

---

# あたしの可愛いモン娘たち

---

クロベえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あたしの可愛いモン娘たち

### 【Nコード】

N7849DA

### 【作者名】

クロベえ

### 【あらすじ】

男の子より女の子が好きな女子高生、青井優奈あおいゆうなは異世界に勇者として召喚される。魔物退治の使命を帯びた彼女であったが、魔物たちのあまりの可愛さに戦うことができそうになかった。価値観の異なるこの世界で、彼女は自分の信じる道を進んでいく。

完結していますが、若干打ち切りっぽいエンドとなっております。

## 01・勇者募集中？（前書き）

序盤が長かったため一部カットしましたが、すでに読んだ方には問題ないです。

なお、1話〜3話は無駄に長い上に盛り上がり欠けるため、4話のあらすじから読んでいただいてもおそらく問題ありません。

## 01・勇者募集中？

勇者募集中。凶悪な魔物を倒して英雄になりませんか？

あたしはスマホでゲームか何かの広告を見ていた。

そこには魔物のイラストが描かれていて、とっても可愛いんだ。猫耳や犬耳のついた子、人魚っぽい子、悪魔っぽい子。ありとあらゆる動物や架空の魔物がとっても可愛いらしく描かれている。

あたしは可愛い物や生き物が何でもかんでも好きなんだ。

魔物は倒すだけでなく、捕えることもできるよ。捕えた魔物からは魔力を吸い取ろう

うん、こんな可愛い魔物たちは倒しちゃだめ。

捕えて可愛がらなくっちゃね。

魔力を吸い取るってのはエッチなことでもしちゃうの？

でもこのゲーム、18禁とは書いてない。

ちよっと残念だけどまあいいか。

勇者初心者でも大丈夫。あなただけの特殊な能力が身に付くよ

あたしだけのかー、魔物を魅了する能力とかほしいな。

こんな可愛い子たちとあんなことやこんなこと……。

うふふふ。にやにやしちゃう。

活躍した勇者はモテモテになれる！

そっかあ、魔物だけでなく人間ともラブラブになれるのかな。  
この世界ファンタジーっぽいからエルフとかいたらいいな。

簡単なプロフィールを入力するだけ。簡単審査ですぐ勇者になれます

審査なんてあるの？

ま、そういう設定なのかな。  
とりあえずやってみよう。

まず名前からか。青井優奈<sup>あおいゆうな</sup>。

性別は女と。

年齢は16歳。

職業？女子高中生だよ。2年生ね。

特技？マッサージかな。女の子に触るために覚えたんだ。

好きなものは、かわいいものと。

嫌いなものは、男の子かな？いや、かわいくないものにしよ。

こんなところかな？送信つと。

あ、メールが来た。勇者のご案内か。

勇者へのご応募ありがとうございます

準備が良ければ、これより勇者とさせていただきます

準備が出来次第、下のボタンを押してください

うん、今は暇だから始めよう。ぼちつと。

本当によろしいですか？

ん？またボタンが……。

準備出来てるよ。ぽちつ。

最終確認です。本当によろしいですね？

もうしつこいなあ。早く始めさせてよ。  
ぽちつと。

ボタンを押した瞬間、あたしの頭の中になにか声が……？  
そして意識をひっぱられるような感覚？  
え？なにこれ？

勇者召喚プログラム発動します

え？え？これゲームじゃないの？  
な、なんかやばい？  
そう考えながらあたしの意識は飛んで行った……。

女神アルティアナに祝福されしこの世界  
1000年の平和が約束されしこの世界  
凶悪な魔物により、その平和がおびやかされている  
勇者よ、今こそ目覚めよ  
魔物を打ち倒すのだ

なんなのなんなの？

頭に変なメッセージが流れ込んでくるよ？  
まるでRPGの冒頭のような……。  
でもさ、なんか文章が安っぽくない？  
1000年の平和が約束された割にあっさりとおびやかされてる  
しさ。

いきなり矛盾してますよー。  
なんか目覚めたくないんですけど……。

勇者様、お目覚めください

ん？目覚めちゃったかな？  
なんだか体が重い……。  
ぼんやりとした視界にだれかの姿が見える。

「勇者様、お目覚めになったのですね」

んー、耳がとがってる綺麗なお姉さんがいる。  
もしかしてエルフ？  
んー、いい目覚めだなあ。  
あたしはどうやら横になっていて、毛布をかけられているようだ。

「えっと、ここは？」

「召喚の神殿です。勇者様を異世界より召喚させていただきました」  
「そっか……。異世界に来ちゃったんだ」

周りを見渡すと、ローブを頭からすっぽりとかぶったような、いかにもな人達がいた。

広いところだなあ。勇者ってそんなすごい存在なのかな？  
あれ？今知らない言葉で話しかけられたよね？  
それなのに理解できるし、あたしも知らない言葉で返事した？

「勇者様、お体に問題はないですか？」

「ん、大丈夫……と思う……。でもなんで異世界の言葉がわかるんだろう？」

「召喚の際に、こちらの世界の言葉を勇者様の魂に刻ませていただきました」

「そっか……。便利だね」

言葉の謎は解けた。

でも、体は大丈夫だろうけど頭は大混乱だ。

最初に見たのがこんな美人のお姉さんでなければとっくに発狂している。

「皆様、召喚は成功です。後は私にお任せください」

その言葉で神殿にいたあやしげな集団が出ていく。

ってことはこの広い神殿にあたしと綺麗なお姉さんの2人きり？  
ちよつとドキドキしちゃう。

「勇者様、お初にお目にかかります。私は勇者様のお世話係をさせていただきます。どうぞリリアと申します。」

とても綺麗な服装に身を包んだとても綺麗なエルフのお姉さん…

…リリアさんは、とても華麗なしぐさであいさつをしてきた。  
綺麗だなあ。ほればれしちゃう。

腰まで伸びた長い髪も素敵。

銀髪なのかな？とてもサラサラしてそう。

「勇者様、まずは服を着ていただきますね」

「え？あ……あたし裸なの？」



「大丈夫です。召喚後すぐに毛布をかけましたので、私以外は見ておりません」

つまり、リアさんにはあたしの裸見られたんだ。

うっ、なんか恥ずかしいよ。

どう思われたかな？

とても素敵なスタイルのリアさんからしたらきつと貧層だったよね？

「まずは下着からですね。勇者様はまだ動けないと思いますので、私にお任せください」

「お願いします。なんで動けないんだらう？」

「召喚のため、異世界を長く飛んでこられたのです。疲労がたまっているのも無理ありません。もう少しで動けるようになると思いますよ」

うん、たしかにすごい疲労感。

あと、この体があたしのものじゃないような感じで動かしにくい。変な感じ。

でもいつか。

だってさ、服を着せてもらうのって、脱がされるよりエッチな感じがするんだもん。

あ、足に下着の感触。ショーツ履かせてもらってるんだ。

えっと……なにこれ？

すっごく肌触りがよくて気持ちいいよ？

履いたことないけど、高級なシルクの下着ってこんな感じなのかな？

いつも安い綿パンツばかりのあたしには過ぎた代物だ。

次はブラかな。リアさんが白いブラを持っている。

見た目だけでも高級そうな感じ。

この世界でもちゃんとブラはあるんだね。

「失礼しますね」

あ、毛布がめくられて見られちゃってる。

うっ、恥ずかしいなあ。そんなに大きくないしさ。

あ、リリアさんのおっぱいは大きくてうらやましいな。

ブラが手際よくつけられていき、リリアさんの手がブラの中に…

…。え？

「ひゃうんっ！」

「すみません、くすぐったかったですか？でもこっすることで美しくなれますので我慢してくださいね」

どうやらリリアさんはあたしの胸をよせてあげているらしい。

あー、びっくりした……。

なにか始まるのかとドキドキしちゃったよ。

実のところくすぐったかったんじゃないかと、気持ちよかったんだけど……恥ずかしくてそんなこと言えない。

あ、でもすごい。

あたしの胸にとっても綺麗な谷間が出来てる。

普段はBなあたしのおっぱいがくくらいに見える。

すごいなあ、リリアさん。さすが美人のお姉さん。

「ふふ、勇者様綺麗ですよ」

「あ、ありがとう……」

なんか照れちゃうな……。

脱がされた時に言われてるような気分。

うーん、このままなにかはじまっちゃえばいいのにな。  
リリアさんだったらいいな……。ってゆうかリリアさんがいい……。

「次はこちらです」

あ、ストッキングかな？

今まで履いたことはほとんどない。

生足の似合う女子高生だしね。

ひゃあ、なんかこれもすごく気持ちいい肌触り。

高級品ってすごいんだな……。

「下着はこれで最後です。もう少し我慢してくださいね」

我慢する必要ないくらい楽しいので大丈夫です。

あ、あれはガーターベルトってやつかな？

大人の色気ムンムンのアイテム。

もちろんつけたことはない。

足から履かされて、リリアさんが位置を整えてくれる。

「ひゃふう……」

「うふふ、勇者様はくすぐったがりやさんですね」

だってさあ、リリアさんの手がすべすべで気持ちいいんだもん。

最後はベルトを止めるのかな？

リリアさんの手があたしのショーツの中に……。え？

「きゃっ」

「あ、ごめんなさい。ここもくすぐりたいんですね」

「あ、ちょっとびっくりして……。ベルトって中に通すんですね」

「ええ、こうしておかないと、トイレですぐに降ろせませんからね」

「なるほど……」

ふむふむ、それは合理的。勉強になるな。

「さて、体の方はどうですか？」

「えと、少しは動かせそうだけど、まだきついな……」

「そうですか、それでは少しお待ちしますね」

リリアさんはあたしに毛布をかけてくれる。

ふう、つい綺麗なリリアさんと下着で浮かれちゃってたけど……、  
これってかなり大変な状況だよな？

勇者って何？これ夢じゃないんだよね？困ったなあ……。  
少しリリアさんに質問してみようかな。

「あたしって本当に勇者なの？」

「もちろんです。今はまだ実感が無いと思いますが、勇者様は素晴らしい力をお持ちのはずです」

「そうなんだ……でも急にここに来てびっくりしちゃって……」

「えっと？勇者様は勇者になることに承諾していらっしやっただけ  
すよね？」

あれが承諾なのかな？

ゲームとしか思えないあの画面。

あれじゃあ詐欺だよ。

「そうだけど……よく理解せずに承諾しちゃって……」

「え……？そうだったのですか？それでは……」

リリアさんがおろおろしちやってる。

うーん……。一応頑張ってみるしかないのかな？

「あ、でも大丈夫だよ。勇者の力があるんだっいたら出来る限りはがんばるよ」

「あ、そうですか。ほっとしました」

「心配させてごめんね。でもあたしも不安でさ。リリアさん、あたしを支えてくれる？」

「はい！お任せください」

うん、こんな素敵な人があたしのお世話係で本当によかった。

「あ、勇者様。活躍していただければ元の世界へ戻ることも可能ですので、がんばってくださいね。この神殿は召喚だけでなく、送還もできます」

「あ、そうなんだ……」

なんか拍子抜けだ。

一方通行じゃないんだね。

「具体的にはどうがんばったらいいのかな？」

「勇者様を呼び出すためには大量の魔力が必要となります。ですので、送還に必要な魔力と次なる勇者様を呼び出すための魔力を集めていただければ可能となります」

「魔力ってどうやって集めるの？」

「魔力は私達人間にはないもので、魔物だけが持っているものです。ですので、魔物を捕えて魔力を奪う必要があります」

たしかゲーム……じゃなかったけど、勇者募集の紹介文にそれが書いてあったな。

魔物から魔力を奪って、それがあたしを呼び出すための力になったのか。

ふむ、まあがんばってみるか……。  
戻れるってのは結構大きい。

「じゃあ大変そうだけど、がんばってみるね」

「ふふ、勇者様ならすぐですよ」

あ、なんだかそろそろ起き上がれそう。

「リリアさん、ちょっと起き上がってみるね」

「はい、お支えますね」

「よいしょっと。立てたあ」

「おめでとうございます、勇者様。あちらに鏡がありますのでどうぞ」

あたしはリリアさんに支えられてゆつくりと歩いていく。

リリアさんが近い。いい匂いだなあ……。

鏡に映っているあたしはまるで別人だった。

白い下着に全身を包まれているあたし。

まるでいいところのお嬢様のように。

おっぱいもこんな綺麗な形になってるの初めて見るし。

「では最後にドレスを着ていただきますね」

「え？うん」

ドレスなんだ。

勇者なんだからもっと動きやすい格好なのでは？

なんて考えてる間にあたしはドレスを手際よく着せられていく。

そしてお姫様が完成した。

「勇者様。とてもよくお似合いです」

「なんか……あたしじゃないみたい……」

下着と同じ真っ白なドレス。

ウエディングドレスではないけど、それに近い。

綺麗だな……。

あと、左腕に腕輪らしきものがついてる。

いつの間に？まあいつか。

「えっと……戦いには向いてなさそうだけど……」

「ふふ、戦うのはまだ先なんです。まずは私の住む都まで移動していただきます」

「あ、そうなんだ……」

「うふふ、実はここまで着飾る必要もないのですが、女性の勇者様は珍しいのでついはいりきつて用意してしまいました」

そっか……。

たしかにあの募集文のように英雄になってモテモテになるつつ、考えるのは男が多いだろうな。

「あたし以外にも勇者っているの？」

「はい、何人かおられて活躍されていますよ。今のところ魔物に負けた勇者様はおられません。それだけ勇者様はお強いのです」

ん、それなら安心だ。

そりゃあ勇者だもん。強いに決まってるよね。

よし、あたしも英雄になって満足したら帰るかな。でも、楽しかったらここにしよう。

「あ、忘れていました。こちらをどうぞ」

「え？うん」

差し出されたのは白いハイヒールの靴。  
ドレスに合わせたんだろうな。

でもあたしこんなの履いたことないや。  
なんだか歩きにくそう……。

あ、でも背が高くなった気分なのはちょっといいかも。

「それではいきましようか」  
「うん」

あたしは慣れないハイヒールでフラフラと歩き出す。  
体もまだ動かしにくいかな……。  
でも、リリアさんが支えてくれるから嬉しいな。  
なんだかいい匂いもするし。

神殿を出ると、大きな庭が広がっていた。

まるでここがお城かと思うような素敵な庭だ。

振り返ると神殿も大きくて綺麗。

すごいなあ……。

庭をゆっくりと歩いて、これまた大きな門から外に出る。

そこから大きな街が見える。

どうやらこの神殿は高いところにあるらしい。

「ここが、中央都市セントウークです。この世界で一番大きな都市  
ですわ」

「すごい……」

この世界はわりと発展しているように見える。

さすがに車とかは走ってないけど、綺麗に舗装された道を馬車が  
走り、お洒落なレンガの家から煙が出てたり、大きな教会っぽい建



物があつたり、なんだかわくわくしてくる。  
まるでおとぎ話の中の世界のように。

「それでは階段を降りましょう。下で馬車が待っています。ゆっくりでいいですからね」

「うん……怖いから支えてね」

「はい、大丈夫ですよ」

高いところにあるだけあって、階段が数百段ありそう……。  
リリアさんに支えられ、手すりも持ちつつゆっくりと降りていく。

「これからどこへ向かうの？」

「私達の住む北の都ノースリアへ向かいます」

「どのくらいかかるのかな？」

「馬車でおよそ1週間ほどかかります」

「そんなに……？」

「はい。来ていただいて早々に移動となり申し訳ありません。戻れば歓迎の儀をいたしますので、しばしご辛抱下さい」  
「うん……」

いきなりきつついなあ。

車って偉大なんだな。

この世界って魔法で移動とかないんだらうか？

「リリアさん、この世界には魔法ってあるの？」

「ありますが、私達人間には使うことができません。使えるのは魔物と勇者様のみです」

「そうなんだ……」

「あと、最近は魔物から奪った魔力で魔法のアイテムを作る研究も進んでおります。今から乗っていたたく馬車も、そのおかげでかな

り速いんですよ。通常の馬車なら倍以上の時間がかかります」

「そっか、いい馬車に乗れるんだね」

「はい。勇者様を迎えるために用意いたしました。」

それならまあいいか。

一応歓迎されてる感じだしね。

ふう、ようやく階段の下まで着いたよ。

降りるまで30分くらいかかった？

早く馬車に座りたいな。

あ、だれかがこつちを見てる？

「リリアよ、そのお方が勇者様だな」

「はい、ランベル將軍」

「勇者様、お初にお目にかかります。ランベルと申します」

「あ、はい……どうも」

「これよりノースリリアまで護衛をさせていただきます」

ランベル將軍、白いおひげがダンディーなナイスミドル。

当然あたしの好みからは程遠い。

ちえっ、リリアさんと2人が良かったなー。

でも、護衛が必要ってことは道中に魔物が出るのかな？

「勇者様、あちらの馬車です。どうぞ」

「うん」

豪華な馬車が待っていた。

うーん、お姫様気分だな。

くるしゅうないぞよ。

あ、ランベル將軍は別の馬に乗ってるみたい。

運転手……御者さんは2人いて交代で運転するらしい。

残念ながらリリアさんと2人きりではなかった……。  
ま、基本的に仮眠をとってるから空気みたいなものだけだね。

人生で初めて乗る馬車の乗り心地、意外と悪くないな。  
道も整備されてるみたいだし、魔法の道具の力も影響しているの  
かもしれない。

さて、これから1週間いろいろとリリアさんに教えてもらおうか  
な。

まず、あたしが一番懸念していたこと。  
本来いた世界ではあたしが行方不明になっているのか？  
これはあっさりと解決した。

まず、あたしは召喚によって魂だけがこの世界に来たらしい。  
その際にあたしの体には仮の魂が入り、普段通りに行動してくれ  
る。

もしあたしが送還された場合はそれまでの記憶をもらえる。  
なんだか至れり尽くせり、まるで某ヒーローの使うコピーできる  
ロボットみたいだ。

話が出来過ぎてる気もするけど……。

「勇者様、おなかすいていませんか？」

「あ、すいてる……」

驚きだらけで、食事のことをすっかり忘れていた。  
今のあたしはおなかぺこぺこだった。

リリアさんがサンドウィッチを用意してくれているようだ。  
見た目はあたしの知っているものと変わらない。

お味の方は……なかなかおいしいぞ。

パンも卵もお野菜も、素材自体がとてもおいしい気がする。  
うん、これならこの世界の食事に期待が持てるな。

食事をしていると、あたしは左腕の腕輪のことを思い出した。  
これも今聞いておこう。

「リリアさん、この腕輪って何だろう？」

「それは……言いくいのですが、言っておかないと失礼ですよね」「ん？」

なんだろう、リリアさんがとても言いくそ。

「以前召喚された勇者様の中に、暴れ出した方がいたのです。それ以来、召喚される勇者様にはその腕輪を着けることになりました」「てことは、これって……」

「はい、いざという時に勇者様を動けなくする機能がついております……」

え……なんか怖いものが着けられてるんだな……。でも、そうだな……。あたしがよく読んでた小説で異世界に召喚される話だと定番だったかもしれない。服従しなきゃならない契約とか。

「そっかあ、まあいいよ。仕方ないもんね。ちゃんとしてれば使われることないんだよね？」

「はい、もちろんです」

申し訳なさそうに言うリリアさん。

うーん、こう言った時の顔も絵になる美人だなあ。

素敵だから許しちゃう。リリアさんが悪いんじゃないしね。

「気にしないでいいよ、リリアさん。あたしががんばるからさ」

「はい、ありがとうございます」

そう言って笑顔が戻るリリアさん。

うんうん、やっぱり美人は笑ってないとね。

はあ……見とれちゃう。

んー、なんか眠いなあ。

たくさん食べたからかな？

「勇者様、今日はお疲れのご様子ですね。おやすみになってください」

「うん、リリアさんに膝枕してほしーな」

眠いついでに甘えちゃうあたし。

まだまだ甘えたい年頃だよ。

「どうぞ、ゆっくりと休んでくださいね」

「ありがとう、おやすみ……」

「おやすみなさいませ、勇者様」

うーん、半分冗談だったのにしてもらえた。

勇者はやはり好待遇なんだな。

とりあえず寝よう。

リリアさんのお膝……いい匂いだな。

あたしは幸せを感じながらまどろんでいった。

## 02・魔物襲撃？（前書き）

これまでのあらすじ

スマホいじってたら異世界に召喚されたあたし。あなたは勇者ですとか言われて、馬車に乗って移動させられてる。つきそいのリリアさんが美人で惚れちゃいそうな今日この頃。

## 02・魔物襲撃？

夢を見ていたようだ……。

仲良しの可奈ちゃんと遊ぶ夢。

お部屋で昔のアルバムを見てはしゃいでるんだけど、ふと顔をあげると目が合って……とても顔が近いことに気づくあたしたち。

そのまま可奈ちゃんが目を閉じるの。

あたしは、しちゃっていいんだよね？と考えながら可奈ちゃんの唇にあたしの唇を接近させていく……。

というところで目が覚めた。

続きは現実でね。と可奈ちゃんが言った気がした。

もちろんあたしの妄想だ。

女の子といちゃいちゃしてみたけど……したことなんてない。

あたしが目を覚ましたのはいつものベッドの上ではなく、馬車の中。

リリアさんの膝枕の上だ。

「勇者様、起きられましたか」

「うん……ごめんねリリアさん。足痛いよね？」

あたしはゆっくりと起き上がる。

たっぷり寝た感じがするので、リリアさんにとってはかなりきつかったはず。

「大丈夫ですよ。勇者様は軽いですから」

「ありがと、でも……。そうだ、あたしマッサージ得意だから揉んであげるね」

「え？いえ、勇者様にそんなことをしていただくわけには……」  
「いいの、あたしがしたいんだからさ。ね？いいでしょ？」  
「それでしたら……。お願いいたします」  
「うん！じゃあうつぶせになってね」  
「はい」

あたしはリリアさんの足の前に座り、マッサージを開始する。  
あたしがずっと乗ってたんだから、全体的に血行を良くしないと  
ね。

足先から順に揉んでいく。

「んっ、んんっ」

「リリアさん、痛かったら言ってね」

「大丈夫です……ん……」

少し苦しそうな声。

やっぱり足はだいぶしびれてたんじゃないかと思う。

早く楽になってもらおう。

あたしはリリアさんのスカートを少しだけ上にまくる。

とても綺麗で白い足がのぞいた。

うーん、うっとりしちゃうな。

頬ずりしたくなるけど、それは我慢します。

血流を良くするふくろはぎマッサージ。

これでリリアさんもっと綺麗になれるよ。

「んんっ……勇者様、本当にお上手なですね。気持ちいいです」  
「でしょでしょ？よく友達にしてあげてるんだ」  
「うふふっ、お友達は幸せですね」  
「あたしマッサージ好きだから、リリアさんにもいつだってしてあげ  
るよ」



「ありがとうございます。勇者様が戦いでお疲れになった際は、私にもマッサージさせてくださいね」

「うん、その時はお願い」

リリアさんのマッサージ。

間違いなく気持ちいいぞー。

楽しみが増えたな。

30分ほどマッサージして終了。

「勇者様、ありがとうございます。すごく楽になりました」

「うん、よかったよ」

「ところで勇者様、おトイレなどは大丈夫ですか？」

「あ、行きたいかも」

行きたいと言ったものの、公衆トイレとかあるわけでもないし、野で??

うーん……でも行かなくちゃなあ。

馬車が止まり、休憩時間となる。

「勇者様、あちらの陰に行きましょうか」

「うん……」

リリアさんに連れられて、馬車から遠めの木の陰へいく。

やっぱり野でなんだなあ。出したいのが小さいほうだけで良かった……。

「勇者様、この葉っぱで拭いてくださいね。わたしは後ろを向いております」

「うん……」

トイレットペーパー代わり？の葉っぱを渡されてあたしはしゃがみこむ。

シヨーツを降ろして、ドレスのすそをしっかりまくってと。

お姫様ってトイレも大変なんだろうなあ。

リリアさんを見ると耳を塞いでいる。

気遣いのできる素晴らしい女性っていいなあ。

特にトラブルもなく事を済ませて、あたしはリリアさんの前に移動する。

「リリアさん、終わったよ」

「はい、それでは私も失礼して……。申し訳ありませんが少し待っていていただけますか？」

「もちろん」

あたしは後ろを向き、リリアさんと同じように耳を塞ぐ。

あたしもしリリアさんみたいな素敵な女性を目指すんだ。

少ししてリリアさんも終えたようで、馬車に戻る。

馬車では、お馬さんたちもごはんを食べてるみたいだった。

あ、お馬さんなどでなでさせてもらおうかな。

あたしは御者さんに話しかけてみた。

「お馬さん触ってもいいかな？」

「え？はい。おとなしい奴だから大丈夫ですよ」

「わーい、お馬さん可愛いな」

あたしは馬の頭をなでなでする。

最初ちょっとビクツとしてたけど、その後は嬉しそうに見える。

うんうん、動物好きのあたしの心が通じたのかな？

「ねえ、この子たち名前はなんていうの？」

「えっと……名前はいいですよ」

「そうなんだ……じゃあ、あたしがつけていい？」

あたしの言葉に御者さんは戸惑っているよう。

なんで？動物に名前を着ける習慣のない世界なの？

そんな御者さんを見て、リリアさんが声をかけてきた。

「勇者様、それはやめておいたほうがいいです……」

「え？なんで？」

「そのうちわかります……」

「えっと……うん……」

さっぱりわからないけど、リリアさんが困ったような顔をしているのであたしはそれ以上聞かずに馬車に戻った。

うーん、異世界ならではのなにかがあるのかな？

お馬さん達もおなかいっぱいになったみたいで、間もなく馬車は出発した。

なんとなくスピードが上がった？

たくさん食べて元気になったのかな？

がんばって走ってね。

「それにしても先ほどの勇者様のマッサージ、すごいですね」

「えへへ、それほどでもないよ」

あたしは少し切ない顔だったのかもしれない。

リリアさんがあたしに気を遣うかのように話しかけてきた。

うん、やっぱり優しい人だな。

「勇者様の旦那様になる人は幸せですよ」

「旦那かー。まだ若いし結婚する気はそんなにないよ」

男にそんな興味ないしなあ。

うーん、でも将来は結婚を考えなきゃいけないんだろっとな……。とりあえず後回しにしたい話題だ。

「勇者様ともなると、結婚の申し込みが殺到しますよ」  
「うーん、困るなあ……」

あたしは男より女性にもてたいんだよ？例えばリリアさんとかさ。この世界にも百合な人たちはいるのかな？

「うふふつ、きつと勇者様の気に入る素敵なお殿方も現れますわ」

「うーん、想像つかないよ。リリアさんとかはどう？」

「はい？わたしがどうかしましたか？」

「あたしが活躍したら、あたしのことを結婚したいくらい好きになつたりとかさ」

「ふふふ、勇者様つたらお戯れを」

「え？」

「女神アルティアナ様の教えでは、同性愛は許されておりませんか  
らね」

「そうなんだ……」

がーん！

あたしは鈍器でぶん殴られたような衝撃を受ける。

あたしの楽しみがひとつ減ったわけね。

それにしても女神アルティアナだっけか？

この世界で信仰されている神様なのだろうか？

この世界で目覚める前にも名前を聞いた気がする。

なんとなくその女神が嫌いになった。

「アルティアナ様ってのはどんな方なの？」

「この世界を見守ってくださるお方です。少しお話ししましょうか」

「うん、聞かせて」

聞いてみたところ女神アルティアナは、この世界の人間を作った神様らしい。

自身の姿に似せて人間を作ったようで、人間をこよなく愛していると。

だったら女性が人間の女性を愛するのも認めてよね。

でも宗教ってこんなものかな……。

同性愛が増えると人口が減るから、禁止する宗教が多いって聞いたっけ。

そして女神は人間を愛するがゆえに、それを傷つける魔物を憎んでいると。

うーん、イラストだとあんな可愛い魔物だったんだけどなあ。

どんなものか見てみたいものだ。

しかし、逆に考えるとこの女神は人間以外嫌いなのではなからうか？

馬に名前つけるのもこの女神が禁止してるとかだったらやだなあ……。

あたしは完全にアンチアルティアナになるよ。

「この世界の神様はアルティアナ様だけなのかな？」

「邪神もいます。名前を口にすることすら禁止されたアルティアナ様の宿敵です。この邪神が魔物達を作ったのです」

「じゃあ、この世界の人間はみんなアルティアナ様を信仰しているんだね？」

「そうです」

ふむふむ。

人間を作った女神アルティアナと。魔物を作った邪神なんかさ  
んの争いか。

あのイラスト通りの魔物だったら、邪神さんはあたしと気が合い  
そうだ。

しよせんは神話と行ってしまいたいけど、こういったファンタジ  
ー世界では本当にいる可能性が高い

宗教が一つしかないのもそれを裏付ける。

ふう……あたし来る世界間違えたね……。

女の子といい仲になろうとしたら本当に天罰が落ちそう。

とつとつ事を済ませて帰ろうと思った。

そんな感じで3日ほど過ぎた。

美人のリリアさんと話すのは相変わらず楽しいのだけど……これ  
以上仲が深まらないと考えると楽しさも半減していた。

退屈だぞー。

馬車の乗り心地がいいのだけが救いだけど、たまにはベッドで寝  
たい。

「勇者様、もうすぐ村に着くので今夜はそこで一泊いたします」

「そうなんだ。どうして？」

やったね、少し気分転換が出来るよ。

なにするんだらう？

「馬車の整備と、馬の交換です」

「そっか、お馬さん頑張ったもんね。休ませるんだね」

「あ……えっと……」

「違うの……？」

なんでそこで言いにくそうになるの？

お馬さんを新しい子にして、今までの子は休めるんじゃないの？

「あの馬達は無理をさせすぎてもう限界なんです……」

「どういうこと？」

「特殊な薬草を飲ませて無理に走らせているんです。ですので……」

特殊な薬草って何？麻薬みたいなもの？

すごく元気だったから、この世界の動物はすごいなって思ったんだよ。

なのに、あれは無理矢理走らせてたってこと？

名前を着けないほうがいいってのは、死ぬとわかってたから？

やだよ……。

「なんでそうまでして走らせるの？」

「勇者様を急いでノースリアまでお連れしなくてはならないのです」

「あたしそんな急がなくていいよ？時間かかっても我慢するよ？だから無理させないで！」

だめ、もう泣いちゃいそう。

あたしのせいで馬がたくさん死ぬことになるんだよ。

そんなのダメだよ。

「申し訳ありません、急ぎ戻らないと……北の都が魔物に攻め落と

される可能性があるのです」

「そんな……」

つまり、人間の住むところを守るために動物を犠牲にするわけだ。これに関してあたしは文句を言えない……。

だって、もしあたしの家族や友達がピンチの時に動物を犠牲にすれば助かるなら……きつとあたしはそっちを選ぶだろう。

人間って嫌だな……。

「勇者様はお優しいのですね。私配慮が足りなかったようです。申し訳ありません」

あたしに深々とお辞儀をするリリアさん。

いいよ……。仕方ないもん……。

納得はできないが、納得することにする。

「いいの。気を遣わせてごめんね……」

「勇者様……」

あのお馬さん達、食用にされるのだろうか？

もしくは薬漬けだから食べることもできないのかな？

もし食用にされるんだったら……あたしは泣きながらも食べよう。

あたしの勝手な考えでしかないけど、無駄死にはさせないよ……。

夜も更けて、村に到着したようだ。

村の人？ 優しそうなおじさんが迎えにきてくれているみたいだ。

「お待ちしていました。こちらへどうぞ」

「よろしく願いますね」



あたしは馬車を降りて、お馬さん達に手を振る。

はあ……ちゃんとお別れしたいけど余計につらくなるだけだよ

ね。

さ、気を取り直していこう。

小さい村だけど、ちゃんと街灯のようなランプがあつて道がよく見えている。

あたしたちのために用意してあるのかもしれない。

家や畑がたくさんあつてのどかなイメージだ。

道端にとても綺麗な青い花が光に照らされていた。

「このお花綺麗だね、なんだろう？」

「あれはキキヨウですね。私も好きな花ですよ。薬草にもなります」

「よろしかったら、どうぞ摘んで帰ってくださいね」

「いや、いいの。せっかく咲いてるのにかわいそうだし」

「ふふ、勇者様はやはりお優しいですね」

キキヨウか。

あたしの世界でもよく聞く花だけど、花に詳しくないからなあ。

暗いので、他に目につく物もなく目的の家に着いたようだ。

「せまい家ですがどうぞ。私は隣の家に住みますので、なにかあれば

お呼びください」

「わかりました、ありがとうございます」

家に入ると、なんだかい匂いがする。

もしかしてごはんかな？

「勇者様、食事の用意が出来ているようです。いただきますよ」

「うん！」

ひさしぶりに馬車以外での食事だ。

それだけでなんだか嬉しいよね。

ごはんと、野菜の煮物かな？あとお魚っぽい。

素朴だけどおいしい。この村で採れた野菜かな？

「食べたらずいですが寝ましょう。馬車の準備が出来次第出発いたします」

「わかった」

ベッドが2つ用意されたベッドで寝るみたい。

ちよつと前ならなにかに期待して喜んでたんだろうけど、今はもう何も期待できないとわかつちやってるからそのままベッドに入る。

ちなみにあたしはずつとドレスを着っぱなし。

不思議なことちよつとも汚れなくて、しわもできない。

さすがファンタジーな世界、と納得しておいた。

「リリアさん、おやすみ」

「おやすみなさい、勇者様」

あたしはお馬さんたちが苦しまずに逝けたか考えながら寝た。

この世界に天国があるのなら、そこに行ってほしいな。

女神様、あなたの愛する人間ではないけど、あの子たちに祝福を

お願いします。

ん？なんだか騒がしい気がして目が覚めた。  
隣を見るとリリアさんがいない。  
ランプの明かり以外は真っ暗だから時間は真夜中と思う。  
なにかあったのかな？  
あたしはランプを持って外に出てみた。

外に出ると、ランプらしき明かりがたくさん見える場所がある。  
とりあえず行ってみよう。  
あれ？明かりが1つ近づいてくる。

「勇者様、すみません。置いて出て行ってしまっ」  
「それはいいんだけど、なにがあったの？」  
「魔物が出ましたが、見回りをしていたランベル將軍に倒されたのでもう問題はありません」  
「魔物……どんなやつなの？」  
「そうですね、これから戦うことになるわけですし、見ておいた方がいいでしょう。こちらへどうぞ」  
「うん……」

ついに魔物との対面だ。  
イラストで見たように可愛いのか。  
リリアさんの言うように凶悪なのか。  
あたしは倒されたという魔物に近づいていく。

なんだろうこれは……。  
あたしに見えるのは、とっても可愛い女の子。  
犬っぽい耳としっぽがついて、ちょっと毛深いけど、凶悪さは微塵もない。

矢が体に数本刺さっていて、とても痛々しい。  
苦しそうに震えてるから、まだ生きてるみたいだけど。

えっと……。

「勇者様、まだ完全に死んではいないのでお気を付けを」

「この子、なにか悪いことしたの？」

「おそらく、畑を荒らそうとしたのではないかと」

あたしは周りを見渡す。

ぱっと見だけど、畑が荒らされてる感じは一切ない。

それよりこの子が手に握っているのは……キキヨウの花？

この花って、薬草になるって言ってたよね？

この子はただ単にこの花を採ってただけじゃないよね？

あたしが放心しているとだれかがやってきた。

「ランベル將軍、いかがでしたか？」

「うむ、逃げたやつは始末してきた。あとはこいつのとどめをさすだけだな」

とどめ？殺すの？こんなに可愛いのに？

「殺しちゃうの？」

「勇者様、おられましたか。凶悪な魔物は始末するか捕える決まりなのです。現在は捕えるための道具がないので殺すしかありません」

「この子、そんな凶悪そうに見えないよ。なんだかかわいそう」

「勇者様はお優しいのですな。こんな魔物に情けをかけられるとはしかし、放っておくとどんな被害があるか……」

ランベル將軍は、棒のような何かを構える。

「それは？」

「魔物から魔力を奪い取る道具です。魔力を奪えば魔物は死にます。」

お下がりにください」

あたしはリリアさんに引つ張られて魔物？の前から離れる。  
ランベル將軍は棒を思いっきり魔物？に突き立てる。

「いやあああああああああ！！！」

耳を覆いたくなるような悲鳴が、目の前で倒れている子から発せられる。

あたしは動くこともできずに、震えながらそれを聞いていた。  
その魔物と呼ばれた可愛い子は、すーっと消えていった……。

「消えた……？」

「魔物は倒すと消えてしまうのです」

死んだら消えるのかな……。

あの状態で無事逃げたってことはないだろう……。

放心しているあたしをよそに、集まった村人は会話をしていた。

「いやあ、今夜は騎士様がいて良かった」

「そうだなあ、普段は魔物なんて出ないのにな」

「騎士様がいる時に限って、運の悪い魔物だよ」

「今までは夜の見回りなんてしてなかったが、これからは必要かもなあ」

ねえ……今あたしが考えてることって、皆に言ってもきつと笑われるよね？

普段からこの子は夜に花を摘んでたんじゃないの？

普段はいない見張りの騎士がたまたまいて見つかったんじやないの？

何の根拠もない考えだけど、一度思いついたらもうそうとしか…。

「勇者様、冷えますので戻りましょう」

「……………」

あたしはリリアさんに手を引かれて、放心状態のまま歩いてきた。なにかを言われている気がするが、あたしの耳には入らない。あの魔物？の断末魔の悲鳴がずっと耳に残っていた……。

家に着き、ベッドに寝かされてもあの光景が頭から離れない。魔力を奪うって、あんな残酷なことなの？

あたしをこの世界に召喚するための魔力はああやって集めたの？  
あたしが元の世界に戻るには、あの行為をあたしの手でやらなく  
ちやいけないの？

嫌だ……。あんなことできない……。  
あたしの頭は絶望感のみで覆い尽くされていた……。

「勇者様、起きてください」

ん？昨日はあれだけ悩んでたけどすっかり眠れたんだ……。  
少しだけ頭がすっきりしている。  
でもなんだか目が腫れぼったい……。  
泣きすぎたかなあ。

「勇者様。大丈夫でしたら朝食を食べましょう。間もなく出発です」  
「今朝はいいや……早く行こう」  
「わかりました。それでは出ましようか」

早くこの村から離れたい。

何の解決にもならないけど、昨晚のことは早く忘れたいんだ。

朝の明るい時間に見る村はのどかだった……。

昨晚のことさえなければもっと楽しく歩けたのにな……。

キキョウの花がたくさん咲いている……。

この可愛い花のことも苦手になりそうだ……。

馬車に乗り込み出発。

リリアさんがいろいろと話しかけているようだが、よく聞こえない。

あたしは適当に相槌を返しながらうずくまっていた。  
落ち着くまで少し時間がほしい……。

あれからまた一晩が過ぎて、あたしの頭は少しだけ落ち着いた。  
最後の望みは一つだけある。

それは、魔物が可愛いというのはあたしの勘違い。

凶悪さをごまかしてあたしをだますための作戦なんだって可能性  
リリアさんも昨日そう言っていた気がする。

そうであれば、あたしは戦える。

村であたしが考えたことは、すべて勘違いでありますように……。  
さて、自分に気合を入れないとな。

「リリアさん、なんか心配かけてごめんね。あたしががんばるよ！」  
「勇者様……ありがとうございます……。精いっぱいサポートさせていただきますね」

リリアさんが涙を流してくれた。

昨日はずっとあたしを心配してくれてたんだ。

そう、こんな優しいリリアさんがあたしをだましてるなんてことはない。

魔物は凶悪なんだ。

今日はそれを教えてもらおう。

「リリアさん、あたしが戦う魔物たちについて教えてくれる？」

「わかりました。ではまず……、私達が向かっているのは北の都ノースリアですが、さらに北に行くと北の魔王が住む城があります」

「北のつてことは、魔王もたくさんいるの？」

「はい、東西南北4人の魔王がいます。勇者様に相手していただくのは北の魔王。氷の女王ヴェリアです」

「なんだか名前からして寒そうな魔王だね」

「はい、住む城は氷に覆われていて、凍えるような寒さと言われております」

「うーん、あたし勝てるのかな……。寒いのが苦手だし」

氷の女王が。

きつと綺麗なんだろうな。

でも雪女みたいな感じで冷酷なんだろうな。

というかそうであってほしい……。

「ふふ、大事な勇者様をいきなり魔王の城に行かせはしませんよ。

まずは勇者様の能力を確かめてから、少しずつ戦いの経験を積んで



いただきます」

「そっか、どんな力があるんだろう……。他の勇者はどんな力を持つてるの？」

「今現在北の都ノースリアで活躍している勇者様は重力を操る力を持つっているそうです」

「なんかすごそうだね。他の都にいる勇者は？」

「勇者様の力の秘密が魔物にばれてはいけないため、公にはされていないのですが、とても強い力を持っているらしいです」

うーん、秘密なのか。

とりあえずわかったのは重力を操るといっすごそうなか。

あたしの力……。便利な力でありますように……。

「どうせなら、魔物を改心させて仲間にできる力とかがいいな」

「勇者様はお優しいですね……。でも水を差すようで申し訳ないのですが、そのような能力はありません……」

「え？なんで……？」

「たとえ改心しようと魔物は魔物。すべて殺すのが決まりなのです」  
「そう……」

魔物嫌いの女神様。

その女神様を信仰する人間達も魔物が嫌い。

なにがあっても殺す……。徹底してるんだな……。

リリアさんの目は真剣そのもので、あたしはこの世界が怖くなってきた……。

魔物が改心させる余地のない凶悪な生き物でありますように……。  
ただひたすらそう願った……。

### 03・メイドさんがいっぱい(前書き)

これまでのあらすじ

異世界に勇者として召喚されて、馬車で移動させられてるあたし。勇者の使命は魔物を倒すことらしいんだけど、道中で出会った魔物はこの上なく可愛かった。見た目と違って凶悪らしいけど……ほんとかな？あたしにつきそってってくれる美人のリリアさんは嘘つくような人には見えないんだ……。

### 03・メイドさんがいっぱい

それから3日ほど馬車に揺られて、間もなく北の都ノースリアに着くらしい。

ここまでの間、リリアさんにこの世界の常識を教えてもらった。一般的なマナーはあたしの住んでいた世界となんら変わらない。気候に関しては北だから寒いわけでもなく、どこも同じくらいだそう。

あたしに優しい世界だね。

違うのはやっぱり魔物に対してかな。

人々は魔物を恐れている。

あたしみたいに魔物に同情しちゃう人は犯罪者扱いなんだってさ。あたしは異世界から来た勇者だからちよっとくらいは見逃してもらえるけど、なるべくそういう態度は出さないようにと注意されてしまった。

なんて言うか……ショックだった。

これを言う時のリリアさんが申し訳なさそうだったことだけが救いだったかな。

こんなことをもし責めるように言われてたら、あたし立ち直れなくなるよ。

あと……動物に対してもこの世界は冷たいようだ。

まずペットを飼う場合は、きちんと調べられて許可の出た動物だけを飼えるらしい。さらに税金もかかる。金持ちの道楽な感じ。

野良動物なんて殺されることも多いとか……。

なんでこうなるかって言うと、魔物が化けてる可能性があるんだってさ。

そんなわけでペットを飼う人も稀だし、家畜もあまりいい扱いはないようだ。

だから馬に名前もないし、薬漬けにしてあっさり使い捨てたわけだ。

はあ……あたし正直この世界嫌いだ。

あたしの好きなことがなにひとつできないんだもん。

そりゃあ、女の子と恋仲になれないのは百歩譲って我慢するよ。

あの可愛い魔物と仲良くなれないのもまあ仕方ない。

でも動物すら簡単に可愛がれないってなんなのよ。

ああ……気が重い。

「勇者様、見えてきました。北の都、ノースリアです」

「んー、やっと着いたんだね」

「はい、長い間申し訳ありませんでした」

ようやくだ。

やっと退屈な馬車生活から解放される。

美味しいご飯に豪華なベッドにお風呂も入りたいなー。

「勇者様、これから領主さまのお屋敷にて休んでいただきますが、その前に少し街を歩いていただきませうね」

「歩いてなにをするの？」

「人々が勇者様を一目見ようと集まっているのです。いわばちょっとしたパレードといったところでしょっか」

「えー、なんか恥ずかしいよ」

「大丈夫ですよ。そのためにドレスも着ていただきました。皆勇者様に見とれるはずですよ」

「むー、そっかなあ。リアさんの方がよっぽど綺麗だけど」

「ふふ、自分で自分のことはわからないのです。勇者様は私なんか

よりよほど綺麗なんですよ」

「うーん……」

うーん……そりゃああたしだって自分ではそこそこ可愛いと思ってるよ。

でもリリアさんの方が間違いないよ。

端正な整った顔立ち。目も大きいしまつ毛も長いし。

こんな大人っぽい美人はあたしの憧れだ。

そもそも化粧してないよね？

あたしは若いから化粧なんてしないけどさ、リリアさんくらいの年齢で化粧なしでこんな綺麗ってすごいことだよ。

そう考えていると馬車が止まったようだ。

「勇者様、行きましようか。お体は大丈夫ですか？」

「うん、ちゃんと歩けるよ」

あたしはリリアさんに手を取られて歩き出す。

ちよつと緊張するな。

慣れないハイヒールで転ばなきゃいいけど……。

あ、人がたくさんいるのが見えてきた。

兵士らしき人が人を整理してる。

いつ集めたんだろう？

先行してたランベル將軍が帰還を連絡してたのかな？

「勇者様、皆に手を振ってあげてくださいね」

「う、うん。やってみる……」

うっつ……歓迎されてるんだろうけど、恥ずかしいよお。

もつすぐ顔の見えるところまで近づくな。

声も聞こえてくる。

「勇者様、ようこそおいでくださいましたー！」

「私達を守ってくださいねー！」

「勇者様、お綺麗ですー！」

「魔物を倒してくださいさー！」

わあ、予想以上に歓迎されてる。

なんだか嬉しいな。綺麗って声も多いし……。

うふ、にやにやしちゃう。

あ、手を振らなきゃね。

あたしは集まってくれた人たちを見ながら手を振る。

それにしても、この世界には美男美女が多そうだな。

人を作った女神様は美的センスに優れているようだ。

うーん、こんな綺麗な女性達と仲良くなれないのがつらいぞ。

いっそ、女の子並みに可愛い男の子でも探そうかな。

シヨタに転向するのも悪くないと考えてしまうあたし。

はあ……歩くだけで疲れ切っちゃったよ。

ようやくお屋敷にたどり着いて一息つく。

領主様とやらは今はいないみたい。

正直助かる……早く私を休ませて。

屋敷の中に入ると4人のメイドさんに囲まれる。

ロングスカートのクラシックなメイドさんたちだ。  
みんなとても綺麗。

あたしは本当にお姫様になった気分。

ああ……これがハーレムだったらなあ……。

でも、こんな好待遇の暮らしなら長居するのも悪くない。

「勇者様、それでは今日はゆっくりお休み下さい。明日の朝迎えに  
参ります」

「わかった、ありがとね」

そう言っけてリアさんは去っていった。

お世話係と言っても常にお世話してくれるわけではないんだね。

ここからはメイドさんたちのお世話になろう。

「勇者様、まずはお風呂で体を癒してくださいませ」

「うん、ずっと入りたかったんだ」

メイドさんたちに連れられてお風呂へ移動。

おつふるー。この世界はどんなお風呂だろう？

きつと大きいよね？

「勇者様、失礼いたします」

「ん？」

お風呂場の脱衣所に着くなり、メイドさんたちに服を脱がされち  
やうあたし。

あつという間に裸にさせられ、体にはタオルが巻かれている。

手際よすぎだね。練習してるのだろうか？

あたしはこの美人ぞろいのメイドさんたちがお世話の練習のため  
に、交代で服を脱がしあっている光景を想像してみた。

メイドさんになるのも楽しそうだな……。  
そのまま風呂に連れていかれる。

メイドさん達は脱がずに、袖とスカートをまくっている状態。  
少し残念。スカートをまくっているといってもそこに色気はない。  
メイドさんとしての魅力が減っただけだ。

「わあ、広いお風呂だなあ。気もちよさそう」

「勇者様、お背中を流しますね。」

「うん！」

メイドさん達が手に持つタオル的なもので、あたしは泡だらけになる。

背中だけでなく、胸やお尻や脚。体中を洗われる。

あつという間に綺麗になるあたし。

背中の中の流しっこという素敵イベントはないまま湯船につかる。

ああ、天国だなあ……。

「勇者様、ごゆっくりしてくださいね」

「うん、でもみんなは入らないの？」

「わたしたちは後で入らせていただきます」

「一緒に入ればいいのに」

「勇者様と一緒に入るなんて畏れ多いですわ」

「そんなことないのになあ……」

メイドさん達は皆、あたしに背を向けて立っている。

見てくれてもいいのになあ。

あたしの裸に興味はないか……。

きつと仕事を淡々とこなしているだけだ。

あ、このメイドさん達にもいろいろ聞いてみようかな。

あたしのこの世界の知識ってリリアさんに聞いたただけだもんね。



他の人の意見も気になる。

「ねえ、みんなは魔物についてどう思ってるの？」

「恐ろしい存在ですね」

「勇者様が倒していただけのをみな期待していますわ」

うーん、ここはリアさんと同じか。

やっぱり魔物は嫌われてるね。

理由とか聞きたいな。

「魔物にひどい目にあわされたりしたの？もしくは知り合いが被害にあったとか」

「私は特にないですね」

「私もないです」

「私もないですわ」

「私もないですね」

「そっか……」

4人が全員ないと答える。

んー、魔物に被害は受けてないけど怖がってるのか。

なんかおかしいよねえ……。

もっとひどい目にあつた話とか聞いてやる気を出したいんだけど……。

全く参考にならない。

あとは、もう一人いる勇者のことを聞くか。

「勇者がもう1人いるって聞いたんだけど、会ったことある？」

「はい、その勇者様もこちらでお世話させていただきました。とても素敵な方でしたわ」

「活躍もされてるそうですし、私お嫁にもらってほしいですわ」

「みなそう言ってますね。でも勇者様同士でくつつかれる可能性も出てきましたね」

「それでしたらお似合いですし、仕方ないですよ」

「なんだか急にメイドさん達のテンションが上がって女子トークだよ。」

「あたしが女の子でごめんねって言いたくなる。」

「勇者はやっぱリモてるんだなあ。」

「はあ……あたしも女の子にモテたかったよ……。」

「こんな感じで大した情報も得られないままお風呂タイム終わり。」

「またも鮮やかな手際で服を着せられて終了。」

「これはネグリジエかな？」

「なんだかとつてもセクシー。」

「勇者様はお疲れとのことですので、すぐ眠れるような格好にさせていただきました。これからお部屋で夕食を食べていただきますね」

「うん、気を遣ってくれてありがとうね」

「もったいないお言葉です」

「正直何度も着替えるのは大変なので助かる。」

「わたしはメイドさんの1人に案内されて部屋へ移動する。」

「他のメイドさんは食事の準備に行ったようだ。」

「そんなわけで、豪華な部屋で豪華な食事をして、気分はお姫様。」

「この世界の食事はあたしの口にあうようだ。」

「食って大事だもんね。」

「というわけで後は寝るだけ。」

「おやすみなさいませ勇者様。 なにかありましたらそちらのベルを

鳴らしてくださいね」

「わかった、ありがとうね。おやすみ」

ふう、やわらかなベッドだ。

疲れを取ろう。

でも、今までずっとリリアさんが近くに寝てたから、今日はさみしいな。

1人になると切ない。

ちよっとお母さんが恋しくもなったり……。

あたしの体に入ってるらしい仮の魂はちゃんとしているのだろうか。

クラスの女の子との仲を進展させてくれたりするのだろうか？

仮の魂がこの世界産だとそれは期待できないかな……。

同性愛禁止の世界って悲しいな……。

いろいろ考えながら、いつしかあたしは眠りに落ちていた。

#### 04・神獣召喚？（前書き）

これまでのあらすじ

異世界に勇者として召喚されたあたしはなんだか皆にちやほやされて浮かれ気味。でも、倒さなければならぬ魔物はこの上なく可愛かった。つきそいのリリアさんや街の人は魔物に怯えているんだけど……その理由があたしにはよくわからない今日この頃。

## 04・神獣召喚？

目覚めて、あたしはほとんど動かないまま着替えと食事がすんだ。気分はほんとお姫様。

このメイドさん達は優秀だよ。

やがてリリアさんが迎えに来てくれた。

リリアさんの顔を見るとホッとす

この世界で初めて会った人で優しくしてくれてるから、当然なのかもね。

「おはようございます勇者様。昨日はよくお休みになられましたか？」

「うん、まるでお姫様になったみたいなお生活だったよ」

「うふふ、勇者様は戦い以外ではお姫様以上の扱いをされますよ」

「そっか、あたしががんばるね」

「期待しております」

リリアさんに連れられ、今日も馬車で移動。

今日は神殿で神託をもらうらしい。

これであたしの能力がわかるんだとか。

ちよつと楽しみだな。

馬車が到着して、また階段の前……。

この世界の神殿は高いところにあるのが決まりなのかい？

「勇者様、申し訳ないですがまた歩いていただきますね」

「わかった……。ハイヒールまだ慣れないから支えてくれる？」

「はい、お任せください」

リリアさんに甘えて、支えてもらおうあたし。

深い関係になれなくても、やっぱり美人のお姉さんにはくっつきたい。

それに、たまにコケそうになるのは本当なのだ。

「神殿が高いところにあるのは、神様がお空にいるから？」

「そうですね、女神様は空より私達を見守ってくださっています。

そこに近づきたいという私達の心の現れですね。実際には高い位置に無くとも、女神様はちゃんと見守ってくださっているのですけどね」

「そっか」

高くする必要はないけど高くしたいわけか。

人間の自己満足なわけだね。

ま、気持ちはわかるけかな。

あたしが好きな女の子に近づきたくなるのと同じだろう。

違う？

30分ほどかけて登り終えた。

どこの観光スポット？って感じだよ。

帰りのことを考えると、あたしは空を飛ぶ能力がほしいと本気で願った。

神殿は、あたしが召喚された神殿より少し小さいかな？

見た目はそっくりだ。

「それではいきましょう、勇者様。中で神官たちが待っています」

「わかった……。緊張するなあ」

「大丈夫です。リラックスしてください」

神殿に入ると、召喚された時に見たのと同じ、頭をすっぽり隠すようなローブに身を包んだあやしげな人達。この人達が神官かあ。

あ、一番偉そうというか豪華な衣装の人が近づいてきた。

「勇者様、ようこそお越しくださいました。私が神官長のゼヴと申します」

「あ、どうも……」

「それでは勇者様をお願いいたします」

そう言って隅の方へ移動するリリアさん。

うーん、そばにいてほしかったなあ。

「勇者様。お名前を教えてくださいいただけますか？」

「えと……青井優奈あおいゆづなです」

「ありがとうございます、勇者ユウナ様」

あ、あたしってこの世界に来て初めて名前を名乗った？

そういえばリリアさんもあたしの名前知らなかったんだよなあ……

…。

後でリリアさんには名前で呼んでもらおうと。

「ユウナ様、神託の儀の前にひとつお詫びをさせてください。あなた様の左腕についている腕輪についてです。それがなにかは聞かれましたか？」

「はい、リリアさんから……」

「そうですね、心苦しいのですが我慢してください。その腕輪の管理をするのは私なのです」

「まあ事情はわかったので……」

「ありがとうございます」

あたしが反抗しようとしたら、あたしの動きを止めるのはこのゼ  
ヴおじいさんなんだな。ないとは思うけどさ……。  
ま、こんな申し訳なさそうに言ってるし許しちゃおう。

「それではユウナ様。これより神託の儀を始めます。こちらへどう  
ぞ」

「はい……」

神殿の真ん中にある祭壇のようなところに連れていかれる。  
うーん、この静かで重い空気がとてつもなく緊張する。

「勇者様、こちらへ膝まづき……女神アルティアナ様に祈ってくだ

さい」

「はい」

よくわからないけど、女神様にお祈りしてみる。

隣ではゼヴおじいさんがなにか呪文を唱えている。

周りの神官たちも呪文を唱え出したようだ。

うーん、ほんとに女神様の声が聞こえるのかな？

とりあえず祈ろう。

女神様、あたしは女の子が好きなんですけど、この世界のひとどう  
こうしようとは考えないので、見逃してくださいね。

怒られそうだけど、ちゃんと懺悔しておこう。

勇者よ、聞こえているか

はい？頭に声が響く。

これが神託？

そうだ、お前に話しかけている



えっと？なにかおっさんのような声だよ？  
女神様じゃないよね？

それは気にするな。勇者よ、お前にはこの世界を救ってもらいたい

うん、魔物を倒すんだよね？なんか気は進まないんだけど……。

そこはお前の判断に任せる

え？倒さなくてもいいの？どういうこと？

まずは時間がない。お前に与えた能力について説明しておこう。  
お前に与えた力は『神獣召喚』と『神獣合体』だ。我が創りし最強の神獣をお前に預ける

おお、最強？なんかかつこいいぞ。  
頭になにか流れ込んでくるぞ。呪文？

力を使いこなすための最低限の知識を渡しておく。では、この世界の未来を任せたぞ

え？まだ聞きたいこといっぱいあるのにな。  
それつきり待てども声は聞こえてこない。  
なんでそんな急いでたの？

「勇者様！ユウナ様？」

ゼヴおじいさんが慌てたように声をかけてくる。

なんか周りもざわざわしてるような……。  
敵かな場所なんだからもうちよっと余韻に浸らせてほしいよ。

「えっと、声が聞こえたけど……」

「女神様でしたか？なんだかいつもと違う感じがいたしまして……」

「どうなんだろう？女神様ってどんな声なのかな？」

「とてもお優しい声をしてられます」

あのおっさんのような声では優しいそうとか判別つかないぞ。

でも面倒事は避けたい。

あれが優しい声ってことにしておこう。

「たぶん女神様の声だったのかな？」

「そうですね。安心しましたぞ。して、どのような力がお聞きになられましたか？」

「神獣召喚って言われたよ」

「神……獣……？でしょうか……？」

「うん、神様が創ったって言ってたよ」

「むっ……？女神様が獣を創りになったとは聞いたことがない……  
しかし……うっむ？」

やはりさっきのは女神でなかった？

てことは邪神？だとしたら怖いけど。

世界を救ってって言ってたよね？

あたしをだまそうって感じはしなかったよ。

まあ、神様の言葉の真偽をあたしなんかじゃ見抜けはしないだらうけど。

「勇者様？顔色が悪いようですが大丈夫でしょうか？」

リリアさんが近づいてきた。

あたしは顔色が悪いらしい。

たしかにそうなのかもしれない。なにか怖いんだもの……。

そう考えたら……体も震えてきてしまう……。

「神官長様？何か問題があったのでしょうか？」

「わからぬ……。問題はないとは思うのだが……。とりあえず勇者様に休んでいただいてから力を見せていただこう」

「わかりました。それでは勇者様、こちらで休みましょう」

「うん……」

リリアさんに連れられて、休憩室ばいところに来た。

ベッドに寝かせてもらう。

「リリアさん、なんか怖い……。あたし大丈夫かな？」

「大丈夫です。勇者様のことはアルティアナ様が見守っています」

「だといいなあ……」

「とりあえずお休みください。神託の儀で精神的に疲労されたのだと思います」

「そっか、じゃあこの不安感は疲れのせいかな？リリアさん、手を握ってってくれる？」

「はい」

リリアさんのすべすべした手、冷たいけど安心するな。

とりあえず休めばこの不安感は消えるのかな？

少し寝よう……。

目が覚めると、リリアさんがあたしの手を握ったまま微笑んでくれた。

天使だな……って思ったよ。

「勇者様、大丈夫ですか？」

「うん、なんか楽になった。行こう！」

「ふふ、元気になられたみたいで安心しました。でもゆっくりでいいですよ。すみません、勇者様がお目覚めになったと神官長様にお伝えいただけますか？これから外へ向かいます」

「わかりました」

だれか他にも近くにいたようだ。

さて、あたしの頭はすつきりしている。

やはりあの不安感は信託の儀のせいなんだな。神様と話すって疲れるんだなあ。

考えてみると。ファンタジーで神様の声を聞く神子が役目を果たすたびに倒れるってのは定番だよな？

さて、あたしの力を試してみよう。

あたしは衣服の乱れを直してもらい、リリアさんに連れられてゆっくりと外へ出る。

皆が待機していた。

ゼヴおじいさんがあたしに近づいてくる。

「勇者様、それでは力をお見せいただけますか？」

「はい、やってみます」

あたしは心の中で念じる。

初めてやることだけど、やり方がなぜかわかる。

では、言ってみようか。

「麒麟、召喚！」

あたしから何かが抜けていく感触。

これはきつと魔力の流れなんだろう。

あたしの体にある魔力を使って召喚するらしい。

その抜け出た魔力が空中で形作られていく。

「おおおおおっ！？」

周りからどよめきや悲鳴が聞こえる。

気持ちはわかる。

あたしもびつくししているよ。

体長は10メートル以上あるだろうか？

ドラゴンのようにも見えるし、いろんな動物のいいところを混ぜたようにも見える。某飲料のパッケージとはちよつと違うかな？

ちなみに名前は私が名付けた。

名前を付けた相手に服従を誓ってくれるらしいんだ。

なんで麒麟かって？

最強の獣って感じがするからさ。

麒麟は空中に浮いたままこちらを見ている。

なんとも素晴らしい威厳が漂っている。

まわりの神官たちはなにかに気圧されるかのように完全にびびっている。

普段は冷静沈着だと思われる神官長のゼウおじいちゃんですら腰を抜かしそう。

「勇者様？あれは勇者様が？」

「うん、そうみたい」

「言うことを聞くのですかな……?」

ゼヴおじいさんが大慌て。

気持ちにはわかるけど、驚きすぎて心臓止まらないでね。

言うこと聞くのかな?

「たぶん大丈夫、降りてきてー」

今降りるとそこにある木々を痛める。もっと広い所でなければならぬ

あ、声が聞こえた。なんかいい子だねえ。

「降りてきませんな……」

「ここ狭いから降りたら木を傷つけちゃうってさ」

「な、なるほど。会話できているのですな……。では消すことは可能ですか?」

「やってみる、もどつてー。麒麟、送還!」

わかった。いつでも呼ぶがよい

うーん、見た目は怖いけど素直でかわいいなー。

消えていく神獣麒麟。

あたしの中に戻っていくようだ。

「これがあたしの力みたい。どうなんだろう?」

「おそらく……これまでの勇者様の中で最強ではないかと……。他の都の勇者をよく知るわけではないですが、格が違うと思います……」

……」

んー？最強の獣を従えたあたしって最強？  
なんだか嬉しくなってきたよ。  
あ、階段降りるのに運んでもらおうかな？  
でも街がパニツクになっちゃうか。

「しかし……あれは本当に使っているいい力なのか？アルティアナ様が望む力とは違うような……」

ゼヴおじいさんがぶつぶつ言っている。  
せつかくテンション上がってるのに水を差さないでほしいな。  
もっと柔軟に行こうよ、おじいちゃん。

この後、偉い人がたくさんやってきて挨拶をされたが、あたしは上の空だった。  
所詮は子供なんだから、新しいおもちゃを手に入れたような心境。  
早くいろいろやってみたいなと思ってる。  
だってさ、さっきは見ただけでなにもさせてないんだよ？  
早くあの子の活躍を見たいの。

あたしはこの時、神託の儀で聞こえた謎の声をすっきりと忘れていたのであった。

## 05・あたしの信じる道

いろいろな儀式やらが終わり、あたしはリリアさんと長い階段を降りている。

あたしはなんだか楽しくなっているのでスキップしたい気分。

「勇者様、ご機嫌ですね」

「うん、あたしの力がすごそうなんだもん」

「そうですね、期待しています。でも、足を踏み外さないよう注意してくださいね」

「だいじょーぶ。あ、それよりさ……あたしのごことは勇者様じゃなくて名前で呼んでほしいな」

「わかりました。ユウナ様」

「うん、やっぱり名前がしっくりくるな」

様無しで呼んでほしいけど、それはきつと断られるかな。

とりあえず、おいおいでいこう……。

今からの予定は、お昼ご飯を食べてから街を案内してもらおう。

いきなり異世界で戦いをするのはストレスがたまるだろうから、まずはゆっくりさせてくれるらしい。

いい待遇だ。

しかし、階段を降りると……なにか違う空気になった。

屈強そうな兵士が4人ほど、緊張した顔で待っていたのだ。

「勇者様、これより護衛に入らせていただきます」

「え？そんな話は聞いていませんが……。それに、今日は街を案内するだけですよ」

「護衛を強化するように言われました。窮屈と思いますが、我慢く



ださい」

えっと……リリアさんも戸惑ってるね。

この平和そうな街で護衛なんているの？

というかあたしを見張ってる？

あたしが危険そうな力を持つているから？

やっぱり疑われてるんだらうな。

あたしの力が女神アルティアナのものでないって。

はあ……楽しかった気分が台無しだよ。

お昼ご飯は素敵なレストランだったんだけど、正直味がわからなかった。

なんなの？この護衛と言いはる見張りたち。

せつかくリリアさんと2人きりのデートだっていうのにさ。

まるで囚人気分だよ……。

リリアさんもやりにくそう。

あたしに対して申し訳なさそうな顔をしてるのかな。

リリアさんは悪くないよー。

昼食を終えた後、街がざわざわしていた。

なんだらうな？

兵士が1人やってきて、護衛の兵に話しかけていた。

その護衛の兵があたしたちに何があったか教えてくれる。

「どうやら前線の砦にて魔物を生け捕りにしたらしく、連れ帰ってきたようです」

「なるほど。今砦にいる勇者様の活躍でしょうか？」

「おそろくそうですよね」

先輩の勇者は砦に行ってるんだ。

捕まえた魔物、見に行ってみたいな。

「リリアさん、魔物を見てみたいんだけど」

「はい、行ってみましょう」

「では、私が話を通します」

うーむ、邪魔だと思ってた護衛の兵が少し役に立っている。

それでも評価はマイナスだけどね。

護衛の兵士さんを先頭にあたしたちは進む。

この兵士さんの1人はちよつと偉い人みたいで、魔物を見せても  
らえることになったようだ。

あたしは捕えられた魔物を見て言葉を失った。

2人いるんだけど、とても可愛いのだ。

猫型の魔物なのかな？

基本的には人の形んだけど、かわいい猫耳としっぽがある。

服を着ているけど、体毛はたくさんあるみたい。

あ、肉球もあるのかな？

2人はよく似ているけど、男の子と女の子に見える。双子？

そのかわいい魔物が手枷に繋がれて、兵士にロープで引かれて  
歩かされているのだ。

とても絶望的な顔をしている。

あたしの世界の住人に、どっちが悪者に見えるか聞いたら、10  
人中9人が兵士と答えるだろう。

「あの子たち、なにをしたの？」

「砦から少し離れたところに崖がありまして、その下に兵が落ちて  
いたのです。その兵士にまわりついていたところを勇者様が捕え  
たということです。おそらく魔物が崖から兵士を落としたのではな  
いかと」

「その兵士さんはどうなったの？」  
「幸い、かすり傷程度だそうです」

「ただ。魔物が何かしたという証拠が一切ない。」

「あたしは名探偵ではないけど、ひとつ推理させてほしい。」

「兵士がなにかの事故で崖から落ちて、この子たちが介抱してたん  
じゃないの？」

「そもそも魔物が凶悪だったら、その兵士はとっくに死んでないと  
おかしいんだ。」

「そもそも崖から落ちてかすり傷って運がよすぎでしょ？」

「この世界の人達は、魔物を凶悪と決めつけてるからそんなこと考  
えもしないのだろう。」

「あたしはこのかわいそうな猫っ子たちを何とか助けたいと思った。」

「この子たちはこれからどうなるの？」

「しかるべき場所で、魔力を吸い取ります」

「そして殺しちゃおうの？」

「いえ、死なせないようにしながら魔力を奪い続けるのです」

「それって、殺すよりひどい拷問だね。」

「なんとかならないものか……。」

「とりあえずそれを見せてもらっておくべきか。」

「場所も知りたい。」

「今後の参考に、どうやって魔力を奪うのか見せてもらっていいか  
な？」

「勇者様ならば、おそらく許可が出ると思っています」

「じゃあお願い」

「わかりました」

兵士さんはなかなか話が通じた。  
任務に忠実なんだろつな。

最初に嫌な奴らだと思ってごめんね。  
嫌なのは上司たちだな。

「許可が出ましたので、一緒に向かいましょう」

「うん、ありがとう」

あたしたちは兵士さんに連れられて、連行されていく魔物？の後に着いて行った。

それにしても、後姿だけ見てもやっぱりかわいいよね。

しっぽが完全に垂れさがっているのがとても可哀そう……。

あれを凶悪と言うこの人達はなんなのだろう？

連行してる兵士達もやけに緊張した顔だから本気なんだろうな。

やはり価値観の差かな。

というか宗教観かな？

「あの魔物、あたしには凶悪そうに見えないんだけど、みんなにはどう見えてるのかな？」

「勇者様はお強いですから、怖く感じないのでしょうね……」

「我々にはあの耳も尻尾もおそろしいです」

「あの爪でひつかかれたらと思うと……」

「ちゃんと牢に繋ぐまでは緊張しますね。何が起きるやら」

はあ……聞かなきゃよかったよ。

あたしとの感覚の違いが余計に感じられただけだ。

うーん……あの子たちを逃がしてあたしも逃げたい気分……。

あたしが召喚する麒麟の力があればそれもできそうなのに。

この腕輪さえなければなあ。

なんて考えてる間に到着した。光の届かない地下だ。

魔物？の2人は頑丈そうな牢屋に入れられ、見動きが一切できない状態に拘束された。あんなに必要あるのかな……。

そして目隠しをされ、声も出せないよう口になにかを嚙まされた。その次に出された道具、あれはなんだろう？

針のようなものを2人の腕に差し込んだ。

苦しそうにうめく2人。痛そう……。

その針はよくわからないなにかに繋がっている。

あれが魔力を吸い取る装置だろうか？

「ユウナ様、これより魔力を奪います。このようにしてためた魔力で勇者様達を召喚しているのです」

リリアさんが説明してくれる。

暗い中気付いていないだろうが、あたしの顔色はきっと蒼白だろう。

正直吐き気もしている。

だけど、逃げずに見ておかないといけない気がした。

兵士が装置を動かし始めたようだ。

「うづうづうづうづうづう……！！！！！！！！！！」

「んんんんんん！！！！！！！！！！」

声を出せない2人が絶叫している。

あたしはそれを絶望的な思いで聞いていた。

あたしはこうやって貯めた魔力で召喚された。

あたしが元の世界へ帰るにはこれをしなければならぬ？

嫌だ……。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

無理無理無理無理！！

あたしはそのまま意識を失った……。

目が覚めると、ベッドの上だった。

このふかふか感。昨日も寝た領主さまのお屋敷かな？

「ユウナ様、お目覚めになられましたか」

「リリアさん……」

「申し訳ありません。いくら魔物とはいえあの拷問のような光景はおつらかったですよね？止めておくべきでした」

「いいよ。あたしが見たいって言ったんだから」

「ですが……」

ふう……リリアさんが気を遣ってくれるのは嬉しいけど、それを少しでいいからあの魔物達にわけてあげてほしいな。

でも無理なんだろうな。

それはきつとリリアさんのこれまでの人生を否定するくらい難しいことなんだ。

あたしはどうしたらいいんだろうな……。

この世界に相談できる人がいない以上、一人で考えるしかないか。

「リリアさんごめんね、もう大丈夫だから1人にしてくれる？」

「はい……。ごゆっくりお休みくださいね」

リリアさんが悲しそうに去っていく。

ごめんね、心配かけて。  
さて、1人で考えるか……。

我のことを忘れていないか？

え？今頭に響いた声は……麒麟？こつやつて話できるんだ。  
1人じゃないってわかると、なんだか安心してきた。  
でも、相談に乗ってくれるのかな？

よい  
我はユウナの望みを叶えるために呼び出された存在だ。頼るが

そっか、嬉しいな。

でもあたしの望みって叶えるの難しいんだよ。  
あの囚われた2人を助けるなんて無理だよ。

余裕である

え？そんなあっさりと言ってくれるんだ。  
でもさ、あたしの左腕にある腕輪、これがあるから変なことはできなんだよ？

我は一度召喚されたならば、例えユウナが動けなくなるうと3  
日は活動可能だ。意味がわかるな？

つまり、あたしが動けなくされたとしても麒麟が目的を達してく  
れるわけか。

これを言って相手を脅迫することも可能かな。

でも、もしあたしが動けなくなったらさ、麒麟だけで目的達成で  
きる？

大きいから牢屋にいる子たちを助けたりできないよね？

我には分身がいる。犬程度のサイズで動きまわれるぞ。試しに呼んでみるがよい

そうなの？

麒麟の小さい分身ってことはちび麒麟でいいかな？

呼んでみよう。

「ちび麒麟、召喚！」

あたしの体から少しの魔力が流れ出し、小さい何かの形がつくられる。

現れたのは、麒麟がデフォルメされたかのような、ちび麒麟。

まるでぬいぐるみ？一言でいえば超可愛い。

この子、とつても役に立ちそうだよ

その分身が10体は生みだせる。小さいが、人1人くらいなら啜えて運ぶことも可能だ

10体も……。

これはやれること広がるね。

うん、なんだかいけそうな気がしてきたよ。

でも助けた後どこへ行けばいいの？

北にある氷の女王ヴェリアのところに行けばよい

そっか、魔物を助けるんだからちゃんと帰してあげないとね。

あの子たち喜んでくれるかな……。

そしたら、もふもふさせてもらえるかもしれないなあ。



よし、細かい作戦を立てよう。

うむ。だがよいのか？人間達を裏切ることになるぞ

うーん、ちよつとつらいかな……。

リアさん優しくしてくれたし。

でもさ、あたしに力をくれた存在が言ったんだよね。

お前の判断で行動して、世界を救ってくれってさ。

これはつまり、人間だけでなく魔物も救ってほしいってことじゃないの？

ふむ、さすがは我が創造主が見込んだ勇者よ

褒められちゃった。

その創造主って誰なの？

女神ではないよね？

いづれわかる

ふーん、まあいいか。

あたしに害のある存在じゃないってのがなんとなくわかる。

創られた麒麟もこない子だしね。

あ、そうだ。人間は傷つけないでほしいんだけど、できるかな？

無論だ。我はこの世界のありとあらゆる生き物を守護するために創られた存在。人間も魔物も傷つけたくない

うんうん。麒麟もだし、創った神様もあたしと気が合いそうだよ。

なんか、こつちのほうが勇者って感じた。

なんだか嬉しい。

我也嬉しいぞ

あたしはすっかり元氣を取り戻した。

今日は元氣になったり落ち込んだり忙しい1日だったなあ。

この後、細かい作戦を立てて寝ることにした。

麒麟、今日はありがとうね。明日はよろしく。

おやすみなさい。

うむ。しかしその私の分身は戻しておくのだ。他の人間に見られるとパニックになるぞ

えー、一緒に寝る気満々だったのに。

あたしは召喚してからずっとこの子を抱っこしたままでいたのだ。残念だけど、仕方がない。戻ってね。

あたしの腕の中から消えていくちび麒麟。

それではゆっくりと休むのだぞ、ユウナよ

うん、明日はよろしくね。

あたしはこのまま寝ることにした。

夕飯は食べてないけど、まあいいか。

明日の朝ごはんをたくさん食べよう。

おやすみなさい……。

朝だ！昨日決意して寝たおかげで目覚めすつきり。

今日はきつといい1日になるはずだ。

昨日のは夢じゃないよね？

おはよう、麒麟。

うむ、我はいつでもユウナのそばにいる。おはよう

うんうん、朝起きたらすぐに挨拶が出来る存在がいるっていいね  
おなかもすいてるし、メイドさんと呼んでみようかな。  
あたしは誰かが来る前に自分から出てみることにした。

部屋のドアを開けると……あたしの部屋の前に誰かが倒れている  
！？

リリアさん？

もしかしてずっとここにいたのかな？

「リリアさん、大丈夫？」

「ん……ユウナ様？」

「ん、あたしだよ。大丈夫？」

「すみません、寝てしまっていたようです」

「無理しちゃだめだよ。こっちで休もう」

あたしはリリアさんを起こして部屋のベッドまで運ぶ。

リリアさんの顔は寝不足のため、少しでも美しさが減っている。

でも綺麗だけど……。

はあ……あたしを心配してくれたんだね。

こんな優しい人をあたしは今日裏切ろうとしている。

作戦の中でリリアさんを人質にする可能性もあるんだよなあ……。  
でも、もう決めたんだ。

「ごめんねリリアさん。」

「リリアさん、少し休んでてね」

「はい、申し訳ありません」

あたしはメイドさんを探しに行こうとして廊下に出るとすぐに見つかった。

朝食と栄養剤的な物をお願いして部屋に戻る。

リリアさんは寝ているようだ。

綺麗な人は寝顔も素敵なんだな……。

もう会えなくなるかもしれないからよく見ておこうかな。

今までよくしてくれてありがとうね。

リリアさんは裏切ったあたしを恨むかな？

でも、いつかわかってほしいな……。

やがて朝食が来て、あたしはおなかいっぱい食べる。

リリアさんも薬草的な物？をもらったらしく、少し元気がでたようだ。

「ユウナ様、お恥ずかしいところをお見せしました……」

「いいの、あたしのことを考えてくれたんだよね」

「そう言っていただけと……」

よし、計画実行のための最初の仕込みをしておこう。

「リリアさん、今日の予定なんだけどゼヴさんに会えないかな？昨日の神託の儀で思い出したことがあるの。相談しないと……」

「わかりました、お呼びいたしますね。お昼は大丈夫と思いますので、ユウナ様はそれまで休んでいてくださいね」

「いいのかな？あたしここに来てから何もしてないんだけど……」

「大丈夫です。異世界にこられた勇者様にはリラックスしていただくための時間を設けておりますので」  
「そっか」

勇者の待遇って良すぎだね。

この世界の人は基本的に優しいんだよなあ。  
なんで魔物にはあんな厳しいのさ。

女神アルティアナの教えによるものだ。人に優しく魔物に厳しく。そのことを疑う人間はこの世界にいない

あたしの疑問に麒麟が答えてくる。  
むー、女神のせいか。

身勝手な神様がいると困っちゃうよねえ。  
魔物みんなでやつつけちゃえばいいのに。

神に逆らうなどできぬ。それに、そもそも我も魔物も女神を愛している。たとえ嫌われようともな

うーん？わからないよ、なんでなの？

それはこれから魔物と仲良くなった後に聞いてみるがよい。まずは今日の作戦を成功させようぞ

そうだね。まずあの子たちを助けないと。  
それに、仲良くなれるんだね。楽しみだなあ。

「ユウナ様？どうかされましたか？」

「あ、ごめん。ぼーっとしちゃってたね」

「まだお疲れのようですね。私は行きますのでゆっくりと休んでく

ださい。お昼すぎに迎えに来ます」

「うん、無理しちゃだめだよ？」

「ありがとうございます。大丈夫ですのよ」

リアさんを見送り、ベッドへ横たわる。

しつかり休んで作戦に備えないとね。

捕えられた者たちが心配だ。我が分身を偵察に行かせておこ

偵察？ちび麒麟ちゃんはそんなことできるのかな？

透明にもなれるし、だいたいのことはできるぞ。昨日見た牢ならば破って連れ出すことも可能だろう。陽動は必要だがな

わあ優秀。さっそく呼びだそう。

「ちび麒麟、召喚！」

あたしの体から飛び出すように現れるちび麒麟。

うーん、もふもふでかわいいぞ。

さっそく行ってくれるかな？

ちび麒麟はかわいくうなずき、透明になった。

もふもふはそのままだ。便利な能力だね。

では、後は任せてあたしは休んでいよう。

しばらくすると麒麟に反応があった。

魔力を死ぬギリギリまで吸い取られているようだな、生かさず殺さず、恐ろしい技術よ

うーん、早く助けてあげたいよね。  
でも、失敗したら元も子もないんだ。  
我慢しててね……。

だが彼らは運が良い。これまでの間、どれだけの者があやう  
て苦しまされてきたか……

そうだね……あたしを召喚するための魔力だって……。  
人間ひどい奴。  
いや、教えがひどいのか。  
なんとかならないのかなあ。

根づいた教えはそうそうのことでは消せぬだろうな。それより、  
あの者たちをすぐに助けられるよう分身をあと4体ほど送っておこ  
う

そうだね。1秒でも早く助けたいもん。  
あたしは4体ほど追加で召喚して出発させた。  
そして待つ。もどかしいが待つ。

昼食を食べ終え、着替えを済ませる。  
ドレスなので動きにくいけど、そこは我慢だ。  
基本的に麒麟の上に乗っているだけなので問題ないはずだ。  
リリアさん、そろそろ来るかな？  
その前に残りのちび麒麟を召喚して透明にしておく。  
万全の体勢で挑むのだ。

やがて……ドアがノックされる。

「ユウナ様、迎えに来ました」

「ありがとう、準備出来てるよ。いこうっ」

これより作戦開始だ。

勇者として召喚されたあたしが裏切り、人間に牙をむく。

きっと大変なことになるだろう。

だけど、あたしは自分の信じる道を進むよ。

あたしはリリアさんに連れられて街の教会に来ていた。  
神殿に登らなくて済んだのは助かる。

なお、昨日の兵士も護衛として周りを固めている。

神官長のゼヴおじいさんはすでに来ているようだ。

さて、なんとかしてあたしの腕輪をはずさせなきゃな。

「勇者様、お話とはなんですか？やはり神託の儀の時になにかありましたか？」

「うん、あの時は混乱してて気付かなかったけど……女神様の声の他に違う声も聞こえた気がしたの」

「なんですと！やはり邪神が悪さをしてきおったのかもしれないせぬして、なんと言ったのでしょうか？」

「おぼろげだけど、麒麟の力を使うなって……」

「ふうむ……それは邪神が麒麟の力を恐れているということでしょうかな……ということは麒麟はやはり女神様の力？」

「わからないの、邪心の罫かもしれないし。それを確かめるために、一緒に麒麟と会話してもらえないかな？」

「ふうむ、やってみましょう。私は接近すれば女神様の力を感じる事が出来ます。麒麟に近づいてみましょう」



うーん、あっさりと騙されてくれてしまった。

麒麟への疑いを持ってきているゼヴおじいさんだから、こういった言い方をすれば騙せるってのは麒麟の案なんだけど……なんだか悪いことをした気がする。

麒麟の背中に乗せさえすれば、あとはなんとかなるだろう。

欲を言えばあたしも麒麟に騙されてるって形にしたいけど……難しいだろうな。

「それでは広い所へ移動しましょうか。ちょうど今日は競技場が空いているはずです」

広いところが空いているのは都合がいい。

あたしたちは移動していく。

「ユウナ様、大丈夫ですか？ 顔色がすぐれません」

「リリアさんありがとね、緊張しちゃってさ」

「無理ありません」

あたしは実際に緊張している。

リリアさんの考えているのとは違う理由だけ。

ふう、最後まで優しくしてもらっちゃった。

ごめんねリリアさん。

そんなわけで到着し、さっそく召喚する。

「麒麟、召喚！」

大量の魔力があたしの体から流れ出て麒麟を形作る。

周りの兵士達が驚きにどよめく。

強そうな兵士達も怖がるんだな。あたしの力はやっぱりすごいんだ。

麒麟は出てきてすぐ、地面に大人しく座っている。ちび麒麟は透明なまま周りにいるはずだ。ちびたちのことは知られたくないからこのまま透明でいてもらおう。

「じゃあいこう。おとなしくしてるから」

「は……はい……。やはり少し恐ろしいですな……」

尻込みしちゃってるゼヴおじいさんの手をひっぱり、麒麟の上に乗る。

さあ、やっちゃって。

「のわあああああー!」

麒麟が唐突にはるか上空に飛び上がる。

ゼヴおじいさんの心臓が止まらないかちょっと心配。

『神官長ゼヴよ。なぜ我が怒っているかわかるか?』

「な、なんじゃ!?!勇者様、これはいつたい?」

あ、麒麟って普通に喋れるんだね。

麒麟の説得のお手並み拝見といこうか。

あたしはとぼけておくことにする。

「えっと……わかんない……麒麟どうしたの?」

『勇者の左腕に着けたものはずせ。あのようなもので行動を縛るなど許せぬ』

「し、しかし……それをはずせば、いざという時にお前を消すこと

もできなくなる。それをするくらいであれば、今ここでわしが死ぬとも……」

わあ、ゼヴおじいさん……たとえ自分が死んでも平和を取るのか。ちよつとかつこいいいけどさ、困つちやうよ……。

これ以上脅すのってなんかやなんだよなあ……。

『まず先に言うておくぞ。我は1度呼びだされたならば、例え勇者が死すとも3日は活動可能だ』

「な!？」

『勇者を殺し、我の怒りをこの都で味わうか?』

「そ、それは……」

『約束しようではないか、今ここで腕輪の呪縛を解くならば誰も殺さぬ』

「そんな約束が信用できると思うか?」

ゼヴおじいさんすごいな。

こんな状況なのに冷静に会話してるよ。

さすが神官長なのか……。

『我は神により創られし存在。嘘などつけぬ』

「邪神であろう?そんな世迷い事を……。む?むむむ……嘘でないのか?」

わかるんだ……。

ゼヴおじいさん何気にすごい人?

でも、おかげで交渉は成功しそう?

麒麟つてもともと人を殺す気ないから、あの交渉は嘘じゃないけどちよつとずるいかなあ。

「腕輪は外そう、だが嘘がつけぬのであればひとつ質問しておきたい」

『なんだ』

「お前の行動には、勇者様の意思があるのか？」

『ある』

えー、あっさり言っちゃったよ。

これであたしが騙されてた説は使えなくなったか……。

すまぬな、だが無言でいたとしてもそれが答えとなってしまう。  
腕輪をはずさせることが先決だ

わかってるよ。責めてるわけじゃないの。

上手くやってくれてるもん。

「ユウナ殿……腕輪は約束通りはずしましょう。しかし……何をお考えかはわかりませぬが、これであなたは反逆者。覚悟なされよ」

「覚悟なら出来てるよ。あたしは自分が信じる道を行くの」

「その自分の信じるわがままのために……罪なき者の命まで落とすことを心にとめておいていただきたい」

罪なき者って誰？

あたしも麒麟もだれも殺さないよ。

「どういうこと？あたしはだれの命も奪わないよ？」

「今回の件で責任を取らされる者がでる。それはおそらく……ユウナ殿と一番長い間一緒にいた者だろう」

「え!？」

リリアさんが責任を取らされて死刑になるってこと？

まさかそんな……。  
いや、この世界は魔物に少し同情しただけで犯罪者になるのだ。  
ありえる……。

「今ならまだ間に合います。力の扱い方を知らぬゆえの暴走で処理もできます。考え直してはいただけぬか？」

この人はあたしの良心に訴えかけて説得しようとしているのか……。  
うう……。どうしたらいい？

いい  
「ここであきらめても我は恨みはせぬ。やりたいようにするがよ

うう……。誰もかれも助けるのは無理なことだよ……。  
どんなに恨まれようと決意は変えないと思ってたけど……。

あたしは悩んだ末、最悪になるであろう答えを出した。  
きつと後で後悔するんだ。でも、あたしのやりたいようにする……。  
……。

麒麟、リリアさんも連れていく。  
人質って形でね。

承知した。この騒ぎで兵も集まってきたようだ。救出を開始する。ユウナの決意に感謝しよう

「腕輪をはずして」  
「わかった……」

ゼヴおじいさんは心底落胆した顔で呪文を唱え始める。

ごめんね、でもこれがあたしのしたいこと。  
腕輪はすぐに外れて地面に落ちていった。  
これであたしは自由だ。

「ありがとう、ごめんね」

ちび麒麟、ゼヴおじいさんを下に連れて行ってね。  
代わりにリリアさんをさらってきて……。。

ここからはあつという間だった。

麒麟の背中にはあたしとリリアさんと、無事助け出した双子の猫  
つばい魔物がいる。  
すごいね……。

我が本気を出せば造作もない。その腕輪だけが懸念であったか  
らな

うん、最強だもんね。

幸いなことにリリアさんは気絶している。

昨日の寝不足のせいもあるのだろう。

起きたらきつと悲しそうな顔であたしを責めるんだろうな……。

つらいけど、あたしが決めたことなんだから受け入れなきゃね。

さあ、最後の仕上げをお願い。

『この女は人質にもらっていく。我に攻撃しようなどと考えぬこと  
だ』

この言葉の後、麒麟は雄たけびをあげて、都全体が揺れたように  
見えた。

人々はみんな、兵士ですらびびって何もしてこないだろうな。

麒麟は北を目指して飛び立っていく。

さあ、もう後戻りはできないぞ。

目指すは魔物の世界。

あたしの信じた道が正しかったのか、これからわかるはずだ。

## 06・魔物の世界へ

無事に北の都を脱出して、北の魔王の城へ向かうあたし達。麒麟、すごい速さで飛んでるな……。

北の皆らしきところまであっという間に着いて、すぐに見えなくなる。

しかも背中に乗ってるあたしたちには風すら来なくて快適だ。魔法なのかなあ。

そして北の魔王とやらの城が見えてくる。

うーん、数時間だったけど快適な旅だった。

さて、入れてもらえるのかな？

『我は神獣、麒麟なり。我が主を通していただきたい』

お、あっさりとお城の門が開いた。

すごいな、トントン拍子に事が進んでいくぞ。

あたしたち4人ははちび麒麟に連れられて降りていく。

麒麟はさすがにでかすぎて入れないから外でお留守番をしてくれるようだ。

さてどうしようか、待っていればだれか出てくるかな？

ユウナよ、城の主に話をつけた。中で話してくるがよい

お、ありがとね。

うーん、話が早くて助かるなあ。

少し待つと誰かがやってきた。

ん？なんだか賢そうな女性？というか魔物？

なんで賢そうなのかと言うと、眼鏡をかけて手に本を持っている。



さらに、周りに本が浮いている。  
学者さんっぽい帽子？平たい正方形が乗ったようなやつをかぶっている。

うん、わかりやすく賢そうだ。

さらに言つと美人で、眼光が鋭い。正直かつこいい……。

「ヴェリア様のお城へようこそ。まずは私達の同胞を救っていただいたことに感謝いたします」

「どういたしまして、早く休ませてあげてね。あとこの人間、リリアさんも……人質として連れてきたんだけど、丁重に扱ってほしいの」

「了解いたしました。間もなく医療部隊が来ますので。あ、申し遅れました。私はこのお城で参謀をしているグリモアと申します」

グリモアさん……名前も賢そうだぞ。

お、担架を抱えて何人かやってきた。

みんな服を着ているけど、人間ではなさそうだ。

ただ、共通してみんな可愛いぞ。

犬っぽかったり猫っぽかったり、羊っぽいのもいるな。

ゲームとかでよく見る獣人的な？もしくはモンスター娘？

これがあたしの憧れてた世界だよ。

「無事帰ってきて良かったー」

「早く魔力を回復させなきゃ」

「あれ？こちらはもしかして人間？」

「わあ、わたし初めて見たよ」

「その人間はお客様扱いで丁重に扱うのだ。ただし、部屋には鍵をかけておくように」

「わかりました。うっ……緊張するなあ」

なんだかわいいわい楽しそう。

喜んでるなあ、助けてきて良かったよ。

リリアさんに対しては、なんだか緊張してるような感じだけど、興味深そうにもしているのかな？人間は魔物を心底嫌っているけど、魔物は人間を嫌ってないみたいだね。

任せても大丈夫そうだ。

でも、あとで謝り行くのが怖いな……。

恨まれてるよね……。

さて、まずはこの女王様とお話をしよう。

「それではユウナ様、参りましょう」

「わかった。あれ？あたし名前言っただけ？」

「麒麟様よりお聞きいたしました」

「そっか。麒麟とすぐに話がついたみたいだけど、麒麟のこと知ってたの？」

「名前は初めてお聞きしましたが、最強の神獣であるその存在をヴェリア様は知っていたようです」

「なるほど。名前はあたしがつけたばかりだからね。でも知ってる人は知ってる存在なんだね」

「そうですね。ヴェリア様は遙か昔より生きておられますので」

氷の女王ヴェリアさん、どんな人なんだろうなあ。

そういえばリリアさんが、すごく寒い氷に覆われた城って言うってたね。

それは人間がイメージしたもので、事実ではなかったんだろうなあ。

だってここ全然寒くないんだもの。

あ、おっきなドアが見えてきた。

「こちらへどうぞ」

「ありがとう」

グリモアさんに連れられてドアをくぐる。  
なんだか緊張してきちゃったな。

玉座つて感じの場所だ。

真ん中にある椅子にはだれかが座っている。

「ヴェリア様、ユウナ様をお連れしました」

「うむ、来るがよい」

「ユウナ様、どうぞお進みください」

「うん」

緊張しながら進んでいく。

とりあえずわかるのは、氷の女王は美人ということだ。

基本的には人間の形のよう。

氷でできているかのような美しく長い髪。

雪国育ちのような白くてきれいな肌。

なんだか周りがキラキラしてる？雪の結晶？

なんていうか神秘的だ。

「そなたがユウナか。麒麟より話は聞いた。その勇気ある決意に感謝する」

「あ、あの……。女王様、ご機嫌うるわしゅうございます……？」

「ふふ、そう固くならずともよい。いつも通りでよいぞ」

「あはは……。えっと、どういたしまして。無事助けられてよかったです」

「正直かなり嬉しい事態だ。ここ千年分の歴史がひっくり返るほどのな」

「そ、そうなんだ……」

うーん、なんだか照れちゃう。

氷の女王様だから冷たいのをイメージしてたけど、なんてあたたかい微笑みをするんだろう。綺麗だなあ。うん、あたしのしたことは間違ってたよなね。

「礼はいくらしてもし足りぬほどだ。して、そなたはこれからどうするのだ？」

「えっと……実は何も考えてなかったり……。行くところもないからここに置いてもらえないかなーなんて思ってた……」

「ふむ、それは構わぬ。そなたなら皆にも歓迎されるだろう。部屋も用意させよう。」

「ありがとう」

うーん、ほんと何も考えてなかったな。

とりあえずここにいさせてもらおう。

皆歓迎してくれるのか……。

あのかわいい子たちと仲良くなれる？

ちよつと楽しみかも。

「今日は疲れたであろう。グリモアに部屋まで案内させるゆえ、ゆつくり休むがよい。なにかあれば、グリモアでも城にいる誰にでもよいので聞くといい。この城は自由に歩いてもらって構わぬ。なんなら、部下にしたい者を選んでおいてもいいぞ」

「え？部下？」

「うむ、そなたに助けられた者など、部下になりたがる者はたくさんいるはずだ」

「そうなんだ……」

部下……。そう言うと楽しい響きではないけど……。

一緒にいてくれる存在と考えてみよう。

うーん、なんだか楽しくなってきたなあ。

「それではユウナ様、部屋へ案内いたします」

「うん、おねがい。それでは女王様、ありがとうございました」

「うむ、ゆっくり休むとよい」

あたしはグリモアさんに連れられて部屋へ移動する。

途中でたくさんのお魔物達と会う。

基本的にみんな人型みたいだ。

なんとなく、あたしを羨望のまなざしで見つめてくるような？

なんだかアイドル気分？

人助け……というか魔物助けっつてするもんだね。

かわいい子がいたので手を振ったら真っ赤になつた。

「魔物は凶悪って人間から聞いてたんだけど、みんなかわいいし……あたしここに気に入ったよ」

「そう言ってもらえると皆喜びます。人間には誤解されたままなのです」

「やっぱりそうなんだ……。なんでなんだろう？」

「千年以上前から伝わる……女神アルティアナ様の教えによるものでしょうね」

「そうなんだ……」

むう、やっぱりあの女神は悪物か？

でも、グリモアさんもちゃんと様付けしてる？

不思議だなあ。

「女神アルティアナ様ってあなたたちにとってどんな存在なの？」

「美しく、憧れの女神様ですね」

「そっか……」

うーん、よくわからないぞ??

女神の教えのせいで魔物は悪者にされてるのに……うーむ?

「女神様についていろいろ知りたいのであれば、城の皆に聞くといいですよ。わたしが全て教えてもいいのですが、複数の意見を聞くほうがよいと思われます。この話を通じて皆と仲良くなっていただければと思いますので」

困惑した感じのあたしに気付いたのか、そう言われた。

ふうむ、なんだかややこしそうな話なのだろうか。

とりあえず、皆と仲良くなるきっかけに使えるらしい?

ま、おいおい知っていきこうかな。

「それではこの部屋をお使いくください。リリア様は隣の部屋です。ユウナ様にも鍵を預けておきますね」

「うん、ありがとう」

「それでは後ほど夕食を運ばせます。なにか用事がある場合はそこにあるベルを鳴らしてください」

「わかった、いろいろありがとうね」

「いえ、それでは」

あたしに用意されたのは豪華な部屋だった。

広めだし、いろいろなものがそろってるみたい。

ホテルのスイートルームとか、当然行ったことはないけどこんな感じなのかな?

相変わらずあたしはお姫様気分だ。

さて、とりあえず隣のお部屋を覗いてみようかな。

リリアさんの顔を見るのは気が重いけど……行かなきゃね。

コンコン。ちゃんとノックしてと……。  
ガチャ。あ、中から開いた？

中から顔を出したのは、とてもかわいい……羊のような女の子？  
基本的には人型だけど、羊のような角、羊のようなもこもこの髪。  
服装は、白いエプロンドレスのようだけど、全体的に羊のような  
もこもこ感。

抱きしめたらさぞかし気持ちいいのだろう。

「あ、おじやまするね。この部屋にいるらしいリリアさんを見にきたんだけど」

「あ、先ほどの……仲間を連れてきていただいた方ですね。どうぞお入りください」

あ、このお城に入った時にいた羊っぽい子が。

あの時はよく見てなかったけど、かわいいなあ。  
部下になってほしいかも……。

「リリアさんはどうだろう？」

「疲れていたのか、よく眠っているようですね。今日はこのまま休んでいただくのがいいと思います。これから安眠の魔法をかけようとしていたところです」

「あ、そんなことできるんだ。ぜひそうしてあげて。ゆっくり休んでほしいんだ」

「はい……。リリア様のことはお任せください。あの、お名前を聞いてよろしいですか？」

「あ、ユウナだよ。よろしくね」

「ユウナ様ですね。よろしくお願ひします。それではここは私に任せとお休みください」

「うん、じゃあよろしくね」

邪魔をしても悪いので、すぐに部屋を出ることにした。

あ、名前聞いてないや。また今度でいいか。

あたしは自分の部屋でのんびりする。

しかし、ドレス姿ってなんだか落ち着かないな。

夕食が来たら聞いてみよう。

あ、麒麟はどうしてるんだろう？おーい。

どうやら問題なかったようだな

あ、いたいた。

麒麟のおかげで簡単に話が進んだよ。さすがだね。

それでどうしようか、戻した方がいいのかな？

いや、このあたりは人が来ることもなく快適だ。このまま休ませてもらいたい

わかった、のんびりしてね。

うむ

なんだかバカンスを満喫してるみたいだな。

さて、あたしものんびりしようか。

コンコン。

ベッドでしばらくごろごろしているとノックの音がした。

「はい」

「おじゃまします。お食事をお持ちしました」



むう……男の声か。

中に入ってきたのは、顔に魚のひれのようなのがついた魔物。かなりのイケメンなんだけど、あたしの興味の範囲外である。うーん、世話役は全部女の子にしてほしいって言うべきかな。

男が苦手と言えば、変にも思われないうな。

人魚男？さんは手際よく食事をテーブルに並べていく。

おいしそうだなー。

「それではごゆっくりどうぞ、なにか困ったことなどありましたら申しつけてください」

「あ、着替えとかないか聞こうと思ってたんだけど……」

「そうでしたか、それでは……後ほど女性の者をよこしますので」

「うん、ありがと」

「では失礼いたします」

ナンパしてきそうな顔だったのに、特に何もなかった。

うーむ、紳士だな。態度と対応は100点だ。

あたしが正常な女の子であればあっさり惚れていたかもしれない。

さあ食事にしようか、なんていうか豪華だなあ。

魔物の出す食事と言うことで少し警戒していたけどおいしそう。

ただ、お肉はなくて野菜ばかりな感じ。

これはなんとなくわかる。

魚でも動物の肉でも、このお城にいる誰かが共食いしてる気分になりそう。

でも野菜だけでも美味しいなあ。

あたしも今日から菜食主義者の仲間入りになっちゃうな。

1人でさみしい以外は、快適な食事時間だった。

さて、だれが来るのだろうか？

なんとなく、合コンで相手を待つ時の気分？

合コンなんて行ったことないけどね。

女の子同士の合コンとかあったら喜んでいったらるうけどさ……。

コンコン。

来た！あたしはドアに駆け寄り、開ける。

「失礼します。着替えが必要とのことでしたので持ってきてまいりました。」

「わあ、ありがとう」

廊下には移動できるハンガーラック的な物があり、たくさんのが掛けられていた。わざわざ持ってきてくれたんだね。

持ってきてくれた子は、犬のような子だ。

犬耳としっぽが付いている。体毛もあるみたい。

毛の色は白と言うか銀色？なんとなく柴犬っぽい。

そういえば耳や尻尾も柴犬っぽいかなあ。

顔は人間って感じだけど、普通耳のある位置には何もなっぽい。鼻の頭が少し黒っぽいのが犬っぽい？

髪の毛は毛の色と同じで肩くらいまでだ。

うんうん、かわいいな。

「とりあえず入ってね。中でいろいろ見せて」

「はい、失礼いたします」

中に入って、服はさておき犬っ娘をよく見てみる。

あれ？なんだか見たことがあるような？

そうだ、リアさんと泊った村で殺された魔物……そっくり？

むー、記憶力はいい方じゃないから自信はないんだけど……。

あの時の光景は目に焼き付いているんだよなあ……。

「どうかなされましたか？」

「あ、ごめんね。どこかで見たことあるような気がして……」

「そうですか、似た顔の魔物がいるのかもかもしれませんね」

「そうかも……」

うーん、どうなんだろうなあ？

あの殺された子……最後にキキヨウの花を握りしめてたっけ……。

そうだ、麒麟に頼んでキキヨウの花を探してもらおう。

おーい、ちび麒麟にお願いだ！

承知した

わーい、ありがと。

では、着替えをしようかな。

「寝間着になるようなのはあるかな？」

「そうですね、こちらなどはおすすめてです」

「わ、なんだかすべすべ」

「蚕の魔物がおりまして、服を作っております」

なるほど、これはシルクなのか。

あたしが身に着けている下着と同じ感じだ。

とりあえずこれでいいかな。

「じゃあこれ着ようかな」

「はい、どうぞ。それでは失礼いたしますね。あ。他の服もよろしければこのまま置いておきますが」

「あ、じゃあお願い、見てみるね」

「はい、ではあちらの方に……」

あれだけあればしばらく1人ファッションショーが楽しめそうだな？このドレスどうやって脱ぐの？

よし、手伝ってもらおう。

「あ、ごめん。着替え手伝ってもらえないかな？実はこのドレス着せてもらったから脱ぎ方わからないんだ」

「はい、わかりました。それでは失礼いたします」

犬っ娘の手があたしのドレスに触れて調べていく。

あ、名前聞かなくちゃ。

「ねえ、お名前教えてください？」

「えっと……、まだありません」

「え？なんで??」

名前がないっておかしいな。

人間が家畜に名前をつけてない理由はわかったけど、魔物は関係ないよね？

「わたしたちは、名前をつけてくださるご主人様が現れるのを待っているんです。名前をつけてくださった方に一生お仕えする。それがわたしたちの夢です」

「え……」

名前、つけてあげたいな……。

そのご主人様ってあたしでもいいのかな？

でも、そうなるってことは一生面倒見る覚悟が必要なんだよね。

あたしに務まるのだろうか？

あ、ヴェリアさんに言われた部下にするってのはそういうことな

のかな？

「ご主人様って誰になってもらうの？身分が上の魔物とか？」

「人間ですよ」

「え！？」

えっと？この魔物達は人間に名前をつけてもらって仕えたがってるの？

ちよつと頭が混乱してきたよ。

だとしたら、その夢は叶わないんじゃないの？

人間は魔物をあんなにも嫌っているんだよ？

なんか……悲しい……。

「あ、そんな顔をなさらないください。たしかにわたし達魔物は人間に嫌われています。ですが、いつかその時が来るかもしれないとみんな期待しているんです」

「そ、そうなんだ……」

「はい」

この犬っ娘の笑顔は……絶望なんて全くない……。  
とてもいい笑顔だ。

あたしはこの魔物達の願いを叶えてあげたくなった。  
世界を平和にする……。

つまり、人間と魔物を仲良くさせろってことだよな？

「背中にファスナーがあるようです。とても素晴らしいドレスのようです。見つけるのに苦労していました。おろしますね」

「あ、うん……」

そうそう、着替えの途中だった。

魔物のことは後でゆっくり考えよう。

ドレスを脱がされながら、これを最初着せてもらった時のことを思い出す。

リリアさん、女性の勇者が珍しいからはりきって用意したって言うってたな……。

やばい……考えてると泣きそうになるよ。

リリアさん、ここの魔物を見て考え直してくれないかな？

こう考えている間にあたしは下着姿。

「ユウナ様、お肌がとても綺麗ですね」

「うん、ありがとう」

「実はわたし、人に会うのも触るのも初めてでして、緊張しています」

「そっか、好きだけ見て触っていいよ」

「あ、いえ……。そんな畏れ多い……」

ちらつと見ると、顔を真っ赤にしている。

うーん、かわいいな。この反応はいいよ。

なでなでしたいなあ、着替え終わったらお礼とともにやってみよう。

「それでは、着るのも手伝わさせていただきますね。手をあげてくだ

さい」

「うん、おねがい」

あたしは手をあげて服を着せてもらおう。

うーん、すべすべ。さっきのドレスより触り心地がいいかも？

蚕の魔物さんにお礼を言いに行きたいかも。

「着心地のほうはいかがでしょう？」

「うん、最高だよ。ありがとね」

「それはよかったです」

「あ、ちよっとそのまま動かないで」

「はい？」

お辞儀をした状態で止まった犬っ娘の頭をなでなでしてみる。

うーん、髪の毛ふわっふわだ。

「ありがとねー」

「ひゃうづうづうー!？」

「えっ?」

あ……あれ? なにか悪いことしたかな?

悲鳴をあげて地面に崩れ落ちちゃったよ?

なでちゃだめだったのかな?

「ご、ごめんね? あたし変なことしちゃったかな?」

犬っ娘は顔を真っ赤にして、うるうるした目で見上げてくる。  
なんだろうか?

「す、すみません……。よくわからないのですが……。なんだかとても気持ちよくて……」

「そ、そうなんだ……」

「はい……。なんででしょう……?」

うーん、気持ちよかったのか……。

むむむ……?

なんだかとても嬉しいことのような気はするけど、あたしの頭も混乱している。もう少し触ってみて確かめたいけど、今日はやめて

おこっか。

「なんでだろう？ごめんね、変なことしちゃって……」

「いえ、問題ありません。それでは失礼しますね。よい夜を」

「うん、ありがとうね」

犬っ娘は顔を赤らめたまま早足で去っていった。

うーん??なんだかセクハラした気分?

でもなんだろう、とても楽しくなってきたよ?

あんな風にかわいがれる子を部下にしたいな。

あ、料理のお片づけはあの子がするんだったっばいけど……。

まあいいか、置いておこっか。

さて……とりあえずベッドで横になろうかな。

明日からやることは……いろいろあるな。

まずなにより、リリアさんだ。ちゃんと話をしないとね。

一番いいのは魔物達が人間に害を与える存在じゃないと知ってもらうことなんだけど、これは難易度が高いぞ。洗脳でもしなきゃ無理なくらい教えが根付いているはずだ。この魔物のお城でちゃんと生き延びて、しかもそれなりの待遇を受けているんだから少しくらいは信じてほしいな。

だめだったら、ちゃんとリリアさんが帰れる方法を考えよう。

あたしの頭じゃ無理だから、グリモアさんさんあたりにも協力してもらって……。

あれ?なんでグリモアさんは名前があるんだろう?明日聞いてみよう。

あとは部下かあ。

魔物達は名前をつけてくれる主人を欲しがっていると……。なんだか魔物って言うよりペットって感じだよねえ。



可愛がっていいのだろうか？

部下ってなにをするの？一緒に戦う？戦いはさせたくないよ？

人間と魔物が仲良くする方法を考えるってのがいいかなあ……。

ん？まてよ？

あたしは今完全に魔物がいい子たちと考えているけど、それは大丈夫なんだろうか？

あの謎の声の神様？に洗脳されたりしてないかな。

うーん……でも今のところおかしな点はないし。

魔物達かわいいし……。

えーと、洗脳されてたらこんな疑問持ったりしないよね？

うん、麒麟を信じよう。

ちび麒麟がそちらに行くぞ

あ、お花摘んで来てくれたのかな？

というか麒麟、さっきまでのあたしの思考に無反応？

照れてるんだとしたらかわいいな。

コンコン。

おや？ドアがノックされたぞ。

開けると、ちび麒麟がかわいく2足立ちして前足の肉球でキキョウの花をつかんで持っている。とりあえずかわいいので抱きしめてみた。この子は女心をわかっている。いや、分身なんだし麒麟がわかってるのか。

「はいつてー、今日は一緒に寝ようね」

ちび麒麟を部屋に招き入れ、まずは花を受け取る。

おお？根っこもちゃんとある、というか土ごと持ってきている。

植物に優しいねえ。いい子だ。

あたしは部屋にあるコップにそれを入れ、水差しから水を注ぐ。  
よし、また会えたらさっきの犬っ娘に見せてみよう。

あたしはちび麒麟を抱っこしてベッドに横になる。

うーん、もふもふ。

幸せだなあ……。

そういえば、元の世界に戻る手段を失くしちゃったなあ。

まあいいか、ここはここで楽しそうだよ。

お気楽過ぎるかな？

でもきつと大丈夫。

そんな予感がするんだ。

というわけでおやすみ……。

07・部下募集中！

起きた！

ちび麒麟のもふもふに包まれていい目覚めだ。

なんとなく今日は楽しいことが起きそうな予感。

さて、着替えはいいかな。

このシルクの服はそのまま普段着でもいけそうだ。

白く、薄く、肌触りがいい。

それでいて透けることもない。いいものだなあ。

とりあえず、リリアさんのところへいってみようかな。

ノックをして部屋に入ると、昨日と同じ羊っ娘が看病していた。

この子も名前ないんだらうなあ。

「ユウナ様、おはようございます。ゆっくりとお休みになられましたか？」

「おはよう、よく眠れたよ。もしかして昨日からずっとここにいるの？リリアさんの様子はどうか？」

「はい。昨日は悪夢を見られていたようなので、それを打ち消しておきました。しかし、その影響で今日1日は眠りについたらままかもしれません」

「悪夢を打ち消す？そんなことができるんだ」

「はい、わたしは夢や眠りに関する力を使うことができますので」

「そうなんだ、リリアさんがよくなったらわたしもお願いしようかな」

「はい、いつでもお任せください」

なんだかすごい力を持つてるんだなあ。

眠れない夜はこの子の数を数えるだけでもよく眠れそうだ。  
こんな優しい力を持つてる時点で悪者じゃないってわかるね。

「一晩中看病してくれたんだよね？あなたも疲れてるでしょ。しっかり休んでね」

「はい、これから休もうとしていたところです。その前にユウナ様にお会いできてよかったです」

「うん、あたしも会えてよかったよ」

「あ……。それでは失礼いたしますね」

「うん、またね」

顔を赤らめて去っていく羊っ娘。

あの反応は？あの子も脈ありなのかな？

うーん、朝から幸せ。

リリアさんを見ると、安らかな顔で眠っている。

今日もお話できそうにないけど、あの子のおかげで大丈夫そう  
だ。

悪夢ってきつとあたしのせいだよ……。

さっきの子みたいに解決できる力を持った子が他にいないか探  
してみようかな。

部屋に戻って少し待つと朝食がやってきた。

今日持つてきてくれたのは……。鳥さん？

顔はまんまかわいらしい女の子んだけど、手が羽だ。

手の平がなく、肩からおっきな白い羽が伸びている。

その羽が器用に料理のワゴンを運んでいる。

着ているのはノースリーブのワンピースだろうか。

スカートから伸びている足は鳥のものだ。指が3本？

とりあえず、何の鳥かは不明だ。

そもそもこの子は飛べるのだろうか？物理的に無理なような……。

「ユウナ様でしたよね？昨日はよく眠ることが出来ましたか？」  
「うん、いいベッドだからよく眠れたよ」  
「それはよかったです。ここにあるお布団はわたしの羽毛で作ったんです」

「わお、鳥っ娘の天然羽毛布団。  
綺麗でやわらかそうな羽だものなあ、そりゃあ気持ちいいや。」

「そうなんだ……。たしかに気持ちよさそうな羽……。触っていいかな？」

「えー？あ……。はい……。では急いで料理を並べますので、その後で！」

「あ、急がなくていいよ。ゆっくり用意して」

「は……。はい……」

「なんだか大慌てで昨日の夕食の食器を片づけている。」

「急にテンション上がったみたいだ。」

「昨日の犬っ娘のように触られると嬉しくなったりするのだろうか？」

「しかし、あの羽でどうやって物をつかんでいるのだろうか？」

「それもあわせてじっくり見てみたいものだ。」

「あ、今日の料理もおいしそう。」

「予想通り野菜ばかりだなあ。あ、でも目玉焼きがある？」

「今日は卵があるんだね」

「はい！わたしが今朝産ませていただきました！」

「え！？」

「目の前にいるこのかわいい子が産んだとな？」

「ちょっとびっくりして固まるあたし。」

ていうか、食べられていいのかな？

このあたしの反応で鳥っ娘は少し慌てたようだ。

「あ、もしやお嫌だったでしょうか？ちゃんと綺麗にして火も通してあるのですが」

「いや……ちよつとびっくりしただけ。でも、産んだ子なのに食べられて平気なの？」

「あ、それはご心配なく。これは命の宿っていない無精卵ですので、そ、そうなんだ……。じゃあ遠慮なくいただくね」

「はい！どうぞお召し上がりください」

ふーむ、つまり生まれてこない卵なのか。

なんていうか、ほぼ人の形した鳥さんの口から言われると、少しどきつとするな。

これはおいしくいただくとして、まずは……。

「あ、食べる前に……触らせてもらっていい？」

「あ……はい……」

鳥っ娘はあたしの前に羽を差し出してくる。

おお、ふわふわしてそうだ。

では遠慮なく……。

「ひゃうんっ！」

「あ、ごめんね……。そんな強く触ったわけじゃないんだけど」

「いえ、すいません……。人に触られるのがこんなにもくすぐったいというか気持ちいいというか……。あまりも予想外で」

「そ、そっか……。あまり触らないほうがよさそうだね」

「あの……ごめんなさい」

「いいのいいの、じゃあ食事いただくね」

「はい……」

触ったのは一瞬だけど、羽は予想通りふわっふわだった。でも……いちいちこんな反応をされては、感触を楽しめないな。

不思議な子たちだなあ……。

「それでは失礼しますね」

「うん、ありがとねー」

さあ、1人で食事をいただくか……。そういえばちび麒麟はいつの間にかいなくなってるな。一緒に食事をしてくれる子を早く見つけたいかも。

あ……リアさんともまた食事したいな……。

できるといいなあ……。

っと……切なくなっではいけない。

食事は楽しくね。

うん、この目玉焼きおいしいぞ。

1日に何個産むのだろう？

これを食べさせてくれたことで、歓迎されているようでうれしい。というわけで楽しく食事完了。

さて……なにをしようかな？

とりあえず、キキヨウのお花のお水を変えておく。

今日はあの犬っ娘に会えるかな？

いや、会いに行けばいいのか。

お城は自由に歩いていいって言われたし。

よし、行くっ！

コンコン。

あら？行く前に誰かが来たようだ。  
だれかな？

「はい、どなた？」

「あの、ユウナ様にご挨拶がしたくて……」

おや？この猫っ娘はもしかやあたしが助けた子？

1人かな？

「とりあえず入ってー」

「はい、失礼します」

部屋の中でじっくりと見つめる。

うん、間違いなくあたしが助けた子だ。

ふわふわくるくるした栗色の髪が肩まであり、頭には猫耳。

お尻からは尻尾が出ている？服に穴があけてあるのかな？

着ているのはパジャマみたいかな？寝てたんだろ？

でも……大丈夫なの？

「あたしが助けた子だよな？元気になったのかな？」

「はい、おかげさまで無事に帰ってこれました。魔力を奪われていました。城の皆が少しずつわけてくれたのでもう大丈夫です」

ほうほう、魔物達は魔力を分け合えるんだね。

なんていうか、みんな優しいんだなあ。

「そっかあ、心配してたんだけど大丈夫そうだね。でももう1人は？」

「あの子は双子の弟なのですが、少しショックが大きくてまだ寝ているんです」



「そっか、少し心配だね」

「でもこのお城にいればすぐに治りますよ。心配無用です」

「そっかあ、よかった」

よかった……。

この元気な姿を見ただけであたしがやったことが間違っていないと思えた。

あ、なんで捕まったか聞いておこうかな。

話したくないかもしれないけど、今後の参考にしたい。

「とりあえずお話ししよう。そこに座って」

「あ……はい」

猫っ娘をソファーに座らせてあたしも隣に座る。

なんだか緊張してるみたいだなあ。

仲良くくつつきたいところだけど、やめておこう。

話すらできなくなる恐れもある。

「ねえ、思い出すの辛いかもしれないけど、どうして捕まったか教えてくれる？みんながこれから捕まらないように知っておきたいの」

「はい……大丈夫です。わたしと弟は動きが早いので偵察部隊に所属しています。それで、今建設中の砦を偵察してたんです……」

そうやって猫っ娘は語り始めた。

なんていうか……あたしの予想がそのまんま当たっていた。

偵察中に崖から落ちた人間を見つけたそうだ。

この子は治療ができるらしく、怪我を治した。

そして、あたしの先輩勇者とやらに見つかって捕まったらしい。

むう、人間は恩を仇で返したか。

よし、あたしは間違っていないとまた一つ証明された。

「大変だったね……。それで、その勇者はどうだった？あたしも戦うことになるかもしれないから知っておきたいんだ」

「実はよくわからないのです……。気がついた時には体が重くなつて……。全く動けなかったのです。そのまま抵抗もできずに捕まりました」

「なるほど……」

たしかその勇者は重力を操る力を持つてるとリリアさんが言っていた。

周りの重力を強くされて動けなくされたんだろうな。

ふうむ、なんか強そうだぞ。

でも、これ知ってるだけでも少しだけ有利だよな。

さて、次はこの子についてだ。

部下にしたいな。

治療できるって言ってたし、勇者のパーティーに回復役は必須だ。

「いろいろ教えてくれてありがとうね、参考になったよ」

「いえ、この程度でよろしければ」

「ところでね、あたしの部下になってくれる人を探してるんだけどさ……。よかつたら……」

んー、なんか告白してる気分になるぞ。

断られたらどうしようという感じが似ている。

「わ、わたしをですか！？えと……えと……」

「嫌……かな？」

「い、嫌だなんてとんでもない！ただ……。あの、その……」

すごい慌てようだなあ。

これは喜んで慌てていると思つていいのかな？

「ちょっと落ち着いて。慌てなくていいからね」

「あ、すいません。えつとですな……嬉しいのですが、この状態だとわたしが捕まったおかげで抜け駆けして部下にしてみらうようでするいと言いましようか……」

抜け駆け？ふうむ、ずるくはないと思うけど、ずるい気分なのかな？

じゃあ、ちゃんとみんなの中から面接でもして選べってことだろうか？

こつという時はグリモアさんに相談かな。

「わかった。じゃああなたが納得する形で選ぶね」

「え？あ、はい……おねがいします」

「ちょっとグリモアさんに相談しようと思うんだけど、どこにいなかな？」

「それでは呼んでくれますね、待つていてください」

「うん、お願いね」

小走りで部屋を出ていく猫っ娘。

足音をほとんど立てずに素早く動いたぞ。

たしかに偵察に向いていそうだ。

しばらく待つて、グリモアさんが部屋にやってくる。

さっきの出来事を話した結果……。

「それでは、部下になりたい人の募集を貼り出しましょう。その後でユウナ様に何人が選んでいただいで、面接をしていただくということだ」

「ふうむふうむ、じゃあそれでいこつ」

あっさり決まった。

グリモアさん、こういう展開になるとわかっていた感じだった。あたしの部下になりたい人ってそんなにいるのかなあ？

部下だとあたしは上司？って言うかご主人様か。

あ、そういえばグリモアさんはなんで名前があるのか聞いてみよう。

「ねえ、グリモアさんの名前はだれが付けたの？」

「ヴェリア様です。わたしはずっとあの方にお仕えしてきました。

そして、そのまま一生仕えたいと思い、名付けていただきました」

「なるほど、ヴェリアさんが好きなんだね」

「まあ、そういうことです……」

きりつとした真面目な委員長とでもいった感じのグリモアさんの顔が一瞬だけ少しほころんだ。ちよつとかわいかったぞ。

でもそうすると、人間と違って女性同士で好きになっちゃいけないって教えはなさそうか？よし、リリアさんに言われたあの時は絶望したけど、今回は希望が持てそうだ。

「それではユウナ様。募集文書を作りますね」

「うん、なにかに書くのかな？」

お？グリモアさんの手元に白い紙が出てきたぞ。

そして、そこにあたしの絵が浮かび上がり、部下募集中の文字が

……。

おおお？なんだこりゃ？

「すごいね……そんなことできるんだ」

「はい、作戦などを皆に伝える際、このように文書で渡すと効率が

よいのです」

「すごい能力を持つてるんだねえ、さすがは参謀さんだ」

「はい、これでヴェリア様のお役に立てています」

うーん、とても優秀なプリンターといった感じだ。

本とかも作れそうだなあ。

では、ポスターに書く文を決めよう。

どうするかな……。

- 1．まずは女の子募集
- 2．基本的に一緒にいてくれる子
- 3．触らせてくれる子

とりあえずこれを書いてもらった。

ちよつと欲張ったかな？

「ユウナ様、この文ではおそらくほとんどの者が来てしまうと思います。もう少し厳しくした方がいいと思いますよ」

「え!？」

なぬう、みんなずっと一緒にいて触らせてくれるってことかい？

うーむ、予想以上に期待されてるの？

じゃあ……えつとえつと……。

- 4．面接では服を脱いで身体検査もあります。
- 5．キスされてもかまわない子
- 6．あたしのわがままをたくさん聞いてくれる子

「これならどうだろう？だいぶ欲張ってみたけど」

「なるほど、これなら最初は恥ずかしがって遠慮する者もそれなり

にいそつです」

最初だけなのか。

というかいいのか……。

むー、早く面接したいぞ。

「それにしてもユウナ様は、我々魔物にとって理想の人間ですね」「え？そうなんだ。おかしくないのかな？」

「おかしいところなどありません。それもこれからの皆の反応でわかっていただけだと思います。それではこれを貼り出しますね。お昼に希望者を広間に集めます」

「うん、お願いね」

「それでは失礼いたします」

ふう、お昼が楽しみだ。

それにしてもグリモアさん、見た目通り頭いいなあ。判断も早いし、いろいろと相談させてもらおう。

リリアさんを無事に帰す方法も見つけてくれる気がする。

よし、面接に備えて準備をしよう。

部屋の片づけ……はしなくていいな。

身だしなみ……よし、髪をといてと……。

ここには鏡もブラシもあるぞ。なるべく綺麗に見えるようにしよう。

化粧はないか……あってもやり方知らないけど。

あと体も綺麗に……ここはお風呂なさそうだなあ……。

とりあえず体を拭こうかな。

服を脱いで、下着も脱いで全裸になっちゃああたし。

えっと……下着を変えたのは昨日の朝か。

うん、そんなに臭くはないな。

なんとなくだけど、いい素材で消臭効果とがありそう？

あたしの世界みたいな技術はないんだろうけど、なんとなくそんな気がする。

でも、下着の替えも用意してもらえばよかったな。

とりあえず今日はこれでいくか。

あたしはタオルを水差しの水で濡らして体を拭く。

うーん、気持ちいいなあ。

よし、綺麗になった。

さ、下着をつけよう。ストッキングは無しでいいや。

生足で勝負だ。

えと……。

リリアさんやメイドさんに着けてもらった時はとても綺麗な胸になったのに、今はいつも通りだなあ……。ブラ着けるのにそんな技術があるの？うう……。リリアさんにまた着せてほしいな。

そのためにもがんばろう！

無事に着替えた後、面接で聞くことを頭の中でまとめて過ごした。

グリモアさんに紙とペンをもらっておくべきだったな。

とりあえず頭に刻みつけておこう。

公平に面接しなきゃね。

そんなこんなでお昼になったっばい。

今日お昼を持ってきてくれたのは男だった……。

えつと……。狼男？今日は満月じゃないと思うよ。

でも昨日の魚男と同じく紳士であった。

襲われることもなく準備完了。

でも一応会話してみようか。

「ねえ、あなたたちも同じような食事なの？お野菜ばっかりの」

「基本的にはそうですね。しかし時々、肉を食いたい希望者が集って狩りへ行きます」

「おお、それは楽しそうだ」

「ユウナ様も肉が食いたい際にはぜひ参加されてみてください。肉をここへ持ち込むと嫌がる者もいるため、外で食べることにになります」

「うん、行ってみる。あたしも肉食べたいから誘ってね」

「はい。来ていただければ皆はりきると思いますよ。では、失礼します」

「ありがとねー」

お肉も食べられることに安堵する。

男相手でも話しかけてみるものだ。

軟派な男は嫌だけど、あんな風に紳士的に会話できるやつなら問題ないな。

うーん、いいところだ。

さて、美味しいお野菜を食べましょう。

ふう……。おなかいっぱいだあ。

野菜だけとはいえおいしすぎるよ。

幸せ。

さて、リリアさんの様子を見に行ってみるかな。

ノックしても返事はないので、そのまま侵入。

やはりベッドで寝たままみたいだ。

うん、安らかな顔してるね。

でも、食事はどうしてるんだろう？

なんとなくだけど、栄養をあげるような便利魔法がありそうな気



がする。

魔力を分け与えたりできてるんだもんね。

よし、部屋に戻るかな。

少し待つとグリモアさんが現れた。

大広間に連れていかれるあたし。

さーで、何人くらいいるのかな？

「ユウナ様、本日は条件を厳しくしたので集まったのは20名ほどです。それと仕事中的のために募集文をまだ見ていない者や、見ても今日来られない者も半分以上おりますので、また次回もお願いいたします」

「う、うん……。なんか緊張するなあ」

「皆も緊張していると思います。じっくりと選んであげてくださいね。皆にとっては、とてもだいじなことなのです」

「わかった……」

20人かあ、たくさん選んであげたいけど今日は数人が限界なのかな。

時間をかけて決めてあげないといけないもんね。

昔お母さんに言われたことを思い出す。

ペットを飼うなら、ちゃんと最後までお世話をする……。

いや、今から選ぶのはペットではないのだけど、そういうことのはず。

いねー

部屋に入ると、皆が一斉に見つめてきた。

こんな注目浴びるのは、北の都ノースリアで凱旋した時以来か。でもあの時とはまた違う。

皆の期待の目がすごいぞ。

うーん、ぱつと見でいるんな動物に、人魚、タコ、虫？  
いるんな魔物がいるぞ。

あ、猫っ娘発見。

犬っ娘はいない模様。少し残念だなあ。

この子たちに共通しているのは、みながみな可愛いということだ  
ろうか。

まずはそれぞれとお話をして、候補を絞る。

猫っ娘はもう決めてるんだけどね。

あとは……人魚っぽい子と蚕っぽい子を選ぶ。

人魚っぽい子はなんかもう見た目が好みだったからだ。

あたしの大好きなお友達、可奈ちゃんに少し似ている。

蚕っ娘はあたしの今着ている服を作ってくれた子だった。

いるんな服作ってくれるみたいなんだもん。

なによりこの中で一番若く見える。

おねえちゃんと呼ばせたい子ナンバーワンなのだ。

選んだ子をグリモアさんに伝えて、あたしは部屋に戻る。

目の前で発表すると、悲しむ子の顔を見ることになるってことで  
グリモアさんが配慮してくれた。優しいね。

各自に手紙入りの封書を渡して、部屋で開けさせるらしい。

なんだか合格通知っぽいなあ。

その中に2次面接の案内が、不合格通知が入っているようだ。

それを魔法的な力であっさり作るグリモアさんがかっても便利だ。

さあ、部屋で待とう！

まずは猫っ娘が来るぞ。

もうあたしの中では採用決定だけど、ちゃんと面接をしよう。

一応向こうからお断りしてくる可能性もあるしね。

あたしは自分をすべてさらけ出すんだ。

つぶつぶつぶ、楽しみだ。

08・あたしの可愛いモン娘 猫娘

コンコン。

ノックの音がして、あたしは部屋に猫っ娘を迎え入れる。

あたしの部下を選ぶ面接の始まりだ。

いや、部下というよりペットと言っか、友達と言っか、もっいっそ恋人？

あ、そうなるとたくさん増えていくとハーレムになるの？

とりあえず、大切な1人目だ。

まずしっかりと見てみよう。

ふわふわくるくるした栗色の髪が肩まであり、頭には猫耳。

顔はほぼ人間だけど、人の位置に耳はない。

色は少し褐色で髪の色に近い。

手は人間の手に近いけど、指が短めで肉球もあるっぽい。

そしてもちろんしっぽ。白と栗色のしましま。

ぶっっちゃけ猫のコスプレした人間に見えなくもない。

だけどこの子は間違いなく魔物なのだ。

「ユウナ様、失礼いたします。本日はここに呼んでいただき感謝しております。どうぞよろしくお願ひしますね」

「うふふ、そんな固くならなくていいよ。実はね、もう最初はあなたに決めちゃおうと思ってるんだ。あとはあなたがあたしのことを気に入ってくれるかだけだよ」

「え？あ……光栄……です。わたしのほうは何も文句などありません！」

「それはこれから決めてね。まだわたしのことをよく知らないわけだしさ。募集文しっかり見たよね？」

「はい……」

そう言っで顔を赤らめる猫っ娘。

これは、裸で身体検査を思い浮かべたか、はたまたキスの文か。とりあえずあたしが言いたいのは……。

「あたしって結構わがままなんだ。だからいろいろ言うからね、嫌だったらちゃんと嫌って言うんだよ？」

「はい……。でも、おそらく嫌なことはないかと……」

「ふーん、そう言われると意地悪しなくなっちゃうかもだよ」

「ユウナ様でしたら……」

おおお？何だこの反応は……。

完全にあたしに惚れているとしか思えない反応？

危険なところを助けたんだし、こうなるのも当然なのかな。

よ、よし……。いろいろ要求だ。

とりあえずソファアに座らせる。

あたしは立ったままで質問をしよう。

「まずあなたってさ、猫だよな？」

「はい、猫型の魔物です」

ふむ、見たことないけどこの世界にも動物の猫はいるようだな。

それなら話が早い。

「あたしが異世界から来たってことは知ってるよね？実はあたしが元いた世界にも猫っているんだ」

「そうなのですね。ユウナ様の世界とこの世界には共通点があるのですね。なんだか嬉しいです」

「それでさ、あたし猫って大好きなんだ。だからあなたのことも最

初に見たときから気に入ってたんだよ」

「それは……嬉しいです。猫の魔物に生まれてよかった……。プロメイティア様……」

目を閉じて感激している猫っ娘。

今つぶやいた名前はだれ？

「ねえ、今だれの名前言ったの？プロマ……？」

「プロメイティア様です。わたしたち魔物を作ってくださいました神様です」

「その神様は女神アルティアナとは別だよね？」

「はい、アルティアナ様は女神様。プロメイティア様は男神です」

なるほど、男の神様もいるのね。

てことは……神託の時に聞こえたのはその男神か？

うーん、こんな可愛い魔物達を作ってくれたその神様に感謝だ。

あたしはこの瞬間、プロメイティア教に入信することとした。

いや、別に宗教ではないんだらうけど……。

「じゃあ、あなたみたいな魔物を作ってくれたプロメイティア様にあたしも感謝するよ」

「はい、嬉しいです。人間の間ではプロメイティア様は何故か邪神とされていて……名前を呼ぶことすら禁じられていると聞きましたので……」

「そうだよねえ……あたしもそう教えられちゃって困ってたよ。あなたに教えてもらえてよかった」

「はい！」

満面の笑顔の猫っ娘。

プロメイティア様のことが大好きなんだろうなあ。

それにしても人間側は、魔物を創ったという理由で男神を邪神としたわけか。

これも女神アルティアナの教えかな？

どんだけ魔物を嫌ってるんだか。

さ、話の続きをするか。

「じゃあ話を戻すね。猫が好きだからさ……あなたにはもっと猫っぽくふるまってほしいんだ」

「猫っぽく……ですか？」

「うん、まず猫の鳴き声ってできる？」

「はい……えっと。にゃあ……」

おお！かわいいぞ。

正直言つと本物の猫には全然似ていない。

可愛い女の子がにゃあと言ったただけな感じだ。

だが、それがいい……。

「あたしの最初のがままはね、常にそれを語尾に付けて話してほしいんだ」

「語尾……ですか？えっと……その……にゃあ？」

よしよし、これをやってくればかわいさ300%アップだぞ。

ちゃんと教えてみよう。

「じゃあ演技指導してあげるね。まず朝の挨拶なら、おはようございますにゃ。言ってみて」

「お……おはようございますにゃ」

「うんうん、かわいいよ。なでなでしてあげる」

「ひゃうんっ！」

頭を撫でると、予想通りの反応。

昨日の犬っ娘と同じだね。

でも今日は容赦しないぞー。ふっふっふ。

「びっくりしたのかな？でもあたしの部下になるってことは、よくこんなことされちゃうんだよ」

「びっくりしましたが……気持ちいいです……。よくされてしまうのですね……。あ、にゃあ」

「そっかそっか、気持ちいいのかあ。それでね、驚いた時とかも、にゃあっつて言うのを心がけてね。もう1回行くよ」

あー、もう最高に可愛くて楽しいよ？

ここにきて本当に良かった！

あたしはまた猫っ娘の頭を撫でる。

「にゃあっー！」

「うん、合格。常に猫言葉を意識してね。お返事もだよ」

「はいですにゃ」

「うんうん、わかってきたね。かわいいかわいい」

「そ、そんなに言われると照れます……。にゃ」

いやあ、これが萌えってやつかな。

嫌がってもいないようだし、一安心。

このままがんばってもらおうとしよう。

「じゃあどうかな？このあたしのわがママは聞いてくれる？」

「は、はいですにゃ……。がんばります……。にゃあ」

「うんうん、いい子だよ」

「にゃっ……」



顔を真っ赤にしてうつむく猫っ娘。

もう抱きしめたいなあ。

でもまだ我慢……。ちゃんと手順を踏むのだ。

「次はね、特技を聞きたいんだけど、たしか治療ができるんだよね？どうやるの？」

「えっとですね……。いやあ。嫌がられるかもしれませんが、舐めて治すんです……。にゃ」

この可愛らしい猫っ娘が舐めて治療してくれるとな？

嫌どころか……。ぜひやってほしいぞ。

えーと、あたしは怪我をしてないし……。よし！

「ユ、ユウナ様！？にゃああ！？」

猫っ娘の悲鳴も無理はない。

あたしは床に向かって思いっきりダイブしたのだ。  
いてててて……。

腕と膝と顔を少しすりむいたようだ。

さあ！治して！

「あなたの能力を確かめておきたいの……。治してみて……」

「わ、わかりましたにゃ！」

猫っ娘は大慌てであたしに飛びついてくる。

素早い動きだな。

この動きなら戦場でも活躍できそうだけど、治療にはどのくらい時間がかかるのだろうか？

「まずは顔からいきます……にゃ。傷が残ったは大変ですから……にゃお」

猫っ娘があたしの顔を一舐め。

長い舌だなあ、少しざらっとしてるけど気持ちいいぞ。

そのままあたしの腕の傷を探す猫っ娘。

あれ？もしかしてもう顔のすり傷は治ってる？

一舐めで治すとはやるな。しかし残念である……。

そのまま腕もぺろりと治され、膝もあっさり治される。

「と、とりあえず治したはずですが、まだ痛いところはありますか  
にゃ？」

「いや、大丈夫みたい」

「ほっ、よかったですにゃあー」

安心して床に座り込む猫っ娘。

あの程度であんな心配してくれるなんて、いい子だにゃあ。

って猫言葉がうつつってる場合じゃない。

とりあえず舐められた腕の匂いを嗅いでみる。

唾液特有の嫌な臭いはない。

傷を治すことが出来るから、臭いの菌とかもないわけだろうか？

とりあえず褒めてあげなくちゃ。

「ありがと。すごいんだね、こんなあっさり治せるとは思わなかったよ」

「浅い傷ならあのくらいで治せますにゃ。もっと深い傷では何度も舐める必要がありますが……にゃお」

「そっか、でも優秀だよ。もともと合格だったけど、さらに合格」  
「にゃうっ……」

照れてるといふか喜んでるようで、また真っ赤になっている。かわいいにゃあ。

でも、物足りないからもっとやってもらおう。

怪我は無しでね。

「でも、もう少し確認しておきたいからさ、あたしの顔に深い傷が出来たと思ってやってみてくれないかな」

「わかりましたにゃ。失礼しますにゃ」

猫っ娘が長い舌を伸ばしてあたしのほっぺを大きく舐める。

さらに舐める。何度も舐める。

なんだかじゃれられてるみたいだなあ。

ほっぺたあつたかくて気持ちいいぞ。

いやあ幸せ。

もし戦う必要があればこの子を戦場に連れていこう。

戦いはさせなくていいの。

あたしが守って、怪我をしたら治してもらおう。

「気持ちいいな。あなたの能力、とっても優しいね。あなたが怪我を治した人間の兵士もきつと感謝してるよ。捕まったのは怖かっただろうけど、そのおかげであたしはあなたに会って、ここに来る決心をしたんだよ」

「にゃあ……」

「ふふ、もうやめていいよ。ありがとね」

「はい……わたしは捕まってしまったけど、あの人間を助けたことを後悔していません。だからユウナ様の言葉が嬉しいです……。あ、にゃあ」

「そっか、そんな優しいあなたのことが大好きだよ。これからあたしが守ってあげるね。もう2度とあんな怖い思いはさせないから」

「ユウナ様……嬉しいです……にゃ」

「さ、面接の続きしようか」

「いえ……もう今の言葉で決めましたにゃ。あなたに伝えさせていただきたいですにゃ」

なんとなくいいムードだ。

この子がこういうのなら、もう決めちゃおうか。

じゃあ、あとひとつだけ……。

「わかった、じゃあ今からすることを受け入れてくれたらね。目を閉じて……」

「えと？はい……にゃう」

さて……キスしちゃっていいよね？

募集文にも書いておいたわけだしさ。

しかし……緊張するな。

これってあたしのファーストキスだよ？

異世界で、魔物にあげちゃうとは思わなかったけど……。

この子なら相手に申し分はない……。

嫌がって逃げたらショックだけど、そうならないと確信してる……

…。

ではまず頭に手をまわして……。

「にゃっ！」

「大丈夫、怖くないからね」

「いえ、ユウナ様の手が気持ちよくて……にゃう」

「ふふっ、じゃあいくね」

「にゃお……」

この子もきつと何をされるかわかっているんだろうな。

よし、しちゃおうぞー！

あたしは顔をゆつくりと猫っ娘に近づけていく。  
やわらかそうな唇だなあ。

この唇にあたしの唇を近づけて……。  
ちゅっ。

「んっ！」

猫っ娘の体がびくんと跳ねる。

予想どおりやわらかい唇だな。

ついにしちゃったよ……。

キスつて、こんなに気持ちいいんだな。

あたしとろけちゃいそうだよ……。

どのくらいしてたかはわからないけど、あたしは唇を離れた。  
猫っ娘も目をとろんとうるませている。

「どうかな？決意は変わらない？」

「もちろんです……にゃお。おねがいますにゃ」

「じゃあ、あなたに名前を付けるね」

「にゃん！」

目を輝かせてあたしを見つめる猫っ娘。

さあ、可愛い名前つけなきゃね。

どうしようかな、あたしの好みで『ミ』の文字は入れたい。

ミケ？ミーク？ミイ？いやいや、猫っぽすぎる。

もう少し自然なのがいいなあ。

悩んだ末あたしの頭に浮かんだのは……。

ミリイ。

うん、人にもいそうだし、猫っぽいし。

喜んでくれるかな？  
呼んでみよう……。

「ミリイ……。あなたの名前、ミリイにしようと思うんだ。どうか  
な？」

「嬉しいです……。素敵……。とても素敵な名前です……」

猫言葉忘れてるよ。

そう言おうとしたけど、ミリイの目に浮かんでいる涙を見て言う  
のをやめた。

それだけ感動してくれたんだね。

今日からあなたはあたしの大切なお友達。

ついてきてね……。

あたしはミリイを抱きしめる。

「にゃっ！」

ミリイの体がびくつと震えるけど、あたしは離さない。

だって、驚いてるんじゃないって嬉しいんだもんね？

あたしわかってるんだ。

その反応も可愛いよ、ミリイ。

しばらくこうしてようつと。

あつたかいなあ……。

名前を付けたからって、見てわかるような何かが変わるわけじゃ  
ない。

だけど、ミリイの中ではすごい変化が起きてるんだろつな。

いったいどれだけの期間、名前を付けてくれるご主人様を待つて  
いたんだろつ。

あたしの可愛いモン娘第1号。

大切にするよ。

「ミリイ、これからよろしくね」

「はい！じゃなくて……にゃん！」

「ふふ、いい子いい子」

「にゃうー」

抱きしめたまま頭をなでなで。

そろそろ触られるのも慣れてきたかな？

ああ、かわいいなあ。

さて、面接の予定時間はまだあるけどどうしようかな。

ユウナよ、お楽しみのところすまぬが……よいか？

あら？麒麟見てたのかな？のぞきはだめだぞ。

なになな？

ユウナの持つ力、神獣召喚のことだが、名前を付けた者呼びだしたり還したりできるぞ

え？そうなの？魔物だけとできる？

その者らも神に作られた存在。我と変わらぬ。ただ魔物と呼ばれているだけだ

そうなのか、じゃあこの子たちも神獣と言っていいわけだね。試してみるよ、ありがとつね。

うむ、しつかりな

麒麟つてば、困った時に聞こえる天の声みたいだ。  
便利な子だねえ。  
さっそく試そう。

「ミリイ、ちよつと試したいことがあるの。部屋に戻ってみてくれる？もし10分たつても何も起きなかつたら戻ってきて」  
「にやう、わかりましたにやー」

ミリイが部屋を出て行つてから5分ほど経過……。  
さあ、呼びだすぞ。

「ミリイ、召喚！」

おお？麒麟の時のようにあたしの体から魔力が出て……。  
その魔力がミリイを形作った。  
麒麟の時と違つて魔力を全然消費していない気はする。

「あれ？ユウナ様？にやお？」  
「あ、成功したね。あなたを呼びだしたんだ。どんな感じだった？」  
「ユウナ様に呼ばれてる気がして……そのまま身を任せていたらここにいましたにや」  
「なるほどね。じゃあ戻してまた召喚するから、次は呼びだしに逆らつてみてね。それが出来たら歩いて戻ってきて」  
「にやう……。逆らせる自信はないですが、やってみますにや」  
「ちゃんと出来たらなでてあげるよ」  
「がんばりますにや！」

うんうん、かわいい反応だ。  
では戻してみよう。



「ミリイ、送還！」

あたしの目の前から消えていくミリイ。

無事に戻れたかな？

では再度召喚。

「ミリイ、召喚！」

む、何も起きないか？

頭などでしてほしいので行けないのですにゃ

おお？頭に声が聞こえてきたぞ。

ミリイの心の声かな？

召喚は断れるんだね。

着替え中やトイレ中に呼びだしちゃう心配はないわけだ。

そしてしばらく待つとミリイが部屋にやってくる。

「ユウナ様！できましたにゃ！」

「よしよし、いい子いい子」

「にゃうにゃう……」

無事ミッションをこなしたミリイの頭をなでなで。

可愛いなあもつ。

「いろいろ聞きたいんだけど、まず送還した後はどこに戻った？」

「部屋の中の、召喚された時にいた場所にそのまま戻りましたにゃ」

「なるほど。それで召喚を断った時はどんな感じだった？」

「ユウナ様に呼ばれてる感じは同じですが、行けない理由を思い浮かべたら……呼ばれる感じが消えましたにゃ」

なるほどね。これは便利だぞ。

危険な場所とかに行く場合も、連れていかずに召喚すればいざという時に還せるわけだ。これは使いやすそう。基本的にこのお城にいてもらうとしようかな。

教えてくれた麒麟にも感謝だ。

「あたしの能力が把握できたよ。ありがとね」

「にやう。お役にたててなによりですよ」

「体に異常とかないよね？大丈夫だった？」

「わたしは問題ないですよ。ただ……」

「え？ただなに？」

「ベッドで横になっていた弟がびっくりしていました」

「あはは……そうだよ。大丈夫かな？」

「はい、さっきの少しの間にお話ししておいたので大丈夫ですよ……にやあ。名前を付けてもらったことも言ったら一緒に喜んでくれましたにや」

「そっかあ、弟君うらやましがってたかな」

「少し……。でもおかげで元気になったようです。ユウナ様のおかげですよ」

弟かあ、一緒に部下にしてあげたいけど男なんだよなあ。

でもミリイにそっくりでかわいいもんなあ。

それなら問題ないかな？

「弟君にも付けてあげることになるかもだね。あたしは可愛い猫が好きって伝えておいてくれる？」

「わかりましたにや！きつとはりきりますにや。わたしも弟とこの話し方を練習しますにや」

「うん、期待してるよ」

「にゃん！」

うん、猫言葉もだいぶ慣れてきたね。

可愛いよ、ミリイ。

さて、後は何をしようかな。

服を脱いでの身体検査も考えてたけど、時間はあと少ししかない。

これは今度のお楽しみだな。

あとやるべきことは……。

「ミリイ、お願いがあるんだけど……」

「お願いだなんて、命令してくださいにゃ。ユウナ様」

「ふふっ、じゃあね……いろいろ触らせてほしいの」

「にゃう……ど、どつぞですにゃ……」

さーて、どこから触ろうかなー。

やっぱり猫耳？

気持ちよさそうだぞ。

まずはなでるようにさわっと……。

「にゃうっー」

「やっぱりくすぐりたい？」

「すこし……。でも嬉しいですよにゃ。遠慮せずにどつぞですにゃあ」

「じゃあ遠慮なく」

「にゃふー」

あたしは耳を手にとってよく観察してみる。

やっぱり猫そのまんまだ。

髪の毛と同じ栗色のうぶ毛。

さわり心地は髪の毛と違うね。

髪の毛がふわふわだとしたら、耳の毛はさわさわだ。

どっちも気持ちいいことに変わりはないけどね。  
えーと、根元はどうなってるんだろ？  
観察だ！

「にゃううー、ユウナ様あ。おかしくなっちゃいそうですよあ  
「もう少し我慢しててねー」  
「にゅうー」

うーん、耳を触っているだけなのにエッチなことをしている気分。  
ミリイは目を閉じてぷるぷる震えている。  
可愛いなあ、優しくしてあげるからね。  
髪の毛をかき分けて、耳の根元はどこかなー！  
ふむ……境目のな物はなく、急に猫耳がある感じだぞ。  
髪の毛があるすぐ横に耳のうぶ毛がある。  
なでてみると、急にさわり心地が変わる。  
なるほどなるほど。よくわからないけど満足。

「ふにゃあ……。わたしこんなに耳弱かったんですね……。にゃう」  
「今まであまり触られたことなかったの？」  
「にゃう……。だって……。好きな人以外にはあまり触られたくない  
場所ですよ」

「じゃあ、あたしは好きな人ってことでいいのかな？」  
「にゃ！？そ、それはもちろんのことなのですにゃう……」  
「じゃあさ、好きなら好きってちゃんと行ってほしいな」  
「えっと……。ユウナ様のことが……。好きですよ」

顔を真っ赤にして、目を潤ませながら好きと言ってくれるミリイ。  
いいものだなあ……。  
好きって言われるとこんなにも幸せなんだな。  
じゃああたしも……。

「あたしもミリイのこと大好きだよ。ずっと一緒にいてね」  
「にゃうう……。嬉しいですよ……」

あたしはミリイと見つめ合う。

あ、よく見ると目は少しだけ猫っぽいかも。

この見つめあう時間も素敵……。

でもどうせなら、猫っぽく胸に飛び込んできてほしいな。

あ、もししたくても遠慮してできないか。これも言うておかないとね。

「ミリイ、あたしの好きなことひとつ教えるね」

「にゃ！教えてほしいですよ」

「あたしね、好きな子に甘えられるのが大好きなの。だから……甘えなくなったら甘えてきてね」

「にゃう！じゃあさっそく！ユウナ様ー、にゃうううー」

「きやはっ」

ミリイがあたしの胸に顔をうずめてきた。

にゃごにゃご言いながら顔をぐりぐり動かしている。

ちよっとくすぐりたいなあ。

あたしのおっぱい気持ちいいのかな？

なでなでしちゃおう。

「ミリイ、かわいいね。よしよし」

「にゃうにゃう……。ユウナ様の胸……気持ちいいですよ」

「好きなだけ甘えてね」

「にゃーにゃー……」

楽しいなあ。

あたしが求めていたのはこのイチャイチャ感。  
憧れの生活をあたしは手に入れた！  
しばらくこのままにゃんにゃん楽しんだ……。

しかし、そろそろ次の子が来る時間だ。  
まだしっぽ触ってないのになあ……。  
まあいい……。後の楽しみにしておこう。

「それじゃあ次の子が来るからこのへんにしておこうか」  
「にゃん。了解ですにゃ」

「今日は一緒に夕飯食べて、一緒に寝ようね」  
「にゃ！よろしいのですかにゃ？」

「もちろんだよ。あなたはあたしの最初の部下……というかお友達  
と言っか……。できるだけ一緒にいてほしいな」

「わかりましたにゃ！精いっぱいお世話させていただきますにゃ」  
「うん、よろしくね」  
「にゃん！」

こうして、最初の面接は無事終わったのであった。  
可愛い部下が出来ちゃったなあ……。

猫っ娘ミリィ。

たくさん可愛がってあげなくちゃ。  
それが名付け親？の義務だよな。  
ほんと幸せだなあ……。

09・あたしの可愛いモン娘 人魚娘

コンコン。

来たかな。

2人目の面接は人魚っ娘だ。

ドアを開けると……台車に乗った水槽？

その中に人魚っ娘が浸かっている。

大広間で見た時もこの状態だったけど、水がないとだめなのかな？

「いらっしやい。入れるかな？」

「はい、失礼いたしますね」

おお？押ししてる人はいないのに台車が動くぞ。

これは魔法か何かなのかな？

「これはどうやって動いてるのかな？」

「わたしは水を操ることが出来ます。周りにある水を動かして水槽と台車を動かしています」

「なるほど、器用だね。水がないと動けなかったりするのかな？」

「はい……残念ながら水がないと何もできません。魚のように死ぬことはありませんけど……」

水を操るのか。かなり強力そうではあるな。

でも水がないとだめってことは召喚できる場所も限られそうかな。ま、とりあえず面接だ。

この子も見ただ目の可愛さでほぼ決まってるけどね。

上半身はほぼ人間、耳や腕に魚のひれみたくらいがあるくらい。

それもアクセサリーに見えなくないかな。

青い髪がとっても長い。身長くらいありそうだ。

青い鱗のような模様のビキニっばい水着を着ている。

露出が多いけど寒くないのかな？

水の中だからあまり関係ないか。

下半身は、おとぎ話に出てくる人魚そのまんまだ。

お魚というか、ジユゴンとイイのか。

でも、女の子の大事なところがある部分はスカートによって隠れている。

むむ……あそこはどうなっているのか？

とりあえずお話からだ。

「じゃあはじめようか」

「よろしくお願いいたします。こうやってお話できて光栄ですわ」

「うん、あたしもあなたに会えてよかった。実はね、あなたってあたしの好きな人に少し似てるんだ」

「好きな人……そのお方は女性なのでしょうか？」

「あ、うん……。女の子が好きって変かな？」

よし、ストレートではあるがこれを聞いておこう。

否定されるなら最初がいいし。

「いいえ、素敵だと思いますわ。愛には性別も種族も関係ありません。わたくしも昔、溺れている人間の女性を助けたことがあります。お恥ずかしながら惚れてしまったことがあるんですの」

「そうなんだ……素敵なお話……」

まるでおとぎ話の人魚姫だな。

相手が王子様でなく、女性ではあるけどあたし好みだ。

その人間とはどうなったんだろう？



聞きたいけど、悲しい話が返ってきてそう……。

「わたくしの片想いですけどね。その女性はだれに助けられたかすら知らないはずですよ」

「その人は気絶してたの？」

「はい、なんとか息は拭き返したのですが……その時他の人間に見つかり、銚で追われてしまいました」

「そっか……それは災難だったね……」

「いえ、幸運でしたよ？他の人間が現れたことで、その女性は間違いない助かったはずですから」

「そ、そっか」

すごく満面の微笑みで言われてしまった。

なんと前向きと言っか健気と言っか……。

この子もとってもいい子なんだなあ。

そういえば昔道德の時間に習ったっけ。

いいことをする時に見返りを求めてはいけないうて。

それを実践できるってすごいことだ。

でも……やっぱり悲しいなあ。

「その人に会いたいとは思わないのかな？」

「しばらくは思いました。しかし、もう100年も前のこと。その人間はもうこの世にいないでしょうね」

なぬ!?

この子とか言っっちゃってるけどすごい年上？

人魚の肉を食べたら不老不死の伝説とかあったっけ。

だから人魚も長生き？

いや、そもそも魔物が長生き？

「えっと、魔物って結構長く生きてるの？」

「そうですね。創られた時期にもよりますが、ヴェリア様などは千  
年前から生きておられるとか聞いたことがありますわ」

「そ、そっか……」

「でも基本的に年齢を聞くのは失礼な気がするので、皆がどのくら  
い生きているかよく知らないのです」

「そ、そうだね……。あたしも聞かないようにする……」

うーむ……。

魔物は皆若い見た目だけど年齢は不明なわけだな……。

まあ気にしないことにしようか。

ファンタジー世界なんだし、見た目が大事。

あ、でも……。

「寿命とかはどのくらいなんだろう？急に寿命で死なれたりしたら  
悲しいよ？」

「あ、わたくしたち魔物は通常の寿命で死ぬことはありませんので

ご安心ください」

「そうなんだ……不老不死??」

「いいえ……わたしたちは愛するご主人様を見つけて名前をいただ  
き、一生お仕えすると誓ったその時に寿命が定まります。すなわち

……ご主人様と同じだけ生き、ご主人さまと同じ時に死ぬこととな  
ります」

なんとなくロマンチックな話ではあるけど……ええええ!?

ミリイってあたしが寿命で死ぬ頃に死んじゃうの？

ううむ……名前を付けるってことはまさに命も預かることなのか。

慎重にならねば……。

「そ、それを聞くと名前を付けるのに躊躇しちゃうね……」

「そうかもしれないですね。しかし、そうやって死に至ることは……  
とてもとても幸せなことなんですよ」

「そっか……でもずっと生きててほしいな……」

「ご安心ください、魔物はその後で新しい命に生まれ変わると言わ  
れております。そしてまた新しい生活が始まるんです」

「そ、そっか……」

うーむ？

幸せに生きて幸せに死んで、また新しい人生か。

それなら問題ないのかな？

でも……この子たちをだまそうとする悪いご主人様がないか心  
配。

「もしさ、名前をもらった後でね、ご主人様が悪者だとわかったら  
どうなるの？もう取り消せないよね」

「そのような悪しき心の持ち主は、わたくしたちに名前を付けるこ  
とはできないと聞いております」

「なるほど……。でも、いい人だったのが名前を付けた後で悪い人  
になったら？」

「どうなるのでしょうか……。でも、名前を付けてくれた時点では  
善き心を持っていたご主人様なのです。たとえ悪くなったとしても  
一生お仕えしたいと思えますわ」

うっ……健気だよ。

こない子たちのご主人様があたしに務まるのかな？

いや、悩んではいけません。しっかりしよう！

「えっと……あたしにご主人様になってほしいと思って来てくれた  
んだよね？」

「はい」

「あたしのことまだよく知らないのに、よく来てくれたなと思ってさ」

そうなのだ。ミリイはあたしが助けたからってことでよくわかるんだけど……。

ほぼ初対面の他の子が来たのはなんでだろう？

一生を左右する問題なのにな。

「数日前のことですが、ヴェリア様がある予言をされました。この世界を変えることのできる勇者が現れると……」

「それがあたしなの??」

「わかりません。しかし、わたくしはそれがユウナ様のことだと信じております。こうしてお話をしている間にもそれが確信に変わってきています」

「うう……そんな期待されるとちよつと困るかも……」

世界を救うって結構なことだよ？

この子は結構思い込みの強い子なのかな？

過去に惚れた女性も一目惚れっばいし。

「あ……申し訳ありません。そんな重く考えないでくださいね。気楽に決めていただいて構いません」

「う……うん」

弱った。

この子も部下にしようとして最初から決めていたのに、今は悩んでいる。

あんな話を聞かされた後では気楽に考えられないよ？

うーん、あたしが選んだ理由……大好きな可奈ちゃんに似てるって言うのも失礼な話かもしれないよね。

「ユウナ様？わたくしがお嫌でしたら、遠慮なくそう言ってくださいね」

「うん、ごめんね。もう少し悩ませて……」

「はい」

こんな状況でも笑顔であたしにはなしかける人魚っ娘。

その笑顔がやっぱり可奈ちゃんに似てる。

かわいいなあ……。

なにかもうひとつ決意を深める何かをほしいな。

「もしさ、ヴェリア様の予言がなかったら、ここには来てなかったかな？」

「いえ、おそらくは来ていましたわ」

「どうして？」

「あの……恥ずかしくて言えなかったのですが……。ユウナ様はわたくしの、とても好みのお方なのです。先ほど話した女性にも似ています」

顔を赤らめて恥ずかしそうに言う人魚っ娘。

はい、採用決定。

そういう理由を言ってほしかったのさ。

やっぱり予言とかでなく、あたし自信を好きになってほしいよね。

じゃあ……こんな質問をしよう。

「もしもただけどね、その女性と仲良くなれてたらさ、一緒に何をしたらかった？」

「そうですね……。やはり、わたくしの住んでいる海の中を案内したかったですね。素敵なところなんです」

「そうだろうね……あたしも連れて行ってほしいな」

「行きますか？」

「え？行けるの？」

「はい」

おお？水中デート？

それはぜひ行きたいけどどうやるんだろう？

「でも水中では息が出来ないよね？」

「息をしていたく方法があります。ユウナ様がお嫌でなければですが……」

「どんな方法かな？」

「わたくしの口から酸素を受け取っていただく方法ですわ」

なぬ？それはまうすとうまうすとか呼ばれる伝説の？？

この子とキスしっぱなしで水中デート？？

それはぜひぜひお願いしたいものだ。

「嫌じゃないよ、ぜひ連れて行って！」

「はい、それではまずユウナ様にも水着になつていただかなくては」

「水着かあ、ここにはないかなあ……」

「あ、こんなこともあるうかと思ひまして持ってきておりますわ」

「お、用意がいいね」

最初から水中を案内してくれる気だったのかな。

あたしは用意された水着に着替える。

シンプルな白いビキニの水着だ。

着替えてる間、人魚っ娘は後ろを向いている。

この子もできる女性である。

着替え終わって見せに移動。

「着替えたよ」

「よくお似合いです、ユウナ様」

「ありがとう、じゃあ案内して」

「はい、行きましょう」

わーい、デートだデート。

ん？時間は大丈夫なのか？

「あ、でもあまり時間はないんだけど移動の時間とか大丈夫かな」

「はい、今日は短い時間のコースで行きましょう。30分ほどですわ」

「それなら大丈夫か。でも、海つてどこ？」

「はい、城の地下の方になります」

地下か、海に繋がってたりするのかな？

しばらく歩き、なんだかプールっぽいところに来たぞ。

あ、他にも魚っ娘や魚男とかいるぞ。

泳いでるのかな？

あ、漁から帰ってきたっぽいのもいるぞ

「あなたたちはお魚食べるのかな？」

「はい、海の恵みです。ユウナ様はお好きかどうかわからなかった  
のでお出ししていませんのですが、お魚は好きでしょうか？」

「うん、時々は食べたいかな」

「では今夜のメニューに加えるよう伝えておきますね」

「ありがとう」

ふーむ、動物たちの肉とかは違う感じだな。

考えてみると、魚は基本的に魚を食べて生きているわけだからいいのか。

ちゃんと感謝して食べよう。

「では、まずあのプールに浸かりましょう。あのプールが皆の部屋や海へつながっております」

「うん」

人魚っ娘に連れられてプールに入っていく。  
なんとなく周りから注目されてるな。

注目されるのは慣れたけど……この状態でキスすることになるの？  
ちよっと恥ずかしいかも。

ユウナよ、お楽しみのところ少しいいか？

おや？麒麟だ。なにかまたアドバイス？

うむ。ユウナの持つもうひとつの能力『神獣合体』についてだ。  
これを使うことで魔物と合体が可能だ。無論、相手の了解は必要だ  
がな

ほうほう、合体するとどうなるのかな？

魔物が持つ能力をすべて使いこなすことが出来る。今回の場合は、水中での行動が可能になるぞ

なるほどなるほど。

でも却下。

あたしは水中に行きたいんじゃないの、水中に連れて行ってもらいたいんだ。

そんな魔法的な合体じゃなく、物理的に合体したいの。



そ、そうか……

うん、でもありがとね。

別の機会に試してみるよ。

うむ。邪魔したな

ふう、麒麟先生がいろいろ教えてくれるのはいいけど、今は不要だったなあ。

「ユウナ様？どうかされましたか？」

「あ、ごめん……。お水、冷たいかと思ったけどあったかいね」

「はい、ここは快適な状態に保たれています。では、よろしいでしょうか？」

「うん……」

あたしは目を閉じて待つ。

まず抱きしめられる。

うん、離れたら危険なものね……。

そして唇に冷たい感触……。

ミリイにはあたしからキスしたけど、キスされるのもいいものだなあ。

いきますね

お、心の声が聞こえるぞ。

この状態でも会話できるんだね。

じゃあ……連れてって……。

はい。潜ります

ん？急に水中ではなくなったような感覚だ。  
でも沈んでるような感覚はある。

ユウナ様、目を開けても大丈夫ですよ

目を開けると、もちろん目の前にあるのは人魚っ娘の顔なのだが、  
周りがすごいぞ。

大きな泡の中に入っているような感じ？

この泡の中で抱き合ってキスをしているあたしたち。

2人きりの空間、いいなあ。

ユウナ様、楽しんでいただけているようでうれしいです

うん、素敵なところだ。

泡の外を見ると、お魚がたくさん泳いでいる。

まるで水族館のよう、幻想的だ。

心奪われちゃうなあ……。

これ、キスやめたらどうなるのかな？

実は、周りの泡の中にも空気がありますのでやめても大丈夫で  
すよ。キスが必要なのは最初だけなんです

そっか……でもこのままがいいな……。

だって気持ちいいんだもん。

わたくしも同感です。こんな幸せな気持ちになれるなんて……

そっだ、このままこの子の名前を考えよう……。

何がいいかなあ……。  
可奈ちゃんに似てるけど、同じ名前はだめだよね。  
ペットに好きな人の名前を付けるのとは違うんだし。  
人魚姫っぽ名前……アクアとか？  
アクアマリン……マリン……。  
うーん……特別な名前とかがいいよね。

ユウナ様？何を考えておられるのでしょうか？

あ、考えてることすべてが伝わるわけじゃないんだね。  
あなたの名前をどうしようかなって考えてたの。

え！？つけていただけののですか？

うん、あなたのこと気に入ったんだもん。  
あなたはあたしでいいのかな？

もちろんです……感激ですわ……

そんな喜んでくれるなら名付けがいがあるね。  
さて、また悩もう。

ユウナ様、一番最初に思いついた名前を付けていただければ……  
……それが一番うれしいです

ん？そういうものなのかな？  
だとしたらアクア……。  
いいのかな？いいんだよね。  
うん、いい名前だよね。  
えっと……最初に呼ぶ時はちゃんと声に出して言いたいな。

では、名残惜しいですが離れますね。あ、体はそのままでお願  
いします。近くにいないと泡の効果がなくなりますので

ふう、長いキスだったなあ。

唇がふやけちゃうくらいしてたよ。

気持ちよかったけど……。

では言おうか。

「あなたの名前はアクアだよ。これからよろしくね」

「アクア……とても素敵な名前をありがとうございます……。一生  
お仕えいたしますね」

「うん、大切に करना。じゃあ、誓いのキスするね」

「はい……」

よし、今度はあかしから……。

目を閉じているアクアの頭に手をあてて引き寄せてキス。

さっきまでのキスとは違う感じがする。

アクアの唇が熱を帯びてるのかな？ちよつと熱いや。

あれ？泡の中なのに、水が顔に垂れてきた？

違うな、アクアが泣いているんだ。

そんなに感動してくれているのかな？

アクア……大好きだよ……。

ん？返事が来ないな。

気絶とかしてないよね？

とりあえず頭を撫でてみる。

あ、ぴくんと反応したから気絶はしてないね。

アクアの長い髪の毛、湿っている感じだけど手にまとわりついて  
はこない。

いいさわり心地だな。

すごく長いし、今度体ごと包み込んでもらおうかな。それにしても、どうしたのかな。

いったんキスをやめて離れようかな？

ん！

なんだかすごい力で抱きしめられた。

離れてほしくないってことかな？

大丈夫、離れないよ。

とりあえず落ち着くまでこうしていよう。

よしよし、アクア……。

も、申し訳ありませんユウナ様……。あまりの嬉しさで魔法が解けそうになって、維持に集中しておりました

そっかそっか。

ちゃんと水中にいられるよう集中してくれただね。

ありがと。

いえ、お恥ずかしいです。水は自在に操れると自負していましたが、まだまだ修行が足りないようです

いいのいいの。

それだけ喜んでくれたんだよね。

そのことがあたし嬉しいの。

ユウナ様はお優しいですね。ところであの……1つお聞きしたいのですが……

ん？なにかな？何でも聞いてよ。

これよりわたくしはユウナ様の部下となります。それである……この今の関係は恋人のようなものとも思っただよるしいのでしょうか？

あ、そうだよね。

そんなことしちゃってるんだもんね……。

えと……どうしようかな……。

そう思ってもらってもいいんだけど……。

こつこつ関係になるのはアクア1人じゃないんだよね。

よし、正直に言っておこう。

はい、それはかまいません。ユウナ様を独り占めしようなどとは考えもしません。その中の1人になれるだけでも最高の栄誉ですわ

そっか、そう言ってくれろと安心。

ちゃんと大切にしろよ。

じゃあそろそろ戻ろうか。

また連れてきてね。

はい、いつでもお連れいたします

短い時間だったけど、水中デートは終了だ。

次は時間のある時にじっくりと案内してもらおう。

戻るにつれて、他の魔物に見られたりする。

キスしてるの見えるのってやっぱり恥ずかしいな。

でも見せつけちゃえ。

お、仲の良さそうな魚人たちがいるぞ。

あれは兄妹？それとも恋人？

あの2人は恋人ですね。仲の良いことで有名です

そっか、魔物同士の恋人、なんだかいいね。  
名前を付けあたりするのかな？

はい、愛の誓いとともにお互いに名前を付けます。とても大事な  
なこのため、あのようになれる者はごく少数です

なるほど。

ん？その場合寿命とか決まったりするの？

はい、種族ごとに定められた寿命が決まると言われております

ふつむ、愛する相手が出来たら死ぬことになるのか。

愛し愛される喜びを知り、その愛の中で死んでいく。それが生き物としての幸せだ……そうプロメイティア様は考えているようです

なるほどねえ。

ロマンティストな男神様だ。

創った魔物達に愛を知ってほしいんだねえ。  
でもそれで寿命が決まるってことは、永遠の愛なんてないと考えているような気もする。

それはちよつと悲しいかな。

その男神プロメイティア様は愛する相手がいるのかな？

女神アルティアナ様のことを今でも愛しておられるようです

わお、仲悪いかと思ってたよ。  
それは片思いなの？それとも昔は付き合ってたの？

この世界は2神でお創りになられたと聞きました。昔は仲がよろしかったと思うのですが、わたくしはよく知らないのです

そか……。

うーむ、なんだろうか？

世界創りの方向性の違いで解散？

とりあえずまたひとつ神様についてわかって、謎も増えたな。  
また今度別の子に聞いてみよう。

よし、プールを出て陸上上がったぞ。

なんだか周りからすごい視線が刺さる。

あたりを見回すと顔を赤らめている魚介類な魔物達が複数。

あたしに見とれているのか、はたまたキスを見たのか。

恥ずかしいので急いで移動だ。

廊下まで出てやっと落ち着く。

さて、もうすぐ次の面接時間だ。

名残惜しいけど、アクアとはここでお別れの挨拶だ。

「アクア、そろそろ次の子の時間だから行くね。見送りはいいから」

「はい、今日はとても嬉しかったです。いつでもお呼びくださいね」

「あ、あたし名前を付けた子を召喚できるんだけど……アクアを呼ぶ時は水がないといけないよね」

「そうですね、水がないと何もできませんわ……」

「よし、部屋に水槽を用意してもらおうかな」

「そうしていただけると嬉しいです。では、こちらで用意して機会



のある時に運び入れますね」

「うん、よろしくね」

そう言っただけでまたアクアにキスをする。

これからお別れの時はキスにしよう。

「ユウナ様……」

「それじゃまたね」

「はい……」

真っ赤になるアクアを愛しく思いながら部屋に戻る。

あたしより遥かに年上だけど、なんてかわいい子だろうな。

ここはいいところだね。

10・あたしの可愛いモン娘 蚕娘

コンコン。

来たね。

今日最後の面接は蚕っ娘だ。

着替える時間がなかったので、あたしは水着のまま。

さあ出迎えよう。

「いらっしやい、入ってね」

「失礼します……って、えっ!？」

「あ、ごめんね。さっき海に行ってきたから水着なんだ」

「そ、そうなのですか……。てっきり下着姿かと思いきりしたのです」

真っ赤になっている蚕っ娘。

うんうん、いい反応だ。

この子は蚕っ娘。

じつのところあたしは蚕という虫を見たことがない。

絹を作ってくれると知っているだけだ。

なんで蚕かわかったかと言うと本人に聞いたから。

大広間でみんなを見渡した時にすぐ目についたんだ。

いちばん小さくいちばん白かった。

見た目は10歳の女の子といった感じだろうか。

実年齢はもちろん不明だけど……。

声も見た目のように幼くてかわいいのだ。

というか見た目が真っ白という以外は人間の女の子でしかない。

足までありそうな長い髪の毛も真っ白で絹糸のよう。

まだ幼体らしく、大きくなると触角や羽が生えて蚕っぽくなるらしい。

それはそれで可愛いのだろうけど、今のままでも十分だ。

服装は……服というのかこれは？

白く丸いふわふわしたなにかに包まれている。

「そういうあなたが身に着けているこれはなあに？」

「これは繭なのです。本来は成体に変態する時に体を包むものなのですが、わたしは常に体に着けているのです」

「そうなんだ、どうして？」

「こうしておけば、糸が足りない時などに役立ちますです」

なるほど、でも糸が足りない時にそれを使い切ったら裸になっちゃうのかな？

見てみたい気もする……。

「糸かあ……。あなたの特技は糸を出したり服を作ったりなんだよね？あたしが昨日から着てるこの服もあなたが作ったんだよね？」

「はいです！着てくださって嬉しいのです。よろしければ、サイズをもっとしっかりあわせて作り直したいのです」

「あ、ぜひしてほしいな。あと下着も作ってほしいんだけど」

「おまかせくださいです！ではあの……採寸させていただきますたいのですが……」

「うん、いいよ。脱ぐね」

「えー!!」

蚕っ娘は照れているけど、あたしは平気で脱ぐ。

見られるのは嫌いじゃないし……この子の照れ顔を見るのが楽しい。

「さあ、どござ」

「は……はいです。失礼しますです」

ちびっこ蚕っ娘は一生懸命背伸びしてあたしの首周りから測りだす。

しゃがんであげればいいのだけど、背伸びする姿が可愛すぎて……。

「ユウナ様のお肌、とても綺麗なのです」

「ありがと、あなたの肌も見えてる部分とても綺麗だよ。あとで全部見せてくれるかな？」

「あ、はいなのです……。貧弱な体ですが……」

「気にしないの。あなたを選んだ理由の一つがね、小さくて可愛いからなんだよ」

「そ、そうなのですか……？じゃあ小さくてよかったのです……」

うーん、今すぐ裸にして抱きしめたいくらい可愛いな。

よし、さっきまでの2人は身体検査してないからこの子にはしよう。

決めた！

「あなたのほうはどうしてなのかな？あたしのところに来てくれた理由教えて」

「わたしは……ユウナ様にわたしの作った服を着ていただきたかったのです。わたしの趣味は服を作ることなのです。えと……ただそれだけで……すみません、たいした理由ではないのです」

「そっか、ありがとね。嬉しいよ」

あっさりとした理由だな。

あたしを見るこの子の目、憧れの人を見る目だ。

この子もアクアみたいにあたしに惚れてる？  
うーん、とりあえず面接を進めて考えようか。

「ユウナ様、お胸を測ります。も、もし触ってしまったらごめんなさいなのです」

「ん？気にせず触っていいんだよ」

「ええ！？それはだめなのですよ？」

何この反応？

可愛い顔して実は男の子なんてオチはないよね？

それはないか、女の子のみ募集したわけだし。

「あなたは女の子だよね？」

「はいです」

「じゃあ問題ないよね？」

「そうなのですか？人間の女性は胸を大事な相手にしか触らせないと聞いたのですよ」

「うふふつ、それは恋人とかのことだね。同性だったら触っても問題ないんだよ。それに、もしかしたらあなたがあたしの大事な人になるかもしれないよ」

「はわわ……。そ、そうなのですか……。ではあの……。失礼しますです」

誰が教えたんだろう？

なにかを勘違いして覚えちゃったのかな？

よし、あたしがちゃんといろいろ教えてあげようっと。

震える手で胸のサイズを測る蚕っ娘。

抱きしめておっぱいに顔をうずめさせたらどうなるんだろう？  
いたずら心がうずくけど、今はやめておこう。

そんなわけで採寸は終わった。  
お尻を測るときも照れていたのが可愛かった。

「それではまたあとで作って、明日にはお届けしますのです」  
「あ、今ここで作ってくれるんじゃないんだね。ちょっと見たかったな」

「すみません。ここで作ることも可能なのですが、これはじっくりと時間をかけて作りたいのです」

「そっか、それならお願いね。楽しみにしてるよ。じゃあ……続きをしようか」

「はいですー！」

さて、何を聞こうかな。

この子を戦いに連れていくことはないと思うけど、一応聞いておこうかな。

「ねえ、服を作る以外に特技ってあるのかな？」

「一応糸を出して操ることはできます。やったことはないのですが、糸で相手を動けないようにすることもできるのではないかと……」  
「なるほど……便利そうだね」

人間と戦う必要があったら、倒さずに動きを封じるって便利かも？  
でもやったことないのか。じゃあやってもらおう。

「じゃあどんなものかあたしにやってみてくれるかな？」

「え？そんなことしてよいのでしょうか？あと、ユウナ様服を着ないのでしょっか？」

真っ赤な顔で聞いてくる蚕っ娘。

この照れた顔を見るために裸なわけだが。

とりあえずこのままやってもらおうか、糸が気持ちよさそうだし……。

「いいよ、遠慮なくやってね。上手にできたら高得点だよ」

「高得点なのですか……。がんばるです！」

「そうそう、がんばるんだよ」

「はいです！いきますね」

蚕っ娘の口から糸が飛び出してくる。

どっという仕組みなのだろうか？

さらには体を覆って繭からも糸が伸びてあたしに襲いかかる。

んん？あつという間に動けなくなったぞ……。

あたしは気を付けの姿勢のまま手も足も動かせなくなる。

後ろがベッドで良かった。ベッドに倒れこむ。

とりあえず暴れてみるけど、さっぱりほどけそうにないや。

しかし、あたしの格好なんだかエッチじゃない？

がんじがらめにされてるのに、おっぱいやアソコは見えちゃってるよ……。

「ユウナ様？いかがなのでしょう？」

「んー、さっぱり動けないや。なかなかいい特技だね」

「で、ではほどきますです」

「いや、このままでいいよ。耐久性のテストするから」

「そ、そうなのですか……」

よし、このまま面接再開だ。

別に危ない趣味に目覚めたわけじゃない。

この糸に巻かれた状態……すごく肌触りが気持ちいいのだ。

いや、縛られて気持ちいいって言うと変に聞こえるけど違うからね？

「じゃあ、あたし動けないからよく見えるようにベッドに登って来てくれるかな」

「は、はい……」

「あたしのおなかに座ってね」

「え？そんな失礼なことではできないのですよ？」

「失礼じゃないよ。それに、募集文見たよね？あたしのわがままはなんであれ聞かないとだめなんだよ？」

「そ、そうでした……。では……。失礼しますのです」

あたしのおなかにちょこんと座る蚕っ娘。

うん、全然重くないや。

座られた部分が熱くなつて気持ちいい……。

うーん、この見降ろされ方はやばいな。

あたし縛られてるし今にも襲われそう。

でもこのちびっこ蚕っ娘がそんなことをしてくれるわけではない。  
妄想はやめて続けよう。

「じゃあ、あなたの体も見せてくれるかな？」

「はい……。脱ぎますです」

素直に返事をする蚕っ娘。

何のために脱ぐのか疑問にも思っていないかもしれないな。

それは……。あたしを楽しませるためでしかない。

あたしってこの立場を利用して悪どいことをしてるかな？

うーん、一応言っておこう……。

「えつとね、もし嫌だったらいいからね。これを断ってもあなたの評価には影響しないから」

「いえ……。恥ずかしいですがぜひ見ていただきたいのです。ユウナ



様はわたしに裸を見せてくださいましたのです。だからわたしもすべてを見ていただきたくたいです……」

「そっか、いい子だね」

よかった、嫌がってないね。  
じゃあ見せてもらおうかな。

蚕っ娘の体に巻きついていいる繭がほどけていく。  
おお……平らなかわいいお胸が見えてきたぞ。  
可愛らしいピンク色の突起がある。

肌があまりにも白いせいで、乳首がとても綺麗に見えてしまう。  
下は、白いシンプルな下着かな。  
お？その下着も繭と同じようにほどけていくみたい。  
なかなか便利な能力だね。

うん、毛も生えてなくてつるつる。

「ユウナ様、どうでしょうか？」

「うん、すっごくかわいい」

「あ、ありがとうございます……」

うん、ほんとに可愛いぞ。

真っ白すぎる肌だけど、触ってみたい……。

あたしのおなかには肌が触れる感触があるけど、そこだけじゃものたりない。

よし決めた。襲おう。

幸い？なことにあたしは縛られている。

この系の耐久性を試すのだ！

ふっふっふ、蚕っ娘ちゃん。

この系の強度が弱かったらあなたはあたしの餌食になっちゃうんだよ。

「ユ、ユウナ様？もし苦しいようでしたら糸をほどきましょうか？」  
「い、いいの……。この糸が人間を捕まえることが出来るかテストしてるから」  
「は、はいです……」

心配そうな顔であたしを見降ろす蚕っ娘。

あたしは必死で暴れるが、この糸は頑丈すぎた……。

「つ、疲れた……。この糸はすごいね……」  
「あ、ありがとうございますです。でも、そろそろほどいたほうが  
いいと思うのです……」  
「そ、そうだね……お願い……」  
「はいです！」

蚕っ娘が念じると、糸が瞬時にほどけてあたしは自由になる。

「ふう、なんだか脱皮した気分だよ」  
「脱皮ですか。わたしも成長の度にするのですが、あれはとても気  
持ちいいのです。ユウナ様も気持ちよかったですか？」  
「うん、すごい解放感」  
「そうですね。よかったです」  
「ところでこの糸はどうするの？なにかに使うのかな？」  
「あ、あの……。その……」

顔を真っ赤にして照れる蚕っ娘。

ん？何故今照れる必要がある？

「どうしたのかな？正直に言ってみて」  
「えと……。気持ち悪がられるかもしれないのですが……ユ、ユウナ  
様に触れた糸ですので、わたしの寝どこに使おうかなと思って……」

ほうほう、なかなかいい趣味をしてる子だ。

好きな人が寝ていたベッドに顔をうずめる的な行為なのかな？

「いいよ、好きに使ってね。でも、そんなことしなくてもさ……」  
「ひゃううう！？」

あたしは蚕っ娘を引き倒して、寝ているあたしに抱きつかせる。  
ひゃ、この子の体冷たいな。  
でも……気持ちいい……。

「あたしをベッドにしてもいいんだよ？」

「ええ！？ひゃううう……」

「ん？嫌かな？」

「いえ……とても嬉しいのです。ただ嬉しすぎてどうにかなっちゃいそうなのです……」

「どうにかなっちゃっていいよ。あたしのところに来たらね、こう  
いうことたくさんすることになるんだよ」

「そ、そうなのですか？」

「そうだよ」

「は……はい……」

冷たい体の蚕っ娘だけど、少し暖かくなってきた。

照れてるんだろうな。可愛いよお。

よし、あたしの願望をさらになえよう。

「ねえ、少し話し方を変えようか。まずね、あたしのおねえちゃんって呼んでほしいな」

「おねえちゃん……ですか？わたしはユウナ様の妹になるのですよ  
うか？」

「うん、あたし妹がほしかったんだ。嫌じゃなかったら呼んでほしいな」

「嫌じゃないですよ、えっと……おねえちゃん……」

「もう一回」

「おねえちゃん……」

照れてあたしの胸に顔をうずめる蚕っ娘。

ちよっとくすぐったいなあ、でもいい気分。

次は……。

「お次は敬語もやめようか。普通にお話ししてみて」

「え？そ、それは失礼なのではないですか？

「そんなことないよ。妹っていうのはおねえちゃんと親しい存在なんだよ。親しい相手に敬語を使うのって変だよな？」

「親しい相手……。そ、そうですね……。失礼かも……？」

「だよな？じゃあそうしてね」

「う……うん。がんばってみるの……」

「うんうん、いい子いい子」

「ひゃうー」

蚕っ娘の頭を撫でてあげると、嬉しそうにしている。

あとは妹らしさをあげるために……。

「あとね、妹はおねえちゃんに甘えるものなんだよ。甘えてみてね」

「う……うん。おねえちゃん、もっと強く抱っこしてほしいの」

「うん、いいよ」

「ひゃふう……」

あたしは蚕っ娘を強く抱きしめる。

きやはっ、おっぱいに息が当たってくすぐったい。

胸に顔をうずめてるから息苦しいのかな？

よし、このまま名前を考えちゃおうかな。

関係ありそうな名前だとシルクだけど、これをもじってみるかな。  
シルフィ、チルク、うーん……可愛さが足りない。

あ、チルなら可愛いかも。

どうかなあ……。

「おねえちゃん？なにか考え事なの？」

「うん、あなたのお名前」

「えー？名前をくださるのですか？いいのですか？」

「ほらほら、敬語になってるよ」

「あ……。えと……名前もらえるの？」

「うん、あたしはあなたのこと気に入ったの。あなたはどうかかな？」

「わ、わたしもおねえちゃんのこと大好きだよ……」

うーん、なんて心地のいい言葉だろう。

裸にして抱きしめるといっておかしなことをしても好きと云ってくれる。

よし！名前をつけよう。

この子の面倒をあたしがちゃんと見るんだ。一生！

おねえちゃんがんばるぞ！

「それじゃあ、あなたの名前はチルちゃんだよ」

「チル……いいお名前だね……。おねえちゃんありがとうなの！」

「ふふつ、喜んでくれてよかった」

そう言いながらあたしの胸に顔をうずめてくるチルちゃん。

うーん、可愛いよお。

「チルちゃん、あたしのおっぱい気に入ったのかな？」

「うん！おねえちゃんのこと、やわらかくてぷにぷになの」

「そっかそっか、好きなだけ触ってていいよ」

「じゃああの、手で触ってもいいのかな？」

「んー、可愛く甘えてくれたらいいよ」

「えっと……おねえちゃん、チルにおっぱい触らせてほしいの……。  
ね？」

顔をあげてあたしの目を見つめてくるチルちゃん。

はい、可愛すぎました。

「じゃあいいよ、優しく触るんだよ」

「うん！」

「ひゃっ！」

チルちゃんの小さな手があたしのおっぱいを揉んできた。

あたしの言った通りにそーっと触ってきたけれど、何この感じ？  
くすぐったいような気持ちいいような……。

自分で触ったことはあつたけど……人に触られるとこんなに違う  
んだね。

や、やばいな……。

ずっとされてると変な気分になっちゃう。

「おねえちゃん気持ちよさそうな顔なの。えへへ、可愛いの」

「んっ……。チルちゃん、そろそろいいかな？次はおねえちゃんに  
も触らせてね」

「え？でもチルは胸がないよ」

「なくてもいいの、起き上がってね」

「うっ……うん」

チルちゃんを起き上がらせて、またあたしのおなかに座らせる。

狙いはピンク色の2つの突起。

あたしは両手を伸ばして、指先とそつと触れる。

「ひゃわわわわー!!」

え？チルちゃんが後ろに倒れこんでしまった。

そんなに驚いた？

よく考えたら、他の子は頭を撫でてだけですごい反応を示していたのだ。

乳首なんて触られたら大変なことになっちゃっか……。

「チルちゃん大丈夫？」

「ふにゅう……」

あたしは起き上がり、あられもない格好で倒れているチルちゃんを見る。

目がすぐくところんとしている。

まるで誘われているかのようだけど、これ以上触ると気絶するかもしれない。

「おねえちゃん……なにか魔法使ったの？体がしびれて動けなくなつたよ……」

「使つてないよ。チルちゃんに触っただけ」

「そっか……人に触られるの初めてだから……あんな風になるんだね……」

「うん、これから慣らしていこうね。慣れたら気持ちよくなるよ」

「そうなんだ……おねえちゃんよろしくね」

「おねえちゃんに任せておきなさい」

「うん！」

さて、あとはミリィやアクアにもしたようにキスをしてあげたいんだけど……。

この子大丈夫かな？

「チルちゃん、名前を付けた後にすることがあるんだけど、できるかな？」

「なににするの？」

「おねえちゃんのここをね、チルちゃんのここにくつつけるの」

あたしの唇とチルちゃんの唇を指で触って見せる。

「え！？そ、それはあの伝説のキ、キス！？」

伝説って何だ……。

胸のことといい、だれかがチルちゃんにおかしな知識を教えているのだろうか？

もしくは本気でそう思ってる子たちがいる可能性もあるな。

「伝説なの？」

「あ、あのね。チルはまだ若い魔物なんだけど、若い魔物達の間ではそう言われてるの。だって、したことある友達が1人もいなくて……」

ああなるほど。

小学生あたりがキスしたことある大人がすごいと憧れるようなもの？

うん、なんていうか可愛い。

「ふふっ、じゃあチルちゃんはお友達の中で一番乗りだね。初めてのキスだけあたし相手でもいいかな？」



「うん、おねえちゃんならとっても嬉しいよ」

「じゃあしようね。まずは起き上がるつか」

「うん……」

あたしはベッドの上に正座して、その上にチルちゃんを乗せる。  
うん、顔がちょうどいい高さにあるぞ。

「じゃあ目を閉じようか」

「うん……どきどきするね……」

チルちゃんの頭を両手で抱くようにして顔を近づけていく。  
少し震えながらも期待しているのかな？

口を少し前に突き出してアヒル口のようになっている。  
可愛すぎだあ、いただきまーす。

「んっ!」

小さい唇、冷たくて気持ちいいな。

反応も予想通りかわいい。

小刻みに震えているチルちゃんが愛おしい。

このまましばらく楽しもう。

それにしても、今日だけで3人とキスしちゃったよ。

普通だったらビッチって呼ばれちゃうね。

でも、ここではないんだ……。

いいところに来たなあ……。

さ、そろそろ離れようかな。

ずっとキスしてもいいけど、チルちゃんの反応も見たい。

「チルちゃん、初めてのキスはとうだった?」

「なんだろう……すごかったの……」

「またしようね」

「うん、いつでもしてほしいの……」

「よしよし」

あたしはまたチルちゃんを抱きしめる。

この子抱いて寝たいな。

でも今日はミリイと寝る約束したし、チルちゃんは服作りがあるからまた今度だね。

「さあ、服着ようか」

「うん、あのね。チルの裸を見たのはおねえちゃんが初めてだからね」

「ふふっ、嬉しいな。実はね、あたしがここに来てから裸を見せたのもチルちゃんが初なんだよ」

「そっかあ、えへへ。おねえちゃん」

うん、いい甘えっぷりだねチルちゃん。

どんどん甘えてね。

チルちゃんはまた糸を体に巻き付けていく。

これはこれで可愛いんだけど、やっぱり可愛い服を着せたいな。

「チルちゃんの服、今度おねえちゃんにデザインさせてほしいな」

「え？考えてくれるの？じゃあ、着てみたいな」

「うん、あと糸を入れておくかばんとか作りたいよね」

「そっか、体に巻かなくてもかばんがあればいいんだ。おねえちゃん、チルね、糸で裁縫するだけじゃなくて革細工もできるんだよ」

「チルちゃん器用なんだね」

「えへへ、今度一緒に作るうね」

「うん、約束だよ」

チルちゃんにどんな服着せたいかなー。  
考えておこう。

かばんはランドセルが頭に浮かんでいる……。  
楽しみがまた増えたなあ。

あ、チルちゃんにもこの世界をどう思ってるか聞いてみようかな。

「ところでチルちゃん、アルティアナ様やプロメイティア様のことをどう思ってるかな？」

「えっとね……。実はよくわからないの。お友達もみんなあまり知らないみたいだし、大人たちに聞いてもみんな言うことがばらばらで……」

「そっか……」

「ごめんねおねえちゃん、チルお役に立てないの……」

「いいんだよ、よしよし」

「ふにー」

チルちゃんの頭をなでなで。

子供の魔物たちはよく知らないのか。

実在するとは言ってもやっぱり大昔からの神話なものな。

上手く伝わっていないのかな？

これはみんなからじつくりと聞いていく必要があるそうだな。

さ、服を着たぞ。

「おねえちゃん、今から作る服もそれに似た感じになるけど、いいのかな？」

「そうだねえ、スカートをもう少し短くしてもらおうかな」

「どのくらいがいいかな？」

「えっとね、膝より少し上、このくらいかな」

あたしは足元近くまであるワンピース風衣装のスカートを持ち上げた。

「おねえちゃん、大胆だね……」

「そうかな？動きやすくていいよ」

「おぱんつ見えちゃうの……」

「見られてもいいような可愛い下着作ってね」

「う、うん……がんばるの」

「がんばったらご褒美あげるよ」

「な、なんだろう？がんばる！」

「よしよし」

「ご褒美と言っても、好きなだけ甘えさせてあげるとかその程度しか考えてない。

でも、期待してるかもしれないからなにか考えようかな。

「じゃあおねえちゃん、今日はありがとうございましたなの」

「うん、これからもよろしくね、チルちゃん」

「うん！それじゃあね」

「ばいばい」

チルちゃんが部屋を出ていき、1人になる。

でもさみしくはないぞ。

夕飯のときにはミリィが来るもんね。

このお城で初の1人じゃない食事だ。

楽しみ楽しみ。

あたしはベッドでゴロゴロしながらにやにやするのであった。

## 11・神獣合体！

夕飯の前に、あたしはリリアさんの様子を見に行くことにした。ここに来て以来ずっと寝たまま、食事もしてないなあと思ったのだ。

リリアさんの部屋に入ると、昨日もいた羊っ娘が看病をしていた。ほんとありがたいなあ。

なにをしているんだろう？部屋に入ったあたしに気が付いていない。

近づくと目を閉じてなにかを念じているよう。

邪魔してはいけないから少し待っていてよう。

リリアさんを見ると、朝と同じく血色がよく安らかな顔で眠っている。

この羊っ娘がなにか魔法でもかけているのかな？

そうして見ていると羊っ娘が目を開けた。

「ユウナ様、来られていたのですね」

「うん、また看病してくれてたんだね。今は何をしていたの？」

「魔力による栄養の補給です。これで食事をしなくても大丈夫なんです」

「そっか、便利なおことが出来るんだ。ほんとにありがとうね」

魔法って便利。

リリアさんは問題なさそう。

「ところでユウナ様、今日は部下を募集されていたんですね。わたし

し、恥ずかしながら寝ていたもので参加できませんでした」

「ごめんね、リリアさんの看病してくれてたから寝てたんだよね。また時間を変えて募集すると思うから、嫌じゃなかったら来てほしいな」

「はい、ぜひ参加させていただきたいです」

嬉しそうに微笑んでくれる羊っ娘。

リリアさんの看病をずっとしてくれている時点でもうあたしのお気に入りだ。

次はこの子が起きてる時間に募集かけたいな。

「今夜も徹夜で看病するのかな？」

「いえ、今日は容体が安定しているようなので、夜にもう1度見に来てから普通に休みます。明日の朝にはリリア様も目覚めると思いますが、ユウナ様も来ていただけますか」

「うん！じゃあ明日の朝また会おうね」

「はい、お待ちしています」

「それじゃありリアさんのことよろしくね」

「お任せください」

明日はリリアさんとお話しできると。

怖いけど、避けては通れないことだ。

あたしは部屋へ戻ることにした。

少し待つとミリイが夕食を持ってやってきた。

約束通り2人分持ってきてくれたようだ。

しかもなんだろうか、メイド服を着ているぞ。

猫耳メイドだ。かわいすぎる。

「ユウナ様、お待たせですにゃ。今日は何とお魚がついているのですにゃ」

「いらっしやいミリイ。人魚のアクアにお魚お願いしておいたんだ」  
「はいにゃ。もともとあの子はよく魚を分けてくれて仲が良かったのですにゃ。さっきユウナ様に名前をつけてもらったことを聞いて、さらに仲良くなったのですにゃ」

「ふふ、ミリイはお魚好きなんだね。あたし、部下たちが仲良くしてくれてうれしいよ。もう一人いるんだけど、蚕の子は知ってる？」

「お魚好きですにゃ。蚕の子は服を作ってくれる子ですかにゃ？小さい子たちとはあまり繋がりが無いのですが、今度お話してみますにゃ」

「うん、仲良くしてあげてね」

あたしの部下になった子たちがライバル意識を持つてことはないようだ。

ま、いい子たちだからそんな心配してなかったけどね。

みんなでお食事とかしたいなあ。

「ところでミリイ、その格好可愛いね」

「ありがとですにゃ。ユウナ様のお世話係になりましたので、このメイド服を着てきましたにゃ」

「そっかそっか、たくさんお世話してね」

「はいですにゃー！」

「じゃあ食べようか。いただきます」

「いただきますにゃ」

ミリイは野菜に目もくれず、魚をむしゃむしゃと食べている。うふふ、やっぱり猫だ。可愛いなあ。

「ほんとにお魚が好きなんだね」  
「はいですよ！お魚を食べるだけで幸せになれますよ」  
「じゃああたしのも少しわけてあげる」  
「にゃ！？い、いいのですかにゃ？」  
「いいよ。はい、あーんして」  
「あーんですよ」

あたしはフォークに大きめの魚をさしてミリイに差し出す。  
ミリイは嬉しそうに口を開けている。  
猫耳がぴよぴよこ動いてわかりやすい反応だ。

「次はあたしにも食べさせてくれる？」  
「もちろんですよ。えーと……何が食べたいですかにゃ？」  
「んー、その煮物かなあ」  
「じゃあユウナ様、あーんしてくださいにゃ」  
「あーん」

ミリイに食べさせてもらい幸せを感じるあたし。  
これが憧れてた食事の形だね。  
あ、ミリイのほっぺたにお魚のかけらがついてる。

「ミリイ、ちよつと顔をこっちに寄せて」  
「はいですよ？」  
「ついてるよ。ほら、あーん」  
「はむ……。おいしいですよにゃー」  
「ふふ、あたしの指は食べちゃだめだよ」  
「はいですよ、でもユウナ様の指もおいしいですよにゃ」  
「じゃあ指で食べさせてあげるね。ほら……」  
「あーんですよ。もぐもぐ……さっきよりおいしいですよにゃ。ユ



ウナ様にも……」

「あーん。もぐもぐ……ほんとだ、ミリイの指もおいしいな」  
「にゃうー」

こんな感じでいちやこらしながら夕飯を終えた。

今はミリイが食事の片づけに行ったので待っている。

あのメイド服、北の都で見たものにそっくりだったなあ。

シックなロングスカートタイプのメイド服。

短いスカートに作り直してほしいなあ。

今度チルちゃんにお願いしてみようかな。

お、戻ってきたぞ。

「ユウナ様！急いで片づけてきましたにゃ」

「よしよし、お疲れ様。いい子いい子」

「にゃーにゃー」

猛ダツシュしてきたのかな？

少し息が荒いミリイの頭をなでなでしてあげる。

さて、少し食休みだ。ミリイとベッドに座る。

「ミリイ、そのメイド服、あたしがお世話になった人間のところで見たのとそっくりなんだけど……」

「はいにゃ、これはわたしたち偵察部隊が人間のところへ潜入して持ち帰った情報のひとつなのですよ」

「そっか、ミリイは偵察部隊だったね。他にはどんなことを偵察してたの？」

「えーとですよ……。人間がどんなものが好きとか、どんなものを食べてるかとかですよにゃ。危険だけど楽しい任務なんですよ」

「そ、そうなんだ……」

この偵察部隊は戦闘用じゃないみたいだね……。憧れの人間の調査をしているだけみたいだ。

うーん、ますます愛おしいぞ。

でも、こんな感じだと攻めてこられたらあっさりやられるのではなからうか。

「ねえ、人間が攻めてきたことってないの？」

「時々ありますにゃ、でもそのための部隊がいますにゃ……。倒すわけにはいかないので幻を見せて追いつ返すらしいのですにゃ」

「へー、すごい部隊がいるんだね」

「はいですにゃ、その部隊のおかげで平和なのですにゃ。ただ……。最近近くに皆が出来ているのでみんな不安がっているのですにゃ」

ここへ来るときに見えた皆のことか。

重力を操れる先輩勇者がいるらしいんだよなあ。

早めに何とかしたいかも……。

麒麟の力で無血開城とかできないものかなあ。

余裕である。勇者の力が未知数ではあるがな

わ、麒麟つてば聞いてたんだね。

勇者さえいなければ楽勝なのか……。

勇者には勇者。ユウナの力で抑えてもらえればよいのだがな

んー、でもあたしかよわい女の子でしかないよ？

そのための神獣合体だ。身体能力の高き者とひとつになればかなりの戦力となれるぞ。例えば、そこにいる猫のようにな

なるほど。ミリイと合体か……。

いざという時のために特訓しておくのだな

ふむふむ、今からお試してみようかな。

ふと気がつくくと、ミリイが首をかしげてあたしの顔を覗き込んでいる。

頭の上に『にゃう?』という擬音が浮かんでいるように見えて可愛い。

あたしがぼーっとしてるように見えているんだろうな。

「ごめんねミリイ、麒麟と会話してた。急にぼーっとしてたら麒麟と会話してると思ってたね」

「はいですよ。麒麟様というとユウナ様を乗せてこられた、あのかつこいいお方のことですよ?」

「そうそう、ミリイは麒麟みたいなのが好みなのかな?」

「はいにゃ! もちろんユウナ様の次にですけどにゃ」

「ふふ、ありがとね」

「にゃー」

うーん、嬉しいことを言ってくれる。

頭をなでつつ猫耳をつんつん……。

神獣合体ってどうなるんだろうか。

あたしにも猫耳がつく? うーん、やってみるかな。

「ミリイ、あたしの能力にね、神獣合体っていうのがあるんだ。それを試してみたいんだけどいいかな?」

「な、なんだかドキドキする名前の能力ですよ……。わたしでよければなんだってしますのにゃ」

「じゃあこつち見てね」

えーと、やり方は確か教わっているはず。  
目を見て呪文を唱えればいいのかな……。  
あたしとミリイは見つめ合い……。

「神獣合体、ミリイ！」

「にゃん！」

元気な返事とともに、ミリイの体が光に包まれる。  
召喚する時に出る魔力に似てる光だ。  
その光があたしの中に飛び込んで……。  
なんだかすつごく気持ちいいぞ……。  
ひゃああああん！

少しして光がおさまったようだ。  
なんとなく体が軽い？

あたしは鏡の前に全身を写してみる。  
顔と服装はあたしのまま。あ、でも少しだけ猫目？  
猫耳としっぽがついている。

しかもしっぽのところ、服に穴があいている？  
うまいことできてるけど、ちゃんと元に戻るんだろうか？  
あ、ミリイの意識はあるのかな？

ユ、ユウナ様の中にいますのにな！なんだかすごく気持ちがいいのですにゃ

お、ちゃんと会話できるんだね。

うんうん、あたしも気持ちいいよ。

この状態でどのくらい動けるか特訓させてね。

どうぞ自由にしてくださいですにゃ。わたしはユウナ様のもの  
ですからにゃ

よしよし、あとでなでなでしてあげよう。

さて、手足は自由に動くのはいつも通り。

耳は……人間の耳と猫耳が両方ある……。

これではコスプレだなあ……。

試し人間の耳を塞いでみると、音は聞こえる。

猫耳を押さえても聞こえる。

うん、便利……なの？

そして耳としっぽは動かせるのかな？

ミリイに手伝ってもらうことはできるのだろうか？

やってみますにゃ。まず耳はこうですにゃ

お、猫耳が動いた。なんとなく感覚がわかったぞ。

とりあえず自分でもやってみる……おお、動かせた。

次はしっぽね。

こっちは楽しいことを考えると簡単ですにゃ。ユウナ様のこと  
にゃ……

お、しっぽが揺れているぞ。

なるほどねえ、じゃあミリイのことを考えるか。

お、さっきより激しく動いたぞ。

ユウナ様……とても嬉しいのですにゃ

なるほどなるほど。

2人で協力したら激しく動けるのかもしいない。  
これは特訓が必要だね。  
ミリィお外へ行こうね。

はいですよ、お散歩ですよ

部屋を出て軽く小走りしてみると、体が軽い。  
足音も立てずに走れてほんとに猫になったみたいだよー。

「にゃははははー！」

ユウナ様ご機嫌ですよー

うん、なんだかすっごい解放感。

城内を上機嫌で走っていくあたし。

通りすぎる魔物達が不思議そうに見ている。

あ、あたし不審者って思われたりしてるかな？

このお城にはヴェリア様の許可がないと入れないので、問題ないとは思いますが

それなら安心だ。

お城の入口まで無事に到着して外に出る。

暗い時間のはずだけど、ミリィの目のおかげなのかよく見える。

よし、猛ダッシュしてジャンプだ。

「にゃおーーん！」

おお、3メートルくらいジャンプできたぞ。

あ……今気がついたけどおっぱい大きくなってる？

ジャンプして揺れた感じで気がついた。

これも合体のおかげかな。  
じゃあ、次はミリイも協力してね、一緒にジャンプだよ。

了解ですにゃ  
「いっくよー！」

ひええ！すつごく高く跳んでるよ？  
さっきの倍は跳べたかな？  
うーん……これならあたしも大活躍できる予感。  
よし、このまま夜の探検と行こう。  
ミリイは行きたいところあるのかな？

綺麗な景色の場所があるんですにゃ。そこにユウナ様を案内したいのですにゃ

おお、それはぜひ連れて行ってほしいな。  
場所教えて。

はいにゃ！

ミリイの道案内で移動していく。  
普通に会話するよりわかりやすいよ。便利な能力だ。  
森に入り、木登りしながら進んでいく。  
猫ってこんなアクロバティックな動きで移動するんだね！。  
なんとなくしっぽの使い方もわかってきた。  
ジャンプ中うまく動かすと姿勢を保てるのだ。  
この動きで人間を翻弄できるかな？  
チルちゃんを抱っこして走り、糸を吐かせる案も思いつく。  
今度試してみよう。

というか3人で合体できたらいいのにな。

能力を極めればそれも可能となる……らしいぞ

お、麒麟先生のアドバイスだ。  
らしいって言われちゃったよ。

極めるってことはかなり練習しなきゃいけないよね。

精進せよ

はい。よし、毎日合体していくぞ！

ユウナ様ー、わたしにも麒麟様の声が聞こえましたにゃ。りりしいですにゃ

なるほど、合体してたら聞こえるんだ。

ミリィは麒麟がお気に入りだねえ。

もちろんユウナ様の次にですにゃよ

わかってるよー。

ま、麒麟ならいいか。今度抱きついちゃっていいよ。

わーいですにゃー

ほのぼのーと会話している間に到着したようだ。

ここは、森で一番高い木の上なのかな？

とっても綺麗な景色が見える。お城とその後ろに広がる海も見えるなあ。

こここの景色が綺麗で、弟とよく来ていますにゃ



そっかそっか、次は弟君も連れて一緒に来たいね。

はいにゃ！あの子も喜びますにゃ

うん、楽しみだ。

あ、合体といてみようかな。

木にしっかりとつかまってと……。

「合体解除！」

あたしの体から魔力の光が出ていき、ミリイの形となっていく。  
お、ちゃんと木の枝に座った状態で出てきたぞ。

そしてあたしは体が少し重くなる。

うん、ミリイが中にいるとやっぱり気持ちよかったんだなあ。

「ふにゃー。ユウナ様の中素敵でしたにゃ。でも、隣にいてくださるほうが嬉しいものですにゃ」

「ふふ、あたしもこのほうがいいよ」

急に夜目が利かなくなつて、あたりが暗くなる。

お城の明かりが綺麗だなあ。

近くにいるミリイの顔は月明かりのおかげでしっかりと見える。

ふふ、こんないいムードの場所ではやっぱり……。

「ミリイ、あたし木につかまってるから動けないんだ。ミリイにしたいことあるけど……できないからミリイからしてほしいな」

「にゃ……それはあの……その……ですかにゃ？」

もじもじしているミリイの顔が見える。

よく見えないけど赤くなっているのかな？  
だとしたらなにかはわかってるよね？

「ミリイが思ってることであってるよ、さあおいで」  
「にやう、わかりましたのにや。ドキドキしますにやあ……」

ミリイの顔が近づいてくる。

緊張しているのが伝わってきて愛おしい……。

あたしは目を閉じて待つ。

なかなか来ないなあ……。

でも、のんびり待つとしようか。

風が心地いいし、いいムードだもんね。

1分ほど待ち、その時が来た。

唇にやわらかい感触。

少し遅れて、ミリイの手があたしの背中と顔に添えられる。

あたしが落ちないように支えてくれてるんだね。

うふふ、キスするのもいいけど……されるのもいいものだ。

ミリイったら今度は離れなくなっちゃった。

キスをやめるタイミングが分からないで困ってるみたい。

それとも……ずっとしてたいのかな？

そうだ、ちょっと驚かせちゃおうつと。

あたしは舌を少し出して、ミリイの唇を舐める。

「にやっ!?!?」

驚いて顔を離すミリイ。

嫌がってはないよね？

暗くてもわかるくらいに顔が赤いもん。

「ふふ、キスの次はあややって舐めあうんだよ」

「そ、そうにやのですかにや？ま、まだまだ勉強不足にやようでしたにや」

「じゃあまた今度しようね」

「にや、にやはいにやあ……」

うふふ、慌てたのかおかしな喋り方になってるよ。

でもそうだな……この猫言葉は敬語じゃないほうが可愛いかも。

「ミリイ、あたしともしっかりと仲良くなれる方法があるんだけどやってみない？」

「にや？にやんでもしますにやよ」

「もう敬語はいいから、普通のお友達みたいにお話して」

「え？でも……。えっと……仲良くなれる……。にやあ？」

「そうだよ、あたしのが好きだったらさ……。おねがい」

「わ、わかりま……。じゃなくて……。わかったにやー！」

「そうそう、いい子だよ」

「うにやにやー」

ミリイの頭をなでなで。

よし、このほうが楽しいな。

「あたしき、部下よりお友達がたくさんほしいんだ。だからあたしをお友達と思ってね」

「わかったにやー、ユウナ様はうちのお友達にやよ」

「よしよし」

「にやにやにやにや」

ふふ、この子普段は自分のこと『うち』って言うんだね。

あたしの前でごんばって敬語にしてたんだね。  
かわいいよ。

さて、そろそろ夜も遅いかな。

「ミリイ、かえろっか」

「にやう。ユウナ様、また連れてきてほしいにや」

「うん、また来ようね」

「にやー」

「では、神獣合体！ミリイ！」

「にやおー！」

またミリイが光に包まれてあたしの中へ入ってくる。  
なんだかさつきより気持ちいいかも？

仲良くなると合体も上手くいくのかもしれない。

きっとそうですよー！。もっと仲良くなるのにやあ

ふふ、そうだね。仲良くなるう。

あたしは来た時より素早く移動して、お城に着いた。

ふっ、いいデートだったね。

デ、デート……にやううー

そうだよ、これからたくさんデートしようね。

他の子とも遊びたいから、いつも2人きりにはなれないけど……。

問題ないにや、みんな仲良くがいいのにや

ふふ、じゃあ戻ろうね。

「合体解除！」

ふう、合体は気持ちいいけど、解除した後さみしくなるな。でも、一緒に並んで歩くほうがいいよね。

「ミリイ、部屋まで手をつないで帰ろうね。後は寝るだけだよ」

「はいにゃ。でもユウナ様、ちょっと弟の様子を見たいのにゃ」

「そっか、じゃああたしも一緒に行くね」

「うにゃ！きつと弟も喜ぶのにゃあ」

「ふふっ、部屋まで案内してね」

「にゃうにゃう」

あたしはミリイに手を引かれて走り出す。

あ、なんか肉球のようなぷにぷにした感触があるぞ。手をつなぐっていいなあ。

通りすがりに出会う魔物たちがあたしたちを見てくる。

ミリイをうらやましそうに見ている子もいるな。

あの子たちにもいつか素敵なお主人様が出来るといいな。

「ユウナ様、着いたにゃー」

「あ、じゃあさ……いきなりあたしが入って驚かせてみようか」

「にゃ！それは面白そうにゃ。弟びっくりだにゃ」

コンコン。

ミリイがドアの陰に隠れるようにして、ノックした。

少ししてドアが開き……。

「はい、どちら様でしょうか……にゃ」

「こんばんは」

「にゃにゃにゃ！？ユ、ユウナ様！ど、どつして？」

「うふふ、驚かせてごめんね。体調のほうはどうか？」

「は、はい！もうこんなに元気になりました。これもすべてユウナ様のおかげです。あ、にゃあ」

「ふふつ、あなたもその話し方を練習してるんだね。可愛いよ」

「あ、ありがとうございますにゃ！」

弟くんは嬉しそうに照れ顔を向けてくれた。

ほとんどミリイと同じ顔だな。

髪が男の子らしく短いのと、目元が少しきりっとしているくらいだ。

この子ならミリイと一緒にそばにいてもらうのもありかもだね。

2人同時にぺろぺろしてもらっちゃうとか……いいかも……。

「とりあえず元気そうで安心したよ。でもまだちゃんと休むんだよ。

また今度遊ぼうね」

「は、はいにゃあ！よ、よろしくおねがいますのにゃ！」

「うふふ、いい子いい子」

「ふにゃあ……」

弟くんの頭を撫でてみると、顔を真っ赤にして床に崩れ落ちていた。

男の子でも同じ反応なんだね。

あたしは力づくで女の子をものにしようとする男が大っ嫌いだ。

だから、こんな風に女の子のような反応をしてくれる男の子なら全然平気かも。

元気になったら面接においで。

「それはじゃあまたね」

「またですのにゃ……」

あたしは手を振って部屋を出ていき、入れ替わりにミリイが入っていく。

少し待ってしよう。

「ほらほら、しっかりするのじゃ」

「じゃう……お姉ちゃん、ひっぱってー」

「しょうがない子だにゃあ。はい」

「んー……ありがとにゃ」

「はい、ちゃんと寝てるんだよ」

「わかったにゃー」

うーん、なんともほほえましいにゃあ。

あたしにもあんな可愛い弟か妹がいたらよかったのにな。

ミリイはお姉ちゃんらしく弟を寝かしつけたらしく、部屋から出てきた。

「ユウナ様、お待たせにゃ。弟が世話をかけたのじゃ」

「いいんだよ、可愛い弟だね」

「じゃう。手がかかるけど、とつてもかわいいのじゃ。時々名前を付けてあげたくなることもあったのじゃ」

「ふふっ、仲良しでいいね」

うーむ……兄弟で名前を付けると、禁断の兄弟愛になるのかな？

なかなか自由だね、魔物の世界ってさ。

さあ、部屋へ帰ろう。

またミリイと仲良く手をつないで部屋まで戻った。

軽くお茶を飲んで、すぐに寝る時間だ。

「さ、寝ようかミリイ」

「じゃーじゃー……」

なんとなくミリイが緊張している。  
憧れの人間と一緒に寝るなんて、一大イベントなのだろう。  
ああもう可愛い！

「ユウナ様？寝るときの決まりとかはなにかあるのかにゃ？」  
「そうだね、裸で寝よっか」  
「にゃんと!？」

実はあたし、裸で寝る派なんだ。  
別にミリイとエツチなことするために裸になるんじゃないからね。  
こっちに来てからは慣れてないんで服着て寝てたけど、今日はミリイもいるしそうしよう。

「ミリイ、脱がしてくれるかな？」  
「にゃう……お世話系の務めをはたすのにゃ」

ミリイは手を震わせながら、あたしを脱がそうとする。  
こっちに来てからメイドさんに脱がされることは何度もあったことを思い出す。

あの人たちは手際が良かったが、ミリイは慣れてないのだろうな。

「ミリイ、だれかの服を脱がしたことはあるのかな？」  
「弟くらいなのにな……でも最近は恥ずかしかってさせてくれな  
いのにな」  
「そっかそっか、じゃああたしで練習してね」  
「にゃい……」

ゆっくりと服を脱がされて下着姿になるあたし。



「あの……下着もですかにゃ？」

「もちろんだよ」

「ユ、ユウナ様は恥ずかしくないのかにゃ？」

「少し恥ずかしいけど、ミリイにはあたしの全部を見てほしいんだ」

「にゃう……照れますにゃ」

あたしの背後で肌に触れないようにおそるおそるブラのホックを外しているミリイ。

時間がかかったけどはずれたようだ。

前に回ってきたミリイの手を持ち、あたしの胸に押し付けてみた。

「にゃにゃにゃー！？ユ、ユウナ様？」

「遠慮なく触っていいんだよ。どうかな？あたしのおっぱい」

「や、やわらかいのですにゃ……」

「ほら、早くブラはずしてね。直接触ってみて」

「にゃう……失礼しますにゃ」

ブラがとられ、あたしのおっぱいが露わになる。

ミリイは震える両手でそっと触ってきた。

「あん……」

「にゃー！、ごめんにゃさい。触り慣れてにゃくて……」

「ふふ、気持ちいいよ、ミリイ」

「にゃう……」

震える手がゆっくり近づいてくると、やけにくすぐったくて気持ちいいな。

この子には慣れずにずっと緊張してほしいな。

「さ、もっと触りたかったらあとでまたしていいからね。まずは脱

がせて」

「はいにや……失礼するにや」

あたしのショーツをゆっくりとおろしていくミリィ。

どこを見ていいかわからずにうつむいている。

しつかり見てごらんと言いたいところだけど、さすがにちょっと  
恥ずかしい。

「ユウナ様。とてもお綺麗ですにや……」

「ありがと、じゃあミリィも脱がせてあげるね」

「にやにや！？そ、それはお手数なので自分で脱ぎますにや」

「あたし脱がせるの好きなんだよ？嫌かなあ？」

「にゅう……ユウナ様のお望みにやら……」

「よしよし」

さて、ミリィのメイド服を脱がせよう。

でもこれどうやって脱がせるんだろう？

とりあえずエプロンはずしてと……上着にはボタンが、スカ  
トにファスナーがある。

どっちから脱がすのが可愛いかなあ……

よし、スカートから脱がせよう。

スカートを降ろすが、まだ上着に隠されてパンティは見えないな  
あ。

でも、すべすべの足が見えるぞ。よし、靴下から脱がそう。

「はい、足上げてねー」

「にやい……なんだかこの格好恥ずかしいのですにや」

「その格好可愛いよ」

「にゅう……」

うーむ、脚をもじもじさせて可愛いぞ。

よし、先にパンティを脱がせてしまおうか。

見えないけど、手をそれらしき場所に入れて、ゆっくりと降ろす。  
お、ピンク色のかわいいパンティが降りてきたぞ。

「にゃうう……不思議な脱がせ方するのにゃあ？」

「んー、だってこうするとミリイが恥ずかしくてかわいいもん」

「ユウナ様いじわるにゃー」

「うふふっ。ミリイ、ちよっとそのまま走ってみて」

「にゃーにゃんで？」

「可愛いミリイを見たいから」

「ううっ……」

見えないように前とお尻を手で隠して部屋の中を走るミリイ。

うーん、可愛いな……。

ってあたし変態すぎるかな？

こんな暴走して嫌われてもいけないね。

「ミリイ、もういいよ。ごめんね、変なことさせて」

「うんみゆ……ユウナ様が喜んでるから大丈夫にゃー」

「よしよし、いい子だね」

さて、いたずら無しでちゃんと脱がそう。

バンザイさせて上着を脱がし……ノーブラだったのね。

あっという間に全裸だ。

恥ずかしくて体を隠すミリイをベッドまで誘導して布団をかけてあげる。

あたしって紳士的。

さ、あたしも布団に潜り込もうっと。

「さ、寝ようか」

「にゃう……昔偵察した時に人間同士裸になってベッドに入るのを見た時はびっくりしにゃしたが、まさかうちも同じことが出来る日が来るとは思わなかったにゃ」

偵察というか、完全にのぞきだよな？

「そんなのまで見てたんだ。その人間たちはベッドで何かしてた？」

「うみゆ……なんだか見ちゃいけない気がするですぐ離れたのにゃ」

「そっか、なにしてたか今度教えてあげるね」

「お願いしますにゃー」

きっとその人間たちは男女だったんだろうけど、たいした違いはないかな。

おおありかもだけど、愛し合うことには違いがないぞ。

今日はおとなしく寝ようかな。

お楽しみは、いろいろと片が付いてからにしよう。

「ミリイ、おやすみ」

「おやすみにゃ、ユウナ様。あの……くっついていいのにかにゃ？」

「好きにしていよいよ」

「にゃうー」

ミリイは丸くなってあたしに抱きついてくる。

ふふっ、猫っぽいなあ。

すべすべした肌と、ところどころに生えている毛がふわふわして気持ちいい。

今日は幸せな気分で眠れそうだよ。

そっだ、寝る前にあれしなきゃ。

「ミリィ……ちゅっ」

「んっ……」

「おやすみのキスだよ」

「ふにゃー」

次はおはようのキスだね。

おやすみ、ミリィ。また明日。

あたしはすぐに眠りに落ちて行った。

## 12・壊せない壁

目覚めると顔がやわらかい感触に包まれていた。

なんだろう？目を開けてるのに視界は塞がれている……。

んー？ミリイに抱きつかれて寝たんだったかな？

このやわらかさは……おっぱい！？

ミリイったら、抱きつくのが大好きなんだね。

あたしを抱き枕にしちゃってるんだ。

じゃあしばらくはこの感触を楽しませてもらおうか。

ミリイのおっぱい……あたしより少しおっきいなあ。

ちよっとづらやましいぞ。

「むにやむにや……ユウナ様……。うちの耳かじっちゃだめだにやあ。食べ物じゃにやいのー」

どんな夢を見ているのやら……。

たしかに食べたくなるような耳だけどさあ。

というか、ミリイにはそんなことすると思われているのだろうか。

うんうん、あたしのことをよくわかってくれてるね。

さて、このままのんびりまどろむとして……今日の予定はどうしようかな。

まず目覚めたリリアさんには絶対会おう。

あとはアクアとチルちゃんにもあいさつしなきゃね。

そういえば、麒麟みたいにテレパシーで会話できないのかな？

ちよっと試してみよう。

アクアー、聞こえたら返事してー。

あら？ユウナ様の声が聞こえたような……気のせいでしょうか？

おお、通じたぞ。

気のせいじゃないよー。あたしが話しかけてるよー。

ユウナ様なのですか？びっくりですわ……こんなこともできませんのね

うん、試してみたんだけど、仲良くなった子とはできるみたいなんだ。

おはよう、アクア。

おはようございます、ユウナ様。目覚めはいかがですか？

うん、すっきりだよ。

でもまだ隣でミリィが寝てるけどね。

あらあら、あの子ったらユウナ様の朝食の準備も忘れて眠ってますのね

んー？もうそんな時間なのかな？

昨日たくさんはしゃいで疲れてから寝坊したのかな。

そのようですわね。では、わたくしが朝食を運びにまいりますね。ユウナ様に直接お会いしたいですし

あ、そうしてほしいな。

あたしもアクアに会いたかったんだ。

うふふっ、それではしばしお待ちくださいな

よし、アクアが来てくれるぞ。

このテレパシーは便利だね。

次はチルちゃんにも話しかけてみよう。

おーい、チルちゃん……。。

くー……。すやすや……

ん？寝息が聞こえる？

つまりは寝てるのかな？

夜遅くまあたしの服を仕上げて寝ているのかもしれない。

よし、起こしちゃう悪いからそっとしておこよう。

んー……。アクアが来る前にちゃんと起きて服を着るべきなのかな？

裸で寝ている2人を見たらどんな反応をするんだろう？

ラブコメっぽく驚いて逃げていくかな？

それとも大人っぽいアクアだから、あらあら……。って感じでにっ

こりしてるのかな？

わたくしもー！って飛び込んできてもらうのが理想だなあ……。

アクアは水から出られないから出来ないけどさ。

「むにゃあ……。ユウにゃ様あ？あれ？いないにゃあ」

ミリィが起きてさっそく寝ぼけている。

あたしはあなたが抱きしめてるんだよー。

「ミリィ、ここだよー」

「むにゃ？枕からユウナ様の声がするのにな」

「枕じゃないよ、あたしだよー」



「んにゃっ!? ユ、ユウナ様!

ようやく抱きしめているのが枕じゃないと気付いたミリィ。  
いつもこんな寝方をしているのかな?

弟君も被害にあってそうだ。

あたしはミリィの抱擁からようやく解放される。

なかなか楽しい時間だったよ。

「ユウナ様、ごめんにゃさい……よく弟にも寝像が悪いと注意されるのにゃ」

「いいんだよ。あたしの抱きしめ心地はどうだった?」

「むにゅむにゅでふにふににゃあー」

「ふふっ」

よくわかんないけど、良かったんだね。

さて、こうしていたいけどちゃんと起きよう。

でもその前に……ちゅっ。

「にゃう……朝から嬉しいことだらけにゃあ」

「おやすみのキスの後はおはようのキスで起きるんだよ」

「わかったにゃー」

「それじゃミリィ、お仕事だよ。服着せて」

「にゃいっ!」

ミリィに服を着せてもらうあたし。

相変わらず慣れない手つきなので、すごく時間がかかる。

でも、この間にミリィの裸をじっくり見ちゃったのさ。

やっぱりあたしより胸おっきいよね。

というかあたしが小さいのかな……。

まあいっか。ぺったんこチルちゃんだっているわけで……。

あんな小さな子と比べるのもどうかと思っけどさ。  
無事着替え終わり、ミリイにもメイド服を着せてあげる。  
よし、アクアが来る前に着替え終わったぞ。

「にゃああー！ユウナ様あ、朝食の準備忘れてたのにゃあ！」

「うふふ、知ってるよ。アクアが持ってきてくれるってさ」

「にゃう……申し訳ないのにゃあ」

「昨日はたくさん遊んで疲れたもんね。許してあげるよ。それとも、ミリイはしょっちゅうお寝坊してるのかな？」

「そ、そんなにやことないの。いつもは弟が起こしてくれるのにゃ……」

ふむ。昨日見た時は弟のお世話をしてるお姉ちゃんって感じだったけど……。

実際は弟の方がしつかりものかもしれないな。

あたしの中でミリイはドジっ子に認定されつつあった。

コンコン。

お、来たかな？

ミリイが部屋のドアを開ける。

「お食事を持ってきましたわ」

「アクアだ。おはようにゃー。お魚の匂いがするにゃ」

「これはユウナ様のですわ。お寝坊さんはお魚抜きですの」「にゃんだってー！」

ふふ、この2人仲がよさそうだね。

それにしてもアクアの食事の運び方がすごいな。

台車に乗った水槽に使っているのは昨日見たとおり。

どうやって運ぶのか疑問だったけど、なんと水槽から水が生き物

のように飛び出て食事を運んでいる。器用に水を操るんだねえ。今度合体してあたしも水を操れるか試させてもらわなきゃ。

「アクア、おはよう。ありがとうね」

「ユウナ様、おはようございます。今すぐご用意いたしますね」

アクアは器用に水を操って、テーブルに食事のお皿を並べていく。まるで大道芸だなあ……お金取れるね。

あ、ちゃんとミリイの分のお魚もあるみたい。

あんなこと言ってたけどやっぱり優しい子だよ。

「アクアはもう食事終わったの？」

「はい、朝は魚を捕まえやすいので皆で潜って食事をするんですの  
「なるほど、楽しそうだね」

「よろしければ今度ご招待しますわ。ちゃんとその場で食べられるようにさばきますので」

「おお、ちょっと行ってみたいかも」

「ではいつでも言ってくださいね」

「うん！」

いやあ、楽しみが増えたぞ。

バーベキューパーティーもあるしお魚パーティーもか。

なんかあたしここで遊んでばかり？

でもここってそんな感じに平和な空気なんだよなあ。

人間と戦争？してる感じは全くないんだ。

だからとりあえず楽しもう。

「うちも行きたいにゃあ」

「ミリイはいつだったか水に入ったら怖すぎて気絶しちゃったじゃない」

「うみゆう……猫は水に弱いのにや」

「ふふ、今度合体したら行けるかもね」

「それだにゃ！ユウナ様おねがいますにゃ」

「合体？それはなんですか？」

「あたしの能力でね、2人で合体して1人になれるんだ。そしたら強くなれるんだよ。アクアも今度やってみようね」

「なんだかすごそうですね。よろしくお願いします」

うん、こつやってみんなと合体してあたしの能力を確認していくんだ。

それがこの世界を救うのに役に立つ！かもしれない。  
そうしたいなあ。

「ユウナ様、冷めないうちにどうぞ」

「そうだね、いただきますー」

「いただきますにゃ」

あたしとミリイは仲良く食事を開始した。

お魚とごはんと野菜スープ。

シンプルだけど朝ごはんにはちょうどいい。

お魚は新鮮でおいしいしね。

アクアはニコニコと見守ってくれている。

なんだか家族って感じだなあ。

今度チルちゃんも呼ぼうと。

「ふう、ごちそうさまでした」

「ごちそうにゃまでした」

「はい、おそまつさまでした。片付けますね」

「うん、ありがとうね」

また水の大道芸を見せてもらう。  
あれって上手く使えば戦いで敵の戦意をそげそうだなあ。  
水場で呼べばいいのだろうか。

「ねえ、海の水ってしょっぱいよね？」

「そうですね。だから魚の味付けには困らないんです」

「な、なるほど……。アクアはしょっぱくないお水でも大丈夫なのかな？」

「はい、川へ泳ぎに行くこともありますわ」

「なるほどー、じゃあ水がある場所なら召喚できるね」

「そうですね。いつでもお呼びください」

「うん」

どうせなら水槽ごと召喚できたらいいのにな。

ん？もしかして出来るかな？

今度やってみなきゃね。

「ユウナ様？今日の予定はいかがされますかにゃ？」

「えっとね、今日はあたしが連れてきちゃった人間のリアさんのところへ行くんだ。だから今日は自由にしててね。なにかあったら呼ぶよ」

「わかったにゃー」

「わかりました。わたくしは海のパトロールへ行つてまいります」

「うちは皆の偵察に行くにゃ。あ、病み上がりだから安全な場所の担当にゃよ」

「そっか、2人とも頑張つてね」

「それでユウナ様におねがいがあるのにゃ。召喚でここに帰還できるのか試させてほしいのにゃ」

「なるほど、やってみようか。いつ頃？」

「夕方ごろかにゃ？」

「うん、できたら便利だね」

なるほどね。

昨日の実験では部屋にいるのを召喚した後、帰還させると部屋に戻った。

召喚した後そのままでもいいのか……帰還は必須なのか……。確かめるにはちょうどいい

「それではユウナ様、失礼いたします」

「いつてくるにゃー」

「いつてらっしゃーい」

2人を見送ると、部屋が少しさみしくなった。

さあ、リアさんのところへ行ってみよう。

部屋を出ると、リアさんの部屋の前に羊っ娘が立っていた。少し落ち込んだ顔をしている？

「おはよ、今日もリアさんのお世話してくれたのかな？」

「ユウナ様、おはようございます。リア様ですが目をお覚ましになられました」

「そっか、どんな感じかな？」

「はい、お体の方も精神の方も安定されているようです。今は朝食を置いてまいりました。ただ、わたしを見て怯えられましたので外で待機しております」

「そっか、なんかごめんね。魔物に対してなにか誤解してるみたいなんだ」

「いえ、慣れていきますので大丈夫です。それより中へどうぞ」

「うん、ありがと。行ってみるね」

羊っ娘、慣れてるとは言うけど大好きな人間に怖がられてつらい

んだろうな。

この子は部下にして抱きしめてあげねばなるまい。  
そう誓って、ノックをして中に入った。

「おじやまします」

中に入ると、ベッドで起き上がってぼーっとしているリリアさんがいた。

こちらを一瞬見て、少し悲しそうな困ったような顔をした。

リリアさんを裏切った勇者がやってきたんだ。仕方ない……。

もつと拒絶されることだって覚悟してきたんだ。

羊っ娘が言うように顔色はいいようだ。

あたしが知っている綺麗なリリアさんのまま……。

でも、食事はしてないみたいだな。

さて、なにか話しかけなければ……。

「リリアさん、元気そうでよかった……。気絶してたから心配してたんだ」

「……」

何も答えてはくれない……。

でも、謝らなくっちゃね。

「リリアさん、こんなことになって本当にごめんね。あたし、魔物たちがあんなひどい目にあっているのが耐えられなくて……だから助けちゃったんだ」

「……」

「えっと……こんなこと許してもらえないわけないよね。だけど……謝らせてね。あたしのせいでごめんなさい！」

あたしはリリアさんに向かって深くお辞儀をした。

しかし何も言い返してはくれない……。

こっちを見てもくれない。

何も反応してくれないんだ……。

やばいよ……泣きそうだよ……。

リリアさんの声が聞きたいの……。罵倒でもなんでもいいからさ

……。

「どうしてなのでしょうね……」

あ、リリアさんがぼそつとだけで一言話してくれた。

どうしてって言うのは？ここに連れてきたこと？あたしが裏切ったこと？

あたしは言葉の続きを待った。

「本来ならばあなたや魔物たちに恐怖し震え、私は裏切ったあなたに文句を言うはずなのでしょうね。でも、そういった感情が湧いてこないのです。私はすでに魔物に洗脳されているのでしょうか？」

えと……羊っ娘がかけてくれた魔法のおかげで落ち着いているはずだけか。

ただ、それを言うと……魔物に洗脳されたってことにされてしまっただろう。

リリアさんの中にある魔物への誤解から、ほぼ確実にそうなる……。

…。

でも、誤魔化したりはしたくない。

正直にあたしの気持ちを話そう。

「リリアさん、信じてもらえないと思うけどあたしの話を最後まで聞いてね」



「……」

返事はないけど、拒否もされてないんだ。続けよう。

「人間たちはね、魔物たちのことを誤解しているんだよ。魔物たちは本当は優しいの。その証拠に、ここは魔物のお城なのにリリアさんもあたしも歓迎されている。ちゃんと寝てる間の世話もしてくれだし、おいしい食事も出てるんだよ」

リリアさんは食事をちらっと見た。

おなががすいているのかな？

食事はお粥っぽいものと良く煮込まれている感じのスープ。  
病人向けって感じのものだ。

「リリアさん、とりあえずお食事をしないかな？ほら、見てみてよ。魔物が凶悪だったらそんな食事作れないよね？リリアさんを騙すための餌って思っちゃうかもしれないけど……そんなことはないの」  
「そうですね……魔物が作ったとはいえ、食事は粗末にはできません。いただきます」

リリアさんは食事のお盆を手にとり食べ始める。

ほっ……これで少しは安心だ。

「リリアさん、あたしがいたら邪魔だろうから……少し外にいるね」  
「……」

また何も言ってくれないが、あたしは部屋の外に出た。  
ふう、どうしたらいいんだろう……。

羊っ娘もまだ外で待っていてくれたようだ。

「ユウナ様、いかがでしたか？」

「とりあえず食事してくれたよ。でも……あたし嫌われちゃってるんだ……」

「そうですか……。わたしの力が及んでいないようで申し訳ないです」

「え？なんで？あなたのせいじゃないよ」

「わたしはリリア様の悪夢を食べました。魔物への恐怖、ユウナ様への恐怖と悲しみ。表面上はその感情が出なくなるくらいに食べましたが、心の奥底にある恐怖までは食べることができませんでした。わたしにもっと力があれば……」

悪夢を食べるか……。

なんともやさしい子だね。

だからリリアさんはあんなに落ち着いていたんだな。

でも、あなたが落ち込まなくてもいいんだよ。

「それをしてくれただけでも十分だよ。だってあんなに落ち着いてたんだからさ。ありがとね。あとはあたしがなんとか話してみるよ」  
「そう言っていただけだと嬉しいです」

羊っ娘がにつこりと微笑んでくれた。

うん、かわいいな。

って今はそんなことを考えてる場合ではない。

それにしてもこの子の能力って、人間と魔物を仲良くさせるには使えそうだよな。

今回は絶対にこの子をスカウトだな。

そのためにまずはリリアさんに元気になってもらおうのだ。

羊っ娘には休んでもらおうかな。

「じゃあさ、ここはあたしに任せて。あなたも他に仕事があるんだ

よね？」

「はい、お気遣いありがとうございますね。ではなにかあれば呼んでください。わたしはたいいてい医務室にあります。場所は誰に聞いてもわかりますので」

「うん、わかった。なにかあれば行くね」

羊っ娘を見送り、あたしはリリアさんの食事を待つ。

さっきからいろいろ悩んでるけど、なにもいい考えが浮かばない……。

とりあえずあたしの正直な気持ちを話そう。

しばらく待って、そろそろいいかなと部屋をノックする。

返事はないけど、入ろう。

「リリアさん、嫌かもしれないけど入らせてね。お話をもう少し聞いてほしいんだ」

「はい……聞かせてください。食事をして少し落ち着きました。おいしい食事だったと伝えていただけますか？私から言うのは怖くて……」

「うん……伝えておくれ。喜ぶよきつと」

リリアさん、魔物はやはり怖いんだね。

でも仕方がない。

とりあえずあたしの話を聞いてくれるだけありがたいや。

「リリアさん、私はひどいことしちゃったよね。そして、今からもひどいこと言っちゃうと思うけど聞いてね。あたしの正直な気持ちだから……」

「どござ……」

今度は返事をくれた。  
ちゃんと聞いてくれるんだね。よかった……。

「リリアさんが信じている教えだけどね、少し間違いがあると思うんだ。ずっとずっと昔から伝わってるから、伝わる途中で何かの間違いがあつたと思うの。魔物はさつきも言ったように凶悪じゃないし、しかも人間を殺すなんてできないって言ってるんだよ」

「そう言われても信じられません……。魔物はやはり凶悪なのです  
よ」

「でも考えてみてほしいの。魔物が凶悪だからって怖がっている人は確かにたくさんいたよ。でも、実際に襲われたって人はいたかな？あたしはほんの少しの人にしか聞いてないけど、実害があつた人はいなかったよ？」

「それは……」

リリアさんは考え込む……。

あたしの予想だといないはずなんだ。

だって、襲うはずがないから。

「私の知っている人にはいませんが、そういった話ならいくつか聞きました……」

そう言うリリアさんは不安そうだ。

言葉も歯切れが悪い。

「しよせんは噂話じゃないかな？リリアさん達はずっと教えにしたがつて生きてきたから気が付いていないんだろうけど、他の世界から来たあたしにはとっても異常な状況なんだよ？」

「異常ですか……」

リリアさんは悲しそうな顔でそうつぶやく。

う……今の言い方は酷だったのかな？

でも、言わなきゃ……。

「ご、ごめんね。リリアさんのこれまでの人生を否定するような言い方になっちゃたけどさ……。でもこれがあたしの正直な気持ちなの……」

「そうですね……。ユウナ様の目、ここに来てから見た時と同じ。まったくすぐで綺麗な目……。きっと嘘をついていないし私を騙す気などないでしょうね……」

「うん、もちろんだよ。それにあたしだけじゃないの。ここに来ていろんな魔物とお話したけどさ、みんなすごくいい子なんだよ。リリアさんの看病してくれてた子だって、ずっと心配そうな顔で、徹夜で付き添っててくれたんだよ。さっきも心配そうにずっと外で待ってたしさ」

「そうですね……。ユウナ様……。とても楽しそうですね」

「う、うん……。リリアさんが苦しんでるのに楽しんじゃってたんだ……。ごめんね。でも、きっとリリアさんもみんなと仲良くなれるよ」

「私はもう元の場所に戻ることはできないでしょうね。おそらくは魔物のスパイとして殺されるのでしょう」

「え！？や、やっぱりそうなるのかな？リリアさんは人質として連れてこられたのに？」

「過去にも例があつたため、よく知っています。間違いありません」

う……予想はしてたけど、残酷すぎるよ……。

人間のばかり、教えのばかり！

そうなるとリリアさんが生き残るには……。

「私が生きるには、もうここで魔物たちと一緒に暮らすしかないの

でしょうね」

「えと……最初は嫌かもしれないけど、そうしてみようよ。きっと楽しくなるよ？あたしもいるからさ……。それに、うまくいけば帰れるようになるかもしれないし……」

「……」

「リリアさんはまた黙りこんでしまった。

このまま説得してなんとかここに居てくれるようにしたい……。でも、なんて言えばいいんだ？

あたしも何も言えずに黙りこんでしまう……。

そんな気の重い沈黙を破ったのはリリアさんだった。

決意したようにこう言ったのだ。

「ユウナ様……私を殺してください……」

え？なんて言った？

気のせいじゃなかったら……とても恐ろしいことを言ったよね？

「リリア……さん？何を……」

「同じ人間に殺されるのは嫌です。魔物に殺されるのも怖いですが。だから第3者とも言えるユウナ様に殺していただきたいのです」

「そうじゃなくて……なんで死のうとしてのの？」

どういうことだ……？

すごく落ち着いた感じで言っている……。

羊っ娘が消すことが出来なかったという心の底の恐怖。

それは死にたくなるほどの恐怖ってことなのかな？

「私のこれまでの人生は否定されました。もう生きる意味などない

のです。アルティアナ様の教えでは自殺は禁じられています。ですから頼むしかないのです」

「あたしの信じてるものだって、人を殺すことなんて禁止に決まってるよ！魔物だって人間は殺せないの……。だからここにはリリアさんを殺すことができる人も魔物もないんだよ……」

あたしはもう泣いているようだ。

だってだって……。あたしが1人の人間の人生を台無しにしちゃったみたいなんなんだもん。

「そうですか……。では私はこれから行き地獄を味わうことになるのですね……。残酷なことですね……」

「えっと……。えっと……」

「ユウナ様……。私を殺していただけないのであれば、もう顔を見たくありません。出て行っていただけますか」

そう言っつて顔を背けるリリアさん。

どんな表情をしているのかはわからない……。

あたしはもう何も言えない……。

完全に拒否されているのだ。

あたしはふらふらした足取りで逃げるように部屋を出ていく……。

「ごめん……。ね……」

最後に何とかこれだけを絞りだし、ドアを閉めた。

鍵、かけておこうかな……。

外に出てなにかあつてはいけない。

でも、どうしようか……。

いろいろと最悪な結果を予想していたけど……。こんなことになる

なんて……。

あれ……？なんだかうまく立てない……？

景色もゆがんで……。

あたしはそのまま倒れていった……。



### 13・あたしにできること

あたしはなにもない空間に立っていた。

ここはどこ？あたしは……だれかはわかる。

これは夢なのだろうか？

だとしたらいつ寝たんだろう？

さつきは何をしてたっけ？

たしか……リリアさんとお話して……。

そうだ、リリアさんが死にたいと言いつ出したんだっけ……。

その後あたしの顔を見たくないと言って……。

あたしはその後どうしたんだっけ？

ちゃんとお部屋へ帰った？

だめだ……覚えてないよ。

まあ、あたしのことはいいとして。

リリアさんのことはいつたいたいどうしたら……。

あんなにも思いつめていては、どうしようもないよ……。

どうしたらいいの……？

あなたはどうしたいのですか？

ん？この声はだれ？あたしの心の声かなにか？

あたしはリリアさんを助けたいよ。

別に嫌われたままでいいから、なんとか人間たちのところへ戻って元の暮らしに戻ってほしいの。

ではそうしましょう。皆に相談すればいいアイデアも出るでしょう。

うん、そうだよね……。頭のいいグリモアさんとかいいアイデアを考えてくれるかな？でも怖いよ……。失敗したらどうなるの……。

弱気になっていると、うまくいかない可能性があります

それはわかってる……。だけどね……。

まずは思い出しましょう。あなたが助きたい人のことを

リリアさん……。あたしがこの世界で最初に会った人間……。あれ？いつの間にか目の前にリリアさんが立ってるよ？

『勇者様、よくお似合いです。女性の勇者様ですのではりきって服を用意いたしました』

あたしもいつの間にか真っ白なドレスに着替えていた。そう、あたしがこの世界で最初に着た服はこの純白のドレスだ。リリアさんに着せてもらって気持ちよかったなあ。また着せてもらいたいな……。また、仲良くしたいな……。いや……。そんな贅沢は言ってられない。まずはリリアさんを無事に帰すことだけ考えよう……。リリアさん……。必ず助けるからね。

『勇者様、魔物を倒して私達を救ってくださいね』

ごめんね、それはできないんだ。

だって、あなた達の言う凶悪な魔物はここにはいないんだもん。だけど、魔物を倒さずに救う方法を見つけるよ。

勇者だから……ね？

『それでは勇者様は、私達を裏切り魔物の元へ着くのですね……』

目の前にいるリリアさんの顔が恐怖に歪んでいく。

あたしは見てないけど、あたしが裏切ったと思った時のリリアさんはこんな表情だったのだろうか？信じていた相手に裏切られた時の顔……。

不謹慎だけど、あたしは少し嬉しいなと思った。

だって、少しの間しか一緒にいなかったあたしをそんなに思ってくれてたんだなって。

今はもう、信用0なのかな？

『ユウナ様……私を殺してください』

結果的にこんな恐ろしい言葉を聞くことになった……。

でも、これをあたしにお願いするってことは……えっと？

まだあたしを少しだけ信用してくれている？

でなきゃあたしに頼まないよね？

って自分に都合よく考えすぎなのかな？

でもなんだろう……なんだか落ち着いて思考が出来る。

あんなに取り乱していた自分が嘘みたいだ。

不思議な夢だな……。

あらためて目の前にいるリリアさんをじっと見つめる。

あたしの今の目的は決まった。

リリアさんを助けるんだ！

あたしは嫌われたって構わないし、一生恨んでくれていい。

だから元の生活に戻ってね。

よし、やるか……と思うけどここはいったいどこなのやら？

「おい、声さんはどこだ？」

「はい、決意が固まったようですね。それではお目覚めください」

「というわけで目覚めたようだ……」。

「ここはどこかのベッドの上かな？」

「目の前にいる可愛い女の子は……羊っ娘かな……」。

「ユウナ様、お目覚めですか。心配いたしました」

「えっと……なんであたしここにいらっしゃるの？」

「リリアさんの部屋の前に倒れていたらしく、こちらの医務室へ運んでこられたのです」

「そっか……部屋出てすぐに倒れちゃったんだね……」

「それで勝手ながら、夢の中で治療をさせていただきました。お気分はいかがでしょう？」

「そういえば羊っ娘の能力って夢を操ったりとかだったっけ？」

「リリアさんを落ち着かせてくれたのもこの子の能力なんだよね。」

「今回はあたしも救われたわけか……」。

「なんていうか、やる気にあふれているというか、前向きな気分だ。」

「うん！すごいいい気分だよ。あなたの能力ってすごいんだね」

「いえ、気休め程度ですよ。後はユウナ様次第です。がんばってくださいね」

「がんばるよ、ありがとうね。それで……リリアさんのことなんだけど……」

「そちらはお任せください。出来る限りのことはしておきます」

「うん、お願いね」

「はい。あ、ちょうどお昼の時間なのですがどうされますか？こち

「らかお部屋のどちらで食べますか？」

「あ、お部屋で食べるよ」

「では、戻って待っていてくださいね」

「うん、ありがとね」

医務室を出て、部屋に戻る。

グリモアさんに相談に行きたいところだけど、食事時間は失礼かな？

とりあえず腹ごしらえだ。

コンコン。

お、さっそくやってきたぞ。

ドアを開けると、料理を運んでくれたのはチルちゃんだった。

羊っ娘が来ると思ってたけど、気を遣ってくれたのかな？

なんてできる子だろうか。

「おねえちゃん、お昼持ってきたの。体の方は大丈夫？」

「大丈夫だよー、ありがとね。チルちゃんこそちゃんと寝た？」

「うん、寝る頃には朝になってたけど……さっきまでたくさん寝たよ。ちゃんとおねえちゃんの服も完成したの」

「そっか、それは後で見せてもらうとして、ごはん食べよう。チルちゃんもお昼まだだよね？」

「うん、2人分持ってきたから一緒に食べようね」

料理を並べていくチルちゃん。

ちっこい容姿に似合わず、てきぱきと作業をこなしていく。

よく考えてみると、服を作るくらいに手先が器用なんだもんね。今日は野菜だらけのようだ。サラダに煮物に炒め物。

チルちゃんは虫の魔物だから、草というか野菜ばかり食べるのかな？

準備が終わったらしく、仲良く隣に座って食事開始だ。

「いただきますーす」

「いただきます」

うーん、おいしい。

気持ちの前を向くと食事もおいしくなるのかな？

リリアさんも、ちゃんと食事しているといいな……。急いで食べて、リリアさんのことを何とかしよう。

「おねえちゃん、おいしいかな？」

「うん、おいしいね。作ってくれた人と育ててくれた人に感謝だよ」

「そっかあ、えへへ……。この野菜育ててるのチルのお友達なんだよ。ちゃんと伝えておくね」

「うん、お願いね」

チルちゃんのお友達はやっぱり虫関係かな？

土を綺麗にするミミズとかいたりするのだろうか？

ちよつと怖いけど、会ってみたいかも。

だって、元が何であれここにいる子たちはみんな可愛いしね。

さて、今日はいちやつきたいのをこらえて急いで食べよう。

「ごちそうさまでした」

「おねえちゃん、食べるの早いね」

「あ、ごめんね。チルちゃんはゆっくり食べててね。今日は急ぐ用事があったさ」

「あ、さっき噂に聞いたけど……。人間が作った砦の件かな？」

「ん？違っけど……。それはなに？」

「なんかね、砦がこのお城に近づいてきてるとか聞いたよ」

皆が近づく？

動く皆でも作ったの？

まあいいや、グリモアさんに会いに行ったときにこれも聞こうか。

食休みしつつ、チルちゃんが食べるのを眺める。

行儀よく食べる子だなあ。

あたしとしては、ほっぺたにごはんつぶをつけて食べるちびっこが見たい。

とりあえずそういった欲望は今度叶えるとして……。

チルちゃんもようやく食べ終わったようだ。

「じゃあおねえちゃん、服着てくれるかな？」

「もちろん！楽しみにしてたんだ」

あたしは素早く全裸になる。

チルちゃんがまず下着を取り出す。

「おねえちゃん、着けてあげるね」

「よろしくね、チルちゃん」

チルちゃんはやっぱり器用だな。

あたしはいい感じに下着を着けてもらえた。

おっぱいもしっかり寄せてあげてくれたし、衣服に関してこの子はプロだ。

肌触りが以前のものよりもすべすべでいいぞ。

メインの服はどんなかなー？

「じゃあ、完成した服がこれなの。どうかかな？」

「おお！？なんだかこの服……光り輝いてない？」

「チルね、糸を作るときに時々すごく綺麗な糸が出来るの。それを

たくさんためておいたんだけど、今回全部使っちゃったんだ。えへへ」

「そんな貴重な糸をいいのかな？」

「うん！名前を付けてくれた人あげるって決めてたんだ。この服がおねえちゃんを守ってくれるよ。この糸は魔法の力もあるみたいだし、汚れないんだよ」

「すごいねえ、チルちゃんありがとう」

「ふみゅー」

チルちゃんの頭をなでなでする。

なんかすごい服を作ってくれたなあ。

さっそく着せてもらう。

シルク素材のワンピース、なんだか羽根のように軽いぞ。

スカートも短くなって動きやすい。

「うん、気に入ったよ。ありがとうね、チルちゃん」

「よかった……。がんばった甲斐があったの……」

「寝る時間惜しんで作ってくれたんだよね。ほんとありがとう」

「ふにゅう……。おねえちゃん……」

チルちゃんをふんわりと抱きしめる。

よし、着替えたし行こうかな。

「チルちゃんはこの後予定あるのかな？」

「えっと……特にはないよ」

「じゃあお姉ちゃんで行こうか。グリモアさんがどこにいるかわかる？」

「たぶんお部屋だと思うんだけど……行ってみる？」

「うん、案内してね」



チルちゃんと手をつないで、案内してもらおう。  
グリモアさんの部屋はきつと本がいっぱいいるんだろうなあ……。  
部屋にたどり着き、ノックする。

「ユウナ様ですね、どうぞ」

「おじやまします。ってなんであたしだってわかったの?」

「城内のことでしたら、基本的に把握しておりますので」

「そ、そうなんだ……」

え?あたしってば部屋でいろんな恥ずかしいことをしてるんだけど……。  
ど……。

み、見られてたりするの?

あたしの慌てた表情を見てグリモアさんは言い足してきた。

「部屋の中については基本的にのぞくことはありませんので」安心  
ください」

「あ、そうなんだね……」

ふう、一安心だ。

基本的につてことはリリアさんの部屋は見てるのかな?  
だったら話が早いのかも。

グリモアさんは机でなにかを書いているようだった。

お部屋は予想どおり本だらけだ。

「それでユウナ様、どのようなご用件でしょうか?」

「実はね、リリアさんのことなんだけど……」

あたしは今朝の一件を説明した。

その上で、リリアさんを帰す方法を相談した。

「了解いたしました。難しい問題ですが考えてみますね」

「うん、お願いね。手間取らせちゃうから、あたしに手伝えるお仕事とかあつたら何でも言つてね」

「そうですね……」

グリモアさんは少し考えて、なにかを思いついたように言ってきた。

「ユウナ様、少しお願いしたいことがあります。うまくいけば、ユウナ様の望みも叶うかもしれません」

「え？それだつたら何でも言つて」

「まず、偵察隊が今朝報告をしてきた内容をお話します。人間達が建てている砦がつい最近完成していたのですが、それがこのお城に少しずつ近づいてきているということです。つまり砦が移動している」と

「ああ、さつき噂で聞いたよ」

「いったいどのような力を使っているのか……大変脅威なのです」

「あー、もしかしたらなんだけど……。あたしより先に召喚された勇者がいるらしいんだけどね、その勇者が重力を操るらしいんだ」

「重力ですか……それなら納得がいきます。とても恐ろしい力ではありませんが……」

ふむ、勇者には勇者と麒麟が言っていた。

ここはあたしの出番だね。

「わかったよ、あたしがなんとかしてみるね。でも、これであたしの望みが叶うつて言うのはどういうこと？」

「ユウナ様が使役しておられる麒麟様の力は絶大です。砦を破壊することでその力を人間達に見せつけければ……休戦の協定を結ぶことが可能かもしれません」

「ということとは？」

「休戦の条件にリリア様を安全に返すことが出来るかもしれません」

ふむふむ。

良さそうな案だけど……でもなんかおかしくないかな？

圧倒的な力を見せつけた側が人質を解放して休戦をお願いする？

この疑問をぶつけると、次のように言われた。

「人間達との戦いでは、幻術を見せつけることで凌いでいることはご存知ですか？」

「うん、こないだ聞いたよ」

「その幻術内では我々が防戦一方……つまり人間が有利な展開となっており、こちらの戦力はかなり削がれていることになっています。つまり、我々は圧倒的不利な状況になっていると言えるわけです」

「ふむふむ……」

「そこへ突如登場したユウナ様のおかげで我々は大逆転勝利となります。しかし、攻勢に出る戦力は残っていないので休戦を申し出るわけです」

なるほどなるほど……。

それならどちらの戦力が減っているから休戦ということが成り立つんだな。

「わかったよ、あたしと麒麟が圧倒的な戦力を見せて皆を壊せばいいんだね」

「はい、後のことは我々にお任せ下されば、うまく処理してみます」「うん！お任せするね」

この後は細かい作戦を相談しておいた。

皆の移動速度から何日くらいの余裕があるのか。

移動の予測ルートから、迎撃に向いた地形はあるのか。

できればアクアの力を借りるために川の近くがあればいいとも言っておく。

また明日にでも情報をくれるとのことだ。

あたしは戦闘の特訓でもしておきましょうかね……。

あ、そうだ。今回のとは関係ないけどひとつ聞いておきたいことがある。

「グリモアさん、なんで幻術で人間に負けた状況にしているの？勝った状態にして逃げてもらえばいいのに」

「人間に不快な思いをしてもらいたくないからです……。それに、人間が不快に思う幻術を使う場合……術の行使者が罪の意識で倒れてしまいます……」

「そ、そうなんだね……」

うーむ、常に人間に優しい子たちだなあ……。

ここはあたしががんばってみんなを守らないとだね。

「じゃあグリモアさん、あたし戦闘の特訓してくるね。また情報が入ったらよろしく」

「はい、こちらこそよろしくお願いいたします」

この部屋に来て一言も話していないチルちゃんの手を取り部屋を後にする。

緊張してたのかな？

「チルちゃん緊張したかな？ ごめんね、連れてきちゃって」

「ううん、大丈夫。グリモア様からの伝言は基本的に文章で来るから、直に声を聞くことって滅多にないんだ。だから緊張しちゃった」  
「なるほど、たしかにあたしの部下募集の時もそうだったね」

「うん、でもグリモアさんかつこいいなあ……。あ、おねえちゃん  
ほどじゃないけどね。えへへ」

「ふふっ、よしよし」

「ふにゅー」

チルちゃんと仲良く歩きながら、あたしは外へ向かった。  
神獣合体をチルちゃんと試すのだ。

「チルちゃん、あたしの能力はね。みんなと合体して強くなれるん  
だ。やってみるね」

「うん……。なんだかすごそうだね……」

あたしはチルちゃんの間を見つめ……。

「神獣合体、チルちゃん！」

「はい！」

返事はチルちゃんがあたしを受け入れてくれる合図だ。  
チルちゃんの体が光に包まれ……。あたしに飛び込んでくる。  
やっぱり……。気持ちいいぞっ！

光がおさまり、あたしは体を確認する。

なんだか小さくなったような……？

そして胸がぺったんこだ……。

ミリイの時は大きくなったのに今回はなくなったか……。  
合体相手にいろいろ影響されるのかな。

チルちゃん、気分はどうか？

なんだか気持ちいいの。おねえちゃんと一緒になるってこんな  
なんだね……

そうだよ、これからもたくさんすることあるから慣れておこうね。  
ではまず身体能力のチェックだ。  
走ったり飛んだりして見た結果……普段のあたしそのままだった  
……。  
チルちゃんは運動が苦手なのかな？

うん……チルはいつもお部屋での作業ばかりで外には出ないか  
ら……

そっかそっか。

じゃあこの状態じゃあ戦闘するには向いてないんだね。

次は、糸を出す能力を試すかな。

チルちゃん、ちよつと糸を出そうとしてみて。

この体はチルちゃんも動かせるんだよ。

わかった。やってみるね

チルちゃんに体を委ねると、あたしの口から糸が飛び出してきた。

おおっ……喉の奥のどこからともなく出てくる糸……。

不思議と気持ち悪くはないかな。

チルちゃんと合体した状態では自然なことなんだろう。

とりあえず糸の出し方の感覚は分かった。

えーと……意識をこつ集中して……。

お、出た出た。

次はチルちゃん、同時に念じて糸を出すよ。目標はあの木ね。

わかったよ、おねえちゃん

チルちゃんと意識を同調させて、糸を念じる……。

木に巻きつく糸……見た目はさっきと変わらないかな？

わあ！すごいよおねえちゃん。チルが普段出してる糸より丈夫そうなの！

お、チルちゃんがそう言うなら間違いないね。

こうやって2人で意識を合わせればチルちゃん的能力を引き出せるからね。

これが共同作業ってやつだよ。

なんだかいい響きだねー。はじめての共同作業って

なんだか体の中が熱くなる。

チルちゃんが照れているのかな？

とりあえずこれを練習しようか。

うん！たくさん糸出したいな。持って帰って使うね

こうしてしばらく一緒に糸を出す練習をした。

狙った場所へ素早く糸を出せるようになった。

今度ミリイを相手にして、動いてる相手を捕まえられるか試してみなきゃね。

たくさん出した糸を回収してチルちゃんの部屋へ行くことにした。

部屋に入ると、たくさん糸や布や革といった素材や加工道具があった。

これはまさに職人さんのアトリエだ。

なんだか糸で作られたハンモックのようなものもあるぞ。

さなぎのような形だが、ベッドなのかな？

うん、とつても気持ちいいんだよ。今度おねえちゃんも一緒に入らないかな？一緒に寝たいなあ

うん、ぜひぜひお邪魔させてもらおうかな。

わーい、じゃあ今度少し大きくしておくね

よろしくね。楽しみが増えたよ。

さて、ここに来た目的……チルちゃんの服を作るのだ。

あたしが頭で思い浮かべたイメージをチルちゃんが形にできるのか。

これを試してみようと思う。

さて……どんな服がいいのかなあ？

色は白が好きなのかな？

うーん……白以外を着たことがないの。おねえちゃんがあうと思っただ色なら何でもいいよ。チルの糸は染めても綺麗だよ。そっちに染めてある布もあるの

ふむふむ。たしかにカラフルな布や糸もある。

綺麗に染まってるね。

あたしが今頭に思い浮かべているのは、近所の小学校の制服だ。

上下一体型のセーラー服のようなデザイン。

青い生地白い線が入っていて、大きな白いリボンが付いている。

あたしはそれを着たチルちゃんを頭に思い浮かべる。

頭には赤いベレー帽のような可愛い帽子。

わ、なんだか見たことないタイプの服だけどかわいいね。えっと……これならなんとか作れると思うよ



そっか、じゃあ今から作れるかな？

うん！おねえちゃんはずっと頭で思い浮かべててね。体はチルが動かすよ。これも共同作業だよね？えへへ

うんうん、一緒に作るうね。

あたしは詳細な部分までしっかりイメージを固める。

体はチルちゃんにより自動で動いていく。なんとも不思議な気分。

チルね、いつもデザインを考えるのが苦手だったんだ。だから今日はすごく早く作れそうだよ

チルちゃんの言うように、あたしの手はすごい速さで正確に布を切断していく。

型紙とか作らずにいきなり切ってるんだもんなあ。

よし、順調になるようにイメージを続けねば……。

こうして、2時間ほどで服が完成した。

可愛いのが出来たなあ。

出来たの！新作なのにこんな短時間でできるなんて……おねえちゃんすごいんだねえ

いやいや、すごいのはチルちゃんの実力だよ。

あたしは少し手伝っただけ。

さ、次はかばんも作っちゃいたいけど……疲れてるかな？

全然大丈夫だよ！チル集中したら1日中作業してたりするんだ。それに、今はとっても調子がいいんだ。おねえちゃんの中にと力があふれてくるよ

そっかそっか、これはあたしの中にある大量の魔力のおかげなのかな？

麒麟先生はいるかな？

うむ、ユウナの中にある魔力は膨大だ。周りに浮遊している魔力を取り込み、回復もしているようだ。どんどん使うといい

お、麒麟先生から回答が来たぞ。

なんだかあたしつてすごい奴？

では、チルちゃん作業をしようか。

今のが外にいる麒麟様の声なんだね？チルにも聞こえたんだ。かっこいいね

なるほど……やっぱり合体中は麒麟の声が聞こえるんだね。

さて、あたしはかばんというランドセルのイメージを頭に浮かべる。

色はもちろん赤だ。

ふむふむ、これは革なんだね。えーと……牛さんの革……あ、ちょうど赤く染めてあるやつがあるよ

ほう、都合よくちょうどいい素材があるものだね。

うん、虎のお姉ちゃんになんかすぐく面積の小さい革の服を依頼されてね。たくさん余っちゃったんだ

虎のお姉さんか……なんだかかっこよさそうだ。

面積の小さい革の服？

なんだかあぶない大人の世界の予感？  
まあ気にするまい……虎のお姉さんに感謝だ。  
あと金具とかあるけど……これも使えるものあるのかな？

金属の加工は苦手だけど、開け閉めだったら革でも似たようなのは作れるよ。それに糸を操って開け閉めするからなくてもいいしね

なるほど、チルちゃんにお任せで問題なさそうだ。  
では作ってみようー。

がんばるよ！

そんなわけで1時間ほどでランドセルが完成。  
器用だねえ……革の切断とか難しそうなのにさくさくって切ってたよ。

では……さっそく身に着けてもらおうかなー。

「合体解除！」

チルちゃんがあたしから出て、あたしの体は元通りに大きくなる。合体したのに縮むって、いろんな物理法則を無視してるよね。

「にゆう……おねえちゃんの中癖になりそうなの……」

「ふふ、またやろうね。じゃあ着替えようか」

「うん……おねえちゃん手伝ってね」

「任せなさい」

まずは脱がせよう。

ってもチルちゃんが自分で糸を体に巻いているのでほどいてもらう

ただだが……。

ここで下着を作っていないことに気がつくが、これは今度作ってもらおう。

チルちゃんに服を着せてボタンを止めていく。

これはセーラーワンピースと名付けよう。

リボンをまつすぐ結んで完成だ。

頭にはベレー帽。背中にはランドセルを背負わせる。

「どうかなチルちゃん」

「うん！とつても可愛らしいの。このかばんもたくさん糸が入って便利そうなの。ありがとねおねえちゃん」

「いいのいいの。チルちゃんが可愛い方があたしも嬉しいから」

「えへへー……。ねえ、これお友達に見せて気に入ったら同じものを作ってあげていいかな？今度お揃いの服作る約束してたんだ」

「うん、お友達も可愛くしてあげてね」

この服を着たちびっ子たちが並んで歩くところを想像すると……  
楽しくなる。

チルちゃんも嬉しそうだし、またこうやって服を作ってもらいたいな。

そのために、今ある問題を解決していかないかね。

そろそろ夕飯の時間かな。

ミリイやアクアが戻ってきたら、一緒にご飯を食べながら作戦会議だ！

## 14・3人集合

あたしは今部屋で1人待っている。

ミリイやアクアにはテレパシーでお話しして、一緒に夕食をしようとして伝える。

チルちゃんは4人分の食事をお願いしてある。

あたしの部下たち3人の初顔合わせだ。

と言つても……ミリイとアクアはもともとお友達だから、チルちゃんの紹介かな。

仲良くしてくれるといいなあ。

もつとも、みんないい子だから全く心配はしていない。

さて……ミリイとの約束があつたんだ。

パトロール先から召喚して返さずにいることが出来るかどうか。

「ミリイ、召喚！」

あたしから魔力が出て行き、10秒ほどでミリイが現れる。

「帰ってきましたにやー、ただいまにやあ」

「おかえり、ミリイ。偵察はどうだった？」

「うちの担当地域は平和だったにや。でも……皆が動いてるって話を聞いて怖くなったのにや……」

「そっか……お疲れ様。ところでその服は偵察用かな？」

ミリイが来ているのは動物の毛皮？

漫画とかで原始人が着てそうなあれだ。

なんとも野性味あふれるスタイルである。

「にやう。仲良しだった動物を看取った後にもらった毛皮なのにあ」

「そっかあ。じゃあ、このまま送還せずにここにいられるかテストするんだよね？」

「そうですねえ。なんだかユウナ様の魔力が体を覆ってる感じなのにあ。これをユウナ様のところに戻せばいいと思うのですにあ」

「ふむふむ」

なるほど……。てことは送還しなきゃいけないというより、送還できる状態なのかも？

なんかそれっぽく唱えてみるかな……。

「ミリイ、解放！」

「にやう！」

お、成功したっぽい。

ミリイの周りにある魔力があたしの中に戻ってくるようだ。よかった……。あれで失敗してたらすごい恥ずかしかったぞ。

「成功だよ、ミリイ。ありがとね、またあたしの能力が把握できたよ」

「にやう。うちも早く帰れてよかったのですにあ。これがあれば危険な任務にも行けますのにあ」

「うん、でも無理しちゃうだめだよ。気絶したらたぶん召喚できないからね」

「そうですねえ。それも今度うちが寝ている時に試してほしいのにあ」

「わかった。やってみるよ」

「それでは、まだ時間ありそうだから着替えて体拭いてくるにゃあ」  
「ふふっ、いつてらっしやい。ゆっくりでいいからね」  
「にゃいっ」

ミリイを見送り、また部屋で1人になる。

次にアクアがやってきた。

いつも通り台車に乗った水槽に浸かっている。

「ユウナ様、ご機嫌麗しゅう」

「アクア、お疲れ様。海のパトロールはどうだった？」

「平和なものです。このあたりの海に人間達が来ることはまだないですからね」

「来たら平和じゃなくなるのかな？」

「どうでしょうね……美味しいお魚をたくさん食べてもらいたくはありますわね」

「そっか……いつかそうなるといいね」

「はい……」

そうなるためにもがんばるとして……。

そういえば合体をまだ試してないのはアクアだけなんだな。

今度やってみなくちゃね。

「ところでアクアは人間の砦が動いて来てる件を知ってる？」

「少し聞きました。恐ろしいですわね……」

「うん、それであたしがなんとかしようと思ってるんだ。手伝ってくれるかな？」

「もちろんですわ。なんでもお申し付けくださいね」

「よかった。ありがとうね」

「あら、あの花は……」

アクアの視線の先には、花瓶に生けたキキヨウの花があった。そういえば犬っ娘に見せようと思ってそのままだったな。

「ちょっと摘んできたんだけど、弱っちゃってるかな」  
「お任せください」

そう言っただけでアクアがなにかを念じると、アクアの水槽から水が出て花瓶に入っていく。

あの水って海水じゃないのかな？どうなるんだろう。

「なにをしたの？」

「植物に必要な栄養がたっぷり入った水に交換しておきました。これではらくはもちますわ」

「わあ、そんなことできるんだね。ありがとう！」  
「どういたしまして」

おかげで助かった。

犬っ娘とお話してできるのがいつになるかわからないからね。でも水にいろいろできるってことは……。

「アクア、おいしくて栄養たっぷりのお水って作れるのかな？」

「はい、できますわ。少し飲んでみられますか？」

「うん、ちょうだい」

テーブルにあったコップになにか液体が注がれる。

少し白く濁った感じ？見た目はスポーツドリンクなわけだが……。飲んでみよう。

「わあ、これおいしい」

「外出時の栄養補給に必要なものを作るべく試行錯誤したんです。



「コウナ様も遠出なさる時はたくさんご用意いたしますわ」  
「うん！よろしくね」

味はまんまスポーツドリンクだ。

なんだか飲んだ瞬間から力が湧いてくる気がするよ。

アクアは水のない場所へ行く時でもこうやって役立ってくれるんだね。

コンコン。

お、チルちゃんがやってきたかな？

ドアを開けると、3人のちびっこが料理を運んできた。

チルちゃんと……お友達かな？

「おねえちゃん、おまたせ。お友達に手伝ってもらってるんだ」

「そっかそっか、みんなありがとうね」

「いえ……おじゃまします」

「し、しつれいします……」

うーむ、可愛いぞ。

この子たちはテントウ虫とちようちよだるうか？

チルちゃんのお友達は虫系なんだね。

ちっこい体で一生懸命料理を並べている3人。

アクアも優しい微笑みでそれを見守っている。

ああ……なごむなあ。

「よし、準備できた。2人ともほんとにありがとうね」

「あ、終わったんだ。あたしからもお礼を言わせて。どうもありがとうね」

「い、いえ……」

「と、当然のことなのです」

作業を終えたちびっ子たちに話しかける。  
こっちを見て少しおびえているような照れているような感じ？  
かわいい小動物達だ。虫だけだ。

「また今度チルちゃんと一緒に遊びに来てね。お茶でもしよう」

「は、はい……」

「ぜ、ぜひお願いします」

照れながら出ていくちびっ子たち。

いろいろ終えて平和になったら遊びたいな。

と、入れ替わりにメイド服を着たミリィがやってきた。

「お待ちせすにゃ。みんなそろってるのですにゃ」

「うん、これで全員勢ぞろい。さっそく食べようか」

あたしの部下3人が初めて同じところに揃った。

あたしとミリィとチルちゃんが椅子に座り、アクアは水槽の中で  
お水のテーブル？に料理を乗せている。

「じゃあ、ミリィとアクアは知り合いだからいいとして……チルち  
ゃんを紹介します」

「はじめまして、チルです。えっと……服とかをよく作ってますで  
す」

「うちもチルちゃんが作った服を着ることあるにゃよ。にゃかよく  
しようにゃあ」

「さっきの子たちといい、かわいいわ。仲良くしましょうね」

「は、はい……。よろしくなのです」

うん、予想通り仲良くやってくれそうだ。

とりあえず食事をしつつ、のんびりと会話をした。

ミリイは普通に仲良くしてる感じだけど、アクアがチルちゃんを見る目が怪しいかな？

魚って虫を餌に釣るけど……まさかね？

ただ可愛い女の子が好きだけと思っておこう……。

夕食の時間はなごやかに過ぎ……これから本題を話し合おう。

まずはみんなに今の状況を説明しないといけない。

あたしはまずリリアさんのことから話を始めた。

そして助けるために皆を何とかしようということ。

その作戦と、あたしの能力についても話しておいた。

「というわけなんだ。協力してくれるかな？」

「もちろんだにゃ」

「もちろんですわ」

「なんでもするの」

予想はしていたけど、みんなあっさりと答えてくれた。

「ふふっ、みんなありがとうね。それで、皆にいる勇者を何とかするために明日から特訓していこうと思うんだ」

「その勇者の力……重力を操るでしたか？なんだかわたくしの能力と似ている気もしますわ」

「おお、というと？」

「わたくしの水を操る能力ですが、これも重力を無視して自在に操ることが出来ます。わたくしは水だけを自在に操れますが、その勇者はなんでも操れるのかもしれませんが」

「てことはアクアよりずっと強力なのかな？」

「そうですね。ユウナ様を見る限り、その勇者も膨大な魔力を持っているのでしょね。わたくしがあの砦ほどの水を操った場合……

すぐに魔力が切れてしまおうと思います」

ふむふむ。てゆうかアクアも何気にすごそうだけど……。勇者はすごいたくさん魔力があるからいろいろできるわけだね。でもそんなの相手にできるのかな？

「話を聞くとなんか勝てない気がしてきたよ……」

「いえ……これはわたくしの予想なのですが、重力を操る力ともなると……おそらくかなりコントロールの難しい能力だと思います」「強力だけど、難しくて扱いづらい？」

「はい。例えば……止まっている岩の重力を操って持ち上げるのは簡単でも、動いている生き物の重力を操るのは困難なのではないかと」

ふむ……それが本当ならいくらでも対処はできそうだけど……。予想が違ったら怖いよね。

「その予想って当たってると思う？」

「はい。その理由として……わたくしが水をこのように上手く操れるようになるまで何十年の修行をしたのです。勇者の能力が凄まじいとは言っても、まだまだ練習が必要なレベルと予想されます」

「なるほど……それなら可能性高そうだね。でもなんとか確かめる方法がほしいな」

動きの素早いだれかが攻撃を仕掛けて試すしかないのかな。でも困ってなんか嫌だよな？

「ユウナ様。いいこと思いつきましたにや。うちが困になって試せばいいのにや」

「え？でももし捕まっちゃたら……」

「そこはユウナ様を送還してくださいだされば解決ですにや」

ああそうか……あたしには召喚と送還があったよね。  
これってかなり便利な能力かもしれないね。  
これらを使いこなす修行もしなくっちゃ。

「よし、じゃあそれも踏まえて修行していこうか」  
「はいにゃあ」

うーん、一人で考えるよりみんなで考えた方がいろいろ思いつくんだね。

なんだかうまくいくような気がしてきたよ。

「うう……チルはどうしよう……」

あ、チルちゃんが自分だけ意見を出せていないから落ち込んでる？  
子供だから仕方ないんだけどね。  
なにかやってもらうことはないだろうか？

「チルさん、勇者の力を試すのにあるものを作ってほしいのですが」  
「え？何でも作るの！」  
「ん？なに作るのかな？」  
「それは出来上がってからお伝えしますわ。チルさん、あとで詳細を伝えますわね」

うーん、よくわからないけどチルちゃんに仕事を考えてくれたアクアに感謝だ。

アクアって長年生きているみたいだから……かなり頭いいのかもね。

頼りがいあるお姉さんだよ。

そうだ、アクアに川から攻撃が可能か確認しておかないと。

「ねえアクア、川のそばをお城が通った場合に水をかけて戦意を削ぐとかできるのかな？」

「はい、大きめの川なら大丈夫と思います。作戦前に魚や他の生き物を避難させる必要があるので時間がかかりますが」

「うん、お城の予測ルート調べてもらってるから、川が近くにあつたらお願いしたいな。でも準備はアクア1人じゃ無理だね？」

「その際はわたくしの親衛隊も連れて行きますので大丈夫ですわ」「そ、そっか……」

親衛隊とかいるんだね……。アクア美人だものなあ。

姫とか呼ばれてたりするのだろうか？

そんな人気者を部下にしちゃっていいのか？あかし……。

まあ気にするまいか、だってアクアから来たんだもんね。

「さて……第一回会議はこんなところかな？また明日も夕飯一緒にしたいけど予定は大丈夫かな？」

「はいにゃ！こちらはユウナ様の予定に合わせて元々の仕事も調整していいことになってるのにゃあ。だからいつでも大丈夫だにゃ」

「あ、そうなんだ。大丈夫なのかな？」

「はいにゃ！」

うーん、あたしってやつぱり好待遇？

部下になった子たちは自由にできるわけか。

このお城はたくさん魔物がいるみたいだし、この人数なら問題ないのかな。

「じゃあ、アクアとチルちゃんは今から作る服の打ちあわせだよね？あたしはミリィと修行するよ」

「わかりましたわ。ではチルさん行きましょっか」

「はいなの！」

「あ、うちが食事の片づけしてくるにゃ。メイドさんのお仕事らしいのにゃあ」

「ふふっ、よろしくね」

3人が部屋を出て行き、一時的に1人になる。

少し休んでミリィを待つかな。

ユウナ様？ひとつよろしいでしょうか

おや？アクアがテレパシーで話しかけてきたようだ。  
どうしたのかな？

先ほどは言えなかったのですが……人間との争いはわたくし達魔物の心に負担がかかります。わたくしは長年の経験によりそこまではないのですが、ミリィと特にチルさんはまだ若いので負担が大きいのです

そっか……グリモアさんもそんなこと言ってたなあ。

そのせいで人間相手に攻勢に出れないって。

ほんとに優しい子たちだよねえ。

でもどうしようか……。

あの子たちの精神的ケアをする必要があります。そういった力を持った魔物が医療班にいますので、ユウナ様の部下になっていただければ心強いかと思えますわ

なるほど、それは重要だね。

よし、心当たりがあるからあたってみるよ。

アクア、ありがとうね。

いえ、よろしく願いたします。それでは……

うん、またねー。

ふう、やっぱりアクアは頼りになるんだな。

明日あたり、例の羊っ娘に声をかけてみようか。

他にも役立ちそうな子がいたらスカウトする必要もありそうだなぞ。いやあ、いろいろとやることもあるもんだ。

「お待ちせすにゃあ」

「お、来たね。じゃあ外で特訓しようか」

「にゃいー！」

あたしはミリイを連れて外へ出た。

まずは送還が有効な距離を調べるのだ。

召喚についてはこの世界のどこからでも呼べると麒麟に聞いた。

まずは横にいるミリイを召喚だ。

「ミリイ、召喚！」

「にゃうっー！」

あたしの横にいたミリイが一瞬であたしの前に瞬間移動したように見えた。

さつきは呼んでから来るまでに時間かかったのにな。

「なんだか早かったね」

「前もって呼ばれることがわかったらすぐに応答できるみたいにな。さつき呼ばれた時は移動中だったの……身だしなみ整えてたから時間かかったにゃあ」



なるほど、じゃあ呼びだす前にテレパシーで合図をしておけば素早くできそうだな。

「じゃあ次は送還できる距離を試すから遠くに行ってくれるかな？  
見えないくらいがいいかな」

「にゃい！いつてきますにゃあ」

「いつてらっしゃい」

ミリイはやっぱり足が早いなあ。

あつという間に見えなくなつて森の中に入っちゃつたよ。  
数分待つてみた……。

ユウナ様、1キロくらい離れたのにゃあ。体にユウナ様の魔力は残つたままだにゃ

よし、そのくらい離れたら十分だね。

さあ、やってみよう。

「ミリイ、送還！」

にゃーい

「うにゃ？」

おお！あたしの前にミリイが現れた。

てことは送還も距離がかなり長い？もしくはどこでも？

なんとなくだけど、テレパシーで会話が出来れば大丈夫な気がする。

さて次は……召喚から合体までをいかに素早くするかだ。

いつそ同時にできれば楽なのだけど……。  
やってみようかな。

「ミリイ、次は召喚と同時に合体してみるから待ち構えててね」  
「らじやーですにゃ」

びしっとおでこに手をあてて敬礼するミリイ。  
そこで覚えたんだろう？兵士の訓練でも偵察してたのかな？  
よし、やってみようかな……。  
あ、でも一応離れてやったほうがいいかな。  
近くにいと召喚出来てるのかがわかりにくいかも。

「ミリイ、悪いんだけどまた離れてくれるかな？今度はそんな遠く  
なくていいから」  
「はいにゃー」

勢いよく走っていくミリイ。  
元気でいいなあ。  
少し遠くから手を振るミリイに手を振り返して……集中だ。

「ミリイ召喚！神獣合体！」

遠くにいるミリイがつつすらと消えていき……そのままあたしの  
中に入ってくる感覚。  
これは……成功かにゃ？

呼ばれたと思ったならユウナ様の中にいたにゃ！

ふふ、これがやりたかったんだよ。大成功だね。  
ではこのまま……この状態から送還したらどうなるかをやってお

くね。

「ミリイ送還！」

あたしの中からミリイが出て行く感覚とともに……遠くにミリイが現れた。

ちゃんと呼びだした場所に戻れるみたいだね。

ふむふむ……これはなかなか便利かもしれない。

チルちゃんのような戦闘が苦手な子はお城にいらしてもらって呼ぶようにすれば安全だ。

実験は成功なのですかじゃ？

うん、大成功だよ。戻ってきてね。

あと……合体解除してから他の子とすぐ合体できるか試したいけど今は無理だね。

これはあとでチルちゃんのところへ行ってみようかな。

外でしかできないことを今はやろう。

戦闘中に合体や解除を繰り返すと想定して……動きながらやってみよう。

「ただいまですじゃー」

「おかえりミリイ。次は動きながら合体や解除するから、あたしの横を走ってみてくれるかな」

「了解ですじゃー」

あたしはダッシュをする。

その横を楽しそうに併走するミリイ。

あたしも運動苦手な方じゃないけどミリイにはかなわない。

ではこのまま合体してみよう。

「神獣合体！ミリイ！」

「にゃおっ！」

走りながらあたしの中に入ってくるミリイ。

急に体が軽くなりバランスを崩しそうになる。

でもミリイのおかげでバランス感覚もよくなっているので持ち直す。

ミリイとの合体は動きながらも問題なさそうだ。

解除してからが問題かもしれない。

このまま解除してみよう。

「合体解除！」

ミリイが横に現れて走り出す。

あたしは急に体が重くなって……あ、やばい……。

「きゃああー！」

「ユウナ様　！！！」

盛大にすっ転んでしまった……。

いててて……。

ミリイは転ぶことなくバランスをとれたようだ。

「ユウナ様、今治しますのにゃ！痛いところはどこですかにゃあ？」

「うう……いろんなところ……あとはまませたよ……がくっ……」

「ユウナ様ー！死んじやだめですにゃあ！」

痛くてたまらないので寝た振りをしてミリイに任せよう……。

慌ててる感じも可愛いなあ……。

「えと……緊急事態なので失礼しますのじゃあ」

ミリイがあたしの体をまさぐってくる。  
楽しい状況ではあるが、痛みでそれどころではない……。

「にゃう……服は無事ですじゃあ。チルちゃん製は丈夫にゃのです。  
では……これは診察にゃのですよ?」

さすが戦闘にも耐えられると言っていたチルちゃんの服だ。  
そのスカートを思いつきめくられた……。  
もつとゆっくりがいいなあ……緊急事態になにを言ってるのかと  
いう感じだが……。

「見た目に傷はないけど……とりあえず舐めますのじゃあ……ぺろ  
ぺろ」

「あんっ!」

ミリイの舌気持ちいいなあ……。  
なんだか体全体が楽になっていく気がする。  
患部を直接舐めなくても効果があるのかな。  
時間もたつたし、体の感覚もしつかりしてきたぞ。  
たぶんたいした怪我はしてないのかな?  
一番痛いのは腕かもしれない。

「ミリイ、腕をお願いしたいな」

「ユウナ様生き返りましたかじゃ?おまかせじゃ!」

「ふふ、おおげさだよ。そんな簡単に死んだりしないからさ」

「にゃう……人間はうちらと違って体が丈夫でないと聞いたのでと  
ても心配したんだじゃあ……ぺろぺろ」

そっか……わりと本気で心配してくれてたんだね。  
がくつ、と口で言えば冗談だとわかると思ったけど、そんなあた  
しの世界の常識は通用しないか。ちよつと反省。

「ユウナ様？どうですかにゃあ……？」

「うん、だいぶよくなつたよ。さすがミリィ、ありがとね」

「照れるのにゃあ。他に痛いところはあるかにゃ？」

「んー、唇」

「にゃにゃなんと!？」

痛いわけじゃないけど、舐めてほしいというかキスしたくなつち  
やつた。

目を閉じて待つてみる。

「で、ではお邪魔しますのにゃ……」

「んっ!」

唇を舐められる……気持ちいいぞ……。

というか、少し残っていた体の痛みがひいていく？

粘膜接触は治療の効果が高いとかあるのかな？

「にゃうにゃう……」

「もつと……」

「にゅっ……」

ミリィの頭を抱きかかえてキスをするあたし。

ミリィの舌があたしの中に入ってくる。

さつきより気持ちいいし、体がすごく楽になっていく……。

あまりの気持ちよさにそのまま数分間そのままだった。

「ミリイ、すっかりよくなっちゃったよ。今度から怪我の場所が分らない時はこうやって治してね」

「そ、そうにやのですか？これにそんな効果があるとは知らなかったにや。さすがはユウナ様なのにやー」

あたしの不純な動機でもらった行為だが、おかげで新発見できた。

怪我だけでなく疲労も取れそうだ。

あ、合体してあたしがキスしたらあたしも治療する側になれるのかな。

今度やってみようっと。

「じゃあミリイ、修行の続きしようか。次は慎重にするね」

「はいにやあ！」

この後1時間ほどいろんな修業をした。

合体や解除をいろんなパターンで繰り返して練習だ。

そして木の上から落下しながら合体して華麗に着地とかできるようになった。

これで高い所から落ちても安心だ。

修行を終えて、ミリイと手をつないでお城に帰った。

さて……チルちゃん達はどうか？

アクアに行ってもいいか聞いてみよう。

おーい、なにしてるかな？お邪魔してもいい？

はい、一段落してチルさんとお喋りしていましたの。来てくだ

さい

よし、行くっ。

チルちゃんの部屋はこっちだったかなあ。

あ、そうだ。合体して行って驚かせよう。

「ミリイ、チルちゃんのところへ行くよ。合体していこうね」

「はいにゃあー」

よし、合体するぞ……。

声に出そうと思ったけど、心で念じるだけでできないかやってみよう。

これができれば水中でアクアと合体とかできるかもしれない。

というわけで……神獣合体！ミリイ！

「にゃいっ！」

ミリイが元気よく返事をしてあたしに吸い込まれていく。

成功だ。念じればいいだけなんて便利だね。

このままチルちゃんの部屋へ移動だ。

部屋に着き、コンコンつとノックすると待ち構えていたようにドアが開いた。

「おねえちゃん、いらっしや……え？あの……おねえちゃんだよね？」

「うん。ミリイと合体した状態なんだよ。どうかな？」

「なんだか綺麗になってる気がするの……あ、いつも綺麗だけどそれ以上に……」

「そうですわね……なんだか神々しいですわ」

「そ、そうかな。なんか照れちゃうよ」

チルちゃんとアクアの2人に褒められた。



うつとりした顔で見ているのでお世辞ではないだろうな。  
さて、目的を果たそう。

「チルちゃん、今合体と解除の練習してるんだけどね。この状態からチルちゃんと合体できるか試したいんだ。いいかな？」

「うん、いいよ。おねえちゃんと合体気持ちいいもん」

「ふふ、じゃあやってみるから待ち構えてね。そのほうがスムーズに合体できるみたいなんだ」

「わかったの」

ではやってみようかな。

合体解除は考えずにそのまま合体してみるぞ。

「神獣合体！チルちゃん！」

「うん！」

チルちゃんがあたしの中に入ってきて……押し出されるようにミ  
リイが出て行く。

これは成功というか……とつても簡単？

「にやうう……チルちゃんに追い出されちゃったにやあ」

「ごめんねミリイ、でも実験は成功だよ」

「よかったにやー」

「では……合体解除！」

あたしからチルちゃんが出てきて、元通り。

「気持ちよかったの……」

「チルちゃんもユウナ様の中好きなんだにやあ」

「うん、一緒だね！」

「なんだか楽しそうですね。わたくしもしてみたいですが……」  
「アクアはまた今度やってみようね。今度プールに行くからさ」  
「はい。よろしく願いますわ」

このあとは4人でのんびりと談笑して過ごした。

今日はいろいろあったけど……なントかなりそうながしてきたぞ。

だってあたしにはこんなに可愛いモン娘たちがいるんだもんね。まだまだ増えるだろうけど……みんなを大切にしていこう。

やがて寝る時間となり、それぞれの部屋へ戻って寝た。

だれかと一緒に寝たかったけど……そういう楽しみは後に取っておこう。

しっかり寝て明日も頑張るんだ。

じゃあみんな、おやすみ……。

そっだ……かわいいモン娘たちと……麒麟も忘れてないからね。

## 15・お魚の気持ち

リリアさんを助けると決意した次の日になった。

あたしは朝食を済ませてグリモアさんの部屋へ来ていた。

ミリイとアクアは偵察任務。チルちゃんも服作りをしているらしい。

皆移動の予測ルートはわかったのかな？

「ユウナ様、皆なのですが川沿いに移動をしているようです。おそらく水を確保するためと思われれます」

「なるほど、それは都合がいいかも。川の水で先制攻撃できれば有利になると思うから」

「川の水ですか。詳しくお聞かせ願えますか？」

あたしは昨日みんなで話したことをグリモアさんにも伝えた。

作戦が有効かどうか確認してもらおうのにちょうどいいね。

「なるほど……彼女の力でしたら問題はないでしょう。それについては彼女と親衛隊に任せるとします」

「アクアのことを知っているの？」

「彼女は私と同じく古参の魔物ですので」

「そっかあ」

うーん、年齢聞きたいけど失礼だよな？

何十年とか下手したら何百年も生きてそつだもん。

「それを考えますと……襲撃に都合のいいタイミングは3日後が良いと思われれます。時間はまた前後するかもしれませんが、その都

度お伝えいたします」

「3日後かあ、じゃあそれにあわせて準備するね」

「よろしくお願いいたします」

3日で準備をして、あたしの力を見せつけて勇者を倒しつつ皆を壊す。

人間と戦わせると精神への負担が大きすぎるからなるべく少人数でだ。アクアの親衛隊は戦いじゃなく魚を避難をさせる要因だから大丈夫だろう。

森の動物達も巻き込まれないように偵察部隊が避難させるのかもしないな。

みんなの精神ケアの方法も相談しなくっちゃ。

「あとね……また部下を増やそうと思うんだけど……」

あたしは皆のケアのために羊っ娘を部下にしたいと伝えた。

直にスカウトしようと思ったけど、他の皆にもチャンスをあげてほしいとのことで前回のような面接形式で募集することになった。

羊っ娘と……あと犬っ娘に来てほしいので確認してからにしようかと思ったのだが、グリモアさんは2人の予定も把握していて2人とも大丈夫みたいだった。

今回は募集文に人間と戦う可能性もあると書き足してもらった。

来る人数は減りそうだけど、重要なことだから仕方ない。

2人とも来てくれるといいなあ。

羊っ娘は以前来ると言ってくれたけど犬っ娘はどうなんだろう？  
今回来なかったらお話だけに呼べばいいか。

話がまとまったので部屋に戻ることにした。

さて、昼までどうしようかな。

アクアが大丈夫だったら合体を試しておきたいんだけど……。

呼んでみようかな。おーい、アクアー。

お呼びですか？ユウナ様

うん、今なにしてるのかな？

時間が出来たら特訓に付きあつてほしいんだけど。

今は川を泳いでいますわ。砦を見てみようかと思ひまして。時間なら大丈夫です。プールで召喚していただけますか

わかった、じゃあ移動したらまたメールするね。

メールとは何でしょう？

ごめん間違えた……。テレパシーで連絡するね。

あ、移動の前に水着に着替えるから時間かかるかも。

はい、その間にわたくしも準備しておきますわ

うーむ……。なんだか癖でメールと言ってしまったぞ。

なんだか元の世界のことを思い出すと切なくなってきたやうなあ……。

あとで羊っ娘に癒してもらえるといいな……。

では水着に着替えて……。プールへ移動しようか。

勝手に入っていいのかなと思つたけど大丈夫みたいだ。

時々魚人に敬礼されてなんだかびっくり……。

あれがアクアの親衛隊なのかな？みんな美形だよ。

さあ、プールの前に着たぞ。

準備はいいかな？

はい、大丈夫ですわ

というわけで、召喚しよう。

周りにたくさん魚人さんがいて声を出すのは恥ずかしいので心の中……。

召喚！アクア！

あたしの体から魔力が出て行き、アクアを形作る。

ちゃんと水の中へ召喚出来たようだ。

「これが召喚ですか。この距離を一瞬で移動できるなんてすごいですわね」

「うん、遠出した時とか呼んで戻してあげられるよ」

「では、今度余裕が出来た時に遠泳に挑戦してみたいですわね」

「ふふっ、楽しそうだね。じゃあさっそく合体してみるよ」

「はい。どきどきしますわ……」

それではやってみようかな。

神獣合体！アクア！

「はい……」

アクアがあたしの中に入ってくる……やはり気持ちいいなあ。

あたしの体に少し青い鱗がつき、ひれや水かきのようなものが出来ている？

でも足はちゃんとあるなあ。

アクア、気分はどうかな？

これはたしかに気持ちいいですわ……。それに、足で立ってい

る感触が新鮮ですわ

そうだよ、普段は尾ひれだから歩いてことないんだもんね。  
この体はアクアも動かせるんだよ。  
ちよつと貸してあげるから歩いてみて。

は、はい……緊張しますわ……

あたしの足がおそるおそる動いていく。  
アクアにとつては人生初の歩行なわけか。  
なんだか生まれたての小鹿みたいな動きだ。  
倒れないようにあたしも少し手伝おうかな。

みなさんは普段こうして移動しているのですね。水の中以外を  
動けるってすごいですわ。ユウナ様、ありがとうございます

ふふっ、楽しそうで何よりだよ。

合体していれば水の中になくても大丈夫なわけだね。

これなら浸かれるほどの水のない場所でも、召喚しつつ合体すれば安全だね。

それでは水に入ってみようか。

アクア、水まで歩いてね。

はい……この状態で水にはいるとどうなるかも楽しみですわ

あたしの足がゆっくりとプールに向かって歩いていく。  
プールの前で……そうだ、ジャンプして飛び込もう。  
行くよー！

ザッバーン！

水しぶきをあげて水に入っていく。  
おお！？息が出来るぞ。えら呼吸をしているのかな？  
首のあたりがひくひく動いている感覚があるぞ。  
これは新鮮すぎる。

ユウナ様？足がなくなりましたわ

おや？たしかに足ではなくアクアと同じ人魚の尾ひれになってい  
る。

水中と陸上で切り替わるのかな？

便利な体だねえ。

じゃあアクア、泳ぎ方教えてよ。

はい、このように尾ひれを動かします

ふむふむ……尾ひれをこうして腕をこう動かすと……。

わあ、速いなあ。

腕にひれもあるし、手には水かきもあるからすごく泳ぎやすい。

じゃああたしにもやらせてね。

はい……水の中をお楽しみください

えっと……尾ひれをこう動かしてと……おお、ちゃんと動くぞ。

お尻と足を同時に動かしているような変な感じだなあ。

アクアほどじゃないけど、人間よりはるかに速く泳げるっばいぞ。

水の中での呼吸も当たり前のようにできてるしこれは楽しいかも  
……。

じゃあさ、一緒に意識を合わせて泳ごう。

アクアと協力したらもっと速く泳げるはずなんだ。



わかりましたわ。共同作業ですね

そうそう、初めての共同作業だよ。

おお！体がさつきよりだいぶ早く動かせるぞ……。それに伴って泳ぐ速度も上がる。

うーん……。気持ちいい！

勢いよく泳ぎ、プールを抜けて海までやってきた。

わたくしも気持ちいいですわ。どんな海の生き物よりも早く泳いでいます。ユウナ様はやはりすごいんですね

えへへー、それほどでも……。あるんだよね。

でも、アクアがもともと速く泳げるからできてるんだよ。アクアの泳ぎもすごいってことなんだ。

照れますわ。わたくし泳ぎには自信がありますの

やっぱりそうなんだね。

綺麗に泳げて速いって芸術的だよ。

さて、それでは水上に出て……。水を操ってみようか。どうしたらいいの？

頭の中で水を動かすイメージを持ってください。そのイメージ通りに動いてくれるはずですよ

なるほど……。魔法のように呪文がいるわけでもないんだね。

たしかにアクアは思うがままに操ってたもんね。

では……。水を浮かせてみよう……。

水に念じてボールのような形で持ち上げるイメージを……。

パシャーン！

一瞬丸い形の水が水上に出て浮かぶが、すぐにはじけ飛んでしま  
う。

水を手でつかもうとしたらつかめなかったようなそんな感覚。

むづ……アクアの言うように難しすぎるかも……。

何十年も修行がいるわけだよ。

ユウナ様、水を空气中に浮かせるのはとても難しいのです。ま  
ずは水中でされることをおすすめいたしますわ

なるほど……そのほうが簡単そうだね。

水中に潜って、もう一度やってみる。

透明で見えにくいけど……丸い形が水中でふわふわと動く。

これならなんとかできそうだ。

そのようにして水の流れを動かしながら泳ぐともっと速く泳げ  
ますよ

なるほど……泳ぎながら進行方向に水を動かすようイメージして  
みる。

たしかに速くなったね。楽しいぞ。

しばらくそうやって泳いでみた。

ふう、なんか満足。

でも、水を操るのはアクアに任せる方がよさそうだね。

難しすぎていざという時には使えないや。

そうですね、お任せください。それにこの状態ならば……ユ  
ウナ様の中にある膨大な魔力を借りることで大量の水を操るのも容  
易かもしれませぬわ。やってみてよろしいですか？

ほうほう、なんだかすごそうだね。  
ぜひやってみて。

それでは……水上に出ただけですか

どんなことが起きるのか、あたしはわくわくしながら水上に出る。  
アクアが集中している感じが伝わってくるぞ。

あたりの水を眺めるが、特に変化は感じられない……。

アクアが力を出している感じはあるんだけど、なんなんだろう？  
なにかしてるの？

うふふ……お気づきになれませんか？ゆっくりと動いている  
のですよ

そうは言われても……付近の水は波一つなく穏やかで……。

あれ？さっきまで波が立ってたよね……。

波をなくした？いや違うか……そんな地味なことじゃないはず。

アクアー、わかんないよー！

それでしたら、少しだけ潜ってみてくださいな。ゆっくりとです  
よ

アクアの言うように、水の底に向けてゆっくりと潜ってみると…  
…。

「ひゃあああ！？なにこれ??」

少し潜ると水から顔が出た。さらに下に水面が見えている。

つまり……あたしは水ごと空に浮いている？

しかも結構な広範囲の水が浮いている……。  
アクアってばすごい……。

すごいのはユウナ様の魔力ですよ。わたくしだけだとこの量の水を一気に持ち上げて投げることはできませんが、こんなにもゆっくりと……しかも長時間の維持などできません

いやいや、あたしの魔力を使っているとはいえ……それでもすごいことだと思っよ。

ほんと頼もしいなあ……。

頼りにしてるね、アクア。

はい！おまかせください

アクアとの合体でもいろいろできるとわかったし、そろそろ帰ろうかな。

また今度時間が出来たら泳ぎにこようね。

はい……楽しみですわ

そんなわけでまた2人で協力して泳ぎ、一気に城の地下プールまで帰ってきた。

そろそろお昼かなあ……。

アクアはどうしようか、送還してさっきいたところに戻る？

いえ……ちょうどお昼の時間ですので、ご一緒させていただいてよろしいでしょうか？

うん、いいよ。一緒に食べようか。

とりあえずプールから出て合体解除つと……。

あたしは陸のまま、あたしから出たアクアはプールへ落ちる。

「それでは昼食を用意しますのでお部屋でお待ち下さいね」  
「うん、よろしくね」

あたしはプールの出口へと向かった。

あ、そういえばアクアの水槽が近くに無いけどどうするのか？  
後ろを振り返ると水槽を運んでくる魚人の姿があった。  
なるほど……親衛隊がいるから何も問題はないんだね。  
安心して部屋へ戻った。

アクアを待つ間、部屋に飾ったキキョウの花を眺める。

こつちの世界で初めて見て……死んじゃった犬型の魔物が死に際  
に持っていた花。

このお城にいる犬っ娘はその時死んだ子にそっくり。  
だから早く犬っ娘とお話したいんだけどなあ……チャンスがなか  
なか来ない。

今日の面接に来てくれるのかなあ……。

ベッドでゴロゴロしているとアクアが昼食を持ってやってきた。

今日も新鮮そうなお魚が焼かれているようで香ばしい香りが漂っ  
てくる。

「ユウナ様、お待たせしました。このお魚なんです……ユウナ様  
の泳いでいる姿に魅せられたらしく、ぜひ食べてほしいとついて来  
ていました。ぜひ食べてやってくださいな」

「あはは……そんなこと言うお魚さんがいるんだね」

「はい。この世界の魚たちは強き魂を持つ相手に食べられることで、  
より大きな魚に生まれ変わることが出来ると言われています。身  
を鍛えておいしくなり、食べていただける相手を常に探しているの

です」

「なるほど……じゃあぜひこの子は大きな魚に生まれ変わってほしいね」

「はい」

笑顔で返事をするアクア。

この世界の生き物ってみんなお互いを支え合う形で生きているよね。

そうじゃないのは人間だけなのかな？

なんだか同じ人間として恥ずかしいかも……。

アクアやみんなに慕われるような立派な人間になりたいな。

とりあえず昼食だ。

「ユウナ様、また部下を募集されているそうですね」

「うん、仲間はたくさんいた方がいいからね。アクアのアドバイス通りに精神ケアが出来る子を仲間にするね」

「それがよろしいですわ。そのお方がユウナ様と合体することで効果も倍増するでしょうし……わたくしも楽しみですわ」

少し頬を赤らめて言うアクア。

たしかに合体してケアすれば魔法の効果も上がるし、あたしがするだけでこの子たちは喜ぶんだらうな。

「あとは戦い向きの子がほしいかな。ほんとには戦いなんてさせたくないけど……みんなを守らなきゃいけないからね」

「そうですね……戦いを避けるためには戦いが必要です。ユウナ様を信頼しておりますので、すべてをお任せしますね」

「うん……でもさ、なんで会って間もないあたしのことをそんな信頼できるのかな？あたしってそんな立派じゃないよね……」

「そんなことはありませんわ。以前ヴェリア様の予言については話

しましたよね？」

「うん……この世界を変える勇者が現れるって話だよね」

「ユウナ様とお話して、まだ2日しかたっていないませんが……その勇者はユウナ様のことだと確信しております」

「うーん……」

アクアって思い込みの激しいところありそうだからなあ……。

以前これを言われた時もプレッシャー感じちゃったし、少し重かな……。

「ユウナ様……少し期待しすぎて困らせてしまいましたね。では……少し恥ずかしいのですが言い代えさせてください。わたくしはこの2日間であなた様にすっかり惚れてしまいました。ですので……勇者かどうかは実は関係ないのです。ユウナ様……好きでいてもよろしいでしょうか……」

「そ、そっか……それなら嬉しいから問題ないよ……ただ……」

「あ、ご安心ください。わたくしはユウナ様を独り占めしようなどとは微塵も思っていないです。ユウナ様は皆のご主人様なのですから」

「うん……好きになってくれてうれしいよ。あたしが好きな子はたくさんいるし、これからも増えると思うけど……アクアのこと大好きだからね」

「はい……それだけで満足ですわ」

心底うれしそうな表情を見せるアクア。

もてるのがつらいって誰かが言ってたけどこういうことなのかな。でも嬉しいや。

がんばるぞー。

こうしてアクアと2人で楽しく昼食を食べ終えた。

「それではユウナ様、元気もいただきましたので行ってまいります

ね。送っていただけですか」

「うん。でもその前にさ……目を閉じてくれるかな？」

「はい……」

なんかさっきのアクアの想いを聞いていたら無性にキスしたくな  
ってしまった。

だからしていいよね？

がんばってくれるアクアへのご褒美も込めてさ……。

「いつてらっしゃいのキスだよ。がんばってきてね」

「はい……」

あたしはアクアにキスをする。

少し冷たく……お魚の味がした。

こう言うとムード台無しと思うけど……あたしに食べてほしくて  
身を差し出してきたお魚の味なんだ。

キスをしながらアクアを送還する。

また夜にね……いつてらっしゃい……。

キスをしながら相手が消えるのって映画とかのラストシーンであ  
ったりするよね。

なんだか自分に酔っちゃうあたし。

いつてまいります。世界で一番素敵な送り出し方ですわ

アクアも同じように思ってくれているようだ。

送り出した余韻に浸るあたし……。

数分後……アクアの水槽が部屋に置きっぱなしと気が付いた……。  
とりあえず部屋の隅に運んでおこう……。

でも、これ置いておけば召喚する時に便利かも。



さて……そろそろ時間だし面接会場に行こうかな。  
今日はだれが来てるかなあ……。

前回よりは少ないと思うんだけどね。

今日はグリモアさんが忙しいらしく、気に入った相手を見つけたらその場で声をかけて面接時間を決めていいとのことだ。

なんていうか……選ばれなかった子に申し訳なくなっちゃう方法  
だけど仕方がない。

広間に入ると、予想通り少なめで十数人ほどであった。  
部屋にいた全員が緊張した顔であたしを見つめている。

皆を見やすいようにか、間隔をあけて並んで立っけてくれているよ  
うだ。

みんなとっても可愛いのに選ばなければならぬ悲しさ。  
さて……羊っ娘と犬っ娘はいるのかな？

すぐに羊っ娘を見つけて近寄る。

「よかった、来てくれたんだね。あなたとまたお話したかったんだ」  
「今日は空いている時間でしたので来る事が出来ました」

「じゃああなたが面接1番ね。これが終わったら来てくれるかな？」  
「はい！ありがとうございます」

羊っ娘は顔を紅潮させて笑顔を返してくれる。

この光景をうらやましそうに見ている周りのみんなの視線が少し  
痛い。

ねたむような顔をしている子がいないのは、みんないい子だから  
なんだろうな。

よし、人数も少ないし全員と一言は会話をしておこう。  
あたしは順番に見て行くことにした。

犬っ娘は来てないんだな……少し悲しいけど仕方がないか。

今日来ていたのは羊っ娘を覗いて13人。

鳥っ娘……空を飛んでみたいな……。

狐っ娘、狸っ娘……なんだか変身したりできるそうなの……。

タコっ娘……触手プレイ可能？

雪女……？ヴェリア様に似ているような気がする。

木っ娘……？なんだか学芸会の仮装のような木だ……。

ドラゴンっ娘……？なんだか最強感を醸し出している。

妖精……？なんだかメルヘンチック。

虎っ娘……チルちゃんが革製の妖しい衣装を作った子だろうか……。

……。なんだか調教されそうな感じが……。

リスっ娘3姉妹。可愛すぎるけど……多いよ……。

あとなにかわからない子……麒麟を小さくしたような……。聞いて

たら自分でもなにかわからないそうなの……。

あたしは悩んだ末に鳥っ娘を選んでみた。

理由はもちろん空を飛びたいからだ。

物理的に飛べそうにないとは思っていたけど、魔力で飛ぶそうなの……。

ドラゴンも飛べそうだけど……姿に威圧感があつてちょっと怖い……。

とりあえず今日はこの2人だ。

面接終了。選ばれなかった子はごめんなさい……。

全員にまだチャンスはあるからまた来てねと伝えて部屋を去った。

さて、部屋に戻って面接開始だな。

戻ろうとしてるところで偶然犬っ娘に出会った。

「あ、ユウナ様。こんなところで会えるなんて嬉しいです」

「こんにちは。ちょうどよかったですよ、あなたとお話したかったです」

面接に来てくれるかなと思っただけど……」

「申し訳ありません……。行きたかったのですが……。病み上がりのため戦いには向いてなくて遠慮したんです」

「そっか……。謝らなくていいんだよ、ごめんね。それであの……。今から2人面接するんだけど、その後で部屋に来てくれないかな。お話ししたいんだ」

「わたしとですか……?」

「うん、嫌ならいいんだけど……」

「嫌なわけではないです!むしろ嬉しくてその……。それでは行かせていただきます」

あたしはだいたいの時間を伝えておいた。

よかった。これでやっと犬っ娘とお話できるよ。

ずっと気になりっぱなしだったからね。

では部屋に戻って羊っ娘を待とう。

何気にこのお城に来てから一番お世話になってる子なんだ。

あたしの部下になってくれたらいいな……。

16・あたしの可愛いモン娘 羊娘

コンコン。

羊っ娘が来たようだ。

あたしはドアを開けて迎え入れようとする。

ドアの前でエプロンドレス姿の羊っ娘がスカートのすそを持ち上げてお辞儀していた。

かわいいなあもう……。

「本日はお招きいただきありがとうございます。ユウナ様」

「ようこそ、入って入ってー」

「失礼いたします」

とりあえず椅子に座ってもらって、あたしも正面に座る。

あらためて姿を確認してみよう。

羊のようなくるぐるした角。

羊のようなもこもこの髪。

あの髪って羊毛になるのかな？

だとしたらチルちゃんか糸にして服にも使ったりできる？

さて……見つめっぱなしも悪いし面接だ。

まずはこれまでのお礼からかな。

「あなたのおかげであたしもリリアさんもすごく助かってるんだ。ほんとありがとうね」

「いえ……それがわたしの役目ですから」

「そっか……それでね、あなたにはあたしと他のみんなの心のケアをお願いしたいんだ。これから人間との戦いになると……みんなの

心に負担がかかりそうで  
「はい、お任せください」

いつも通りの笑顔で答えてくれる羊っ娘。  
あたしは悩む必要もなくこの子を採用だ。  
名前どうしようかなー。

あ、その前にいろいろ聞かなきゃいけないんだった。

「ありがと。じゃあ一応いろいろ教えてね。あなたの特技は……夢  
で心を落ち着かせることなんだよね？ 他にも何かあるのかな？」  
「そうですね。でも実のところそれは特技というより……ただでき  
るだけなんです。本当の特技は……悪夢を見せることなんです」  
「え……？」

悪夢を見せる？

相変わらずの笑顔で悪夢と言われても戸惑ってしまう。  
優しそうなこの子にそんな能力が？  
全く不要な能力だよね？

「どうかされましたか？ユウナ様」  
「あ……ごめん。少し驚いたんだ……。でも悪夢を見せる能力って  
使う機会ないよね？」

「そんなことはありません。とても役に立つんですよ」  
「えっと……？だれにどう使うのか聞いてもいい？」

「そうですね……ユウナ様にはお話しておいたほうがいいでしょう。  
あれは700年前のことです……」

「えと……ちょっと待って……」  
「はい……」

なんだって？

「この子700歳以上生きてるの？  
驚きの連続に戸惑ってしまう……。  
少し深呼吸してと……。」

「ごめんね……。じゃあ続けて」

「はい。700年前も今と同じようにわたし達魔物は人間に嫌われていました。ただ、魔物は人間を襲わないということを人間達は気付いていたんです」

むむ？

昔は今より平和だったのかな？

なんで今はこんなことになったんだらうか。

「そして魔物が脅威でないとわかると……次第に人間達は魔物のことを気にしなくなってしまうました。やがて……人間達の間で争いが始まってしまったんです。」

「戦争……。人同士で？」

「はい……。それを見たプロメイティア様は悲しみにくれてしまいました。おそらくはアルティアナ様も悲しんでいたはずです」

ん？

話の途中で口をはさむのは悪いけどひとつ確認しておきたい。

「あなたはプロメイティア様に会ったことあるの？」

「はい……。今はお隠れになっていますが、昔はよく現れていたんです」

ふーむ……。

なんで隠れたんだらうか。

アルティアナに振られたショック？

「この子なら知ってそうだけど……それはまた後だ。」

「あ、脱線させてごめんね。話を続けて」

「はい。それでわたしはプロメイティア様に相談して能力をいただきました。悪夢を見せる能力です。それを使って人間達に悪夢を見せました」

「どんな……悪夢？」

「魔物たちは恐ろしい存在で……放っておけば人間達を滅ぼしに来る……そんな悪夢です。その結果人間達の戦争は終わりました。人々は団結して魔物の脅威に立ち向かうようになったのです」

「それが……今もずっと続けているのかな？」

「そうです。わたしの悪夢は、魔物への恐怖を魂に刻み込みました。それは子孫にも影響し、人間達は理由もわからないまま魔物への恐怖心を抱いているはずです」

人間達が魔物を異様に恐れている理由が判明した。

人間の戦争を止めるためにこの子は魔物を犠牲にした……。

悪夢が役に立ってこういうことだったのか。

なんてなんて優しい悪夢……。

うっ……泣いちゃいそうだよ……。

でも羊っ娘は相変わらずの笑顔だ。

この子はきつと……自分のしたことに後悔なんてないんだろう。

「それって……魔物はみんな知ってるのかな？」

「このお城ではヴェリア様とグリモアさんくらいでしょうか」

「そっか……さすがにみんなには言えないよね」

「そうですね……悲しむ方もいると思います。でも……きつとみんな戦争を止めたことを喜んでくれるはずですよ」

「うん……」

きつとそうだね……。

このお城の子たちはみんな人間大好きで……優しいもんね。  
あたしはこらえきれずに泣いてしまっていた。

「ユウナ様！大丈夫ですか？少し重い話でしたよね……今……ケア  
します」

「しちゃだめ……」

「え……？」

「あなたは笑っているけど……きつとつらかったはずだよ。だから  
あたしもこの悲しみを心にとどめておきたいの……。共有していた  
いんだ……」

「ユウナ様……」

「でも……ちょっとだけお願いしていいかな？抱きしめてほしいん  
だ」

「はい……ユウナ様」

羊っ娘の腕があたしを優しく抱きしめる。

羊のもふもふを感じるかなと思っただけど……人間に抱かれるのと  
変わらないかな。

でも……気持ちいいな。

服の上からはわからなかったけど、羊っ娘のおっぱいは大きい……  
…。

あたしは顔でその感触を楽しんだ。

しばらくして……ちょっとだけ落ち着いた。

そう言えばこの子は人間であるあたしを抱きしめてもいつも通り  
だな。

他の子たちは触るだけですごい反応を示したのにね。

長生きしてるから、他の子よりだいぶ大人なのかな？

「ありがとね……落ち着いたよ」



「はい、よかったです。あの……わたしの能力を使わなくても癒せたのは初めてです……。不思議ですね」

「不思議じゃないよ。あたしだって何の能力もないけど……こうやって抱きしめて喜んでもらうことできるしさ」

「あ……」

あたしは逆に羊っ娘の頭を抱き寄せてみた。

さっきまでと変わって慌てたようになる羊っ娘。

うふふっ、やっぱり他の子と同じだ。

なんだか愛おしくなって……頭をなでたくなった。

なにか褒めてみようっと。

「人間の戦争を止めたあなたってすごいんだね。がんばったね。えらいえらい……」

「あ……」

あたしの何十倍も生きている羊っ娘を子供のようになでてみた。

頭のもこもこ……気持ちいいなあ。

って羊っ娘がなんか震えてる？

「うっつ……ユウナ様あー」

「え？」

羊っ娘が急に泣き出してしまった。

どうしたんだろう？

「えっと……あたし変なこと言ったかな？」

「いえ……今まで戦争を止めたのは当たり前のことだと思っていたんです……。わたしの使命だって……。でもユウナ様に褒めていただいて……。なんだか急に嬉しくなって……。わたしは……褒めても

らせることをしたんでしょうか？」

「うん、そうだよ。あなたはがんばったんだから……あたしが褒めてあげるよ」

「はい……嬉しいです……。わたし……本当は怖かったんです……。人間達に自ら嫌われるようなことをするの……。だからこそ褒めていただいて嬉しくて……」

「やっぱりそうだよね。つらい時は我慢せずあたしに言ってね。こうやって抱きしめるしかできないけどさ……」

「はい……それだけで十分です」

なんだか本心を打ち明けられた気がして嬉しいな。

この子がみんなの心を癒して……あたしがこの子の心を癒すんだ。まず最初の一步はもちろん名前だ。

「じゃあ……あなたの名前を考えようね」

「名前……ありがとうございます。あ……そう言えば戦争を止めてひとつだけいいことがあったのを思い出しました」

「どんなこと？」

「わたしの悪夢を見た人間達にこう呼ばれたのです。『ナイトメア』と……。意味はわかりませんが、きっと悪い意味なのでしょうね。

でも……名前をもらえたようで嬉しかった……」

ナイトメアってまんま悪夢の化身って感じだね。

でも羊っ娘はとても嬉しそうだ。

じゃあ……こうしてみようかな。

「あなたにとって素敵な思い出なら……そこから名前を取ろうか」

「どういった名前でしょう？」

「メア……。あなたの名前はメアだよ」

「では……多くの人間とユウナ様……たくさんの方がつけてくれた

名前となりますね……。嬉しいです……。ユウナ様

「気に入ってくれたならよかったよ。メア」

「はい……」

「メア……」

「はい……」

お互いに見つめ合っていていいムード……。

これは……いいのかな？

「メア……目を閉じてね」

「はい……」

メアの頭にはあたしの手を絡めたまま……。

そのままあたしの方に近づけて……キスをした。

声は出さないものの、メアの体がびくと震える。

でも嫌がってはいないはずだ。

だってあたしの体につかまってるメアの手が強くあたしを抱きしめている。

キスを終えて唇を離すと、メアはまたあたしの胸に顔を押しつけてきた。

真っ赤になつた顔が可愛いな。

「メアは甘えん坊だね」

「はい……わたしは古参の魔物です。甘える相手が今までいなくて……ユウナ様に甘えてもいいでしょうか？」

「もちろんだよ、いつでもおいで。メアが甘えん坊ってことは……あたしとメアだけの秘密だね」

「はい……2人っきりの時はこうさせてくださいね……」

「じゃあお話の続きはベッドの上でしようね」

「はい……」

あたしの胸から離れようとしなないメアをひきずるようにベッドまで移動した。

今からいいことが……残念ながらはじまらない。

まだまだ聞いておくことがあるんだ。

ベッドに抱き合つたまま寝転がって会話を再開する。

「ところで魔物の人間に対する恐怖って取り除けないの？」

「魂に強く根付いてますが……時間をかければ取り除くことも可能です」

「そっか……それなら人間と魔物が仲良くなることもまだ可能なんだね」

「そうですね……」

時間はかかるか……。

でも取り除けるならよかったよ。

だめだったらあたしの望む平和な世界なんて無理なんだから。

そういえば……魔物という共通の敵がいたから人間の間では平和になったということは……。

人間と魔物に共通の敵がいたら仲良くなれる？

でもそんなのいないしなあ……。

あたしが麒麟と一緒の世界の敵になればあるいは……。

つてさすがに無理か。

そもそもそんな方法とつたらみんなを悲しませちゃう。

他になにか考えよう。

「そうだ。ねえメア、あなたの能力で人間が魔物を好きになるようにはできないの？」

「怖がらせるのに比べると……かなり難しいですね。少人数なら可能ですが……その人間が迫害されてしまいます」

「そっか……でもいい方法があるよ。あたしの能力『神獣合体』を使うとあなたの能力が格段に上がるんだよ。あたしの魔力たくさんあるらしいからさ」

「ユウナ様の無限ともいえる魔力……たしかにそれなら可能かもしれないですね。でも……やはりだめですよ」

「どうして？」

「アルティアナ様が悲しまれます。愛する人間と……嫌いな魔物が仲良くするなどあつてはならないのです……」

えっと……それを言われてしまうとあたしが目指す平和な世界は実現不可能だ。

あとはアルティアナに魔物を好きになってもらうしかないけど……

……きつと無理。

むっ……詰んでない？

「アルティアナ様は……あなたたち魔物にとってどんな存在なのかな？」

「私達を創ってくださったプロメイティア様の……愛する女神様です」

「だからあなた達もアルティア様のことが好きなの？」

「そうなりますね」

やっぱり詰んでるか……。

それにしても、自分を嫌う相手を好きになれるってすごいな……。健気な子たちだよ……。

なんとかしたいけど……今はまだ方法が思いつかないな。とりあえず……健気なこの子を抱きしめようっと。

「あんっ……ユウナ様？」

「あたしのことも好きになってほしいな」

「えっと……もう……好きです……よ」  
「そっか……嬉しいな」

真っ赤な顔でそう言うメアが愛おしい……。  
あたしはおでこをメアのおでこにくつつけて目を見つめる。

「あたしも……メアのこと好きだよ。両想いだね……」  
「はい……嬉しいです……」

そう言っただけ涙を流すメア。

案外泣き虫なんだね。

よしよし、頭のもこもこをなでなで……。  
ついでにいたずら心が出て……お尻もなでなで……。

「ひゃっ！ユウナ様……あの……」  
「メアのお尻ぷにぷにだね。触られるの嫌かな？」  
「いえ……ユウナ様ならどこを触られても構いません……。あんっ  
……」

「ふふっ、メアってば可愛い声出すんだね」  
「うっ……だって生まれて初めて触られたんですよ……」

何百年も生きてるのに初めてか……。  
不思議な感じだけど、なんか嬉しいな。

「じゃあこれから……いろんな初めてをもらっちゃうね」  
「はい……ふつつかものですが……」

そう言っただけメアは目を閉じた。

あれ？今言っただけからを今すぐって意味でとられた？  
あたしは今後じわじわのつもりで言っただけだな……。

えっと……どうしたらいいんだろう？  
と、とりあえずキスしながら考えよう。

「んん……」

あたしの唇で塞いだメア唇から甘い声が漏れて……あたしは少し興奮する。

もっと声聞きたいな……。  
舌いれちゃおうかな。

「んんっ……！？」

少し驚いたような声。

あたしは舌でメアの舌を探し求める。  
それに気づいてくれたのか、メアの舌がおそろおそろあたしの舌に触れてきた。

「んっ……」

今度はあたしが声を出してしまった……。  
舌同士が触れ合うと……なんだか体に電流が走ったような気分だ。  
キスってすごいんだなあ。

少し放心していると……今度はメアの舌があたしの舌を押し返してきて、あたしの口にメアの舌が侵入して……。  
なんだか立場が逆転しちゃった。  
でも……メアの方が年上なんだしリードしてもらおう。

「んんっ……んー……」

あたしって割と色っぽい声が出せるんだなあと感心する。

しばらくメアの思うがままにされて……なんだか眠くなってきた……。  
そのままキスをしながら……あたしの意識は落ちていった。

「ユウナ様……起きてください」

「んんー？メア？あたし眠ってたのかな？」

なんだかとても気持ちよい目覚めだ。

なんで寝ちゃってたんだっけ？

「申し訳ありません……。先ほどあまりの気持ちよさにわたしの体から魔力が漏れてしまい、ユウナ様と2人で眠ってしまったようです」

「魔力って漏れたりするんだ」

「はい、わたし達魔物は年齢を重ねるごとに魔力が増えて制御が難しくなっていくます。ただ……長く生きてきた中でこんな失敗は初めてです……。本当に申し訳ないです」

なるほど。

制御できなくなるくらいあたしとのキスが良かったのかな？

なんだか嬉しいよ。

そういえばアクアも魔法の制御ができなくなりかけてたなあ。

「いいんだよ。メアの気持ちいいのがあたしにも伝わったみたいでよく眠れたからさ。また今度一緒に寝ようね」

「はい……嬉しいです」



さて、そんな長くは寝てなかったようだけど……もう少して終了時間だ。

残った時間でちゃちゃっとあたしの能力を説明しておいた。あとは……また時間のある時にみんなを紹介すればいいか。

「それじゃあメア、これからよろしくね」

「はい！ありがとうございます。それでは失礼しますね」

もっといろいろ聞きたいことはあったけど、おいおいでいいかな。なんだかあの子の口から出る言葉は覚悟して聞く必要があるそうだし……。

でもいろいろ重要なことを教えてもらえてよかったな。頼りにしようっと。

## 17・あたしの可愛いモン娘 鳥娘

コンコン。

さて……次の面接は鳥っ娘だ。

ドアを開けると、体と顔は人間そのまま……腕が白い羽の鳥っ娘がいた。

ノースリーブのワンピースを着ていて、肩が少し見えるのがちよいセクシー。

スカートから見える足先は鳥のものようだ。

あとで中を確認せねば……。

今まで見た魔物の中で一番人間から遠い姿かもしれないな。

とつても緊張した感じで立っているぞ。

「いらつしゃい、入ってねー」

「はい！本日はお招きいただき光荣であります！」

「ふふっ、そんな固くならないでね」

「は、はい……」

鳥っ娘を椅子に座らせて面接開始だ。

この子には以前食事の用意をしてもらったことがある。

あたしの部屋のお布団はこの子の羽が詰まっててふかふか。

食事で時々出る卵はこの子が産んだものらしい。

何から聞こうかなあ。

「じゃあ、あなたの特技を教えてくださいかな？」

「はい！まず空を飛んでの偵察です。普通の鳥の姿に変身できますので、街へ行くことも可能です」

「ほうほう、変身してみてくれるかな？」

「はい！」

鳥っ娘は両腕の羽で自分を抱きしめるような格好となり……次の瞬間姿が変わった。

先ほどの羽と同じように真っ白でちっさい。

これは……文鳥かな？

あたしは思わず両手を前に差し出して……。

「おいでー」

「ぴいぴいー！」

手の平にもこもこもぞした感触。

これはたしかに普通の鳥だね。

「その状態だとしゃべれないのかな？」

「ぴい……」

「そっか。完全に化けちゃうんだね。戻っていいよ」

ちびちゃんはあたしの手からふわっと飛び立つと……次の瞬間元の姿に戻っていた。

そういえば……リリアさんが言っていたことを思い出した。

動物は魔物が化けている可能性がある。

あれは正しかったわけか。

「いい特技だね。それにすっごくかわいかったよ」

「は、はい……。ありがとうございます。様々な種類の鳥に変身できるのですが、あれが一番気に入ってるんです」

「どうしてかな？」

「以前人間に飼われている鳥を見まして、それがとてもとてもうらやましかったんです。あの鳥のように飼われたいなと思い……。あの

姿によく変身するようになりました」

「そっかぁ……………」

うーむ…………飼ってあげたくなるな。

この面接って、本来合格か否かを決めるはずなんだけど…………みんな合格してるよね。

だってみんな話していると愛おしくなるいい子なんだもん。だからもう合格って前提で話しちゃおうかな。

「あたしでよければ飼ってあげたいな」

「え！？　そ、それは願ってもないことです…………。憧れのユウナ様でしたら申し分ありません！」

「じゃあテスト、あたし可愛く甘えてくれる子が好きなんだ。もう一度変身してみて」

「はい！」

また文鳥の姿に変身する鳥っ娘。

先ほどと同じようにあたしの手を差し出すと乗ってきた。手の平で包み込むとふわっふわで気持ちいい。なんとなく熱くなっている気がするな。

「じゃああたしの肩に乗ってみて」

「ピーー！」

ぱたぱたと飛んで肩に乗ってくるちびちゃん。

これは可愛すぎだぞ。

「次は頭ね」

「ピーイツー！」

今度はぱたーっ、とジャンプする感じで頭に乗っかってきた。  
なんか楽しいな。

あたしは頭のちびちゃんを手に取り、顔の前に持ってきた。  
そして小さなくちばしにキスをした……。

「ピイイッ!? ひゃあああんっ!」

あ……… ついついペット感覚でキスしちゃったけど、この子には刺  
激が強すぎたか。

変身がとけて、床に崩れ落ちちゃっ鳥っ娘。

頬を紅潮させ、とろんとした目であたしを見上げてくる。

「大丈夫? ごめんね……… あまりにも可愛くてつい………」

「いえ、驚きはしましたが……… とても嬉しかったです………」

「あたしに飼われるってことはね……… あんなことや……… 他にもいろ  
んなことされちゃっうんだよ」

「いろいろ……… 可愛がっていただけのですね………」

「うん、そうだよー」

「それでしたらぜひ……… ユウナ様のペットにさせていただきたいです

ペットかあ……… 女の子の顔でこんなこと言われるとすごく不思議  
な感じ。

でもこの子の望みだもんね。

「あなたはどんな風に飼われたいのかな?」

「わたしが見た鳥は……… かごのようなものに入れられていました。  
あの状態がうらやましいです」

「え? でもあの中に入れられちゃっくと自由に動けないんだよ」

「そうですね。でも……… 人間が自分のそばに常に置いておきたいた  
めにそうするのですよね? そんな風に想われてみたいんです」

「そっか……うん、そうだね」

前向きな考えをするんだなあ。  
だとすると、この子を飼うなら鳥かごがいるな……。  
チルちゃん作れるかな？  
とりあえず面接の続きだ。

「じゃあ変身できるのははよくわかったよ。他に特技はあるかな？」  
「はい、風を操ることができます」

「おお……なんかすごそうだね。やってみてよ」

「はい……えっと、なにをしましょうか」

そうだなあ……。

ちよつといたずら心を出しちゃおう。

「えっとね……あたしの履いてるスカートを風でめくってみて」

「ええ！？　そ、そんな失礼なことをしていいのでしょうか？」

「うん、これはテストだよ。あたしの下着の色を当てられるかどうか……。挑戦してみる？」

「テストですか……。もちろん挑戦します」

「よし、じゃあスタート」

「はい！」

さあお手並み拝見といこうか。

鳥っ娘は羽を頭の上にあげて、ゆっくりと下ろした。

ヒュインッ！

「きゃあっ……」

あたしの足に風が吹いてきてスカートがめくれそうになるのを手

で押さえる。

自分でめくれと言ったくせに恥ずかしがってしまった。  
でもなんか楽しい……。

鳥っ娘は素早い動きであたしの横に移動してまた羽をはばたかせる。

ヒュウッ！

「やん……」

なんとか押さえることができたが、鳥っ娘はさらに移動して風を起こしてくる。

あたしはめくれそうになるスカートを手で押さえるのに精いっぱいだ。

鳥っ娘の動きがどんどん速くなり、あたしの周りを飛び回る。

「これで決めます！」

ヒュルルルル！

「きゃあああっ！」

あたしの足元全体から上に噴きあげるように風が起こった。

スカートが押さえきれない……。

その間に鳥っ娘は素早く移動して……見られちゃったかな？  
風がおさまり、急に静かになる……。

「ユウナ様……白……ですね」

後ろを振り返ると……鳥っ娘が真っ赤な顔でうつむいていた。

「正解だね……合格だよ……」

そういつあたしも真つ赤になってしまっているようだ。

他の子には平気で裸を見せたりしたと言つのに……なぜか恥ずかしかつた。

スカートめくりつて……エッチだよな？

「あの……ユウナ様すみません。なぜか恥ずかしくて……」

「あたしも……」

「えっと……恥ずかしながら申し訳ないです」

「いいんだよ。あたしがやらせたんだしね」

「でもなんだか申し訳なくて……ユウナ様の大切なところを無理矢理見てしまった気がして……」

あたしはまたここでいたずら心がわいてきた。

なんでかわからないけど……この鳥つ娘をからかいたくオーラを出している。

「じゃああなたの大切なところも見せてほしいな。それでおあいこになるよ」

「え！？ あ……あの……それはわたしのスカートの中を見たいと言つことでしょうか？」

「うん。でも嫌ならいいよ。これは面接に影響ないからね。ただ、あたしがあなたのことをよく知りたいだけ」

「わたしのことをユウナ様に知っていたたく……。ぜひ見ていただきたいです！」

「そっか……嬉しいな。じゃあお願い」

「はい……」

なんとなくあたしの言い方がずるい気もしたけど……わくわく。

鳥つ娘は羽の先をスカートの裾にもつていく。

どうなっているかはわからないけど、あれでスカートをつかんで



いるようだ。

「ユウナ様……見てくださいね」

「うん、見てるよ」

スカートも見たいし、この上なく照れた顔も見たい。

あたしは両方楽しむべく視線を素早く上下に移動させる。

スカートが少しずつ持ち上がり、鳥足が少しずつ見えていく。

うーん……中身まで鳥だったらどうしよう……。

そう考えていると、鳥の足がある場所から人間の太ももとなった。

太ももから鳥の足が生えているような感じだ。

なるほどね……そうなっていたのか。

「ユウナ様……見えているでしょうか……」

「まだ見えてないよ。もう少し頑張ってね」

「はい……」

恥じらしいの顔が可愛すぎる。

さあ……もうすぐだ。

やがて白い布地が見えてきた。

お股の形はまんま人間と同じようだ。

「ふふっ、あたしとおそろいの色だね」

「は……はい……。嬉しいです」

というか基本的にみんな白を履いているのかな？

そのうち落ち着いたらチルちゃんにいろいろ作ってもらってみんなに配りたいな。

鳥っ娘の顔は沸騰しそうになっている。

ずっと見ていたいけど、そろそろ終わりにしておこうか。

「じゃあ下ろしていいよ。ありがとね」  
「はい……」

いやあ楽しい時間を過ごせた。  
ただ……面接というよりセクハラ？  
真面目な話に戻りたいけど、ひとつ確かめたいことがある。

「ところでその格好だとさ、空飛んでる時にはんつ見えちゃったりしないのかな？」

「周りの風を操っていますので、絶対見えないようにしています」  
「な、なるほど……器用だね」

「はい……だから見られたのはユウナ様が初めてです……」

そう照れながら言っつうつむく鳥っ娘。  
可愛すぎたのでもう採用決定。

「初めてって嬉しいな。さて……どんな名前にしようかな」  
「え！？ つけていただけののですか？」  
「うん、あなたのこと気に入ったからね。名前考えるから少し待ってね」

「はい！ えっとあの……それでしたらペットっぽい名前がいただきたいです……」

ペットっぽいって……それでいいのかな。  
人間のペットがよっぽどうらやましかっただらうね。  
でも、この世界のペットの名前をよく知らないぞ。

「あたしが異世界から来たって知ってるよね？ だからあたしの世界でのペットっぽい名前がいい？」

「はい！」

目を輝かせて元気に返事をする鳥っ娘。  
では考えよう。

鳥と言えばピーちゃんがすぐに思いつく。  
さつき文鳥姿の時にパイって鳴いてたっけなあ。  
よし、ペットっばいしこれでいいか。

「あなたの名前はパイにするね。パイちゃん」

「パイ……素敵な名前です。ありがとうございます」

さて、いつものあれをしようかな。

パイの顔を両手で持つと……パイは目を閉じた。

さつき文鳥の姿の時にしたからわかっているのかな。  
それではいただきます。

パイの唇は羽のようにやわらかかった……。

顔を離してとろんとしたか顔のパイと見つめ合う。

「これはペットと飼い主の誓いのキスだよ」

「はい……」

「これからよろしくね、パイ」

「はい……お願いします。ユウナ様に一生忠誠を誓います」

「うん、あたしも一生面倒見るからね」

「嬉しいです……」

これで5人目か。

あたしの部下……可愛いモン娘たちは順調に増えている。  
さて、時間はまだあるから他にも話をしておこうか。  
パイと一緒にベッドに座ってと。

「あなたも偵察部隊なんだよね？　どんなことしてるの？」

「はい。情報収集は他の皆と同じですが、わたし達鳥族にはもうひとつ役目があります。わたし達の起こす風は自然のものと区別がつかないので、この力を使って偵察している場所の平和を守っています」

「平和を？　どんなことしてるの？」

「例えば子どもが高い所から落ちた際には、風で助けて軽傷ですませたりもしました。これは滅多にないですけどね」

隠れて人間を守っているのか。

やっぱり優しい子たちだよ。

これを人間が知らないのは悲しいけど……。

「なるほど……他には？」

「皆で協力することで空の雲を時間をかけて動かすこともできます。日照りが続く時は雨雲を呼び、逆もあります。こうすることで農作物の収穫を助けるのです」

「天候まで操れるんだ。すごいね……」

「はい。とても楽しい任務なんですよ」

「それって誰かが指示を出しているのかな？」

「ずっと昔から続いているようで……今では当たり前のようにやっていますね。本来はなにか重要な理由があったらしいのですが、わたしは知らないんです」

「知りたいとは思わないの？」

「少しは気になりますが、人間を助けることは喜ばしいこと。知らなくても問題ありません」

「そっか……」

うーん、やっぱりいい子たちだよ。

それにしても重要な理由は少し気になるな。

メアあたりは知っているだろうか。  
毎度のことながら、こういう話をしてしていると抱きしめたくなくなってしまっ。

でもこの羽があるとどう抱きしめたらいいのかわかんないな。  
よし、たまには逆をしてみよう。

「ねえパイ、お願いがあるんだけど」  
「はい、なんでも命令してください」  
「あなたの羽気持ちよさそうだからさ……あたしを包んでみてほしいな」

「え……あ……はい……。では……失礼します」  
「うん……」

パイの羽があたしの背中と頭を包みこんできた。  
やっぱりふわふわで気持ちいいや。

あたしはいつもこのふんわり羽の布団で寝てるんだね。

「ユウナ様……いかがでしょうか？」  
「とつても気持ちいいよ……。今日から布団で寝るたびにパイのこ  
とを思い出しちゃいそう。パイに包まれてる気分になって寝るね」  
「わたしの羽で作った布団を気に入っていただけなら嬉しいです。  
もっとたくさんむしって、もっとふかふかなものを作りますね」  
「あはは……自然に抜けたやつだけでいいよ」  
「はい……またためておきます」  
「うん……」

羽に包まれたまま、パイの胸に顔を押しつけてみる。  
この子は胸ちっちゃめだね。  
大きいと飛ぶ時に邪魔なのかな？

「あん……くすぐつたいです……ユウナ様」

「嫌かな？」

「いいえ……嬉しいです」

「じゃあこのままお話しようね」

「はい……」

このままの幸せな体勢で残りの時間を過ごした。

あたしの特技を説明して、砦攻略についても話しておいた。

今度一緒に空を飛ぶ約束もした。

これで今日の面接は終わりだ。

かわいいペットができちゃった。

## 18・男神の愛

コンコン。

来たかな？

面接ではないけど、犬っ娘が遊びに来てくれたはずだ。

ドアを開けると予想通り犬っ娘が立っていた。

ミリイと同じように、基本は人間で犬耳としっぽがついていて体毛もある。

白というか銀色しっぽ体毛で全体的に柴犬って感じがする。

鼻の頭が黒いのが犬しっぽくて何か可愛いぞ。

「いらつしやい、中へどうぞ」

「はい、失礼します」

犬っ娘は緊張した感じで部屋に入ってくる。

緊張のためかしっぽは垂れさがっているのかな？

「そんな緊張しないでね。ここに呼んだのは、あなたとお話したかったからだよ」

「そ、そうですか……」

犬っ娘は緊張が少し解けたのか笑顔になり、しっぽがゆらゆらと左右に揺れ始めた。

わかりやすく可愛いぞー。

さて、あたしの話したいこと……。

この世界に来て最初に見た魔物は、目の前にいる犬っ娘にそっくりだった。

あたしの目の前で殺されたのを見たわけだけど、別人とは思えな

い。  
それを確かめよう。

「まずはこのお花を見てくれるかな？」

「これは……キキヨウの花でしょうか？」

そう、あの魔物はこの花を持って死んでいたんだ。

「うん、これを見てどう思うかな？」

「そうですね……。この花にはとても大きな思い出があります。でも……どうしてユウナ様がこの花を？」

「ごめんね。あたしの勘違いかもしれないけど確認したいことがあって。その思い出、よかつたら聞かせてもらえるかな？」

「はい、かまいません。わたしが以前ここより遙か南の地で偵察任務をしていた時のことです。怪我をしてしまった時に……とある人間に助けられたのです」

ほうほう、怪我をした魔物を助ける人間もいるんだね。

なんだか希望が持てる話だよ。

「その時にその花を煎じた薬を作ってくださいました。そのお方は薬にもなり綺麗なキキヨウの花がだいそう好きで、わたしも同じようにその花が好きになりました」

「なるほど、それはいい思い出だね」

「はい……しかしそれからしばらくしてそのお方が亡くなったことを知りました」

「そっか……つらいこと思い出させちゃったね」

死因を聞きたいけど……なんだか聞きづらいな。

魔物を助けたせいで迫害されて殺された恐れもあるぞ……。



「いえ……。それでわたしは時々お墓参りにキキヨウの花を持って行っていました」

「なんだかい話だね。最近行っていないの？」

「行きたいのですが……行けなくなっていました……」

「え？ どうして？」

「えっと……」

犬っ娘は言っていないものかどうか悩んでいるような表情。  
なにか言いづらい理由があるのかな？

「嫌じゃなかったら教えてほしいな。あたしあなた達のことを色々知っておきたいんだ」

「そう……ですね。ユウナ様はわたし達魔物の特性を知っておく必要がありますので、お話しておきます」

「特性？ぜひ教えてほしいな」

「まず先ほどの続きからお話しますね。わたしは人間に見られないよう、夜中にお墓参りに行っていました。しかしある日……普段はいない強そうな人間が警備をしていて……わたしは……」

どこかで聞いた話のような……。

「あなたはどうなったの？」

「はい……殺されてしまったのです」

「えー!？」

殺されたって……じゃあ目の前にいるこの子は何？

「というか殺したのってやっぱり、あたしを護衛してたランベル將軍？」

「……混乱してくるぞ。」

まずひとつひとつ確認して行く。

「殺されたのって……もしかして8日ほど前だったりする？」

「え……たしかそのくらいだったかと……。どうして知っているのでしょうか？」

「こないだ、あなたに似た魔物を見たことあるって言ったよね？」

その殺されたところをあたしも見てたんだ……」

「そう……でしたか……」

「ごめんね……助けられなくて……」

「いえ、きつとその時のユウナ様は何も知らずに見ていただけなんですよね」

「うん……」

どうしようもなかったとはいえ、なんとも申し訳ない気持ちだ。

そして……もうひとつの最大の疑問もぶつけよう。

「それで……あなたは殺されたのにどうしてここにいるの？ それ  
が魔物の特性？」

「そうです。わたし達魔物は寿命以外で死ぬと定められた場所で蘇ります。わたしの場合はこのお城ですね」

「蘇るんだ……。あ、そういえばあなたが殺された時にもう一人いなかったかな？」

「はい、あの子は南のお城で蘇っているはずです。情報交換をしているために一時的に合流していましたので」

「そっか……南って遠そうだね」

「そうですね。行くにはかなり苦労する場所です」

「だよな……。でもどうして蘇るの？だれかの魔法？」

「プロメテイヤ様のお力です」

なるほど……男神は自分が創った魔物たちが大好きなんだろうな。

するとこの子たちは死なない不死身の存在？

「蘇ることでデメリットはあるのかな？」

「はい、魔力は枯渇し……能力も失います。わたしは人に見つかることなく偵察する能力を持っていたのですが、それが使えなくなりました」

「あ……だからお墓参りには行けなくなっただ」

「そうですね。今のわたしは生まれたての魔物程度の能力しかありません。ですので雑用くらいしか役に立てないんです。だからユウナ様の面接に行くこともできなかつたんです」

「なるほど……つらいことなのにお話してくれてありがとうございます」

「いえ……知っておいていただいた方がよいことですので」

能力をなくすつてかなりのデメリットだなあ。

ミリイは魔力を奪われたけど、死んだわけではないからすぐに復讐できたんだな。

蘇ることができるとはいえ……死んじゃだめだな、うん。

「ユウナ様……もし他の魔物が命をかけてユウナ様を守ろうとした場合は好きにさせてあげてくださいね。わたしたちは死んでもたいしたことはありません」

「え……でも……」

「能力を失うなんて些細なことです。愛する方を守れることの方がよっぽど嬉しいのですから」

「うん……覚えておく」

「はい」

犬っ娘は満面の笑顔だ。

やっぱりいい子たちだ。

自分のことより相手のことばかりを考える魔物たち。

あたしはこの子たちみんなを守れるように強くならなきゃな。

「いろいろ教えてくれてありがとう。良かったらこのお花もらってくれないかな？」

「いいのですか？ いただきます」

嬉しそうにキキョウの花の入ったコップを受け取る犬っ娘。

可愛いなあもう。

「そうだ。あなたはあたしがこの世界に来てから初めて出会った魔物になるんだよ」

「そうなんですか、それは光栄です」

「能力なんてなくてもいいからさ……今度面接に来てほしいな」

「ありがとうございます。ぜひ参加させてください」

よし、能力がいらないのは本当だ。

こうやって話をしただけで、あたしはもう犬っ娘を気に入っている。

次に来てくれたら即採用だよ。

「それではユウナ様。失礼しますね」

「うん、またお話ししようね」

「はい！」

犬っ娘は部屋から去って行った。

いい時間を過ごせたことにあたしは満足だ。

さて、今日の予定は大体終わりだ。

夜はまたみんなとお話しつつ作戦でも考えよう。

そして今日の夕食はにぎやかだった。

猫っ娘ミリイ。

人魚のアクア

蚕っ娘チルちゃん。

羊っ娘メア。

鳥っ娘ピイ。

あたしの部下というかお友達というか恋人というか……ペットも？ 増えたなあ。

ちゃんとみんなを平等に可愛がれる様にしなくちゃね。

全員の紹介を済ませて、砦攻略について話し合っ。

ピイが仲間になってくれたおかげで、あたしが空を飛べることも作戦に組み込めそうだ。

メアにはもちろん全員の心を安定させておいてもらう。

3日後の砦襲撃に向けて、あとは修行するだけだ。

そしてみんなにはあたしの最も重要な目標を話しておく。

リリアさんを元の生活に戻すんだ。

みんなは当然のように協力してくれると言ってくれた。

ありがとうね、みんな。

でも……生き返れるからって命をかけようとは思わないでね。

あたしは今文鳥の姿で、砦に向かってぱたぱた飛んでいる。

文鳥といえども、風の魔法に乗っているためすごいスピードだ。

この3日間で修行も作戦もばっちり。

パイと合体することで空を飛ぶこともある程度できるようになっている。

でも基本的に空を飛ぶことはパイにお任せだ。

はい、お任せください

テレパシーの会話でも緊張しているのが伝わってくるな。

大好きなはずの人間と戦いをするんだから当然だろう。

さて、今日の目的は、圧倒的な力で砦を壊滅させること。

あたしの召喚できる最強の神獣である麒麟いわく余裕とのこと。

だから問題となるのは、いかに人間に死者や重症者を出さずに退散させるかだ。

そのことについてはしっかり作戦を練ってあるが、いきあたりばったりなところが大きい。

うまくいくといいけど……。

川にいるアクアの準備はどうか？

川の生き物の避難も完了いたしました。いつでもいけますわ

うん、ありがとね。

準備は万端のようだ。

アクアは川にいるけど、他のみんなは城で待機している。

召喚と送還が自在にできる以上、それが一番安全だからね。

さあ、皆が見えてきたので風の魔法を止めて普通の文鳥のように飛ばう。

小さめの皆だけど、たしかにじわじわと動いている。

皆の通った跡は草花が踏みじられた感じになっていて痛々しい。自然破壊するのはどこの世界でも人間なんだね。

あたしは適当な木に止まって、作戦予定場所に城が来るのを待つことにする。

みんな、もう少して始まるからよろしくね。

はい……お任せください

緊張するのじゃあ

おねえちゃん、気をつけてね

ユウナ様、ご武運を……

あたしのテレパシーは、名前をつけた子なら距離関係無しに届くと判明している。

さらに、あたしを通してみんなで会話することも判明した。

このおかげで作戦や状況の伝達が容易だ。

作戦内容を全員で再確認し合い、その時がやってきた。

さあ行こうかな。まず初めが肝心だ。

文鳥の姿のまま皆に近づいていく。

皆の上で見張りをしている兵士はのんびりとした顔であたしに視線を向けてくる。

これから怖いことが起きるからしっかり逃げてね。

皆の真上まで来て……作戦開始だ。

「麒麟召喚！ ミリイ召喚！ チルちゃん召喚！ メア召喚！ ア

クア召喚合体！」

まず麒麟の姿が現れ、その上に他のみんなも現れていく。

あたしはパイとの合体を解除してアクアと合体した状態となる。

まずは麒麟の挨拶からよろしく。

麒麟は咆哮し、周りの空気が震える。

きつと皆でも軽い地震が起きていることだろう。

兵士達は何事かと怯えた顔で見上げているようだ。

『我は神獣麒麟なり。そのような忌まわしきものを作り、大地を荒らす所業。その報いを受けるがよかるう』

麒麟つてばノリノリだね。

じゃあアクア……始めようか。

はい……ユウナ様の魔力をお借りします

アクアがあたしの魔力を使って……川の水を一気に持ち上げる。皆から見ると麒麟が水を持ち上げて投げるように見えているだろう。

水は皆の上から一気に降り注ぐ。

なお、アクアと親衛隊の力でこの水は一時的に意識を持ったような状態となっているらしい。

人間の肺には入らないようになっていて、水に流された人間が大怪我をしそうになると守るそうなの。

なにかを守る能力に関してはみんなすごい力を持っているようだ。さて、ここからが重要だ。

「アクア送還！ 神獣合体ミリィ！」

「にゃうっ！」



アクアは川に戻ってサポートだ。  
しばらくは皆に水が降り続けることだろう。

ミリイと合体したあたしはチルちゃんをおんぶして麒麟から飛び降りる。

チルちゃんは糸を使ってあたしに巻きつけているため、落ちることはないだろう。

あたしのやることは勇者探しだ。  
ついでにチルちゃんは余裕があれば人命救助。

「ま、魔物の襲撃だー！」

「死にたい奴はかかってこーい！」

あたしもノリノリで兵士相手にすこんでみせる。

麒麟の出現と不意打ちの水攻撃に加えて魔物も降り立ってきた。  
さらにメアが人間達の恐怖を増幅させているはず。

兵士達は大混乱だ。

さあさあ、ちゃちゃっと逃げてね。

水のせいで皆の上から落ちたつばいのも何人かいるようだけど、  
それはちび麒麟とピイが救助しているだろう。

麒麟は皆のでっばった部分を爪で破壊して、被害の出なさそうな  
場所へ投げつけている。

「ゆ、勇者様お助けをー！」

よし、あの兵士についていけば勇者に会えるかな？

チルちゃんに細い糸を1本出してもらい、追跡用に兵士につけておく。

まずは皆上にいるであろう兵士をすべて追い出そう。  
腰を抜かしている兵士や気絶している兵士もいるな。

気絶した兵士は透明ちび麒麟に下まで運ばせよう。  
あたしは腰を抜かした兵士に近づき首根っこをつかむ。

「勇者はどこ？ 言わないと大変なことになるよ」

「はわわわわ……ま、魔物……」

「勇者の場所を教えて」

「ととと……皆の中……ひいひいひい……」

そんなの知ってるよ……。

使い物にならないな。

でもとりあえずこいつをひつつかんで中に入れてみようか。

あたしは他の兵士がいないことを確認して皆に侵入する。

ちび麒麟も何体かついてきてね。

「なんでこんなに水であふれてくるんだ！」

「よくわからないが魔物の襲撃らしい。避難しろ！」

「くそっ！ 俺達が攻勢に出てるんじゃないのか？」

皆内部も大混乱のようだ。

階段から水がどんどん流れ込んできて床が水浸しだ。

その水はこの階全体を流れた後下へ向かう階段へ落ちていくよう  
だ。

ユウナ様。皆内部の構造は水を通じて把握しましたわ。その流  
れている方向へ向かえば外へ出ることができます。

お、ありがとねアクア。

とりあえずあたしが抱えている腰を抜かしている兵士は、下へ向  
かう階段に向かって滑らせるように投げつけよう。

アクアに任せておけば怪我もするまい。

とりあえずこの階にいる兵士を追い出すか。

ああしは適当な兵士につかみかかつては出口方面にぶん投げている。

ミリイと合体していると、素早い上に結構な力を出すことが出来て楽しい。

ユウナ様の魔力のおかげで力があふれてくるのですにやー

ミリイも楽しそうだね。

人間に攻撃するのはかなり嫌なはずだけど、実はミリイは兵士をつかむと共に治癒魔法をかけている。

あたしと合体している時は舐めなくても治療できるらしい。

しかもその治療効果は少しの時間持続するため、投げ飛ばした兵士が怪我をしてもすぐ治るはずだ。

憧れの人間を治療出来ているのでミリイはご機嫌なわけだ。

ユウナよ。砦の外より強大な魔力の流れを感じる。おそらく勇者だ

お、麒麟がそう言うなら間違いないね。

砦内部はちび麒麟に任せてあたしは外へ行こう。

ついでに兵士が落としていった剣をひとつもらっていきこう。

魔物のお城には武器が一切なかったんで、何も持ってこなかったんだ。

「おねえちゃん、さっき糸をつけた兵士さんのところへいきこう。なんだか大きな魔力の近くに行ったみたいなの」

「チルちゃんも感じるんだね。じゃあ外に出たら誘導して」

「うん！」

砦の外へ出てチルちゃんの誘導通りに移動すると、明らかに他の兵士と違う姿の男がいた。

あれが重力を操るといふ先輩勇者かな。

なにか能力を使用しているようだけど、なにしてるのかな？

あたしは麒麟が放り投げた砦の破片の陰に隠れて様子を見ることにする。

「みんな、ケガ人を抱えて避難しろ！ あの化け物の強さは半端じゃねえ。砦は間違はなくぶっ壊されるぞ」

「勇者様もお逃げください！」

「俺はお前らが逃げる時間を稼ぐ！ いいからとっとと行くんのだ！」

「は、はいー！」

おお、なんか勇者っぽくてかつこいいことしてるぞ。  
時間稼ぎって何してるんだらう？

先ほどから砦が硬くなっているようだ。重力を操る力とやらで強化しているのだろうか

なるほど、そうやって皆が逃げるまで砦が壊されないようにしてるのか。

敵ながらあっぱれなやつだ。

あとでチャンスがあればお話しできないかな……。

魔物が凶悪な存在じゃないってことを知ってほしい。

とりあえず兵士達が避難し終わるのを待とうかな。

反撃してくる気配は無さそうだしね。

しばらくすると……兵士のほとんどは避難完了したようだ。

「勇者様、避難完了です。逃げ遅れた者もいません」

「わかった、お前も遠くまでいけ。俺一人なら逃げるのは余裕だ」  
「わかりました。お帰りをお待ちしております」

むう……なんかかつこよくて悔しいぞ。  
兵士は馬に乗って去っていくようだ。

ユウナ様の方がかつこいいのじゃ

ありがとね、ミリィ。

勇者は皆に向けていた能力を解除したようで、深呼吸をしている。  
では、勇者と対峙しようか。

チルちゃんはここに隠れて待っててね。

さあ、話をするにしてもまずは勝ってからだ。

油断するとあっさり負けてしまう相手のはずなんだから。

「あなたが勇者ね」

「ん？ 魔物か」

「そんなところよ、あたしと勝負しなさい」

「あいにく俺はもう逃げるつもりなんだ」

「逃げたら今皆を破壊している麒麟が兵士達を追いかける。勝負し  
てくれたら追いかけることはないよ」

「脅しか。お前が約束を守る保証などないな」

「魔物は嘘をつかないの」

「ふん。まあいい……不意打ちもせずに現れたんだからな。勝負し  
てやるよ」

勇者が魔力を集中している気配がある。

とりあえず走り回って重力攻撃から逃げられるかやってみよう。

「はあああああ……！」

勇者から魔力が発せられる気配。  
それはあたしの服に当たり、服がちぎれ落ちていった。

「なにっ！」

「ふふっ、効かないよ」

アクアの予想通りだった。

重力を操る能力は制御がまだまだ難しいらしい。

そのための衣装をあたしは着ている。

アクアが考えてチルちゃんが作ってくれた服は、一見ドレスのようにはひらひらがたくさんあってとても豪華だ。

このひらひらはある程度の力がかかるとちぎれ落ちていく。

重力を操る能力をあたしにかけているつもりでも、服の一部にかけているだけとなるようだ。

おそらくこの勇者が修業を積みればこれも意味ないのだろうけど、  
今だけは役に立った。

あたしはこのすきを突いて、素早く勇者に接近して殴りかかる。

勇者の顔面にクリーンヒットしてふっとんでいく勇者。

ミリイが無意識のうちに治療魔法を発動しているのでたいした怪  
我はないだろう。

なんとかこうやって戦意を削いでいきたい。

「くっ！ ならばこれで！」

また勇者が魔力を集中しているようだ。

何をする気だ？

ユウナ様！ 右に跳ぶのにゃ！

「えいつ！」

「なにっ！？ 避けただと？」

ミリイに言われてよくわからないまま跳ぶと、先ほどまであたしがいた場所に勇者が一瞬で移動してきていた。

重力を操って自分の体を動かしているのかな？

あれはあたしの動体視力では見切れない。

ミリイに任せなくては……。

「これならどうだ！」

「ひゃああっ！」

「くそっ……すばしっこいな……」

ミリイのおかげでなんとか避けてはいるが、あたしも攻撃できない。

このままでは長期戦になってしまっ。

ちよっとずるいけど……ピイの風魔法とチルちゃんの糸にも協力してもらおう。

まずはピイが砂埃を起こして、チルちゃんの糸を勇者の体にゆっくり巻き付けていって。

了解しました。目を閉じてくださいね

チルがんばるよ！

突風とともに大量の砂埃がとんできて、勇者の目を襲う。

あたしは目を閉じて、ピイからのテレパシーで状況を教えてもらう。

「くそっ！ なんでこんな時に……前が見えんっ！」

そのまま前に少し進めば目を開けて大丈夫です。勇者は右を向ければいます

ピイの指示通りに移動して目を開ける。  
そのまま猛ダッシュで勇者に殴りかかる。

「ふごあつ！ そつちか！」

勇者はすぐに起き上がり、あたしに向かって高速移動してくる。  
目をまだ閉じたままなのに器用なことだ。  
あたしは素早く避けて再度殴りかかる。

おねえちゃん、糸が付いたからくるくる回らせながら逃げてね

よし、チルちゃんから出ている糸で勇者を巻き取ってやろう。  
先ほどより弱いけど、砂ぼこりの風が吹きっぱなしのため糸は見えないだろう。

「くそつ……風のせいでやばかったが、まだいけるっ！」  
「きゃあっ……！」

先ほどと同じように避けるだけで手一杯だけど、動けば動くほど糸は巻きついていく。  
かなり緩めた状態の糸らしく、勇者は気付いていないようだ。  
ある程度動いてからチルちゃんに糸を一気に締めてもらおう。

おねえちゃん、これだけ糸があれば動けなくできると思っつ  
「これで終わりっ……あなたの負けだよっ！」  
「なにっ!? なんだこの糸は……?」



糸に絡まって転び、勇者はもがいている。  
さらにここからだめ押しだ。

「神獣合体チルちゃん！」

ミリィがあたしの体から出ていき、チルちゃんがあたしに入ってくる。

じゃあ協力して強力な糸を出そう。

数分後、糸でがんじがらめにされた勇者が転がっていた。

さて、これで大丈夫かな？

ユウナ様。あの能力は集中が必要とされます。ですので……  
チルちゃんが糸でくすぐっていれば集中できないはずですよ

なるほど……アクアの助言に従おうか。

これはチルちゃんに任せるとして合体を解除しよう。

魔力の流れを感じたらくすぐってね。

これは攻撃じゃなくて、人間を笑顔にさせる方法の一つなんだよ。

「チルがんばるー。たくさん笑ってもらおうね」

「よしよし、じゃあ勇者さん。あたしの話を聞いてくれるかな？」

「よくわからんが好きにしろ……。って……あひゃひゃひゃひゃあ

……」

勇者がなにか能力を使おうとしたのだろう。

チルちゃんの糸が全身をくすぐっているようでもだえはじめた。

「能力を使おうとしたらそうなるから」

「ひひひひいっ……。わかった、わかったから……とめてくれ！」

「チルちゃん止めてあげて。じゃあ……話を聞いてね。別に殺したりしないか安心して」

「わかった……というかお前は人間か？」

「そう、あなたの後に召喚された勇者ユウナよ」

あたしはこの世界に来てから何をしていたか話して聞かせた。

別に仲間を引き込もうってわけじゃあない。

魔物のことを少しでもいいから知ってほしいんだ。

あたしが話し終わると勇者は口を開いた。

「なるほどな。そっちにいるのは俺が捕えてお前が助けた魔物だな」

「は、はいですよ……その節はどうもなのにゃ」

何故かお礼を言うミリィ。なにかあったのかな？

「ひとつ聞きたいんだが、あの崖から落ちた兵士を助けていたのか？」

「そうですよ……。あの人は大丈夫でしたかにゃ？」

「ああ、なにも問題なかった……」

なんとこの勇者もあの時のことは疑問に思っただらしい。

崖から落ちたはずの兵士が魔物2体に囲まれていたのに無傷だった。

その疑問を兵士に訴えても、魔物が恐ろしいの一点張りだったらしい。

よかったねミリィ、ここにもあなたのことをわかってくれる人がいたよ。

この勇者はいいやつっぱいぞ。

協力してもらえないかなあ……。

「ねえ、魔物と人間を仲良くさせるのに協力してくれないかな？」  
「今の話を聞く限り無理だろう……。根が深すぎる」  
「それでも……。あたしはやりたいんだ」  
「そうか……。ならば俺に出来る強力は一つだ。俺は元の世界に戻る。それならばお前達はわずかにでも平和になるだろう？」  
「そっか……」

仲間になってもらうのは無理だったけど、話を聞いてくれたようだ。

まあ……。それでいいかな。

「チルちゃん、糸をほどいてあげて」

「うん……。きつく縛ってごめんなさいでした」

「あ、ああ……」

勇者は魔物に気を使われていることに若干戸惑っている。

まあ……。これでさっきのあたしの話が真実だったとわかってくれるだろう。

「じゃあ、気をつけて帰ってね」

「ああ、しつかりな。お前のおかげでこの世界を去る決心が着いたよ。ここはいろいろと居心地悪かったんだ。魔物におびえる人々を助けたいという気持ちから戦っていたが、今の話でもう戦えなくなつた。お前はこれを変えようと言っただな」

「うん、もうみんなと仲良くなつたからね」

「そうか……。うまくいくことを願っている。それではな……」

「あ、お名前は？」

「2度と会うこともないと思うが、リュウという。ではさらばだ」

そう言って集中し、空を飛んでいく勇者リュウ。

重力を操る力ついているいろでいるんだなあ……。  
まだ発展途上の能力でよかったよ。  
でなきゃ負けてたね。

空を見上げていると、砦を壊し終わった麒麟が飛んで行った。  
逃げた兵士達に恐怖を刻みつけに行くのだろう。

遠くの上空で麒麟が咆哮し、周りの木々が揺れているのが見える。

『畏れよ、我を』

麒麟のその心に響く声がメアの力で増幅され、兵士達の心に届いているはずだ。

これで麒麟の圧倒的力を見せつけるといふ目的は果たされた。

あとはグリモアさんに任せれば、リリアさんを返すことができるはずだ。

あたしの初陣はこうして終了した。

麒麟もみんなも……すっごく頼りになる存在だね。

## 20・戦いの後に

北のお城から魔物が総動員されてきて、壊した砦の片づけを行っている。

材料はなるべくリサイクルするそうなので、川を使って城の近くまで運ばれるそう。

川での作業は、アクアと親衛隊が大活躍しているようだ。

さらには麒麟も大きな破片を動かしたり大活躍している。

虫の魔物たちは砦に踏みじられた植物や木のお手入れをしているらしい。

あたしはパイと合体して空を飛び、先に城へ帰らせてもらうことにした。

他のみんなは先に送還している。

わりとあっさり勝利はしたけど、みな精神的に疲れているはずだ。

ちゃんと確認しておかねば。

まずパイはどうなのかな？

砦から落ちそうになった人を風で押し戻したり、人の頭に落ちそうな破片を風で吹き飛ばしたり、とてもとても楽しかったです。麒麟様の力もあり、ケガ人は一切出なかったんですよ。

ふふっ、パイは満足そうだね。

パイのおかげで人間はみんな無事だし、勇者には勝てたもんね。

この子は大丈夫そうだな。

パイが嬉しそうなのは本心からのようで、帰りの飛行はとても速かった。

お城について最初に向かうのはメアの部屋だ。  
人間の恐怖の感情を増幅する……あの子が一番負担のかかる能力  
を使っていたんだ。

部屋に入ると、少し顔色が悪い感じで寝ていた。

「メア、つらい役目を任せてごめんね」

「いえ……ユウナ様のためですし、ああやって人間に逃げていただ  
いたおかげでケガ人は出ませんでした……」

「うん、ありがとね……」

「はい……」

顔色は悪いまま、笑顔をあたしに向けてくれる。

心を癒す力のあるメア。

この子を癒すには、同じ力を持った他の魔物の力があるのかな？  
あたしでなんとかできないだろうか？

「ねえメア、まだやったことないけど合体してみようか。あたしで  
もメアを癒せるかも……」

「ぜひ……試していただきたいです」

「じゃあいくよ、メア……神獣合体……」

「はい……」

メアが光に包まれてあたしの中に入ってくる。

合体のいつもの気持ちよさとともに、悲しい感情があたしに流れ  
込んできた。

これがメアの悲しみかな？

とりあえず……合体で半分にはできたよ。

少し楽になりました……。ユウナ様の中はとても素敵です

よかった……。

この状態でメア的能力を自分に使えないのかな？

試してみましようか。だれかの夢に入る時はまず自分の夢に入り、自分の夢と相手の夢をつなげるんです

なるほど、じゃあ一緒に自分の夢に入ってみよう。

はい……それでは寝る時のように心を落ち着けてみてください

メアの言うとおりに眠りにつくような気持ちになってみると……意識がどこかへ落ちていく感覚……。

夢の中では悪夢のような光景が広がっていた。

死体の山が転がっている。

死んだ子供を抱えて泣いている母親がいる。

これは人間同士の戦争なのだろうか……。

この光景がメアの心を悩ませてるの？

ユウナ様、それは関係ありません。今までわたしが食べた悪夢があるだけです

食べたんだ……。

悪夢って人間の？

はい、戦争が終わった直後人間達は苦しんでいました。その悪夢を食べて回ったのです。それ以外にも、魔物が怖いという悪夢以外は食べて回りました……

な、なるほど……。  
戦争ってPTSDとか後遺症があるって言うもんね。  
そうならないようにしたわけか。  
相変わらず優しい子だよ。  
でもこんなにあって苦しくないの？

多少は苦しいですが、人間達の役に立てたという気持ちが大き  
いので問題ないです

そつだよね、メアはそういう子だもん。  
そつすると……今メアが悩んでいる原因はどれだろう？

埋もれてしまつてどこにあるかわからないですね

そつか……じゃああたしがここに来た意味はないのかな……。。

いえ、何故か判りませんが……ユウナ様がそこにいるだけで心  
が癒えていく感じがします。ユウナ様と一緒にすることでわたしの  
能力が高まっているのかもしれない

なるほど。

ミリイの傷を癒す能力もあたしと合体することでかなり強くなつ  
たんだ。

メアの能力もあたしと合体することで向上するのだろう。  
しばらくここにしようかな。いいよね？

はい、狭苦しいところですがごゆっくりどうぞ

この後しばらくメアの悪夢を眺めて過ごした。



恐ろしい光景だけど、そんな不快な感じではなかった。  
メアの優しさを感じられるからかな？

偶然あたしとメアがキスしている光景が見えて2人で照れるとい  
ういいハプニングもあった。

メアの心が癒えたようで、あたしは夢から目覚めることにした。

ふう、夢の中って不思議だな。  
メアは元気になった？

はい、ばつちりですよ。他のみなさんのところにも行かれるん  
ですよ？ このまま行きましよう。今の状態であれば、近くに  
いるだけで心が癒えるはずですよ。

おお、なんともいい能力だね。  
そばにいただけで癒せるってなんか幸せ。  
まずはミリイのところかな。

あの子は人間の怪我をたくさん癒せてご満悦のはずだ。  
心配してはないけど、顔は見ておこう。

部屋に行くと、弟君が出てきた。

「あつ……ユウナ様？ ですよね……にゃお」

「いつもと違う姿だけどそうだよ。ミリイはいるかな？」

「えっと……先ほどから眠ってしまったていますにゃ」

「そっかあ、どんな様子だった？」

「とてもとても嬉しそうにユウナ様との武勇伝を僕に話してくれま  
したにゃ」

「そっか、それなら安心だよ。じゃあ行くからたくさん寝かせてあ  
げてね」

「わかりましたにゃ。ユウナ様、今日は本当にお疲れさまでしたにゃ」

「うん、ありがと」

よし、ミリイは大丈夫。

チルちゃんはどうかなー。

部屋をノックすると反応がない。

テレパシーで話しかけてみようかな。

くー……すやすや……おねえちゃん大好きなの……

嬉しい寝言を言いながら寝ているようだ。

チルちゃんも大丈夫なのかな？

あの感じだと問題なさそうですね

メアのお墨付きももらえた。

じゃあグリモアさんのところへ行こうか。

今やっている片づけの指揮もしているはずだけど、部屋でしているはずだ。

ノックして部屋に入れてもらう。

「グリモアさん、上手く行ったと思うんだけどどうかな？」

「お疲れさまでしたユウナ様。あの戦いっぷりでしたら上手くいくと思われれます。明日人間と交渉してリリア様に帰っていただけたと思います」

「うん、よろしくね」

「お任せください」

忙しそうなので早々に退散だ。  
でもこれでやっとリリアさんをお家に帰せるかな……。  
元の生活に戻ってほしいな。  
今から会いに行ってみたいけどちょっと怖い……。

ユウナ様、リリア様に渡していただきたいものがあります

ん？ なにかな？

今から作ります。ユウナ様はリリア様のことを思い浮かべてください

うん……。なにかわからないけどメアにお任せしよう。

リリアさんへの想い……。幸せになっただけでほしいな……。

この世界であたしを最初にお世話してくれた人だもん。

そう考えていると……。あたしの体から出た魔力がなにかを形作っていく……。

手を伸ばしてそれを手の平に乗せてみる。

これは……。イヤリング？

真珠のようなとても綺麗な宝石がついている。

成功です。この片方をリリア様に渡してください。この宝石……パールに込められた魔力によって、着けた者同士に繋がりができます。リンクパールとでも申しませうか

これをあたしとリリアさんが着ければつながりができるのか……。でもどうして？

リリア様のご事情が少しだけ心配なのです。もし何かあった際は助けに行きましょう

そうだね……。  
なにかあってほしくはないけど念のためだ。  
これをリリアさんに渡しに行こう。  
合体は解除しないと驚かれちゃうよね？

ユウナ様……恐らくなのですが、合体したままでもユウナ様の元の姿になれると思います。念じてみてください

え？ そうなの？

メアに言われた通り念じてみると……普段のあたしの姿に戻った。こんなこともできるんだね。

さすがユウナ様です。それでは行きましょう。この状態で行けばリリア様に安らいでいただけたと思いますし、イヤリングも受け取ってもらえるはずですよ

そうだね、行こう！

リリアさんの部屋の前で深呼吸してノックをする。  
返事が聞こえたので、あたしはそーっと部屋に入る。

「ユウナ様でしたか」

「うん、久しぶりだねリリアさん。そっちに行つて……いいかな？」

「はい……来てください」

リリアさんは椅子に座つてなにか本を読んでいたようだ。  
なんだか穏やかな表情……。

こないだは死にたがっていたのに、もう立ち直つた？

「リリアさん、元気そう良かった」

「こないだは取り乱してしまつて申し訳ありませんでした。あの…  
…メアさんでしたか？ あの魔物からユウナ様が私のためにいろいろと動いていると教えていただきました。本当にありがとうございました。」

メア……いろいろお話してくれたんだね。

リリアさんがあたしと普通に話をしてくれている……。  
なんだか涙が出てきちゃった。

「リリアさん……うう……」

「ユウナ様？ 泣かないでください」

リリアさんが立ち上がつてあたしを抱きしめてくれる。

いい匂い……。なんだか安らぐ……。

甘えてもいいんだよね？

「ユウナ様、なにか雰囲気が変わりましたか？ その……なにかよくわからないのですが、こうしていると落ち着きます」

「んー……勇者の力……かな？」

「そうですか、素敵な力をお持ちですね。もう少しこのままでよろしいでしょうか？」

「うん！」

メアのおかげでリリアさんにたくさん抱きしめてもらえてる。  
幸せだなあ……。

よし、プレゼント渡すにはいいタイミングだ。

「リリアさん、これ受け取ってほしいんだけど……」

「これは……イヤリングですか？」

「うん、あたしとお揃いで……これがあればいざという時に助けに

「行けるんだ」

「嬉しいです……。大切にしますね」

さっそく右耳にイヤリングを着けてくれるリリアさん。

じゃああたしは左耳に着けよう。

お互いに着けたのを確認して微笑み合う……。

この後しばらくリリアさんと楽しく話をして過ごした。

「じゃありリアさん、きつともうすぐ帰れるから……元気でね」

「はい、ユウナ様もがんばってくださいね。私は協力できませんが」

「うん、しちゃだめだよ。前と同じように生活してね」

「はい……」

あたしは満足してリリアさんの部屋を出た。

でもなんで急にああも変わってしまったのかな？

以前お話した、魂に刻み込まれた魔物への恐怖……それを取り除きました

あ、そうなんだ。

結構大変だったんじゃないかな？

ありがとうね。

いえ、時間はかかりましたが……とても楽しかったです。ただ、帰っていただく前にまた元に戻す必要はありますが

そうだよね、あのまま帰しちゃったら問題が起こりそうだ。

魔物を恐れない人間はきつと迫害されちゃう。

メア、つらいだろうけどお願いね。

お任せください

さて……これでみんなに会ったかな。  
アクアはどうしてるんだろう？  
おーい。

作業は順調ですわ。ユウナ様

そっかそっか、今日の戦いで人間達にたくさん攻撃しちゃったけど大丈夫？

そう……ですね。お城に帰ったらユウナ様がおかえりの……を  
していただければきっと元気になれますわ

ふふっ、よしよし。

帰ったら抱きしめてしてあげるよ。

はい！

よし、冗談っぽく甘える余裕があるなら大丈夫だね。  
最後は麒麟だ。

今日一番の働き者だもんね。  
なんだかノリノリで人間を脅してたけど、大丈夫かな？

問題ない。あれは我なりのじゃれ方だ

あはは……。

麒麟ってば威厳のある見た目の割にお茶目だね。

というわけでみんな問題無しだね。  
さて、少しだけ平和な日々が続きますように……と。



## 21・見送り

あたしは麒麟の背中に乗って大空を飛んでいた。  
少し離れたところにグリモアさんが座ってる。

これから人間と休戦の約束をしに行くらしい。  
そのあたりはあたしによくわからないのでグリモアさん任せだ。  
隣ではリリアさんがあたしに抱きつくように寄り添っている。

魔物に対して怯えているのであたしに抱きついてるわけで……役  
得である。

「リリアさん、大丈夫かな？」

「は、はい……。もっと近くに行っていていいでしょうか？」

「うん、好きにしていよいよ」

リリアさんはあたしにこの上なく密着してくる。

腕に押し付けられる胸のやわらかさに喜びつつ、あたしとの違い  
に少し切なくなる。

そのあたしのささやかな胸は不満でいっぱいだ。

ちゃんとリリアさんは帰ることができるのだろうか？

グリモアさんいわく、書面にてだいたいのごことは合意済みらしい。  
あとは直に会って調印をするだけだとか……。

書面を人間のお偉いさんのところに送り着けつつ、会話までして  
しまうグリモアさんがすごい。

なんでも2枚1組の紙を用意し、それらは片方に文字を書くとも  
う片方にも文字が浮かびあがるらしい。

これを1枚相手に送れば会話ができると言うすごい代物だ。

もう少しで予定の場所までたどり着く。

あたしがプロメイティア様らしきおっさんから神託を受けたあの神殿だ。

なんでもアルティアナの見ている場所で約束をすることに意味があるとか。

いきなり攻撃されたりとかはないと思うけど……その時は頼んだよ、ミリィ。

おまかせですよ。ユウナ様はうちが守るのにや。麒麟様もいるので安心なのですにやよ

うん、そうだね。

麒麟もミリィも頼りにしてるよ。

ちなみにあたしはミリィと合体状態だ。

姿は普段のままとなっている。

さて、見えてきたかな……。

ちよいと準備をせねば……。

「リリアさん、悪いけど縛っちゃうね」

「はい……」

「今のうちしか言えないから言うっておくね。さようなら、そしてありがとうね」

「はい……さようならユウナ様」

あたしはリリアさんの腕を後ろ手で縛って、口も塞ぎ目隠ししました。

魔物の元でひどい目にあっていたと思わせる証拠が必要なんだ。

麒麟に怯えているためか、顔色は悪くなっているのぢょうどいいい。

体に傷とかはないけど、これはさすがにしたくない。

では到着したようなのでちび麒麟に連れられて降りよう。  
ちび麒麟は透明なので下にいる人から見たら、謎の魔力で浮いて  
いるように見えるだろうな。

神殿にはお偉いさん達が集まっていた。

会ったことあるんだろうけど覚えてないや。

わかるのは神官長のゼヴおじいさんくらいかな。

悲しそうな顔でこちらを見ていてちよっと居心地が悪い。

どうせなら睨んでほしいよね。

調印とやらは無事に終わった。

リリアさんも無事に引き渡した。

これで……リリアさんの件は無事解決したんだよね？

さあお城へ帰ろうか。

帰る途中であたしはリリアさんとお揃いで作ったイヤリングを左  
耳に着けた。

リリアさんも向こうで着けてくれたらいいな……。

さて、お城に帰ったら気分を一新してあたしの部下面接をしよう。  
麒麟の上でグリモアさんに相談だ。

もう例の犬っ娘は採用決定なので面接をすると決めた。

あと1人くらい募集したいわけだけど……。

「ユウナ様、男性陣からもチャンスが欲しいとの声があります。一  
応目を通すだけお願いできないでしょうか？」

グリモアさんにこう言われちゃった。

たしかに女の子しか募集してないもんなあ。

うーむ……。  
一応見るだけ見るか。

「わかった、じゃあ集めてみてね。採用したくなる子がいるかはわからないけどね。実はあたし……男が苦手で……」  
「かしこまりました。見るだけ見ていただければ男性陣も納得するでしょう」

そう言ったグリモアさんはなにかしら書類を作成してそれをお城へ飛ばしたようだ。

いつでもどこでも働き者だねえ。

お城に帰って遅めの昼ごはんを食べ、広間へ赴く。

うーん……男だらけ。

なんとも食欲がわかないな……。

イケメン多いけどそんな興味ないし、かわいい系ならまだいけるかな……。

あれ？ なにか1人異質な子がいるぞ。

なんだかフリフリな感じのピンク色のドレスを着ている。

とっても可愛らしいけど……男だよな？

近寄ってみると、猫かな？

てゆうかミリイの弟？

顔をこの上なく真っ赤にしてうつむいている。

話しかけてみよう。

「こんにちは、ミリイの弟君だよな？ 可愛い格好だね」

「ユウナ様、こんにちはですよ。この格好は……お姉ちゃんがユウナ様が可愛い格好が好きと言って無理矢理……」

「ふふっ、よく似合っくて可愛いよ」

「ほ、ほんとですかにゃ？ 嬉しいのですにゃ」

「うん、このあと面接においでー」

「はいですにゃー！」

ミリイの弟君は大喜びだ。

それはいいんだけど……周りがおかしな感じでざわざわしてる。

可愛い格好か……とか、女装なのか？ とか、語尾に『にゃ』をつけばいいのかとか。

全部間違ってるからやめてね……。

ここにいる男の魔物がみんな女装してにゃーにゃー言おうものならあたしは発狂しそう……。

さて、他にめばしい魔物はいなかったので終了とさせていただきます。

若干かわいそうな気もするけど仕方がない。

あの子たちにも素敵な相手が現れることを願っておこう。

部屋に戻ってきて面接の時を待つ。

まず最初にミリイの弟君で、次が犬っ娘だ。

おねえちゃん、ちょっといいかな？

のんびり待っているとチルちゃんが慌てたようなテレパシーを送ってきた。

どうしたのかな？

なんかね、お客さんがいっぱい来て……大きめの女性用の可愛い服を作ってほしいって言うの。それもみんながみんなだよ。おかしいよね？

その原因はあたしだね……。  
チルちゃん、申し訳ないんだけどグリモアさんのところに行って  
くれるかな……。  
かくかくしかじかで……。みんなの勘違いを傳達してほしいって……。

わかったよー、このままじゃ大変なことが起こりそうだから行  
ってくる。みんなにやーにやー言ってるし

まかせたよー、このお城の平和はチルちゃんにかかっているから  
ね。

ふう、あたしの行動一つでえらい騒ぎになるんだな……。  
いろいろ気をつけよう。

ユウナ様、今よろしいですかにやー？

今度はミリィだね。

何の用かな？

うちの弟が面接してもらえたことになったみたいなので、お礼  
を言いたいのにやー

お礼なんていいんだよー。

ミリィがさせた格好可愛かったしね。

そうなのですにやー！うちの弟はらぶりーなのですにやよー。  
それですにや、うちも面接に同行してはだめでしょうかにや？

同行？

なんでかな？

うちの弟は人見知りだし緊張する子なので、ユウナ様の前で何も話せなくなる恐れがありますのによ。だからうちが保護者としてですにゃあ……

うーん、あたしと普通に話してたけどなあ。

ミリイの心配し過ぎじゃあないかな？

というかさ……ミリイが弟君と一緒にいたいだけじゃないの？

ぎくっ……ですにゃあ

やっぱりそっか、でもいいよ。

一緒においでー。

ありがとなのですにゃー

ミリイってば弟離れしてないんだなあ。

でも一緒にくるのも楽しそうだからいいか。

さあ、あたしの可愛いモン娘が増えるぞー。

## 22・あたしの可愛いモン娘？猫男の娘

「ユウナ様ー、お邪魔しますのにやあ」  
「し、失礼します……にやお」

元気よくミリイが入ってきて、その後ろに弟君が続く。  
女装させられてとっても可愛らしいのだけど、恥ずかしいのか真  
つ赤だ。

あたしは好きだけど……嫌がってるんだとしたらやめさせてあげ  
るべきかな。

「ようこそ、待ってたよ。ところで弟君すごく恥ずかしそうだけど、  
無理にそんな可愛くしなくてもいいんだよ」  
「ユウナ様、実はこの子はこういう格好が好きなんだにや。小さい  
頃はよくうちの服を着ようとしてたんにやよ」  
「お、お姉ちゃん……恥ずかしいから言わないで……」

おや？

ミリイが無理矢理着せたのかと思いきや、弟君も好きなのか。  
これが俗に言う男の娘ってやつかな。

「じゃあ自分でちゃんとユウナ様に言うのにや。ユウナ様にはすべ  
てをさらけだすにやよ」  
「うん……。ユウナ様、僕……可愛い格好好きなんです。あの、変  
じゃないですか？ にやお……」  
「もちろんだよ。とってもあたし好みで可愛いよ」  
「にゅっ……」



この格好が好きというのであれば、面接に入ろっかな。まずじっくり見つめよう。

まるでお姫様のようなフリフリの着いたドレス。スカートは膝くらいで、ミリイとそっくりな綺麗な脚がのぞいている。

顔はミリイとほぼ同じで若干男らしいくらいだ。

髪が短いから簡単に区別がつくけど、もし同じ髪型にしたら判別しにくいぞ。

さて……まずはいつも通り特技から聞くか。

「あなたの特技を教えてくださいるかな？」

「はい。僕はお姉ちゃんと同じように治療ができますにゃ。ただ、お姉ちゃんほどではないんですにゃ」

「そうなんだ」

「ユウナ様、続きはうちが説明するのにゃ。弟は怪我の治療こそ苦手だけど、なんとお肌のケアとかできてしまうのですにゃ。これは内緒の情報にゃのですが、弟が舐めるとおっぱいも大きくできるんですにゃよ」

「そ、そうなんだ……」

ふうむ……あたしのおっぱいも舐めさせれば大きくできるわけか。チルちゃんのは舐めさせないようにしないと……。

おねえちゃん、チルのこと呼んだかな？

ああごめん、呼んでないよ。

ちよっとチルちゃんのこと考えてただけ。

チルちゃんはずっと今のままでいてね。

よくわかんないけど、チルのこと考えてくれてたんだね。嬉し

いなあ

いつでも考えてるよー。

それじゃ面接中なんでまたね。

またなのー

「とうわけでユウナ様、弟によるお肌のケアを試してみませんか  
にゃ？」

「えと……ちょっと恥ずかしいかな……」

今まで散々恥ずかしいことをやってきた気はするけど、相手が男  
だと話がちよつと違う。

いかに可愛らしい男の娘といえども、少し恥ずかしいぞ。

「だったらまず……弟に恥ずかしいことをさせるのにゃ」

「えっ？ お姉ちゃん？」

「ん？ どういうことかな、ミリィ」

「ちよつと相談するので待っててくださいなのにな……」

ミリィと弟君は部屋の隅でひそひそ打ち合わせを始めた。

恥ずかしいよーとか、これでユウナ様喜ぶからとか、いろいろ聞  
こえてくる。

なにか楽しそうなことが始まる予感がするかも？

とりあえず……床に正座して待つことにした。

やがて打ち合わせが終わったようだ。

弟君がゆっくりとあたしの前にやってくる。

「ユウナ様……僕の……おぱんつを見ていただけますかにな？」

「はっ！」

そうきたか……。

もしこれがギャグ漫画であればあたしは鼻血を噴き出しているだろう。

それくらい今の弟君は可愛いのだ。

瞳を潤ませて、スカートのすそを震える手で握っている。

「あの……やはり御迷惑でしょうか？ にゃうう……お姉ちゃん」  
「あ、あのね。嫌じゃないんだよ。ただ、恥ずかしいなら無理にそんなことしなくてもね……」

「たしかに恥ずかしいのですが……ユウナ様に見ていただきたいのですにゃ。この日のためにとっておきの履いたので……にゅう……」

なんだろうか……。

今までのどの女の子よりも可愛いんだけど……。

あたしはどきどきしながら無言でうなずく。

「ではあの……お見苦しいかもしれませんが……」

弟君の手がゆっくりとスカートを持ち上げていく。

こないだ鳥っ娘ピイでも同じことをした気がするけど。それ以上にどきどきだ。

やがて見えてくる水色の布地……。

弟君の顔は沸騰しそう。

あたしも顔が異様に熱いぞ……。

「み、見えていますかにゃ？」

「う、うん……少しだけ見えてる……」

「じゃあもう少し上げますのにゃ……」

そして見えてきたおぱんつ。  
今まで見てきたものと違う……。  
それはもちろん、この子が男の子だからあるふくらみ……。  
うーん、大きくなってはいないようだ。  
なっつても困るけどさ……。

「ユウナ様……いかがですかにゃあ？」

「うん……可愛い」

「それは嬉しいですよ……。たくさん見てくださいにゃあ」

「えっとあの……触ってもいいかな？」

「えー？ えっと……ユウナ様のお好きなようにしてくださいにゃあ」

……

「じゃあ……」

思わず言ってしまったけど……いいのかな？

水色おぱんつのふくらみに向かって人差し指を伸ばす。

「あひゃあんっ！」

「あ、ごめんね……」

「い、いえ……」

このふくらみ……。ぶにつてやわらかい感触。

こ、これが男の子の触り心地が。

悪くないかもと思ってしまっ……。。

あたしは男は苦手だけど、男の娘ならいけると判明してしまった。  
もう一度触ろう……。ぶにつ……。。

「にゃっ……」

弟君の色っぽい声を聞いて癖になりそうなたたしがいる。  
あれ？ ちょっと大きくなってない？

なんだかこのままだと大変なことになりそうなのでここで終わる  
う。

あたしは立ち上がって弟君のぱんつから目をそらした。

「すごく可愛かったよ、ありがとね」

「はい……見ていただいてありがとうございます」

「じゃあご褒美」

「にゃうううううー！」

あたしは弟君を抱きしめてみた。

ミリイと比べて少しだけ固いかな？

でもいい匂い……。

おなかあたりになにか出っ張るものが当たる気がするけど気にし  
ないことにしよう。

そして床に崩れ落ちる弟君。

いつも通りの反応だね。

「ミリイ、弟君をベッドに運ぼうか」

「にゃいっー！」

ミリイと一緒に弟君をベッドに運び、あたしとミリイも横になる。

名前考えようかなあ。

でもどうせなら……。

「ねえミリイ、一緒に名前考えようよ」

「にゃんと？ いいのですかにゃ？」

「えー？ 僕に名前をくださるのですかにゃ？」

「うん、あたしミリイだけじゃなくて弟君も好きになったよ。それ

に、同じく弟君を好きなミリイと一緒に名前を考えたいな」

「にゃうー、嬉しいのですにゃ」

「ユウナ様が僕のことを好き……」

「じゃあちよっと待っててね」

あたしを中心に川の字で寝ているから、なんだか家族のよう。

さあミリイ、名前を決めるよ。

うちの名前と少し似たのがいいのにゃあ

そうだね、あたし的にはミで始まる名前がいいんだ。

いいですよにゃあ。可愛い名前がいいのですにゃ

ミラ、ミリ、ミル、ミレ、ミロ……うーん。

ユウナ様、ミディとかどうかにゃ？

ミリイとミディか……。

たしかに双子にはいいかもしれないね。

よし、あたしも気に入ったから決めちゃおうか。

はいにゃあ！

「決まったよ、あなたの名前はミディ。どうかかな？」

「ミディ……ユウナ様と。お姉ちゃんが考えてくれた僕の名前……」

「そうにゃよー、気に入ったかにゃあ？」

「もちろん気に入りました……。ああ……プロメイティア様……」

ふふっ、ミリイも面接のときこんな風にプロメイティア様の名前

をつぶやいてたことを思い出しちゃった。

「ミディもプロメイティア様のこと大好きなんだね」

「はい。プロメイティア様のおかげで僕は生まれ、お姉ちゃんとお会いしましたにゃ。そしてユウナ様とも会えたんです……にゃお」

「うん、そうだね。あたしもミリイとミディに巡り合えたことをプロメイティア様に感謝するよ」

「はい……」

さて、名前をつけたってことは誓いのキスなわけだけど、なんとも恥ずかしいぞ。

男の子だしなあ……。

あたしの初キスはミリイで、初男の子とのキスはミディになるわけか。

うーん、どうしよう。

「ユウナ様、誓いのあれをミディにもしてほしいのにゃ」

「そ、そうだね……」

「誓いの？ それはなんででしょうか？ 僕もぜひしたいのですにゃ」

「じゃあ……先にミリイがお手本見せようか」

「にゃにゃ？ では遠慮なく……」

なんとなく今日はあたしからキスするより、されたい気分。

ミリイはもう慣れたのか、ゆっくりと顔を近づけてきた。

あたしは目を閉じてそれを迎える。

ミリイとのキス……やっぱりいいなあ。

「にゃにゃにゃにゃにゃにゃあああああ！？」

あたしとミリイのキスを見て大慌てのミディ。

今からこの子はこれができるのかな？  
やがてミリイがあたしの顔から離れてミディに「うん」言うのだ。

「さあ、ミディの番じゃよ」

「ほ、僕の番……」

あたしは体をミディに向けて、目を閉じて待つことにする。  
うん、あたしからが恥ずかしいからって任せたのはずるいかな？  
きつとミディは今顔を真っ赤にして固まっていることだろう。  
でも……男の子なんだからがんばれ！

「ほら、まずユウナ様の頭をしつかりと支えるのにゃ」  
「う、うん……。ユウナ様。失礼しますのにゃ」

ミディの震える手があたしの頭と顔に添えられる。  
すごく熱い……でも気持ちいいかな。

そのまま待つこと数分……。

ようやくあたしの唇に柔らかい感触がやってきた。

男の子との初キスしちゃったよ。

いや……男の娘かな？

どちらにせよ……これはこれで悪くないかもしれない。

キスの時間は、先ほどのミリイとぴったり同じだった。

「これでミディもユウナ様の部下だにゃー」

「うん！ ユウナ様、よろしくお願ひしますね」

「うん、よろしくね。ミディとミリイ」

「それではさっそく……ユウナ様に美しくなっただきますにゃ  
あ」

「え？ きゃあー！」



ミリイがあたしの服を脱がそうとしてくる。  
ちよ、ちよっと待って……。  
という間もなく下着姿にされちゃったあたし。  
ミリイめ、やるようになった。  
ミリイはもちろん顔が真っ赤つか。  
たぶんあたしも真っ赤だな……。

「では弟のお肌ケアを楽しんでくださいにゃあ」  
「う、うん……。でもあたしだけ下着姿って恥ずかしいよ……」  
「じゃあうちらも脱ぐのにゃあ。ほらほらミリイも」  
「うん……」

ミリイは白い上下お揃いの下着。  
ミリイは水色の上下お揃いの下着……。

「あ、ブラもしてるんだね……」  
「はい……。胸がないのにごめんなさい……」  
「ふふ、可愛いから問題ないよ。でもこっちは……」

あたしはミリイの股間に目をやってしまつ。  
先ほど見た時よりふくらみが大きくなって……。  
あたしの下着姿のせいだよな？

「う、ごめんなさい……。お見苦しいものを見せしまいましたに  
ゃあ」  
「いいんだよ。男の子だもんね。あとでなでなでしてあげる」  
「にゃあああ！？」  
「じゃあさっそく始めてね」  
「はい……」

ミディがあたしの肌を舐め始める。  
なぜかミリイも同じように舐めてきた。

「ああんっ!」

「、これは気持ちよすぎる……。」

ミリイに舐められていただけでもよかったのに2人同時だなんて

……。

これはいろいろやばいぞ……。

「ユウナ様はおっぱい大きくなりたいたいのかじゃ?」

「なりたいけど……今日はやめとく……。」

この状態でおっぱいなんて舐められたらえらいことになりそうだ。  
また今度にしてもらおう……。

今度があるかはわからないけど……。

この後悶えながら30分ほど全身を舐められ続けた……。

悶えまくって疲れたと思いきや……体調がばっちりとなっている。  
なんだか肌も潤っている気がするし、この双子の治療とケアは素  
晴らしいようだ。

「ユウナ様……いかがでしたでしょうかにゃ?」

「うん、すごく良かったよ。じゃあご褒美に……。」

「にゃううー……。」

ミディの頭をなでなで。

猫耳がぴくぴくして可愛いな。

「ユウナ様、うちもなでなでほしいのじゃあ」

「ちょっと待ってねー。ミディのこっちも……」

あたしは先ほどした約束の通り、ミディの股間のふくらみをなでなでした。

さっきはやわらかかったのに、今は硬いな……。男の子の体って不思議だ。

「にゃううううー!?!」

ミディがベッドから跳び起きて逃げるように部屋の隅へ行っつて、ずくまってしまった。

「ミディ、どうしたのかにゃ!?!」

「お、お姉ちゃん……僕お漏らししちゃったみたい……。」「にゃにゃにゃんとお!」

ミリイも慌ててベッドから降りてミディに駆け寄る。

「ユウナ様の前でなんで粗相しちゃうんだにゃあ!」

「ご、ごめんなさい……」

「ユウナ様、ちょっと今日はここで失礼するのにゃあ」

ミリイは素早く服を着て、ミディにも服を着せて部屋を出ていった。

あたしは1人取り残されてぼかんとする……。

お漏らして……もしかして……出ちゃったのかな？でも少しなでただけで出ちゃうものなの？

あたしは手に残る硬柔らかい感触を思い出しながら、可愛いなら男の子も悪くないと思うのであった。

## 23・あたしの可愛いモン娘 犬娘

ミリイとミディが早々に退散したせいで、あたしは少し暇になってしまった。

とりあえず服を着て犬っ娘を待つことにする。

今のうちに名前を考えようか。

7番目のあたしの部下になるわけだけど、この世界で初めて見た魔物。

どうしようかなー。

ココアとかチヨコとかいろいろ思いつくけど……。

犬っぽい美味しそうな名前になっちゃうんだよなあ。

本人の希望も聞いて考えるべきか。

コンコン。

しばらく悩んでいると犬っ娘が来たようだ。

あたしは素早くドアを開けて迎え入れる。

「いらっしやーい。入って入って」

「はい、失礼しますね」

「さっそくなんだけど、どんな名前がいいか希望はある？」

「え！？ いきなり名付けていただけなのですか？」

「うん、もうお話はたくさんしたし名前はつけるって決めてたんだ。それに名前をつけてから試したいことがあるしね」

この子は一度死んで能力を失っている。

合体することでその能力が戻ったりしないかなと考えているわけだ。

「はい……ありがとうございます。でも名前ですか……。つけていただければなんでもいいと考えていましたので、すぐには思いつかないですね」

「そっかあ……。じゃああなたの特徴を教えてくださいませんか。失った特技って何だったの？」

「わたしは隠密に長けていました。体を透明にしたり気配をなくしたりできるんです。潜入にはうってつけの能力でした」

透明……みんなが憧れの透明人間になれるのか。

それはいい能力、まるで忍者だね。

忍者犬か……。

忍び……。こつというのはどうだろうか。

「シノン……って言う名前はどうかかな？」

「シノンですか。とても素晴らしい名前です。それを名付けていただけののですか？」

「うん、あなたはシノンだよ。よろしくね」

「はい！」

「じゃあ……目を閉じてくれるかな。誓いとして……あることをするからね」

「はい……お願いします」

素直に目を閉じる犬っ娘。

何をされるか知っている感じた。

というわけで遠慮なくいただきます。

犬っ娘のふわふわした毛をなでるように顔に手を添えてと。いつものようにゆっくりとキスをした。

「んん……」

犬っ娘は体をぴくつと震わせながらあたしのキスを受け入れる。  
これであなたも……あたしと人生を共にしていくんだよ。

「ユウナ様……シノン……幸せです」

「うん、あたしも幸せだよ」

「能力を失ったわたしではたいしてお役に立てませんが、よろしく  
お願いしますね」

「あ、それなんだけどね……」

シノンにあたしの能力をすべて話して聞かせた。

合体でどうなるか試したいことも伝えて、さっそくやってみよう  
かな。

「神獣合体！ シノン！」

「はい！」

シノンがあたしの中に入ってくるいつもの感覚。  
慣れたけどやっぱり気持ちいいなあ。

これがユウナ様との合体……なんだか力があふれてくる感覚で  
す

じゃあシノンがこの体動かしてみてね、失った能力がどうなっ  
ているかもね。

はい、やってみますね

あたしの体は鏡の前に移動した。

シノンが集中しているのを感じる。

次の瞬間、鏡に映っていたあたしの姿が消えた。

これは……透明になっている？

ユウナ様！ できました。シノンは以前と同じように能力が使えます！

そっかあ、予想通りあたしと合体したら能力が使えるんだね。いろいろやってみてね。

はい！ とても嬉しいです。やってみますね

今度は鼻に集中しているようだ。

鼻から大きく息を吸い込むと……。

なんだかいろんな香りが鼻に入ってくるぞ。

むむ？

ミリイの香りもあり、ミリイがどこにいるかがわかる。

というかあたしが知っている全員の香りを感じることができ、居場所もわかる。

匂いを嗅ぎわけることができるんだ。さすがわんちゃんの魔物だね。

わおーん！ 能力なしでも匂いの嗅ぎわけはできるのですが、ユウナ様の魔力のおかげで精度がすごいです。さすがユウナ様！

ふふっ、喜んでくれて嬉しいよ。

じゃあ……あたしにもその能力を使う練習をさせてね。

お城の中をこっそり探検だ。

シノンに透明になる方法を聞いて実践……。

というわけで透明になった状態で気配も消し、グリモアさんの部屋の前まで来てみた。

グリモアさんは普段城の中をすべて見とおすことができると言っていた。

そのグリモアさんを欺くことができれば、この能力はかなり使えるってことだ。

では、ドアをこっそりと開けて侵入だ。

グリモアさんは本棚に背を向けていたのでドアが開いたことに気づかないようだった。

こっそりと背中接近だ。

なにか独り言でも言わないかな……。

「ユウナ様のおかげで城の中の雰囲気が変わって来ていますね……。私もヴェリア様ともっと仲良くなることができるかも……。」

おお！

普段クールなグリモアさんがヴェリア様のことを恋焦がれている？  
これはいい独り言を聞いた……。

って、覗きはよくないよね。

隠密能力を確かめる目的は達したんだ。

またこっそりと部屋を出よう。

ふう、とても緊張しました。まさかグリモア様の目まで欺けるとは……。ユウナ様の力はすごいんですね

ふふっ、これはシノンの力でもあるんだよ。

じゃあもっといういろいろやってみようかな。

この能力で他の人を見えなくすることってできないかな？

近くにいることで、気配を少し遮断することは以前もできていました。ユウナ様の力があればそれも可能かもしれませ



じゃあやってみよう。

お外に行こうね。

麒麟の姿隠せたらいいなってずっと思ってたんだよ。

麒麟様ですか。たしかにとても目立つ姿ですものね。でもあの素敵な姿を隠すのはもったいな気がしますね

シノンも麒麟好きなんだね。

麒麟ってば人気者だ。

そうですね。麒麟様はプロメイティア様が作られた最強の神獣とお聞きしました。麒麟様の近くにいるとプロメイティア様を感じることが出来る気がします。皆同じように言っています、だから大人気なんです

なるほどねえ、それにかっこいいもんね。

よかったね麒麟。

今から時間あるか麒麟にも聞いてみないとね。

問題ない。城の外で待っている

大丈夫そうだ。

お城の外に出ると麒麟の巨体が待ち構えていた。とりあえず背中に乗ってみようか。

麒麟様のお背中に乗れるなんて感激です！

そかそか、しっかり楽しむんだよ。

麒麟は大空へと飛びあがる。

では、透明になる能力を麒麟にも使えないか実験だ。

シノン、一緒に集中だよ。

はい！

集中した結果、麒麟の姿が見えなくなった。

自分の姿も見えないので、なんだか幽霊にでもなつて飛んでいる気分だ。

無事成功だなあ。

次は気配か……。

ちよつとあつちの鳥の群れに向かって飛んでみて。

うむ。これはなかなか楽しいものだな

麒麟つては見た目に反して子供っぽくしていたずらつ子なところがあるようだ。

鳥の群れにゆっくりと接近しているであろう麒麟。

麒麟の力なのか、風は起きていない。

鳥の群れに接近したが、鳥は気付くことなく普通に飛んでいる。

しばらく一緒に飛んでみた。

麒麟も心なしが楽しそうだ。

能力の確認もできたつてことで、しばらく空中散歩を楽しんでからお城に帰った。

あたしのお部屋にて合体解除だ。

「楽しかったー。シノンはどうだった？」

「はい、とても楽しかったです。でも合体をとくとやはり能力は使えなくなりますね……。でも……。あら？」

「どうしたの？」

「今まで完全になくなっていた能力が少しだけ戻っているようです。

ユウナ様の魔力のおかげでしょうか。本来なら能力が戻るにはもつと時間がかかるはずなのですが」

「ふふっ、じゃあ頻繁に合体してたら回復も早まるかもだね」

あたしの能力ってすごくないなあ。

魔物と仲良くなるのに最適だし、こんなに喜んでもらえることができるし。

プロメイティア様に感謝だね。

「シノン、今度機会があつたら一緒にお墓参り行こうね」

「はい！ ぜひお願いいたします」

シノンがお世話になった人間のお墓がここより遙か南にあるはず。いつか一緒に行こう。

そう約束して今日の面接は終了した。

さあ、ますます楽しくなってきたぞ。

## 24・リリアさん救出作戦

あたしはしばらくの間のんびりと過ごしていた。

アクアたちお魚系の魔物たちとお魚パーティーもした。

肉食系の魔物達に連れられて外でバーベキューパーティーもした。狩りをする予定が、動物達があたしに食べてほしいと身を差し出してきたのには少しびびったが……。

今日は何をしようかと考えていた時、急に頭の中に声が聞こえてきたのだ。

ユウナ様……お助け下さい……

今のはリリアさんの声？

どうしたんだろうか。

こちらから呼びかけても、それ以降何も聞こえない……。

あたしはすぐさまメアのところへ行き、事情を説明して合体した。メアが集中して何かを探っているようだ。

ユウナ様……おそらくリリア様は拷問を受けているようです

え！？

拷問って……。

やっぱり魔物のところへ行つて戻ってきたから？

グリモアさんの交渉も意味がなかったってことかな。

たしか友好の証としてリリアさんを返すと言って、リリアさんが無事な限り魔物側から攻撃をしないと約束していたように思う。

命は無事……と解釈しているのかもしれない。拷問して何かしら情報を引き出さねばと思うほど魔物に対して恐怖しているのかもしれないね

全く意味がわからないけど……メアが言っている通りなのかな。拷問なんかしたって意味無いのに……。何にせよ今からの行動は決まっている。助けに行くんだ。リリアさん、待っていてね……。

あたしはシノンと合体した状態で麒麟の背中に乗って飛んでいる。目指すは北の都ノースリア。

麒麟の姿を消して近づくこともできるし、ある程度近づけば匂いでリリアさんの居場所もわかるはずだ。

さらに隣にはピイもいる。麒麟と同調して風の魔法を使うことで、麒麟の速度が上がっているようだ。いろいろ便利なきがができるんだねえ。

おかげで最初に北のお城へ行った時より早くノースリアに到着できた。

麒麟が街の上空にいるけど、透明なため気付かれてはいない。シノンと一緒に鼻に意識を集中してみる……。

どうやら地下のようですね。あちらのあたりではないかと

ふむ、あれはミリイとミディが捕まっていた地下牢かな？

リリアさんまであんなところに閉じ込めるとは許すまじ。

では麒麟を送還して、ちび麒麟と一緒に行ってみようかな。  
ピィは鳥に化けて上空から偵察しててね。

かしこまりました

さて、では潜入開始だ。

と言っても誰にも気づかれないので楽なものだ。

地下への階段を降り、リリアさんの匂いの元へと移動していく。  
匂いからすると複数の人間がいるようだ。

近づくと悲鳴が聞こえてきた……。

鞭を打つような音もする。

「早く白状しろ！ お前は魔物が化けた姿ではないのか？」

「違います……。いやあああつ！」

なんてことを……あたしの目には牢の中で鎖につながれ鞭打たれるリリアさんが映った。

周りにいるのは身分の高い人たちだろうか？

ちび麒麟……あの鞭打ってる兵士と、周りにいる偉そうなやつらを気絶させて。

ちび麒麟たちは音もなくそいつらを気絶させたようだ。

さすが優秀だね。

あたしはリリアさんに近づいて、姿を現す。

「リリアさん、大丈夫？」

「ユウナ様……なのですか？」

そう言っただけリリアさんは気絶したようだ。

体中に鞭の跡があつて痛々しい。

とりあえず治療しなくっちゃ。

「ミリイ、ミデイ、召喚！」

リリアさんの拘束を解放して治療を任せる。

ちび麒麟は人が来ないか見張つててね。

あたしは……この拷問をしたやつらに制裁を加えたい……。

あたしは怒りが頂点に達している……。

「メア召喚……神獣合体！」

ユウナ様、やはりリリア様が大変な目にあわれていたようですね。わたしを呼びだしたのはリリア様の精神的ケアでしょうか？

いや、それは帰ってからじっくりするよ。

今はね……リリアさんをこんなひどい目にあわせたやつらをこらしめたいんだ。

こいつらにメアの持っている悪夢を見せてやることはできる？

えっと……それは可能ですが……

じゃあやつっちゃって！

あとこいつらに命令出したやつらもまとめて悪夢を見せてやって。

わ、わかりました

あたしと合体したメアの中から嫌な感じの魔力が出ていく。

それらが目の前で倒れている人間達に吸い込まれていく。

こいつらの夢を通して命令した人間達にも悪夢が移動するはずだ。

これでこいつらにおしおきができる。

そう思った直後、メアの意識が落ちていった。

強制的に合体が解除される。

メアは気絶しているようで、すごい熱が出ているような状態？  
もしかしてあたし……とても酷いことをメアにやらせちゃった？

「ミリイ、ちょっと来て！メアの治療はできるかな？」  
「にゃにゃ？　メアさん倒れちゃってるのにゃ？」

ミリイが来てくれてメアを見るが、怪我でなければ治療はできないかもしれない。

「ユウナ様、うちには無理なのにゃ。お城に返して医療班に任せべきなのにゃ」  
「わかった、そうするね……」

メアのごときは心配だけど、ここではどうしようもないので送還しかないか。

お城にいるアクアとチルちゃんにお願いして送還だ。

メアのことを考えず、怒りに任せて人間に攻撃したことを少し後悔……。

でも今はリリアさんを連れて帰らなくては……。

「リリアさんの怪我はどうかかな？」

「応急処置は出来ました。後はお城でしっかり治療すれば体は大丈夫ですよあ」

「ありがとね。じゃあミリイとミディは送還するね。ミリイはリリアさんに着せる服を用意してくれるかな？　じゃあシノン、また合体だよ」

「はいにゃあ」

「はい！」



あたしはリリアさんをお姫様抱っこした状態で透明になる。  
このまま気付かれないよう逃げ出そう。  
なんともあつさりした救出だけど、問題はこれからだ。  
リリアさんを元の生活に戻すことは不可能になってしまった……。  
広いところまで移動した後、麒麟を召喚する。  
なんだか騒がしい声が聞こえるけど知ったことではない。  
早く帰ってリリアさんとメアをなんとかしなくちゃね。

麒麟の背中にてリリアさんを見ている。

衣服がぼろぼろでなんとも可哀想な状態だ。

シノン、先に戻ってってくれるかな？

今からミリイと一緒にリリアさんを治療するんだ。

わかりました、先に帰還いたします

シノンを送還して少し待つ。

ユウナ様、服の準備ができましたにやあ

「よし、ミリイ召喚！」

「じゃおーん」

ミリイと一緒にリリアさんの服を着せかえる。

ここに来た時と逆だな……。

でもリリアさんの体には鞭のひどい傷がまだ残っている。

「ミリイ、この傷治せるよね？」

「ユウナ様と合体すれば余裕なのですにや。でもうちだけじゃ完全ではないので、この後ミディとも合体して治療するのにやあ」

「そっか、じゃあまずミリイと合体だね」

ユウナよ。神獣合体が魔物2体と出来ると言ったことを覚えて

いるか？ 絆の深い魔物同士であれば容易だ

おお、麒麟のいいアドバイスが来たぞ。

ではミデイも召喚だ！

「ミリイ、ミデイ、これから3人で合体するよ」

「にゃんと？ そんなことまで出来るのですかにゃ」

「僕合体するの初めてですが、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫！ やってみるね」

さあ、集中して……ちゃんとできるはずだ。

「神獣合体！ ミリイ！ ミデイ！」

「にゃんっ！」

ミリイとミデイの体が魔力の光に包まれてあたしの中に入ってきた。

これはすごいな……。

でも今はリアさんの治療が先だ。

気持ちいいとか考えている場合ではない。

2人とも力を貸してね。

にゃうっ！

なんだかミリイとミデイの声が一つに聞こえるな。

まあ気にせずリアさんの治療だ。

舐めるのが一番効果的らしいけど、なんだか不謹慎な気がして出  
来ない。

傷に手をかざして念じていこう。

ミリイとミリイの能力のおかげで傷がみるみる消えていく。

ユウナ様の力ですにゃ

ふふっ、あたしたち3人の力だよ。  
完全に治るまで力を貸してね。

もちろんだにゃあ！

こうしてお城に着くまでに治療は完了した。  
あとは心の傷だけど、それを直すためにまずメアだ。

城に着くとあたしは合体を解除した。

リリアさんのことをミリィたちに任せてメアの元へ急ぐ。  
治療班のおかげか、メアは意識を取り戻していた。  
しかし、かなり衰弱しているらしい。

人間に悪意を持って攻撃するとこんなことになってしまっんだな  
……。

「メア、大丈夫？」

「ユウナ様……申し訳ありません。いきなり倒れたりして……」

「ううん、あたしが無理させたから……。メアを癒したいんだけど、  
合体していいかな？」

「はい……お願いします」

「じゃあメア……神獣合体」

あたしはメアと合体してベッドに寝た。  
また一緒に夢の世界へ行こう……。

メアの夢の中……前回来た時にたくさん見えていた悪夢がかなり減っている。

人間達に押し付けちゃったからだね。

さて、来たはいいがどうしたものかな。

この状態で少しずつ心が癒えてくるのを感じます

そっか……でも根本的には解決しないよね。

さつき人間達に放った悪夢って回収できる？

よろしいのですか？

うん、さつきはかっとなってやりすぎちゃったんだ。

そのせいでメアが体調崩したんだし……元に戻そう。

はい……しかしもう少し回復しないとその力も使えそうにありません

そっか……他に回復手段はないのかな？

メアのためだったら何だってできるよ。

それではユウナ様、ひとつ甘えさせてください。わたしが今まで使ったことのない能力があります。それを使わせていただけませんか？

なんだろう？

もちろんなんだってするよ。

好きなだけ甘えてね。

人の素敵な夢を食べて奪う能力です。一生使うことはないと思

っていましたが、ユウナ様の素敵な思い出をわたしにください

夢を奪うか……。

きっとその言い方は違うよ。

あたしの素敵な夢を共有しようね。

はい、ではいただきます

なんだろう……頭にになにかの光景が浮かんできた。

その光景は夢の中だからか、あたしの目の前に現れる。

幼稚園の時のあたしだろうか？

その小さなあたしの前には男の子が立っている。

『あたしね、カズくんのお嫁さんになるんだ』

これは……あたしの小さい頃の記憶か。

昔好きだった男の子にこんなことを言った気がする。

あたしって昔は男の子が好きだったんだね。

こんな夢持ってたんだ。

素敵な夢ですね。これをいただいてもいいでしょうか？

これをあげちゃうとあたしは本当に男に興味がなくなるかもしれない。

でもいつか。

あたしには可愛いみんながいるんだしね。

メアにあげるよ……。

ではいただきますね

あたしの中から何かが失われていく感覚。  
そしてメアの心が満たされていくのを感じる。

ユウナ様のおかげで力が戻りました。悪夢を回収しますね

メアの夢の中はすぐに悪夢で満たされた。  
簡単に戻せるんだね。

これを戻したってことは体調も戻った？

はい、完全に回復しました。しかもユウナ様の夢をいただいた  
おかげで能力が向上しています

よかった……2度とあんな酷いことさせないからね。  
本当にごめんね……。

いえ、ユウナ様のためですから

うん、ありがとね……。

でも、メアになにかあっても嫌だからさ……もしあたしがまた怒  
りで我を忘れて同じようなことをさせようとしたら、断ってね。

わかりました

じゃあ目覚めてリリアさんのところへ行こうか。

はい、ではこのまま夢を渡ります

よろしくね。

次の瞬間、あたりの景色が変わった。  
恐ろしい魔物の姿や、リリアさんに拷問をしていた兵士の姿があ

る。

これはリリアさんの悪夢かな？

そうです。すぐに消してしまいましたでしょうか。ユウナ様も一緒に念じてくださいね

わかった。

リリアさんのことを考えながら念じると、その悪夢たちはすぐに消え去った。

終わったの？

はい、ユウナ様と合体しているおかげかすぐに終わりました。目覚めて会いに行きましょう

さすがメアだね。

さっそく目覚めてリリアさんの元へ行こう！

リリアさんの部屋に入ると、横になっていたリリアさんがとても嬉しそうな顔をしてくれた。

「ユウナ様！ 来てくださったのですね」

「うん、でもごめんね……。あたしのせいであんなことになって…

…。もうリリアさんを元の生活に戻すことができそうにないよ」

「そうですね……。でも、ユウナ様とここで暮らすのも悪くないと思っっています」

「え？」

「ここで数日暮らしたことで魔物がそんな悪い存在でないことも知りました。それに、何故だか急に魔物を怖いと思わなくなっているのです。以前は洗脳ではないかと疑いましたが、そんなこともない

「ようです」

「うん……嬉しいな。魔物のことをわかってくれて……」

「はい、というわけでよろしくお願いしますね」

「うん！」

リリアさんの中でどんな考えが巡っていたのかはわからない。

でもここで暮らすと言いだしてくれた。

それならあたしのすることはただひとつ。

このお城も、たくさんの魔物たちも、リリアさんもすべて守るんだ。

その方法をどうすべきか、あたしは無い頭を絞って考えることにした。



## 25・決意を胸に

リリアさんを助けた3日後。

あたしは麒麟の背に乗って中央都市セントトウクへと向かって  
いた。

目的は一つ。

勇者を召喚するための魔法陣と装置がある神殿を破壊する。

リリアさんによると勇者を召喚できるのはあそこだけだそうだ。

しかもあれを作るのに200年以上かかっていると聞く。

つまり、あれを一旦壊してしまえば長い期間平和になるんだ。

もちろん召喚できなくなるってことは帰還もできなくなる。

でも構わない。

あたしはリリアさんや名前をつけた魔物たちとここで暮らすって  
決めたから。

麒麟はいつも通り高速で空を飛び、数時間で北の都ノースリアを  
通り過ぎる。

中央都市セントトウクへは3日もあれば行けるだろう。

前回と同じく透明になっているので、誰にも気づかれないうらう。

時々広い場所に降りて休憩をしたが、基本的に麒麟は疲れないうら  
しい。

どうもあたしの体から出る魔力のおかげで常に体力全快となれる  
そうなの。

不思議だねえ。

途中でシノンがお世話になったという人間のお墓参りに行った。  
もちろんその人間が好きだったというキキヨウの花を摘んでた。  
この墓がある村は、あたしがこの世界で初めて魔物を見た場所。

魔物の死を見て、この世界に疑問を思った場所。

その時死んだ魔物……シノン結果的に生きていたわけだけど、あの時の出来事がなければあたしは魔物の世界に行ってなかったかもしれない。

だからシノン、あなたに出会えてよかったよ。

はい。わたしがお世話になったこの方が巡り合わせてくれたのだと信じています

そうだね……。

あたしもお墓にしっかりと手を合わせた。

この人も人間と魔物が仲良く暮らせる世界を望んでくれていただろうか？

いつかそんな日が来ることを願ってほしいな。

あたしもがんばるけど、きっとすぐには無理だからさ。

そう考えて墓を後にした。

その後何も問題なく中央都市セントトワークに到着だ。

あたしが召喚された神殿に到着する。

あの長い階段にはうんざりしたものだけど、空を飛ぶと楽しいや。

ここを壊せばもう勇者は召喚できなくなるはず。

そして当然召喚された勇者も帰れなくなる。

あたしは恨まれるだろうけど……覚悟の上だ。

ユウナよ、本当にいいのだな？

うん、召喚の魔法陣と神殿を破壊しちゃおう。

麒麟なら簡単だよな？

実のところかなり骨が折れる作業だ。ここはアルティアナ様の祝福を受けし場所だからな。ユウナの魔力をかなり借りることになるぞ

うん、いくらでも使っただね。

これが終われば魔力なくなっただって大丈夫だしさ。

魔力が尽きれば我はユウナとこうして話もできなくなる。少し残してほしいものだな

そっか。

じゃあほどほどに使い切っただね。

まずは神殿内にいる人間を追い払うところからだな。それは他の魔物たちに任せよう

そうだね、全員召喚して人間を追い払いつつ近づかないようにしてもらおう。

幸いこの庭には池もあるのでアクアも呼べる。

もしピンチになった子がいたらすぐに送還すれば大丈夫かな。

「ではいくよ。全員召喚！」

今現在はシノンと合体した状態だ。

一旦分離しよう。

猫娘ミリィ。あなたは人間を逃がしつつ、ケガ人を治してね。

猫男の娘ミディ。お姉ちゃんのサポートだよ。

人魚娘アクア。池の水でみんなをサポートしてね。

蚕娘チルちゃん。あの長い階段を逃げる人が転ばないように糸で上手いことしてね。

羊娘メア。ここを守りに来る兵士達を怯えさせて逃がしてあげて人間のためにさ。

鳥娘ピイ。上空からの偵察は任せた。

犬娘シノン。まだ力戻ってないだろうから無理せずにチルちゃんをサポートしててね。

みんな任せたよ。

あたしは……。

「神獣合体！ 麒麟！」

麒麟の力でもこの神殿を破壊するには手間取ると言っていたわけだし、これがベストだ。

なんだか自分が最強の存在になった気分だ。

ふむ、力がみなぎるのを感じるぞ。これならば……はあああああああつ！

あたしの体から魔力が外へ飛び出して拡がっていく感覚。今何したの？

周囲にいる魔物を活性化させた。これで皆普段の数倍の能力が発揮できるぞ

それは素晴らしい。

さすが最強の神獣だよ。

魔物を統べるリーダーって感じた。

じゃあ行こうね。

神殿からは突然の魔物襲撃によって人が逃げ出してくる。階段で転ばないように逃げてね！。

の  
転んでも大丈夫なように糸張ったよ！。人間に怪我はさせない

よしよし、えらいぞチルちゃん。

ユウナ様。神殿の中はほぼ無人ですよ。もう少し回ってみますが逃げ遅れはないと思いますよ。

うん、ありがとねミリィ。

人数不足かと思ってたけど、なにか人の形をした水があちこちに  
いるような……。

わ  
わたくしの水人形です。弱い存在ですが、驚かすには十分です

よしよし、さすがはアクアだよ。

あたしはたくさんの本がある場所を訪れていた。

ここには神殿や魔法陣の設計図もあるはず。

これを全部燃やしてしまおう。

歴史的価値のある本もあるんだろうけど、選り分けてる暇はない  
からごめんね。

麒麟の能力を借りてあたしは火を吐き出す。

気分はドラゴンだ。

あつさりと燃やしつくし、次は冷気を吐き出して消火する。

麒麟は自然破壊が嫌いだから普段はこれらの能力を使わないらしいけど、凄まじいな。

さて、次は魔法陣だ。  
どこにあるんだろう？

この神殿は巨大な魔法陣の上に建っている。神殿全体を破壊せぬよう床を破壊するところからだ。時間がかかると言った理由はそれだ

それはめんどそうだ……。でもやるしかないね。この石を砕くにはどうしたらいいんだろう？

爪を立てるなり拳で砕くなりやってみるといい。我の巨体にあつた力がユウナの小さな体に凝縮されていると思ってい

なるほど……。

試しに思いっきり床を殴ってみる。

激しい音と共に床の石が砕けた。

たしかにこれは簡単だ。

この石の片づけ……アクアにお願いできるかな？

かしこまりました。水でその石を運びます。これで階段にバリケードを作っておきますね

うん、よろしくね。

時間かかるから間違いなく兵士達が来ちゃうから。

下手したら勇者も来るかもしれないからね。

神殿の床を破壊し始めて30分ほど……ようやく半分かな。なかなか大変な作業だ。

それでも予想より早い。ユウナの体にある魔力はすさまじいな。

何故こんなにも魔力があるのか不思議でならぬ

そつだねえ……魔物から魔力を集めるって言ってたけど、こんな  
に集まらないよね。

ユウナ様！ 兵士の大群が階段を上って来ています

空で見張っているピィからの連絡だ。

とりあえず急いで魔法陣を破壊しなくては……。

みんなにはこのまま時間を稼いでもらおう。

チルちゃん、ここに人間が来たら危ないから登ってこれないよう  
に守ってあげてね。

任せてね。今日は糸が良く出るの。麒麟様のおかげだね

よろしくね、でも危なくなったらすぐ逃げてね。

さて、床の破壊を再開だ。

それからさらに30分ほど暴れた。

もう魔法陣の大半は見えているかな。

この魔法陣はどうやって破壊すればいいのかな？

床に手をかざして後は我に任せよ。ユウナの魔力を一気に流し  
込み破壊する

よし任せた。

あたしの中にある大量の魔力が両手に集まっていく。

それが魔法陣に流れ込んでいき……神殿全体が揺れ出した。

この魔法陣破壊の衝撃で神殿は崩れるだろう。これが終われば

すぐに逃げるぞ

うん、もうすぐ魔法陣は崩壊しそうだ。

え！？

それと同時に麒麟との合体が解け、麒麟はそのまま送還される。  
何が起きたの？

ぬかった……ユウナよ。今すぐそこから逃げるのだ

よくわからないけど……と、とりあえず脱出だ。

今の状態では普通の女の子でしかない。  
神殿が崩れてきたら助からないぞ。

ユウナよ、勇者たちにある魔力の正体がわかった。あの魔法陣から常に供給されていたようだ

え？ てことは今のあたしは魔力が無い状態？

魔法陣の破壊にほとんど使い切ってしまったようだ。残った魔力は逃げるために使うべきだ。最悪他の魔物を犠牲にしてもな

犠牲につて……。

たしかにあの子たちは生き返ることができるけど、犠牲になんてさせない！

あたしは必死に走って外へ出た。

「みんな、作戦は成功だよ。逃げよう！」

「ユウナ様！ 麒麟様からテレパシーで状況は聞きました。ピィさんと合体してお逃げください。それ以外のことには魔力は使わないでくださいね」



「え……どういうこと？ アクア」  
「兵士達が階段を登って来ています。今の状態で突破はできそうにありません。ユウナ様に生き延びていただくことがわたくしたちの願いです」

さつきまで麒麟の能力のおかげで皆の能力が向上していた。今はその反動で皆弱っているようだった。でもあたしだけ逃げるなんて嫌だよ……。

「と、とりあえずみんな集まって固まってね」  
アクアのいる池の前に皆で集まる。  
なにか逃げる方法を考えなくては……。  
門には兵士が到達していた。

なんとかはあったりで突破できないものかな？  
何も思いつかないまま兵士は庭になだれ込んできている。  
こちらを警戒しているのか遠くにいるのだが……皆弓を構えている。

「ユウナ様！ 急がねばピィさんと合体して逃げることも困難となりますす！」  
「そうですねやあ！ ユウナ様だけでも逃げるのにや！」  
「そ、そんなこと言われても……」

あたしがこうやって悩んでいたせいで、事態は最悪の方向に向かったのかもしれない。

兵士達が一斉に弓をこちらに向けてきた。  
これってもしかして全滅……？

あたしは自分の持つている勇者の力を過信しすぎていたようだ。  
こんなことになってしまうなんて……。

可愛い部下達はあたしを弓から守ろうとあたしを取り囲んでいる。  
兵士たちのリーダーらしき存在が手を挙げた。  
攻撃の合図だろうか。

「撃てー！ー！ー！ー！！」

みんな死んじゃうのかな？

えっと……みんなごめんね。

きつと許してくれないだろうな。

最後の魔力はこうやって使うね……。

「全員送還……」

その瞬間ここにいるのはあたしだけとなった。

魔力が完全に尽きているのを感じる。

なんとか足りたようだ……。

きつとみんななにかを言っているんだろうけど、もうテレパシー

もできない。

次の瞬間、あたしの体は複数の矢に貫かれた……。

あはは……これは死ぬよね？

でも、みんなは生きてね……。

あれ？ あの子たちってあたしと同じ寿命になってるんだっけ？

あたしが死んだら一緒に死んだりする？

それは嫌だな……。

プロメイティア様……あたしとあの子たちの契約なかったことに  
できないのかな？

あたしがんばったから……最後の願い聞いてほしいな。

この際アルティアナ様でもいいよ……。

あたしは可愛いモン娘たちのことを想いながら意識を失った。

## 25・決意を胸に（後書き）

次回最終話が同時投稿されています。

## 26・エピソード(前書き)

本日2話同時投稿しておりますので、最新話に飛んできた方はご注意ください。

## 26・エピソード

この世界は男神プロメイテアと女神アルティアナの2柱によって作られた。

アルティアナは自身の姿そっくりに人間を作り愛した。

プロメイテアは人間に可愛がってもらう存在として動物達を作った。

ここまでは順調だった。

かよわき人間を守るために、プロメイテアは強き魔物を作った。魔物は人間を守り、人間は魔物を可愛がる。

それがプロメイテアの理想の世界であった。

しかし、それがアルティアナには気に入らなかった。

人間が例え弱くとも自分達の力で生きてほしかったのだ。

魔物に愛情を注ぐプロメイテアに嫉妬していたのかもしれない。

こうして2柱の神は対立し、人間と魔物が対立する世界となった。もっとも敵意を持っていたのはアルティアナと人間側だけであったが……。

言ってしまうえば神様の夫婦げんかに人間と魔物は巻き込まれたのだ。

対立から1000年が過ぎ、人間側が遥かに有利な状況となった。異世界から勇者を召喚する技術を人間は手に入れた。

これにより魔物が世界から駆逐されるのは時間の問題だった。

それをぶち壊しにしたのは1人の勇者だ。

こともあるうに勇者を召喚するための装置を破壊したのだ。

同じものを作るには200年はかかるだろう。

だから200年ほど平和な期間を作ったとも言える。

その勇者とはもちろんあたしのことだ。

神殿を破壊した後人間の手によって殺されてしまった。

ここは天国……ではなく魔物たちが北の地に構えている城だ。

あたしは確かに死んだはずなんだけど……こうして生きている。

死んだ魔物が生き返るのと同じように生き返ったのだ。

あたしも魔物になった？

というわけではなくおそらくプロメイティア様が助けてくれたんだろう。

今のあたしの状態は単なる人間とほぼ同じだ。

召喚や合体の能力は失っていないようだけど、それを使うための

魔力もない。

みんなが魔力を分けてくれたりもするんだけど、どうも死んだ影響が魔力がそんなたまらないらしい。

時間がたてば少しずつ増えるみたいだけど、以前のように大活躍はできない。

つまり、この世界を変える力がもうないってことだ。

あたしにできることは、このお城にいる魔物たちを幸せにすることだけだ。

あたしの寿命尽きるまで、モン娘たちと過ごすんだ。

もしかしたらその間にいい方法が見つかるかもしれないね。

あたしとしては、プロメイティアがアルティアナを無理矢理引っ張ってどこか違う世界へ駆け落ちでもしたらいいのと思っている。

そしたらあとは何とでもなりそうな気がする。

というわけでプロメイティア様がんばれー。

では……今日もあたしの可愛いモン娘達に会いに行くとしようか

な。

## 26・エピローグ（後書き）

打ち切りエンドのようになってしまいましたが、これで終わりとさせていただきます。ここまで読んでいただきありがとうございます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<https://ncode.syosetu.com/n7849da/>

---

あたしの可愛いモン娘たち

2019年12月2日09時51分発行